# 「満足度・生活の質に関する調査」に関する第４次報告書

～生活満足度・暮らしのレポート～

（生活満足度の観点から経済社会構造を「見える化」する）

令和２年９月１１日

内閣府　政策統括官（経済社会システム担当）

# 目　　次

はじめに　--------１

第１章　生活満足度の観点から経済社会構造を「見える化」する　--------３

第２章　with コロナの暮らしと満足度　-------９４

第３章　「満足度・生活の質に関する調査」のデータを活用した研究の紹介
-----１０９

補　論　総合生活満足度と分野別満足度との関係　-----１３８

## はじめに

人々の生活満足度にはどのような要因が影響しているのだろうか。近年、国際連合、OECD 等の国際機関を中心に、GDP 等の経済指標では捉えられない人々の幸福や満足を描き出そうとする試みが活発化している。

我が国においても、経済社会の構造を経済指標によるだけではなく、満足度という質的・主観的観点から、より多角的に「見える化」し、政策運営に活かしていくべく内閣府が検討を進めてきた。

本報告書はこれまで3度にわたり公表してきた、内閣府の「満足度・生活の質に関する調査」に関する報告書の続編であり、第4次報告書である。加えて、2020 年5、6月に実施した「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」の結果を生活満足度の観点から集計・分析したものも含めている。

本報告書の主な狙いは、2019 年7月に公表した暫定試案の「満足度・生活の質に関する指標群（ダッシュボード）」の構築において残された大きな課題、すなわち、「分野別満足度と関連する客観指標との対応関係を都道府県レベルで検証したが、明確な相関関係が見出せなかった。」を解決し、より信頼性の高いダッシュボードを構築することである。

分野別満足度と関連の客観指標との関係が有意に見出しにくかった理由としては、検討の結果、以下の3点が考えられた。

① いくつかの県でサンプル数が少なく、満足度のデータの信頼性が低いこと
② 都道府県という地域の区分が粗すぎること
③ 人々は満足度を答える際に「周りの人と比較して自分は恵まれているか」という評価をしつつ答えている可能性がある。そうだとすると個人の満足度は、個人の関連指標とは正の相関を持つが、関連指標の地域平均とは逆の相関であることや、相関が弱い可能性があること

そこで今回は、この3点に対応する作業を行った。

第一に、①のサンプル数に関する問題を改善するため、今回追加調査を行い、前回調査と合わせたプールデータを用いることとした。その結果、相関関係のある客観指標をかなり見つけることができた。ただし、時間の制約もあって、分野別満足度を客観指標で説明するモデルを構築するところまでは至っておらず、今回は選択し直した客観指標群と分野別満足度との全体的な対応関係を概観することにした（第1章参照）。

第二に、②の「都道府県レベルでは地域区分が粗すぎる」という問題に関しては、市町村レベルで利用可能な客観指標は限られていること、小規模な市町村では、満足度調査のサンプルが十分ではないこと、という二つの制約があるので、全分野で全市町村を対象に分析することはできなかった。しかし健康分野に関しては、一定規模以上の市町村を対象に説得力のある分析結果が得られたので、第3章1節で紹介する。

第三に、③の「人々は周囲の人と比較して自分は恵まれているかを評価して答えているのではないか」という点に関しては、生活全般の満足度に関して、個人効果をコントロールした上で地域効果を計測する試みを行った。その結果、地域効果は弱いながら、個人効果とは独立した形で、個人の生活全般の満足度に影響を与えることが分かった。この点については第3章2節で紹介する。

上記に加え、「満足度・生活の質に関する調査」を活用した、以下の研究結果について、第3章で掲載している。

第3章3節では、生活満足度がかなり低い人々について、その背景を探る分析を行っている。第3章4節では、分野別の生活満足度と将来不安の関係について分析し、持続可能な社会の実現に向けた分析の第一歩としている。第3章5節では、プールデータ全体のクラスター分析を行った結果をまとめた。第3章6節では、社会とのつながりの新しい形態である、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の利用と生活満足度との関係を分析している。

なお、第2章では「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」（2020 年5、6月実施）の結果を、生活満足度の観点を中心に詳細に分析している。

今後とも、生活満足度という観点から経済社会構造を「見える化」すべく、より信頼性の高いダッシュボードの構築に向けて取り組んでいくとともに、「満足度・生活の質に関する調査」を活用して、人々の満足度とその背景にある経済社会的条件、持続可能な社会等との関係について研究を深め、政策運営に活かしていきたい。

## 第1章　生活満足度の観点から経済社会構造を「見える化」する

### 1．これまでの取組

人々の生活満足度にはどのような要因が影響しているのだろうか。近年、国際連合、OECD 等の国際機関を中心に、GDP 等の経済指標では捉えられない人々の幸福や満足を描き出そうとする試みが活発化している[1]。

我が国においても、累次にわたる骨太方針を受け、我が国の経済社会の構造を経済指標によるだけではなく、満足度という質的・主観的観点から、より多角的に「見える化」し、政策運営に活かしていくべく内閣府が検討を進めてきた[2]。具体的には、2019年2月に約 10000 人を対象とした WEB 調査である「満足度・生活の質に関する調査」を実施し、結果を2度の報告書[3]に取りまとめるとともに、同年7月には、満足度・生活の質を客観的に把握するのに役立つ指標のグループを一覧表示する「満足度・生活の質に関する指標群（ダッシュボード[4]）」の暫定試案を作成し、内閣府 WEB サイト上に公表した。

### 2．前回（2019 年）調査による指標群（ダッシュボード）の暫定試案の作成

指標群（ダッシュボード）の策定に当たっては、生活全般の主観的満足度に影響を与えていると考えられる、分野別の主観的満足度を調べた上で、後者に関係の深い客観指標群を抽出するという方式で行った。

生活全般の満足度を構成する分野については、OECD による先行事例の分類をベースとして、①家計と資産、②雇用環境と賃金、③住宅、④仕事と生活（ワークライフバランス）、⑤健康状態、⑥教育水準・教育環境、⑦交友関係やコミュニティなど社会とのつながり、⑧政治、行政、裁判所への信頼性、⑨生活を取り巻く空気や水などの自

---

[1] 2008 年2月、サルコジ仏大統領（当時）のイニシアティブに基づき、ジョセフ・スティグリッツ教授、アマルティア・セン教授らの著名な経済学者をメンバーとして「経済実績と社会進歩の測定に関する委員会（Commission on the Measurement of Economic Performance、通称「スティグリッツ委員会」）」が設立され、2009 年9月に同委員会からの報告書（Mismeasuring Our Lives：Why GDP Doesn't Add Up）が発表されるなど、GDP 以外で経済社会の進歩を測定する議論が国際的に活発化している。

[2] 骨太方針 2017 では、「人々の幸福感・効用など、社会のゆたかさや生活の質（QOL）を表す指標群（ダッシュボード）の作成に向け検討を行い、政策立案への活用を目指す」、骨太方針 2018 では、「国民の満足度、生活の質が向上されるよう、満足度・生活の質を示す指標群を構築するとともに、各分野の KPI に関連する指標を盛り込む」、骨太方針 2019 では、『我が国の経済社会の構造を人々の満足度（well-being）の観点から見える化する「満足度・生活の質を表す指標群（ダッシュボード）」の構築を進め、関連する指標を各分野のKPIに盛り込む』、骨太方針 2020 では、「人々の満足度（well-being）を見える化し、分野ごとの KPI に反映する」とされた。

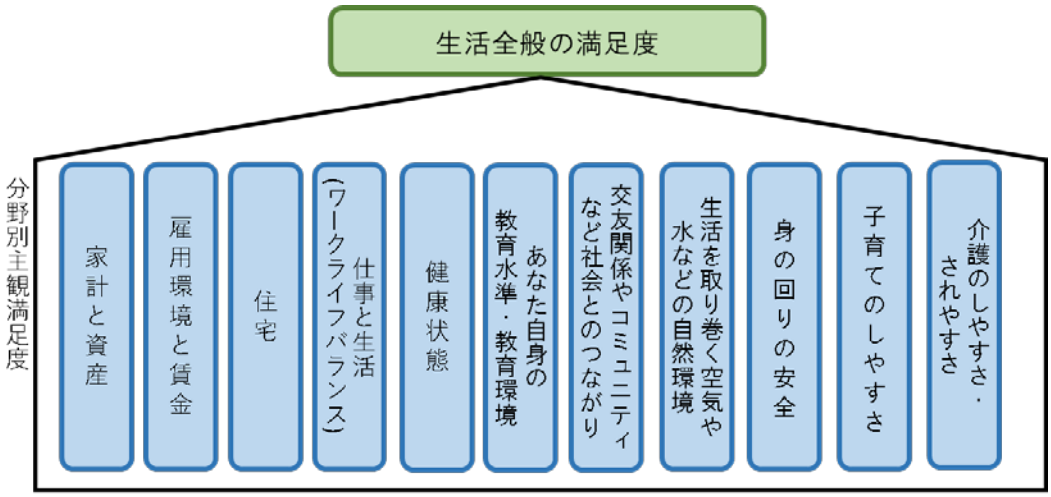
[3] 「満足度・生活の質に関する調査」に関する第1次報告書（令和元年5月 24 日）及び「満足度・生活の質に関する調査」に関する第2次報告書（令和元年7月 30 日）。

[4] 「ダッシュボード」の原義は自動車などの「計器盤」である。自動車のように状態に関連する指標を集め、その全体像の一覧表示を行う仕組みのことを意味している。

然環境、⑩身の回りの安全の 10 分野を候補とした。これらに加えて、ここでは、現在の日本の経済社会において、重要な課題と考えられる少子化・高齢化と密接に関係する、⑪子育てのしやすさ、⑫介護のしやすさ・されやすさ、そして、より前向きな要因として⑬生活の楽しさ・面白さの3つの分野を候補に追加した。

分析の結果 [5]、⑧「政治、行政、裁判所への信頼性」は生活全般の満足度との関連が低かったのでダッシュボードの対象から除外することとした。また、⑬「生活の楽しさ・面白さ」については、生活全般の満足度に対する説明力は高いが、他の分野別満足度で説明できる部分もあり、その意味するところや客観指標との関係をさらに検討することとし、ダッシュボードでの位置づけは見送ることにした。これにより、客観指標群は 11 分野で構成することとした [6]。

**図表１－０－１　満足度・生活の質に関する指標群（ダッシュボード）11 分野**




次に、11 分野ごとに客観指標群（ダッシュボード）を選定した。まず、分野別主観満足度を都道府県別に整理し、それを関連の客観指標群から直接説明することを試みたが、十分な結果が得られなかった。そこで、上記調査において、重要であるとの回答が多かった項目と分野別主観満足度と個票ベースでの相関が高かった生活実態データを抽出し、これに対応する指標を選んだ。こうして、2019 年7月の「満足度・生活の質に関する指標群（ダッシュボード）」の暫定試案では、11 分野の指標群（11 分野×3グラフ）を選定した。

---

[5] 生活全般の満足度と分野別の満足度との関係を詳細に分析した結果は補論参照

[6] 作業の方法論にはなお改善の余地があり、関連が低い分野についてはその理由についてもなお分析する必要があるため、今回の選択は暫定的なものである。

## 3．今回の報告書の主な狙い

前述のように、前回調査のデータからは、分野別の満足度と、それに関連する客観指標との間に都道府県レベルでは明確な相関関係が見出せなかった。

このため、「はじめに」で記載のとおり、「いくつかの県ではサンプル数が少なく満足度のデータの信頼性が低かったこと」などの問題点[7]について対応すべく、作業に取り掛かった。

具体的には、2020 年2月に、前回調査でサンプル数が少なかった都道府県にややウェイトを置いてサンプルを割り当てるなどの工夫を加え、前回調査と同一回答者を含まない約 5000 人を対象とした WEB 調査を実施した。

本報告書では、2019 年調査（約 10000 サンプル）と2020 年調査（約 5000 サンプル）を足し合わせた約 15000 サンプルをもとに[8]、再度、生活全般の満足度を構成する 11 分野において、都道府県レベルでのモニターの満足度（平均値）と相関関係が確認できる客観指標を一般統計等より探り当てることとした。分析の結果、11 分野すべてにおいて、満足度と相関関係が確認できる客観指標が抽出されたことから、指標群（ダッシュボード）を分析に裏打ちされた頑健性の高いものへと改善することができた。

これまでの指標群（ダッシュボード）を構成している 33 グラフ（41 指標）については、（1）相関関係が確認できたものについては引き続き採用、個票レベルの相関が高かった項目や、満足度調査で重要との指摘が多かった項目に関連する指標は、観察対象としてとりあえず残すこととした。

ダッシュボードとは車などの「計器盤」を意味する。指標群（ダッシュボード）を用いて人々の満足度という観点から経済社会構造を「見える化」し、政策運営に活かしていくためには、信頼性の高い指標群（ダッシュボード）の構築は不可欠である。新しく適切なデータが抽出できれば積極的に取り入れ、主観的満足度と客観指標群との関係の分析を踏まえつつ、今後ともより信頼性の高い指標群（ダッシュボード）の構築に向けて、指標群（ダッシュボード）の改善作業を行うこととする。

---

[7] その他の問題点への対応については、第3章記載。（「はじめに」参照）

[8] 2019 年調査と 2020 年調査の生活全般の満足度及び分野別満足度の分布はほぼ同様であり、分布の同一性に関する統計的検定でも、多くの分野で有意な差はみられなかった。（詳細は「満足度・生活の質に関する調査」第3次報告書の Appendix を参照）

# Ⅰ　家計と資産

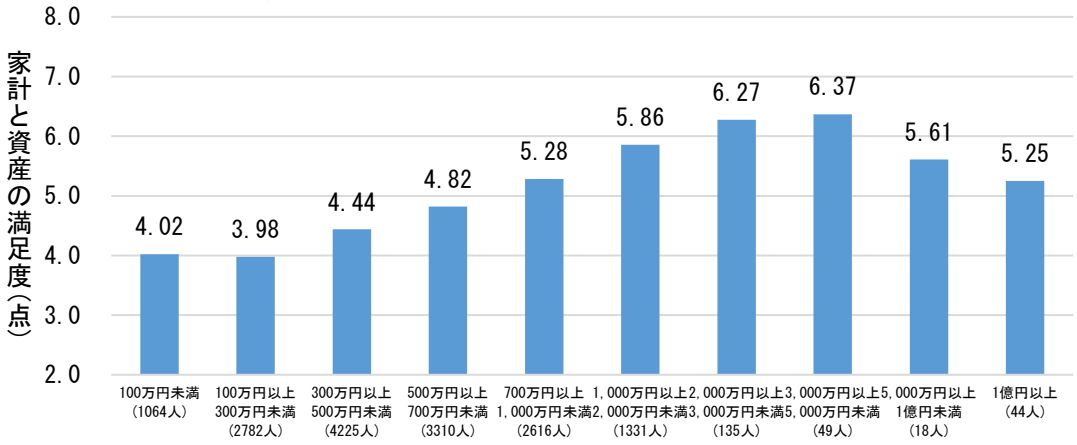
## 1．ダッシュボード指標の妥当性の検証

2019 年7月に公表したダッシュボードでは、家計と資産に関する指標として「可処分所得」「生涯賃金」という所得関係指標2つと、「金融資産残高」という資産関係指標1つを採用した。そのダッシュボード指標としての妥当性・有効性を検討するため、各指標と「家計と資産」の満足度（平均値）との関係を分析していく。

### ①所得関係指標（可処分所得等）

「満足度・生活の質に関する調査」のクロス集計によって、世帯年収と満足度の関係をみると、年収が増加するにつれて満足度が高まる傾向が確認できる。また、個票別（個人レベル）で集計すると、世帯年収と満足度の相関係数は 0.21 となっており、正の相関が確認できる。所得関係指標が、ダッシュボード指標として有効であることが分かる。なお、ダッシュボードでは、所得税・住民税等を支払った後に世帯の手元に残る可処分所得を指標として採用しており、これを継続採用する。

**図表１－１－１　世帯年収別の家計と資産の満足度**



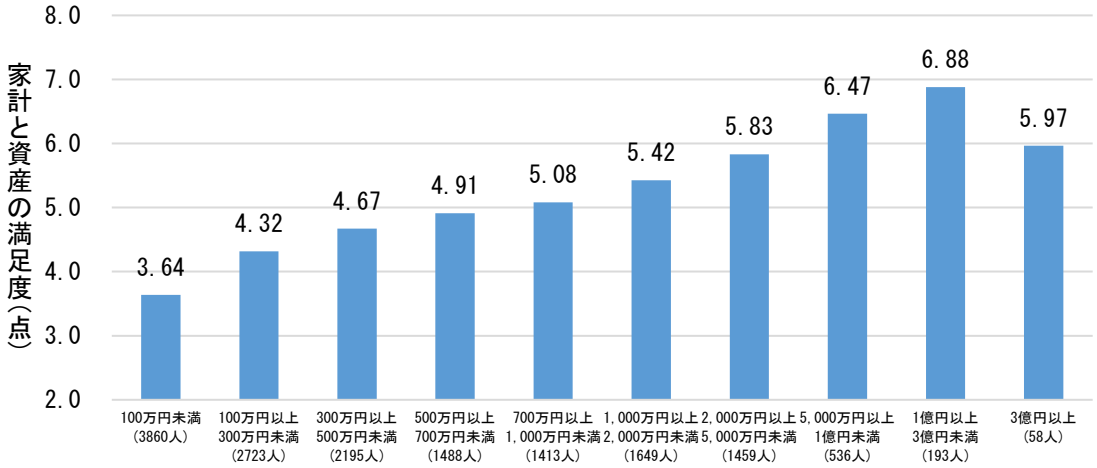

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

なお、年収増加に伴う満足度の上昇は「3000 万円～5000 万円」で頭打ちとなり、それ以上の高所得層では、所得の増加に伴い満足度が低下する傾向がある。仮に、人口の相当な割合の個人にとって「所得が増加することで満足度が減少する」という傾向があるのであれば、ダッシュボードとして必ずしも適切とはいえなくなる。しかし、3000 万円以上の年収を持つ割合は1％未満と非常に小さく、ダッシュボード指標としての有効性に問題は無いと考えられる。

### ②金融資産関係指標

「満足度・生活の質に関する調査」のクロス集計によって、世帯金融資産残高と満足度の関係をみると、金融資産が増加するにつれて満足度が高まる傾向が確認できる。個票レベルでも、金融資産と満足度の相関係数が 0.25 と正の相関を示しており、金融資産残高がダッシュボード指標として有効であることが確認できる。

**図表１－１－２　世帯金融資産残高別の家計と資産の満足度**

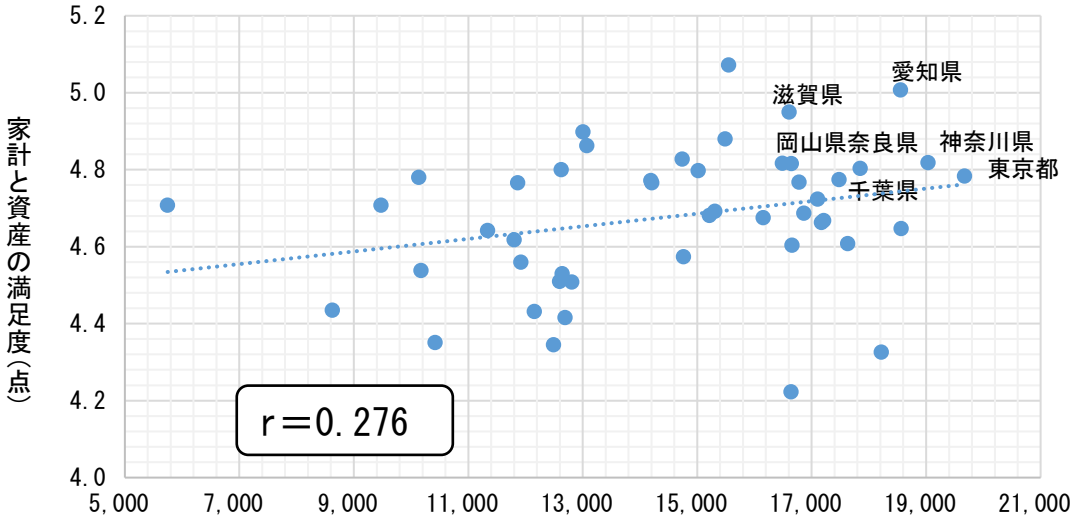



（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

なお、特に世帯の金融資産 100 万円未満の回答者の満足度は平均 3.64 と低い。一方、世帯金融資産残高が3億円以上の回答者は、「1～3億円」以上の回答者よりも満足度が低く、金融資産による満足度への正の影響が、頭打ちになっている。

次に、都道府県別にみると、二人以上世帯の貯蓄残高と、家計と資産の満足度に緩やかな正の相関があることが確認できる。

**図表１－１－３　都道府県別　家計と資産の満足度と**
**二人以上世帯の貯蓄残高の相関**




二人以上世帯の貯蓄残高[2014年11月末現在]（千円）

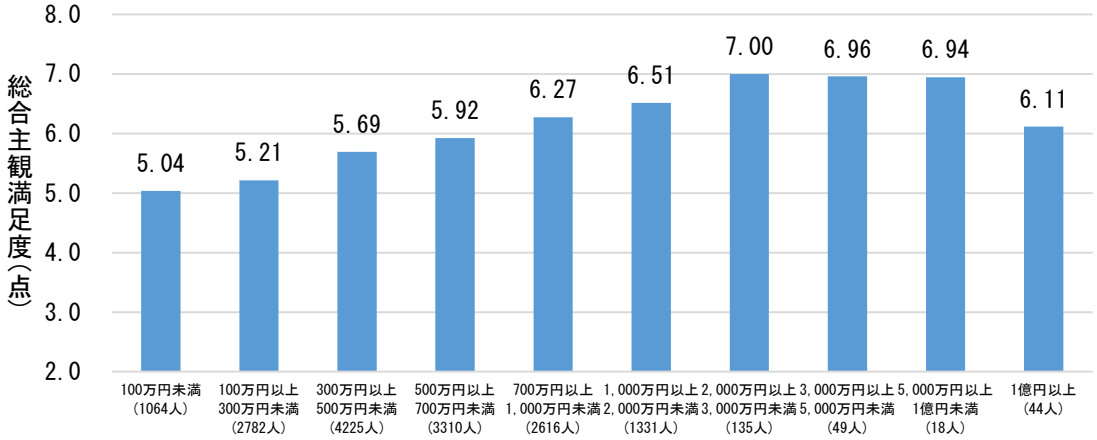
（出典）総務省　全国消費実態調査

内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## ＜コラム＞　収入や資産との関係

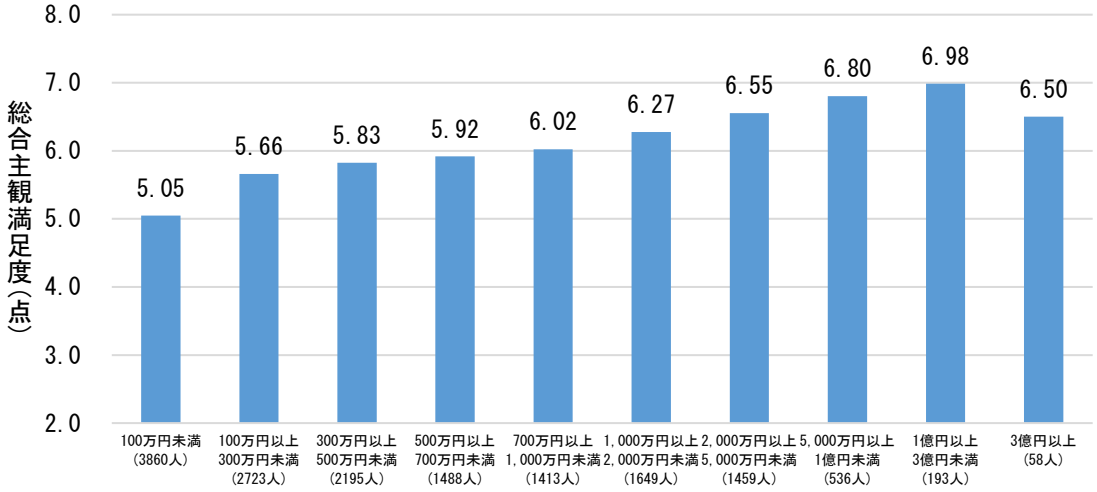
回答者の総合主観満足度と収入や資産との関係をみると、同じように山型ではあるが、世帯年収は「2000 万円～3000 万円」で頭打ち、世帯金融資産残高は「5000 万円～1 億円」で伸びが緩やかとなり、総合主観満足度の方が「家計と資産」の満足度より、山のピークが左側（低い金額）となっている。このように、所得の増加に伴う満足度への正の影響が、一定の所得水準で頭打ちになる現象は、他の先進国でも観察されている。

**図表１－１－４　世帯年収別の総合主観満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

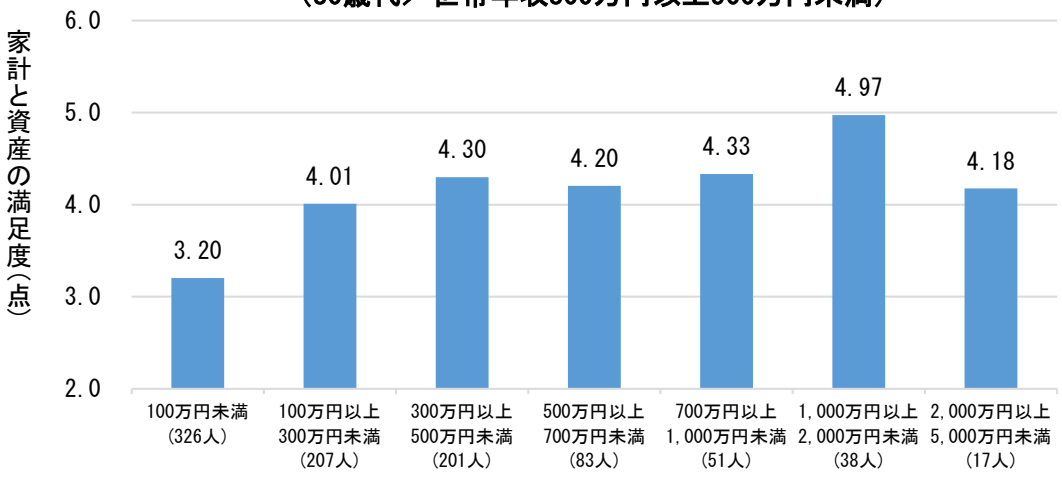
**図表１－１－５　世帯金融資産残高別の総合主観満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

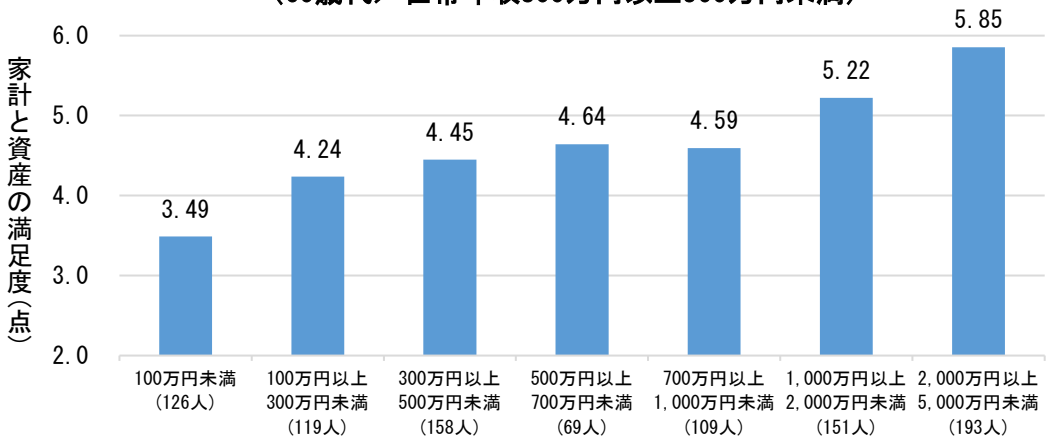
次に、異なる世代における、「家計と資産」の満足度と収入や資産との関係についてみていく。図1－1－6、図1－1－7は 30 歳代と 60 歳代の世帯年収 300 万～500 万円の満足度を金融資産額別に示したものであるが、30 歳代は棒グラフが比較的フラット（金融資産額による満足度の相違が小さい）であるのに対し、60 歳代は概ね右肩上がりとなっている。そこで、60 歳代の資産と満足度の相関係数を調べると、0.43 と高く、年齢層が上がると、家計と資産の満足度において、金融資産の重要性が増すことが分かる。

**図表１－１－６　世帯金融資産残高別の家計と資産の満足度**
**（30歳代／世帯年収300万円以上500万円未満）**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

**図表１－１－７　世帯金融資産残高別の家計と資産の満足度**
**（60歳代／世帯年収300万円以上500万円未満）**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## 2.「家計と資産」の満足度を客観的に示す総合的な指標の作成（試行）

前節では、都道府県レベルで、「家計と資産」の満足度と相関のある客観指標を確認することができ、「家計と資産」の満足度が、収入や資産などと多面的な相関関係を有していることがみてとれた。そこで、複数の指標を合成することで、「家計と資産」の満足度と総合的に対応する客観指標を作成することを試みることとした。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここでは z 値を算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。

「家計と資産」の満足度をあらわす客観指標としては、収入・所得（フロー）と金融資産（ストック）の両面からとらえることとし、この両面に対応する指標を選定した。なお、収入・所得に対応する指標としては「年間収入」、金融資産に対応する指標としては「貯蓄現在高」「有価証券現在高割合」を選定している。金融資産については、全体の量（総額）と質（構成）を示す2つの指標を選定している。試算結果は以下のとおりである。

試算結果をみると、単純合成法、多変量解析法とも相関係数はほぼ同じ値となっている。（0.35、0.34）

### （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 年間収入(二人以上の世帯のうち勤労者世帯) | 千円 | 全国消費実態調査 | 2014 | 0.21 | 収入・所得 | |
| 貯蓄現在高(二人以上の世帯) | 千円 | 全国消費実態調査 | 2014 | 0.28 | 金融資産（総額） | |
| 有価証券現在高割合(二人以上の世帯) | % | 全国消費実態調査 | 2014 | 0.43 | 金融資産（構成） | |

### （2）試算結果

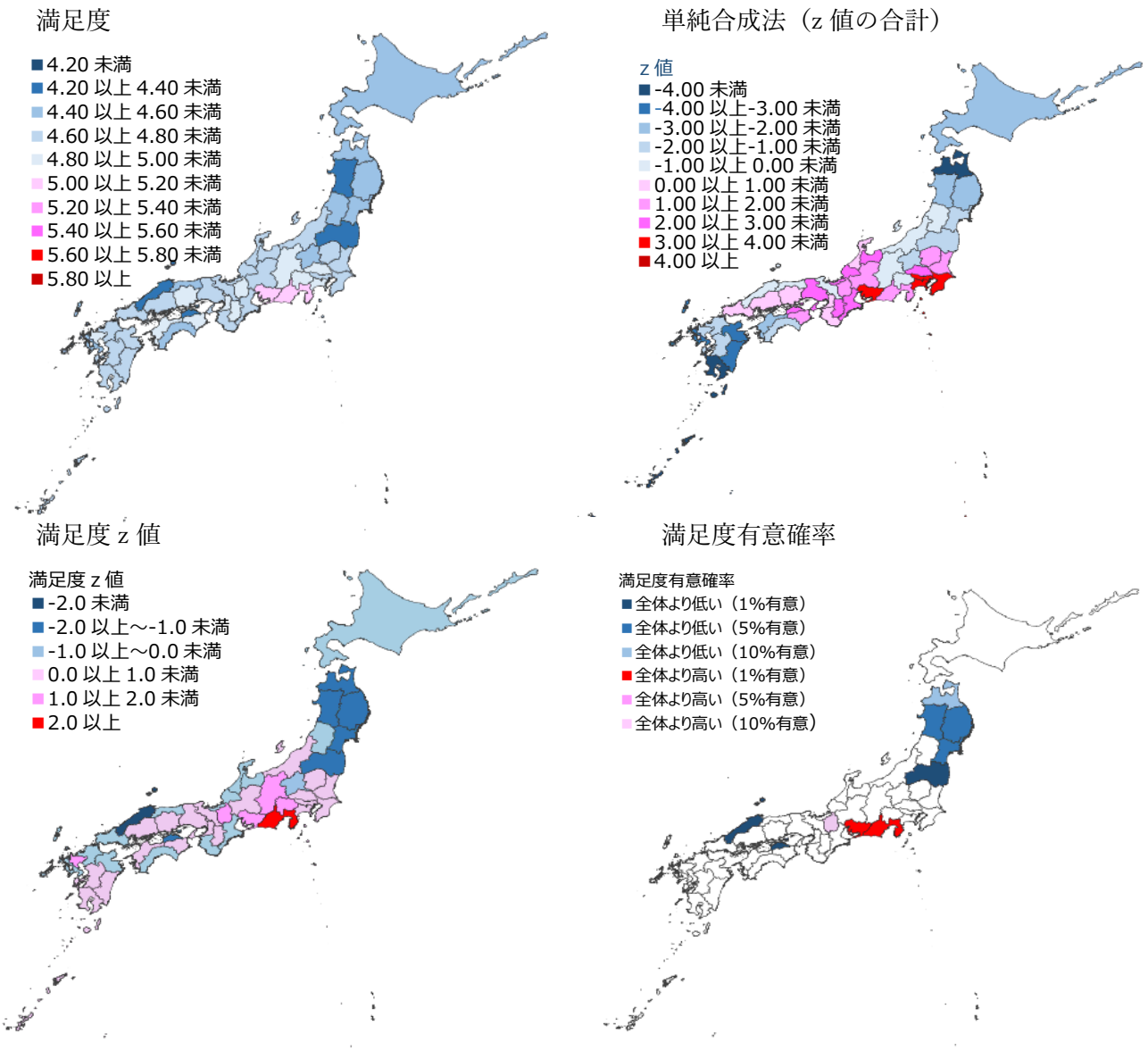
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| ①年間収入(二人以上の世帯のうち勤労者世帯)<br>＋②貯蓄現在高(二人以上の世帯)（1世帯当たり）<br>＋③有価証券現在高割合(二人以上の世帯) | 0.35 | 0.34 |

※符合は単純合成法のみに適用。主成分分析では指標値をそのまま投入（以降同様）

### (3)都道府県地図

下の図は、満足度(満足度調査による計測値の平均値)、標準化した満足度(z 値)、単純合成法(各客観指標の z 値の合成)、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。満足度の地図をみると、家計と資産の満足度は比較的低いことから、全体は青みがかっているが、一部薄い桃色の地域がみてとれる。また、単純合成法と満足度のｚ値との比較では、同系統の配色が多いものの、明らかに異なる配色の県が複数みられた。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも 10 県であった。

**図表１－１－８　都道府県地図**



## Ⅱ　雇用環境と賃金

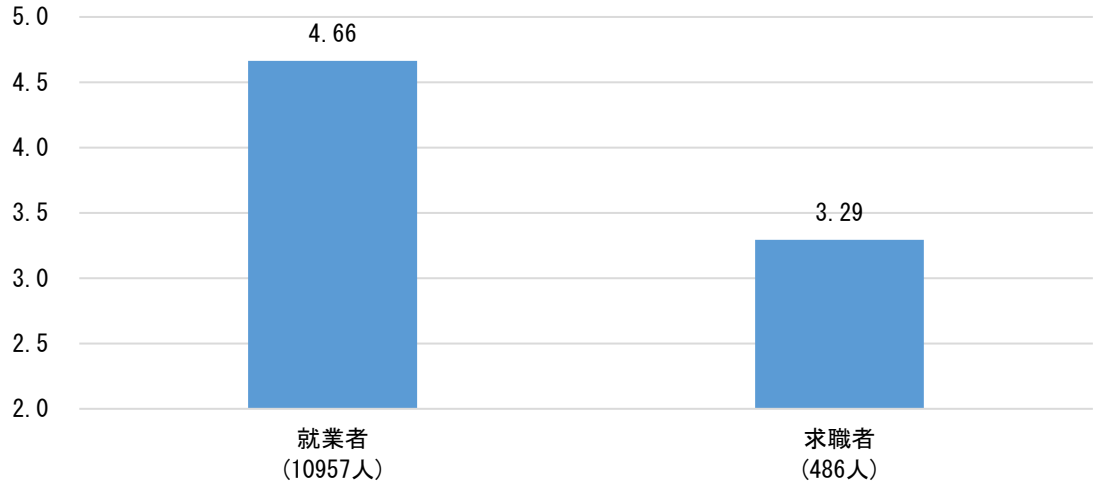
### 1．ダッシュボード指標の妥当性の検証

2019 年7月に公表したダッシュボードでは、失業・就業に関する指標として「完全失業率」「有効求人倍率」を、雇用の質に関する指標として「正規雇用数」を、賃金に関する指標として「所定内給与額」「最低賃金額」を採用した。ダッシュボード指標の妥当性を検証するため、これらの指標と「雇用環境と賃金」の満足度（平均値）の間の関係を分析していく。

#### ①失業・就業に関する指標

ダッシュボードにおいて「完全失業率」「有効求人倍率」という失業・就業に関する指標を設定しているが、これは失業することは、多くの場合に人々の生活の痛手となると考えられるためである。実際、失業者（求職者）の満足度は 3.29 と正規雇用の 4.77、非正規雇用の 4.35 と比較して大幅に低い水準にある。また、過去の失業・廃業経験の有無は、満足度に影響を与えており、長期的にも満足度を低下させる可能性が示唆される。こうしたことから、ダッシュボード指標として、失業・就業に関する指標である「完全失業率」「有効求人倍率」を採用することが適当だと考えられる。

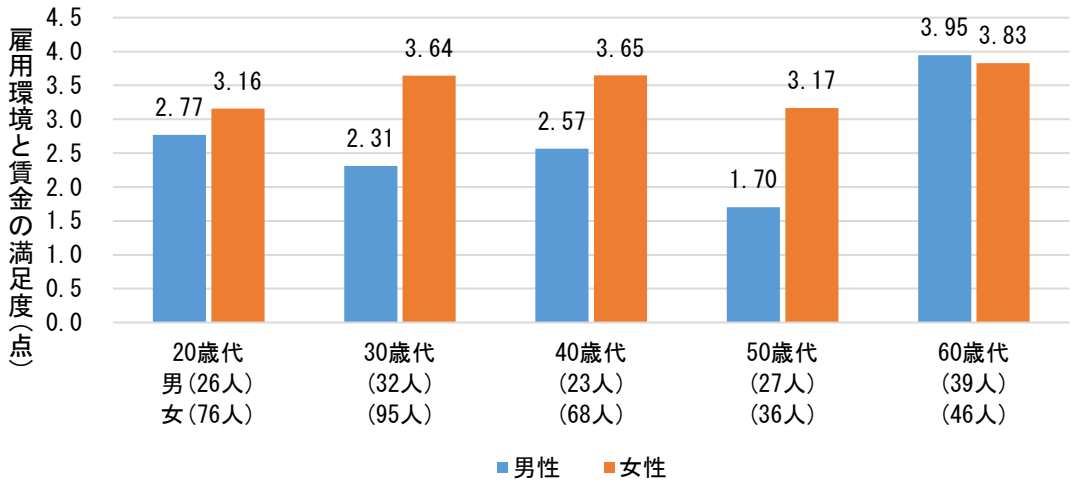
**図表１－２－１　就業の有無別雇用環境と賃金の満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

求職中の者の満足度を年齢別にみると、特に 50 歳代の男性の満足度は 1.7と極めて低い水準であり、就業していないことが、中高年世代にいかに大きな負のインパクトを与えるかがうかがえる。

**図表１－２－２　求職者の雇用環境と賃金の満足度（性年代別）**

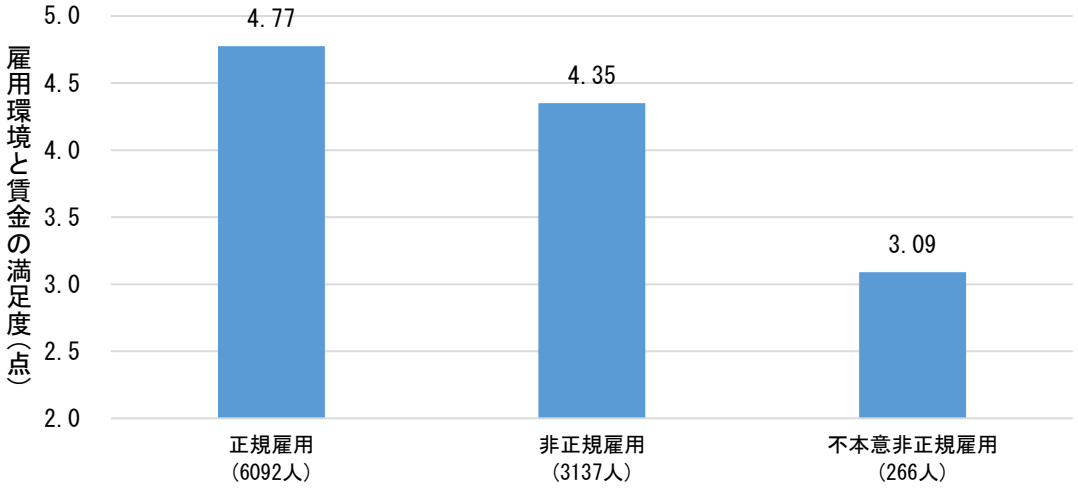



（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 調査・2020 年調査）

## ②雇用の質に関する指標

次に、ダッシュボートとして採用している「正規雇用数」の妥当性を確認するとともに、雇用の種類別に他のダッシュボード指標を追加すべきかみていく。回答者の雇用形態と「雇用環境と賃金」の満足度との関係をみると、正規雇用の満足度は 4.77 と非正規雇用の 4.35 よりも 0.42 上回っており、正規雇用の数を確認することが、ダッシュボード指標として有効であることが分かる。

**図表１－２－３　雇用形態別の雇用環境と賃金の満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 調査・2020 年調査）

一方、正規雇用と非正規雇用の満足度の違い(0.42)は、正規雇用と失業者（求職者）との差（1.48）と比べると大きくない。ただし、非正規雇用のうち、不本意非正規雇用については、求職者（失業者）よりも満足度が低い。満足度の観点からは、不本意非正規を減少させることが非常に重要であると言える。このため、ダッシュボード指標として、不本意非正規雇用者数を新たに採用することとする。

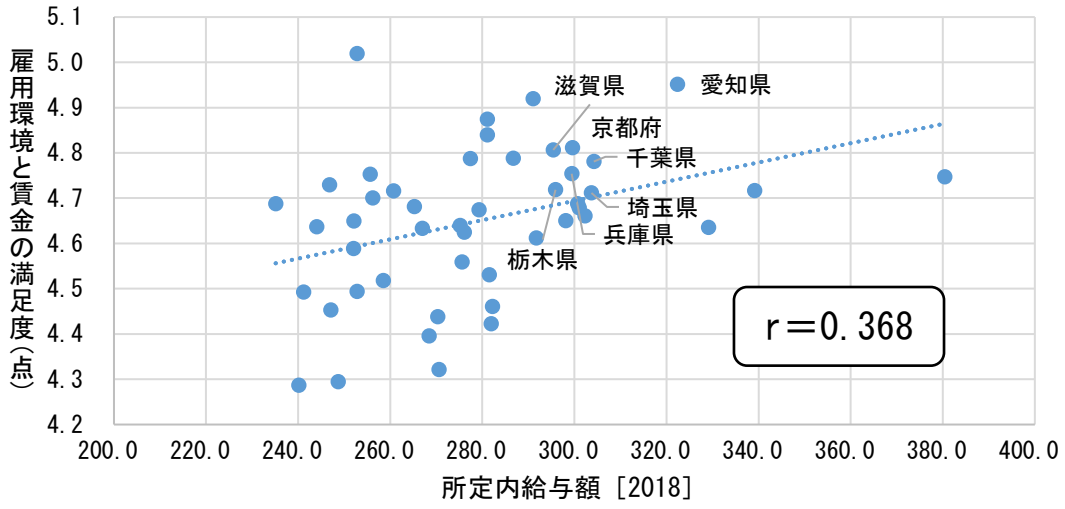
### ③賃金関連指標

次に、都道府県別の所定内給与額との関係をみると、所定内給与額が高い都道府県ほど、「雇用環境と賃金」の満足度が高い傾向がある。（相関係数 0.368）

さらに、都道府県別の最低賃金額との関係をみると、相関係数が 0.351 と、ここでも、最低賃金額が高い都道府県ほど満足度が高い傾向にある。

このように、都道府県間で、回答者の「雇用環境と賃金」の満足度の平均と、一般統計から得られた「雇用環境と賃金」に関連する複数の客観指標との間で、相関が確認できた。したがって、これらの客観指標は、「雇用環境と賃金」の満足度をあらわす指標群（ダッシュボード）の一つとして有効であることが示唆される。

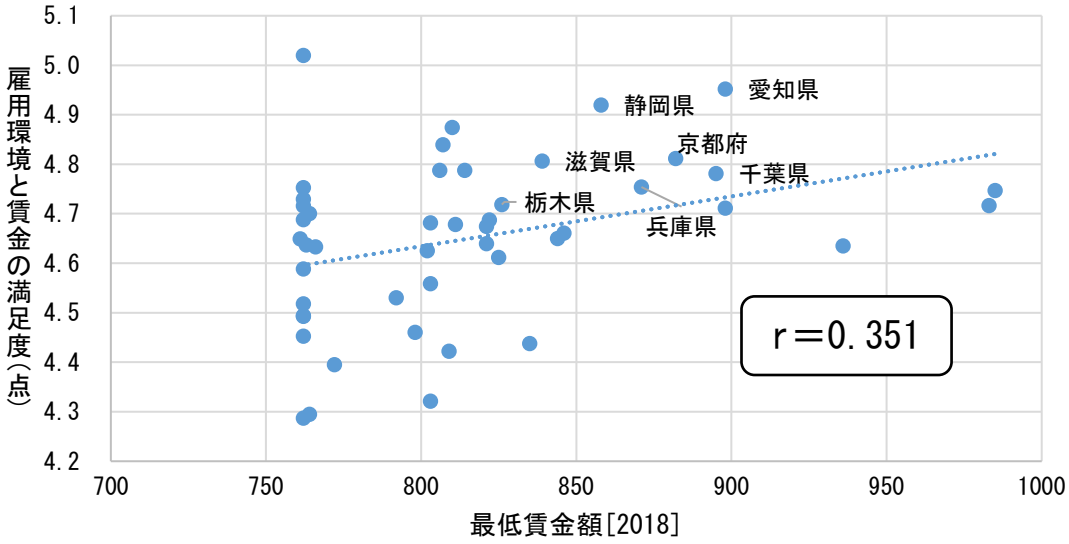
**図表１－２－４　都道府県別　雇用環境と賃金の満足度と所定内給与額の相関**




（出典）厚生労働省　賃金構造基本統計調査

内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

**図表１－２－５　都道府県別　雇用環境と賃金の満足度と最低賃金額の相関**

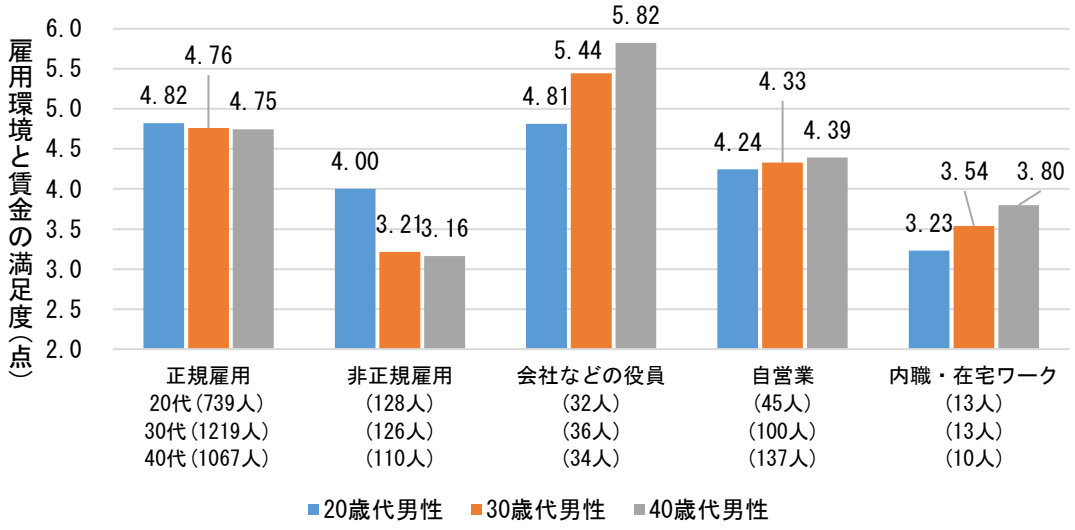



（出典）厚生労働省　地域別最低賃金改定状況
内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## ＜コラム＞　年齢別･雇用形態別にみた満足度

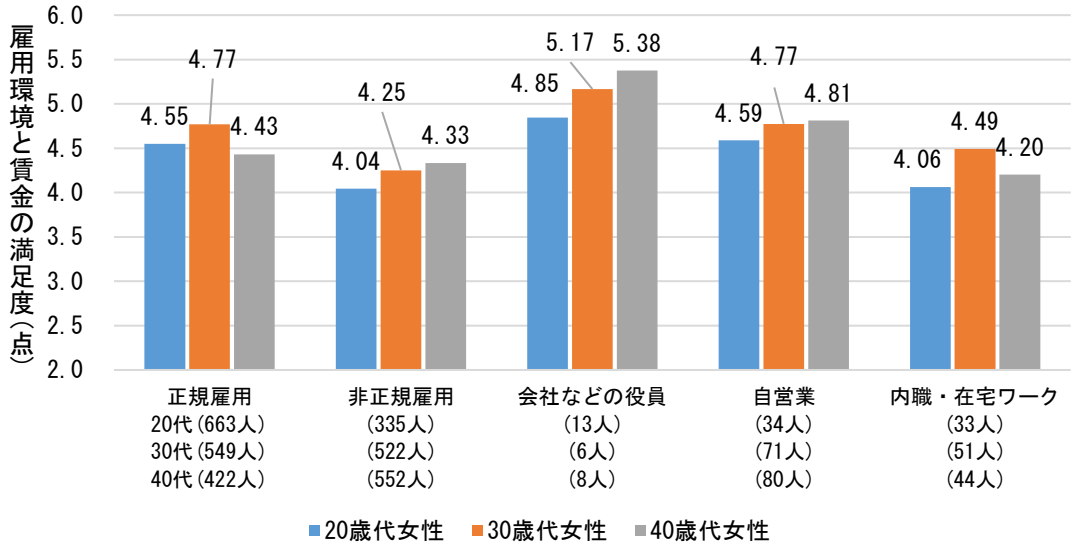
年齢別･雇用形態別に満足度をみると、非正規の男性の場合、30 歳代以降は満足度が3点台の前半と非常に低い水準である。一方、女性の非正規雇用でみると、20 歳代より 40 歳代の方が、満足度が高い傾向がみてとれる。

**図表１－２－６　雇用形態別の雇用環境と賃金の満足度**
**（男性年代別）**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

**図表１－２－７　雇用形態別の雇用環境と賃金の満足度**
**（女性年代別）**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## 2.「雇用環境と賃金」の満足度を客観的に示す総合的な指標の作成（試行）

前節では、都道府県レベルで、「雇用環境と賃金」の満足度と相関のある客観指標を複数確認することができ、「雇用環境と賃金」の満足度が、所定内給与額などと多面的な相関関係を有していることがみてとれた。そこで、複数の指標を合成することで、「雇用環境と賃金」の満足度と総合的に対応する客観指標を作成することを試みることとした。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここでは z 値を算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。

「雇用環境と賃金」の満足度を表す客観指標としては、就業機会、就業条件、賃金水準、労働環境の面からとらえることとし、これらの面に対応する指標を選定した。就業機会に対応する指標としては「新規就業率」、就業条件の総合的な整備状況に対応する指標としては「従業者 100 人以上の事業所の従業者割合(民営)」とした。賃金水準に対応する指標としては、主に非正規雇用の賃金水準に対応するものとして「地域別最低賃金」を、主に正規雇用の賃金水準に対応するものとして「所定内給与額」を選定した。また、労働環境に対応する指標として「労働災害発生の頻度」を選定している。試算結果は以下のとおりである。

試算結果をみると、単純合成法、多変量解析法とも相関係数は約 0.5 と高い値となっている。

### （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 新規就業率 | % | | 2017 | 0.48 | 就業機会 | 統計でみる都道府県のすがたの掲載データを使用 |
| 従業者 100 人以上の事業所の従業者割合(民営) | % | 経済センサス調査 | 2016 | 0.47 | 就業条件 | 大規模な事業所を、就業条件が整備された職場の外形的目安とする |
| 地域別最低賃金 | 円 | 地域別最低賃金改定状況 | 2018 | 0.35 | 賃金水準（主に非正規雇用の賃金） | |
| 所定内給与額 | 千円 | 賃金構造基本統計調査 | 2018 | 0.37 | 賃金水準（主に正規雇用の賃金） | |
| 労働災害発生の頻度 | | 労働災害統計 | 2017 | −0.13 | 労働環境 | |

### （2）試算結果

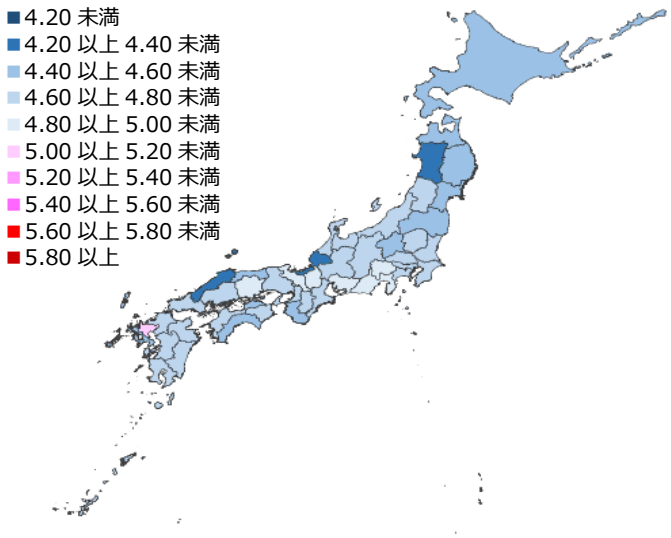
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| ①新規就業率<br>＋②従業者 100 人以上の事業所の従業者割合<br>＋③地域別最低賃金<br>＋④所定内給与額<br>－⑤労働災害発生の頻度 | 0.48 | 0.46 |

### （3）都道府県地図

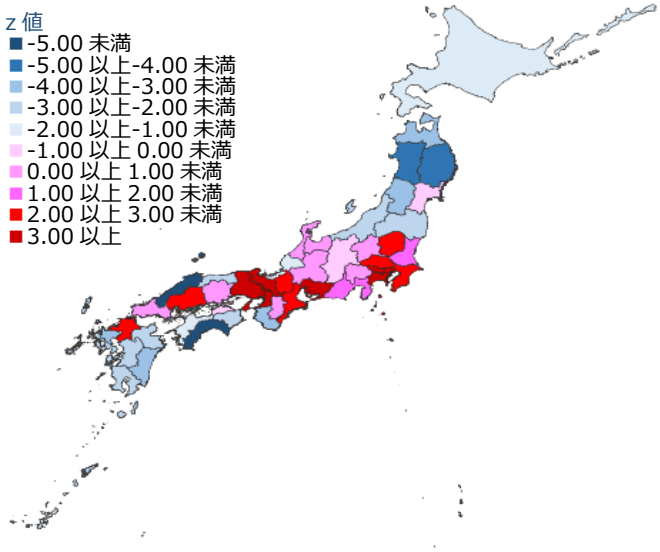
下の図は、満足度（満足度調査による計測値の平均値）、標準化した満足度（z 値）、単純合成法（各客観指標の z 値の合成）、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。満足度の地図をみると、「雇用環境と賃金」の満足度は他の分野に比べ低いことから、青いグラデーションとなっており、全都道府県の満足度が5以下であることがみてとれる。また、単純合成法と満足度の z 値との比較では、同系統の配色が多いが、グラデーションが異なる傾向を示す地域もみられた。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも9県であった。

**図表１－２－８　都道府県地図**

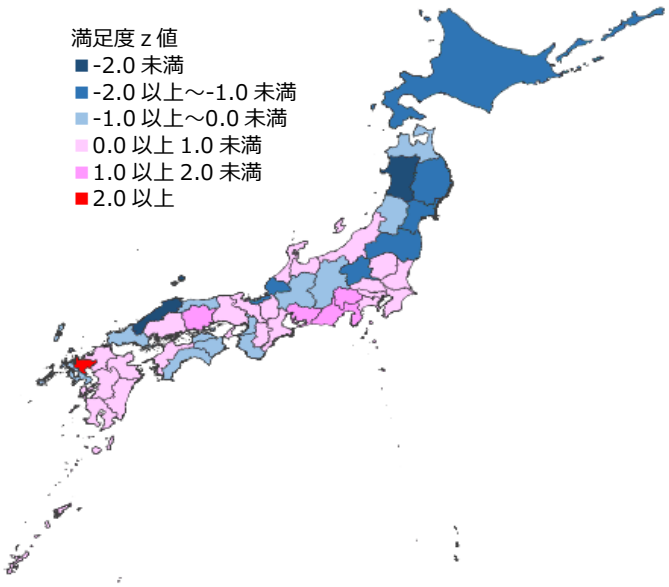
満足度



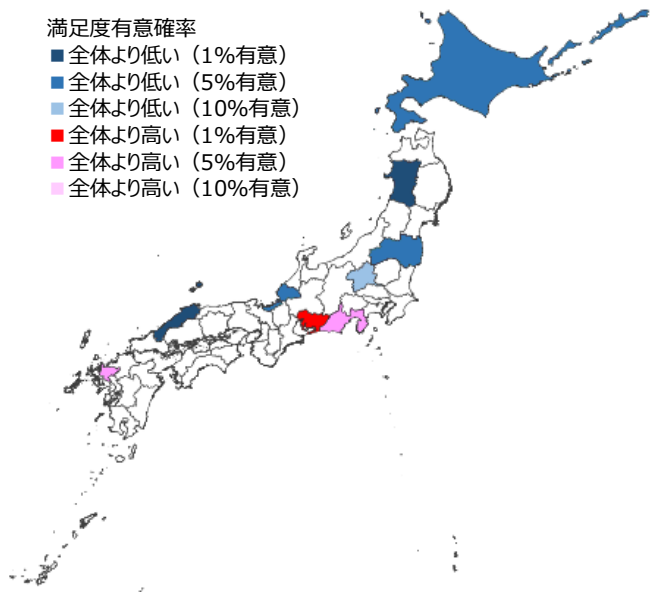

単純合算法（ｚ値の合計）




満足度ｚ値




満足度有意確率



## Ⅲ　住宅

### 1．ダッシュボード指標の妥当性の検証

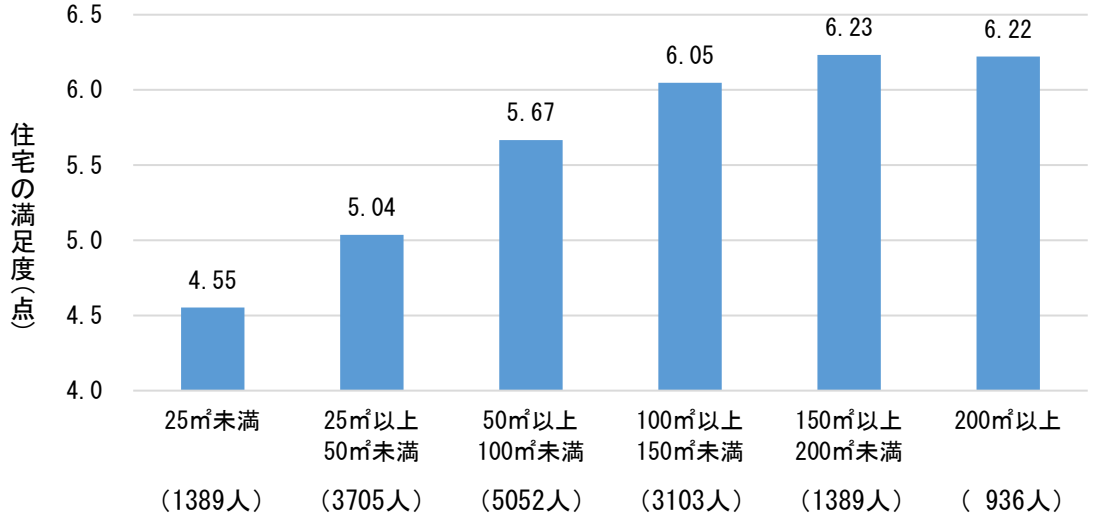
2019 年7月に公表したダッシュボードでは、住宅に関する指標として「延べ床面積（住宅の広さ）」、「家賃地代（収入に占める割合）」「（持家の）住宅保有率」を採用した。ダッシュボード指標の妥当性を検討するため、これらの指標その他の関連指標について、「住宅」の満足度（平均値）との関係を分析していく。

#### ①住宅の広さに関する指標（延べ床面積等）

個票をもとに、回答者の住宅の広さ（延べ床面積）と「住宅」の満足度の関係をみると、住宅が広いほど満足度が上昇する傾向にあり、ダッシュボード指標としての有効性が示唆される。

特に、延べ床面積が 100 ㎡以下においては、延べ床面積による「住宅」の満足度の差は大きく、例えば延べ床面積 25～50 ㎡の回答者と 50～100 ㎡の回答者の間には 0.63 の差がある。一方、延べ床面積が拡大するにつれて満足度の上昇幅は小さくなり、150 ㎡～200 ㎡未満で、満足度が頭打ちになる。

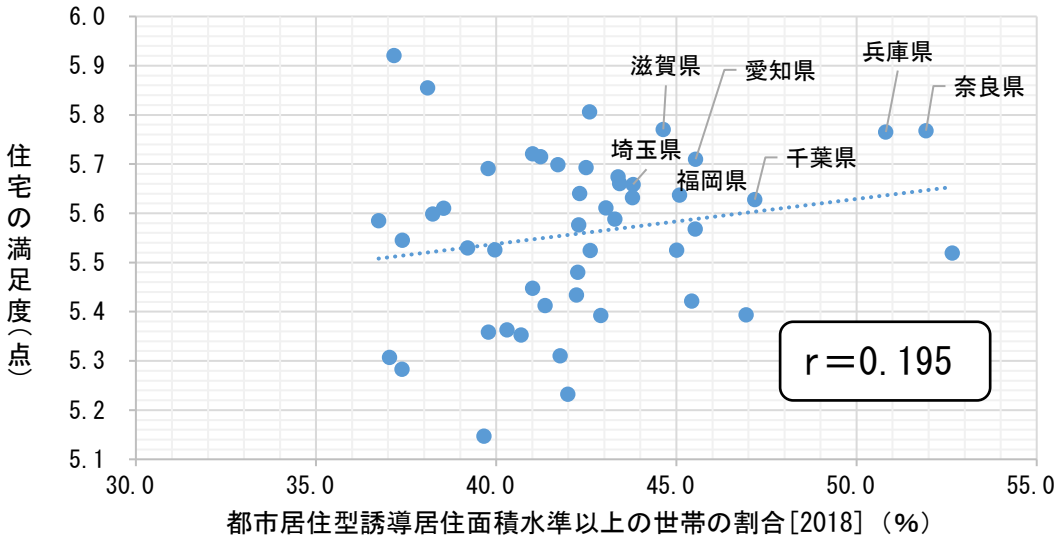
**図表１－３－１　延べ床面積と住宅の満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019年調査・2020年調査）

次に、誘導居住面積[9]より広い住宅に住む世帯の割合と、「住宅」の満足度の平均値との関係について都道府県別にみると、緩やかな正の相関がある。

**図表１－３－２　都道府県別　住宅の満足度と**
**都市居住型誘導居住面積水準以上の世帯の割合の相関**



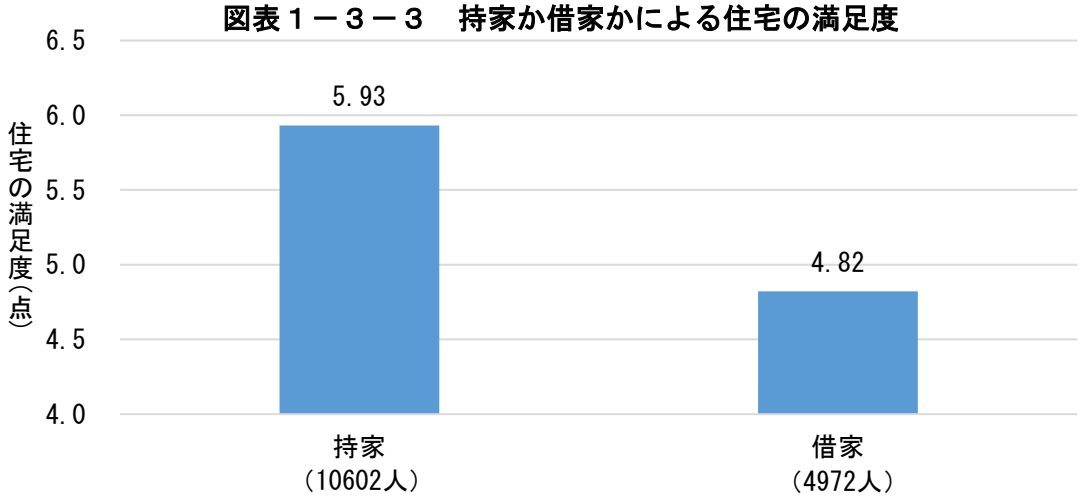

（出典）総務省　住宅・土地統計調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

[9] 住生活基本計画で提示された、豊かな住生活に必要と考えられる広さの基準

②持家

個票をもとに、住宅の居住形態と「住宅」の満足度との関係をみると、持家を有する回答者の満足度の方が高く、その差は 1.11 と大きい。

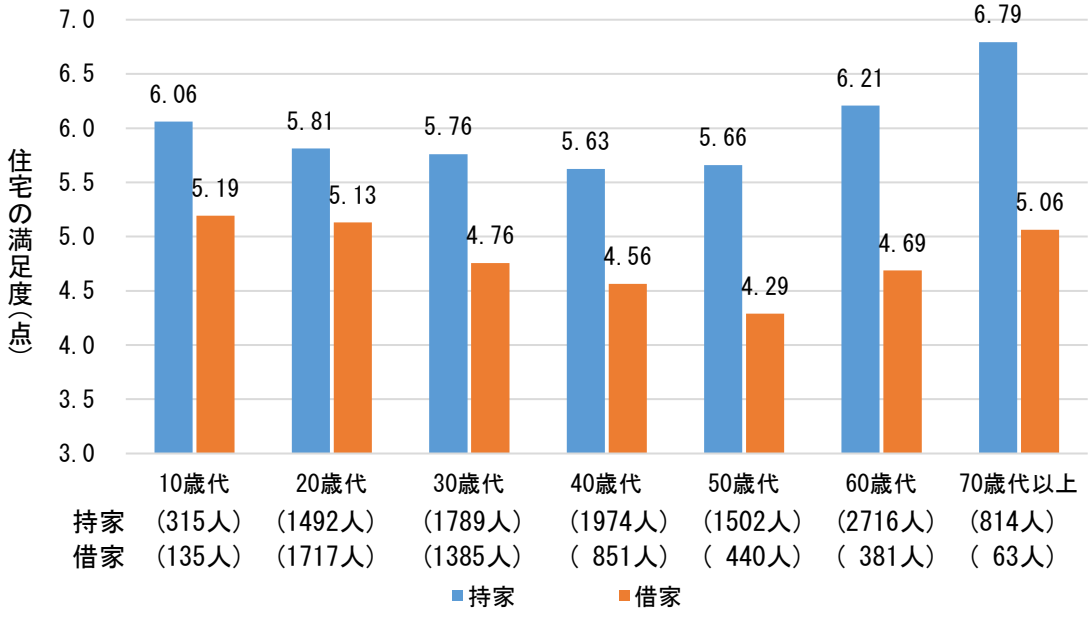
**図表１－３－３　持家か借家かによる住宅の満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019年調査・2020年調査）

年齢別にみると、年齢を追うごとに持家と借家の違いによる「住宅」の満足度の差は大きくなる傾向にある。特に 50 歳代以降の差は大きいことがみてとれる。

**図表１－３－４　年齢別　持家か借家かによる住宅の満足度**

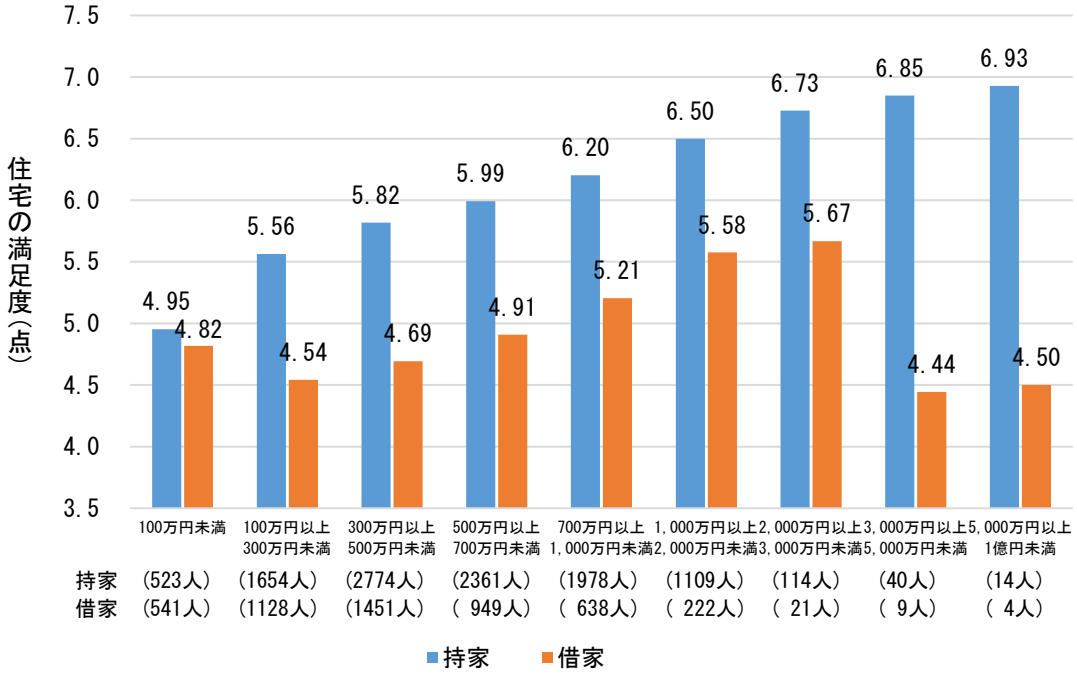



（出典）内閣府　満足度・生活の質に難する調査
（2019年調査・2020年調査）

また、世帯年収別にみると、世帯年収が 100 万円未満の層では持家と借家で満足度に差がないが、それ以外の年収層では持家の満足度が高く、特に年収が 3000 万円以上の層では、借家の回答者の「住宅」の満足度は低いものとなっている。

以上のように、年齢別・世帯年収別でみても、持家を有することで「住宅」の満足度が高まる傾向にあり、ダッシュボード指標として「持家の住宅保有率」が有効であることが示唆される。

**図表１－３－５　世帯年収別　持家か借家かによる住宅の満足度**



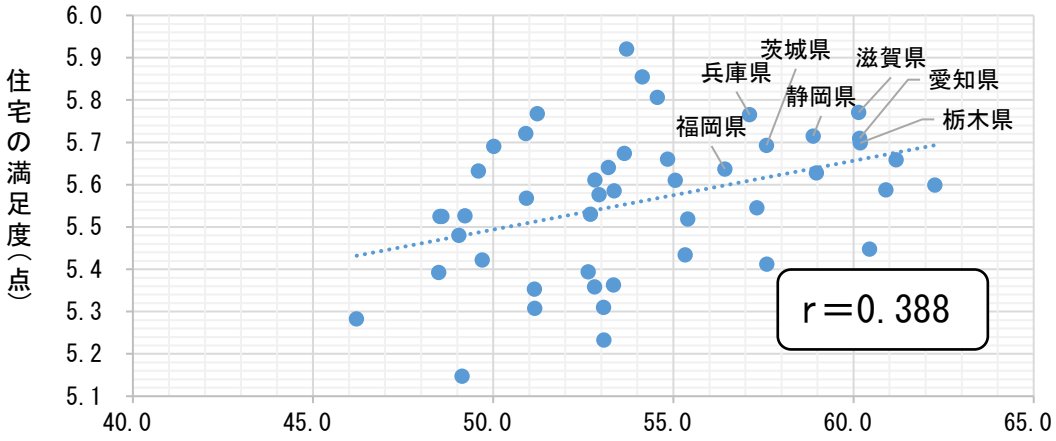

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019年調査・2020年調査）

### ③その他の指標

これまでは住宅の「広さ」「持家」についてみてきたが、次に「老朽化」の観点で、「住宅」の満足度との関係をみる。適切な補修・改築等が行われずに老朽化した住宅であることは、住みやすさに影響しうる。

以下の図のとおり、非老朽化住宅の割合が高い都道府県は、「住宅」の満足度が高いという正の相関が確認できる。ダッシュボードに採用するにあたっては、今後、個票レベルでの「住宅」の満足度との関係を確認していくことが課題である。

**図表１－３－６　都道府県別　住宅の満足度と**
**非老朽化住宅の割合の相関**




（出典）総務省　住宅・土地統計調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

また、ダッシュボードでは、「家賃地代（収入に占める割合）」を採用している。これは、2019 年調査において、「満足度に影響しているものは何か」との回答への1位が家賃・住宅費となっていることから採用しているものであり、継続して採用することとする。

## 2.「住宅」の満足度を客観的に示す総合的な指標の作成（試行）

前節では、都道府県レベルで、「住宅」の満足度と相関のある客観指標を複数確認することができ、「住宅」の満足度が、居住面積や住宅の老朽化などと多面的な相関関係を有していることがみてとれた。そこで、複数の指標を合成することで、「住宅」の満足度を客観的に示す総合的な指標を作成することを試みることとした。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここでは z 値を算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。

「住宅」の満足度を表す客観指標としては、住宅の広さと住宅の総合的な質・性能の両面からとらえることとし、この両面に対応する指標を選定した。なお、住宅の広さに対応する指標としては「都市居住型誘導居住面積水準以上の世帯の割合」、住宅の総合的な質・性能に対応する指標として「非老朽化住宅率」（目安：2018 年時点における 1991 年以降の割合）を選定している。

試算結果をみると、単純合成法、多変量解析法とも相関係数は同じ値となっている。（0.39、0.39）

### （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 都市居住型誘導居住面積水準以上の世帯の割合 | % | 住宅・土地統計調査 | 2018 | 0.19 | 住宅の広さ | 都市居住型誘導居住面積水準以上の世帯と同水準未満の世帯の合計に占める割合 |
| 非老朽化住宅率（目安：2018 年における 1991 年以降の割合） | % | 住宅・土地統計調査 | 2018 | 0.39 | 住宅の総合的な質・性能 | 建築年が 1990 年以前の住宅と 1991 年以降の住宅の合計に占める割合 |

### （2）試算結果

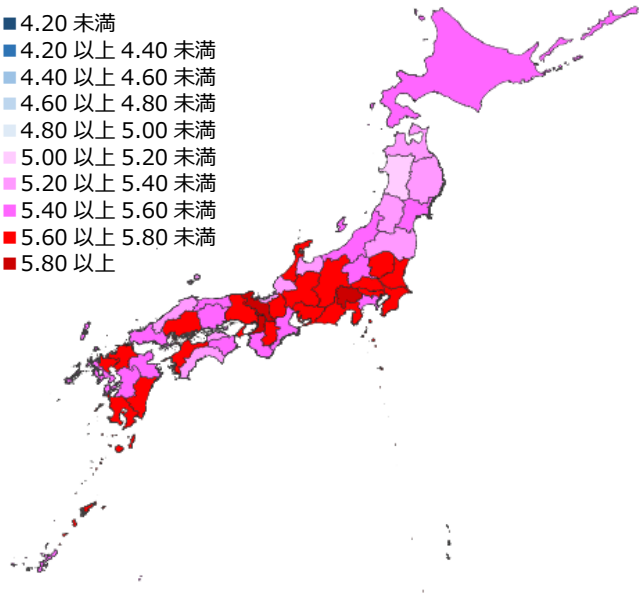
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| ① 都市居住型誘導居住面積水準以上の世帯の割合<br>＋②1991 年以降の割合（老朽化住宅以外の住宅の割合の目安） | 0.39 | 0.39 |

### （3）都道府県地図

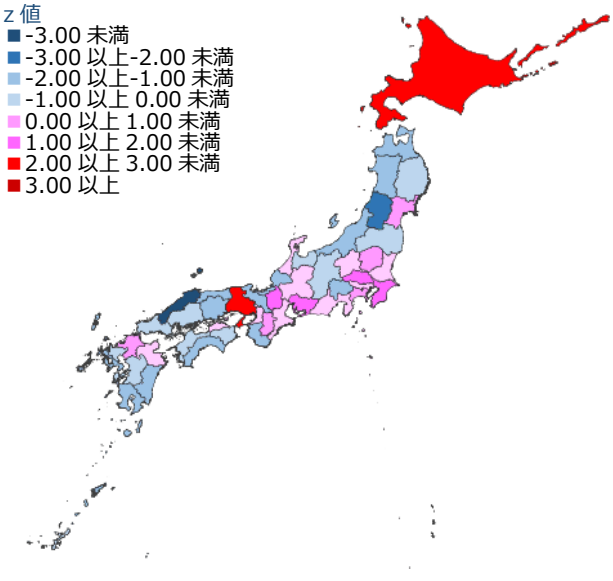
下の図は、満足度（満足度調査による計測値の平均値）、標準化した満足度（z 値）、単純合成法（各客観指標の z 値の合成）、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。満足度の地図をみると、「住宅」の満足度は比較的高いことから、全体は暖色であるが、薄い桃色から濃い赤まで色のバリエーションが広いことがみてとれる。また、単純合成法と満足度の z 値との比較では、同系統の配色を示す地域と、異なる配色を示す地域がみられた。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも9県であった。

**図表１－３－７　都道府県地図**

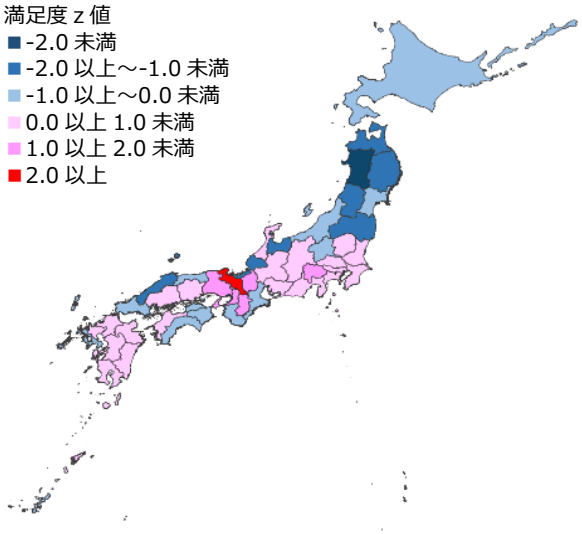
満足度



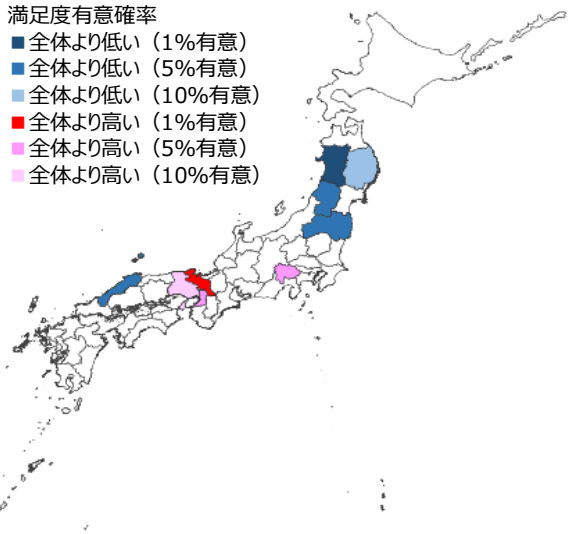

単純合算法（z 値の合計）




満足度 z 値




満足度有意確率



## Ⅳ　仕事と生活（ワークライフバランス）

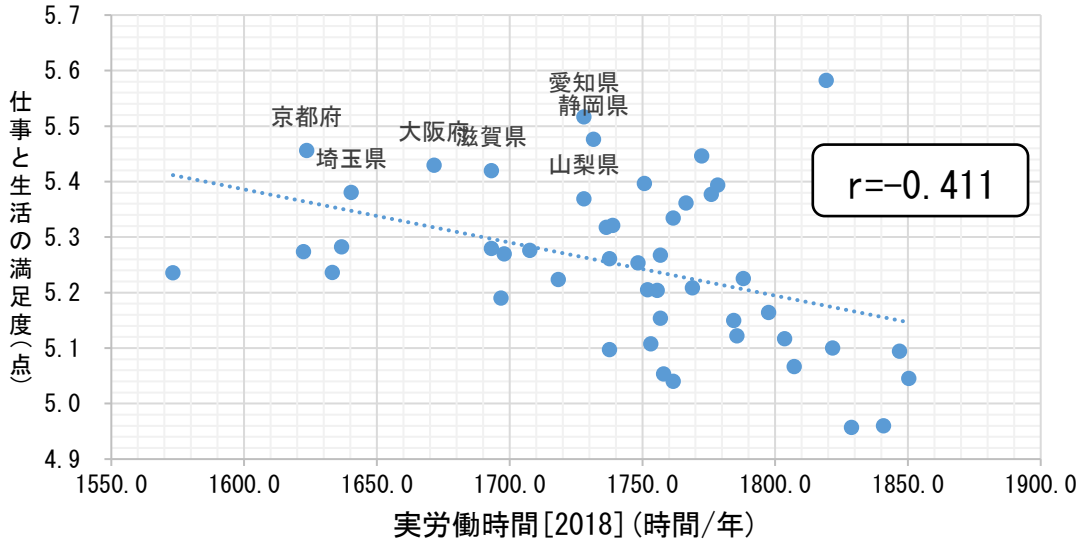
### 1．ダッシュボード指標の妥当性の検証

2019年7月に公表したダッシュボードでは、ワークライフバランスに関する指標として「実労働時間（一般労働者）」、「年次有給休暇取得率」「睡眠時間（平日）」を採用した。ダッシュボード指標の妥当性を検証するため、これらの指標その他の関連指標について、「仕事と生活」の満足度（平均値）の間の関係を分析していく。

#### ①労働時間に関する指標（実労働時間等）

2019 年7月に、ダッシュボード指標として「実労働時間（一般労働者）」を選定したのは、（ⅰ）2019 年調査の個票分析において、正規雇用の平日の「義務的な時間（仕事・家事等）」が7時間以上の人と、7時間未満の人で、「仕事と生活」の満足度で有意な差があったこと、（ⅱ）2019 年調査において「仕事と生活（ワークライフバランス）に関する現在の満足や不満に大きく影響しているものはどれか」という質問への回答の上位（2位）が「労働時間」(38.1%)だったことから選定されたものである。

**図表１－４－１　都道府県別　仕事と生活の満足度と実労働時間の相関**

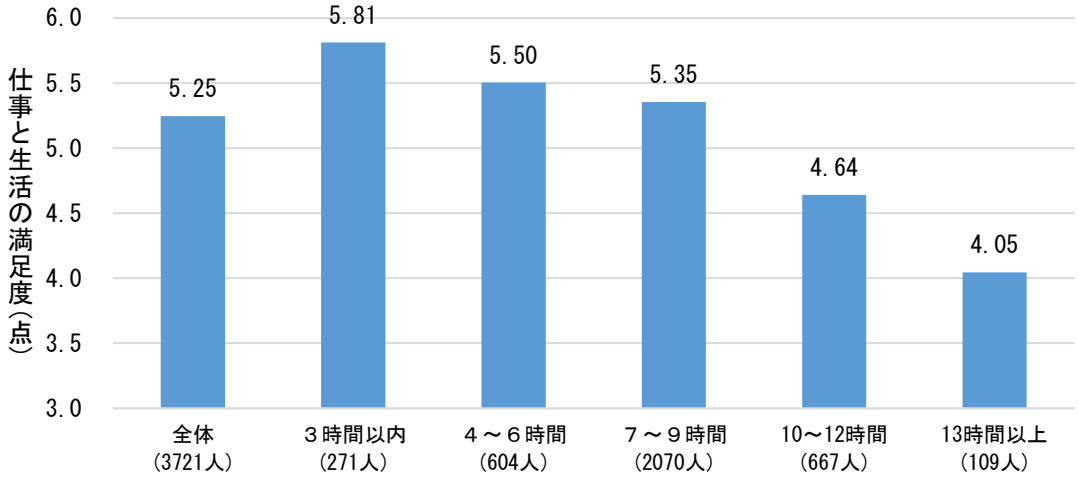



（出典）厚生労働省　毎月勤労統計調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

今回、都道府県別の「仕事と生活」の満足度と、一人当たり実労働時間との関係をみると、相関係数が-0.411 と一定の相関を示している。ダッシュボードに採用した実労働時間（一般労働者）は、「仕事と生活」の満足度に関係する指標であるということが改めて確認できた。

次に、個票分析によって労働時間と「仕事と生活」の満足度の関係をみていく。男女計では１日当たり労働時間が短いほど満足度が高い関係にあり、１日当たり労働時間3時間以内では満足度が 5.81、労働時間 13 時間以上では 4.05 と大きな差がある。このように、個票分析の結果も、ダッシュボード指標としての「実労働時間（一般労働者）」の有効性を示唆している。

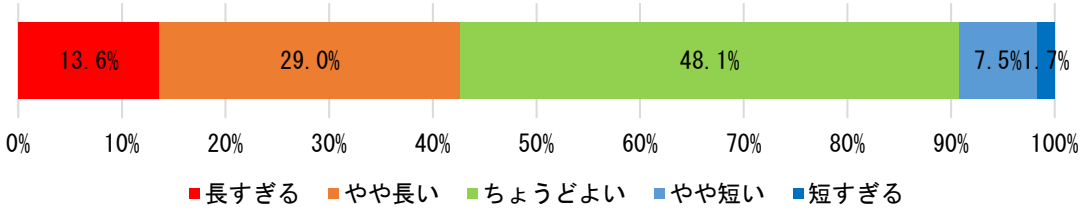
**図表１－４－２　労働時間別の仕事と生活の満足度**
**（就業者全体（学生を除く））**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

一方、労働時間は長すぎず、短すぎずというバランスの視点も重要である。働きたい時間との比較で、労働時間が「長すぎる」又は「やや長い」と考えているのは 42.6%であり、「ちょうどよい」が 48.1%、「やや短い」や「短すぎる」も 9.2%いる。これは、労働時間が短いと十分な所得が得られない、働き甲斐に欠ける等と感じる人がいる可能性が考えられる。

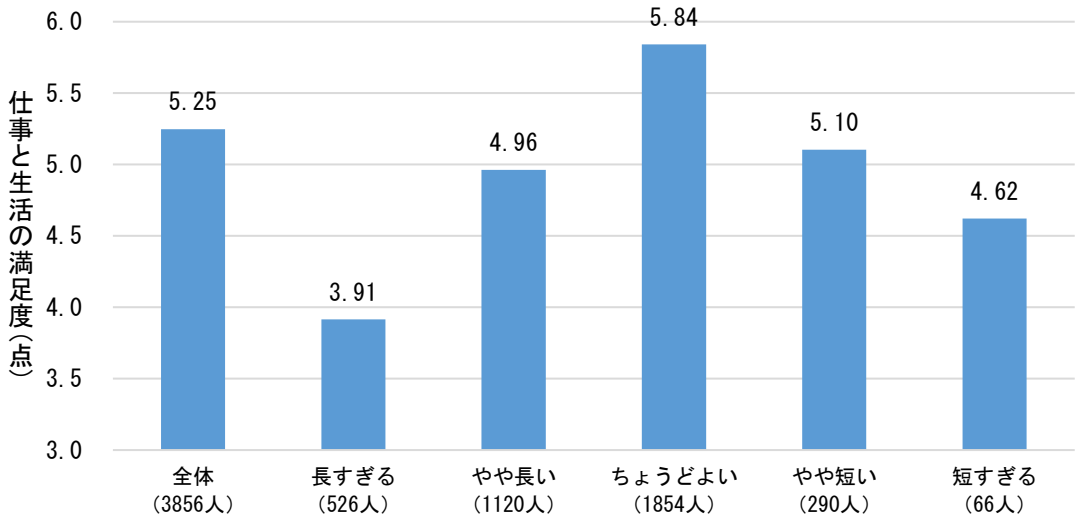
**図表１－４－３　労働時間の評価（働きたい時間との比較）**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

労働時間の感じ方ごとに満足度をみると、「ちょうど良い」と考えている人よりも、労働時間が長い、あるいは短い、と感じている人の方が、満足度が低いことが分かる。

**図表１－４－４　自身の労働時間の感じ方と仕事と生活の満足度**

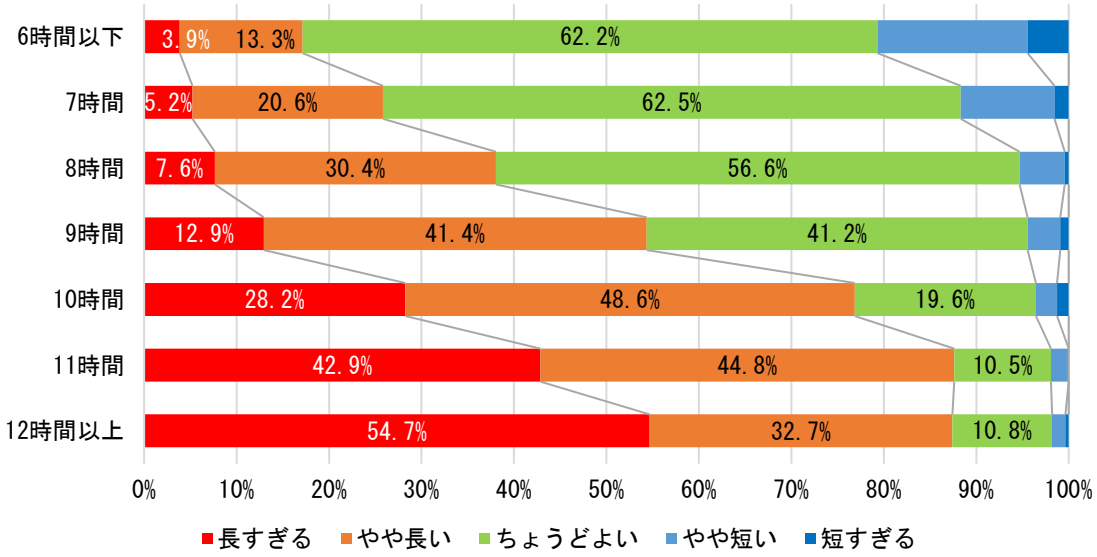



（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

次に、１日の平均的な労働時間別に、労働時間の感じ方や満足度をみていく。１日当たり9時間までは「ちょうど良い」割合が4割以上であるが、10 時間を超えると「ちょうど良い」割合が2割未満となり、「長すぎる」「やや長すぎる」の合計が8割程度になる。また、満足度でみると、9時間以下までは満足度は比較的フラットで、労働時間7時間と9時間の間の満足度の差は 0.2 未満である。しかし、労働時間が 10 時間で満足度が落ち込み、7時間と 10 時間の満足度の差は 0.76 に広がる。

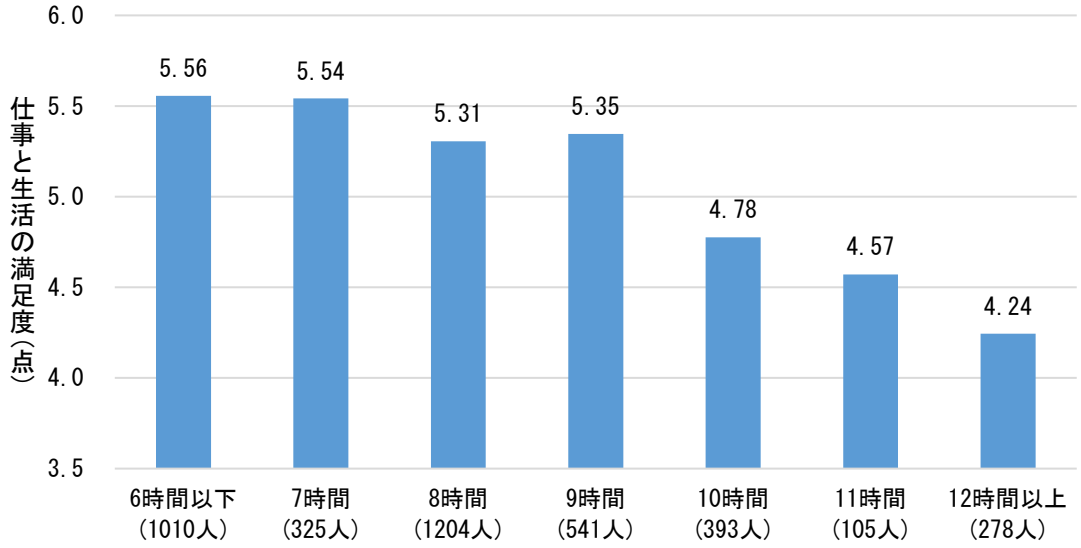
こうしたことから、世界的に長時間労働の指標として使われている週 49 時間以上の長時間労働が満足度を下げることが確認できたので、長時間労働者割合をダッシュボード指標として新たに採用する。なお、OECD においても、同様の指標を Well-being 指標のヘッドライン指標としている。

**図表１－４－５　１日の平均的な労働時間とその評価**
**（働きたい時間との比較）**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

**図表１－４－６　１日の平均的な労働時間と仕事と生活の満足度**



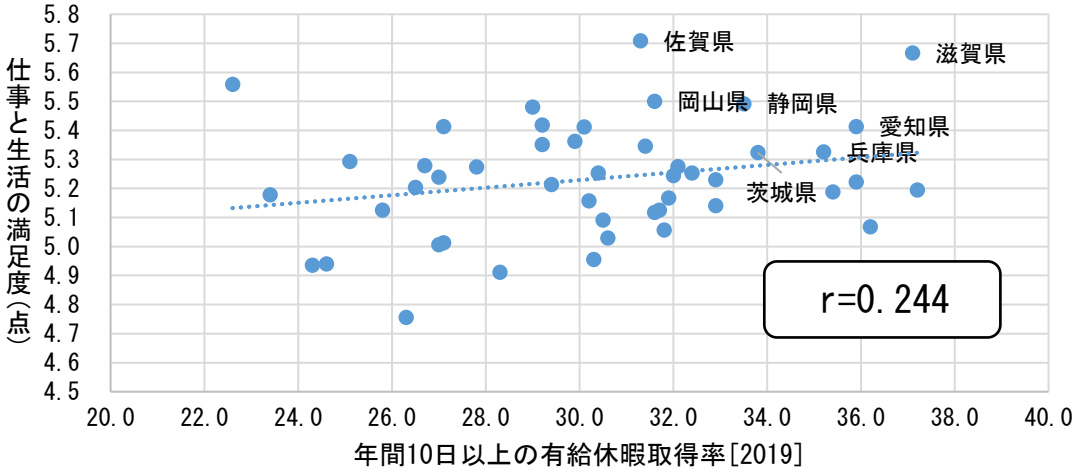

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

### ②年次有給休暇に関する指標

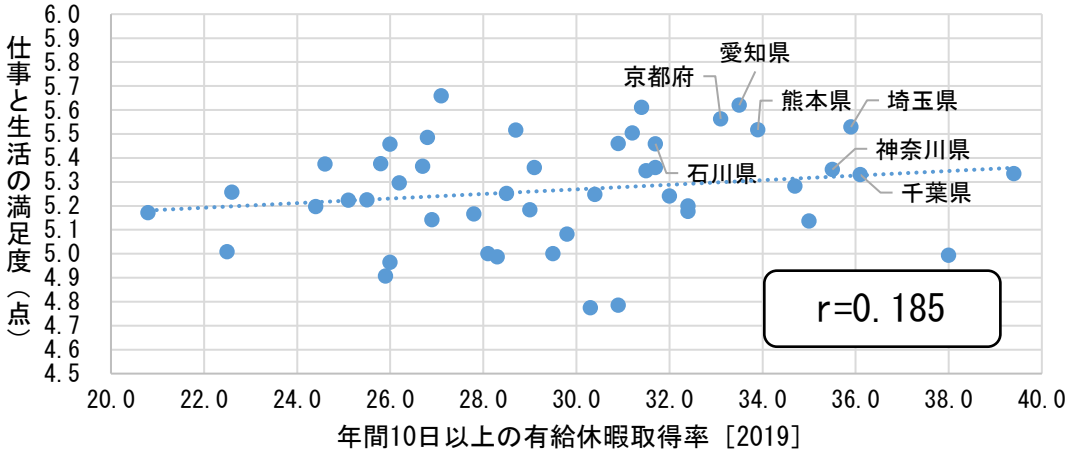
次に、都道府県別の有給休暇取得率と「仕事と生活」の満足度の関係をみていく。ダッシュボードとして採用した厚生労働省「就労条件総合調査」の「年次有給休暇取得日数」や「年次有給休暇取得率（取得日数／付与日数）」は、都道府県別の計数が得られないため、ここでは民間統計である（一社）ストレスオフ・アライアンス「ココロの体力測定 2019」の「年間 10 日以上の有給休暇取得率」を用いる。

男性では滋賀県・愛知県、女性では埼玉県のように、10 日以上有給休暇取得率が高い都道府県では、「仕事と生活」の満足度が高い傾向にあるという緩やかな正の相関関係が確認できる。

**図表１－４－７　都道府県別　仕事と生活の満足度と有給休暇取得率の相関（男性）**




**図表１－４－８　都道府県別　仕事と生活の満足度と有給休暇の取得率の相関（女性）**

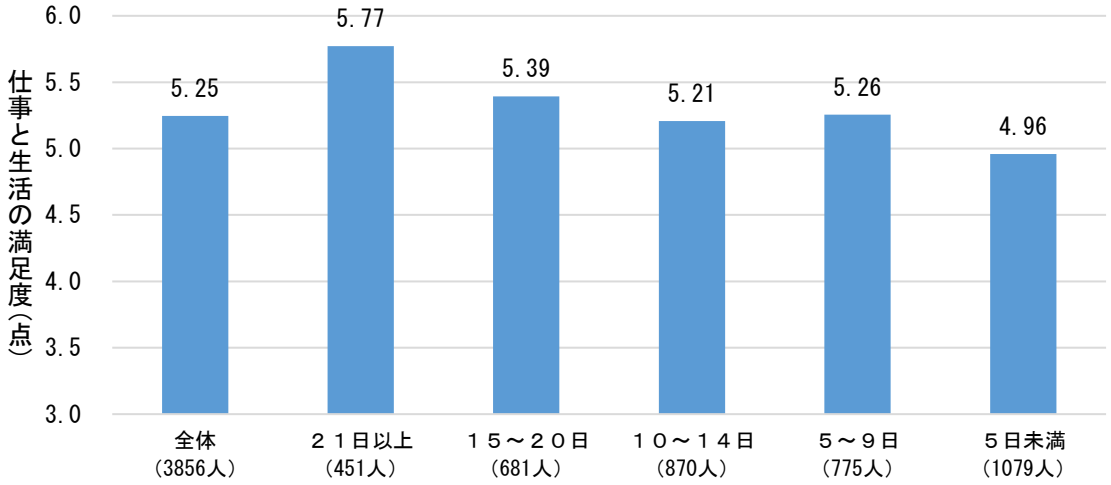



（出典）（一社）ストレスオフ・アライアンス　ココロの体力測定 2019

内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

次に、個票分析によって、有給休暇の年間取得日数と「仕事と生活」の満足度との関係をみていく。年間取得日数5日未満の就業者は満足度が 4.96 と最も低く、21 日以上では満足度が 5.77 と最も高いことから、有給休暇取得日数が満足度と一定の関係があり、ダッシュボード指標としての有効性が示唆される。

**図表１－４－９　有給休暇の取得日数別の仕事と生活の満足度**

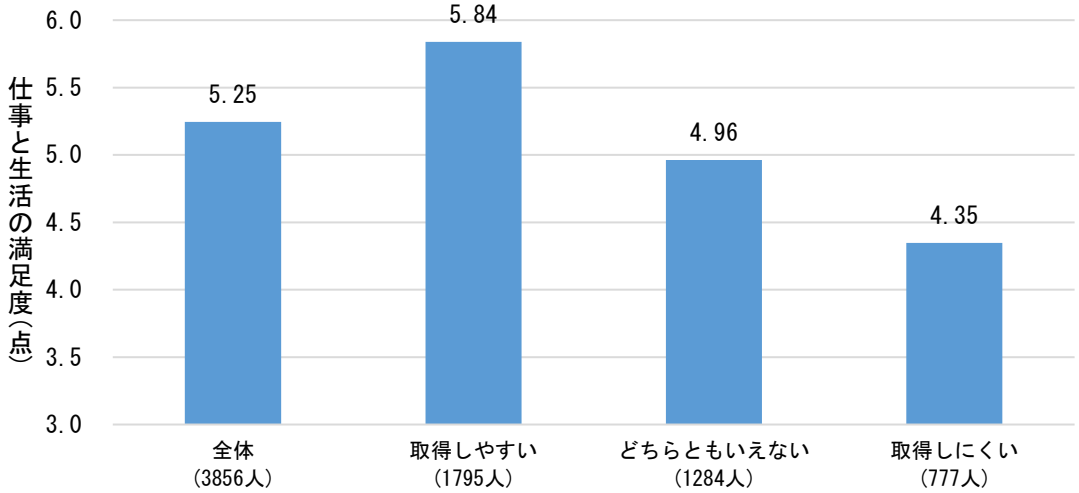



（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

さらに、ワークライフバランスとの関係が深い指標の例として「有給休暇の取りやすさ」についてみてみる。

2020 年調査で「休暇の取得しやすさ」を質問したところ、取得しやすいと回答した人の満足度が 5.84、取得しにくいと回答した人の満足度が 4.35 と大きな差がある。現時点では「休暇の取得しやすさ」を示す既存統計は存在しないが、仮にこうした視点の統計が継続的に入手できるようになれば、「仕事と生活」の満足度と関する有力な指標候補になり得るのではないか

**図表１－４－10　休暇の取得のしやすさ別の仕事と生活の満足度**



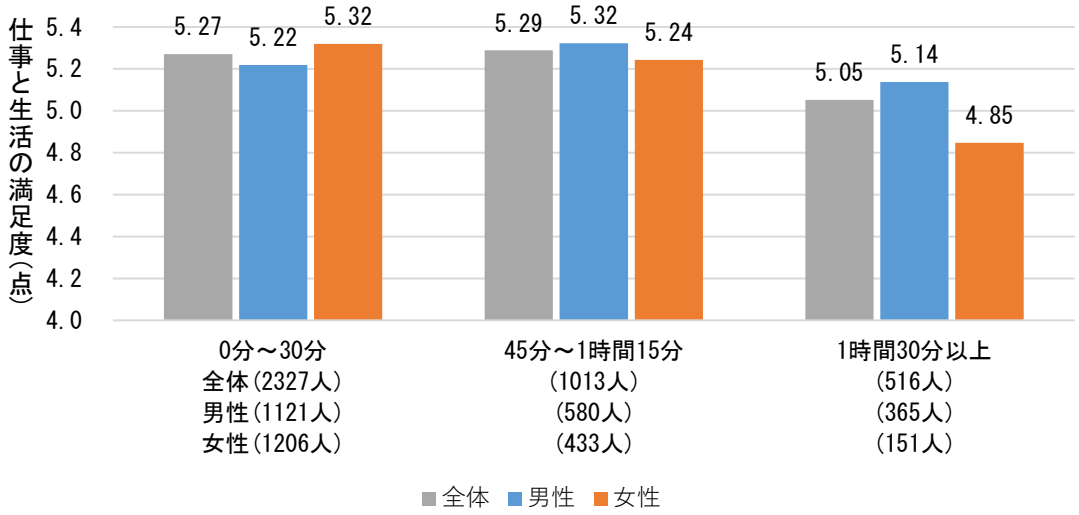

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

### ③その他の指標

以上のほか、ダッシュボードに採用している指標として「睡眠時間」がある。この指標は 2019 年調査において「仕事と生活（ワークライフバランス）に関する現在の満足や不満に大きく影響しているものはどれか」という質問への回答の上位（3位）が睡眠・食事・入浴等の時間だったことから選定されたものである。しかし、都道府県別にみると、睡眠時間と「仕事と生活」の満足度は負の相関　(−0.492)となっており、ダッシュボード指標から除くこととする。

次に、通勤・通学時間（有業者）と「仕事と生活」の満足度の関係をみてみる。通勤・通学時間が長くなると、生活の時間が少なくなり、ワークライフバランスが悪化する可能性があるためである。個票分析によると、通勤・通学時間が1時間 30 分以上になると、満足度が低下する傾向がある。特に女性の満足度は大きく落ち込むことがみてとれる。

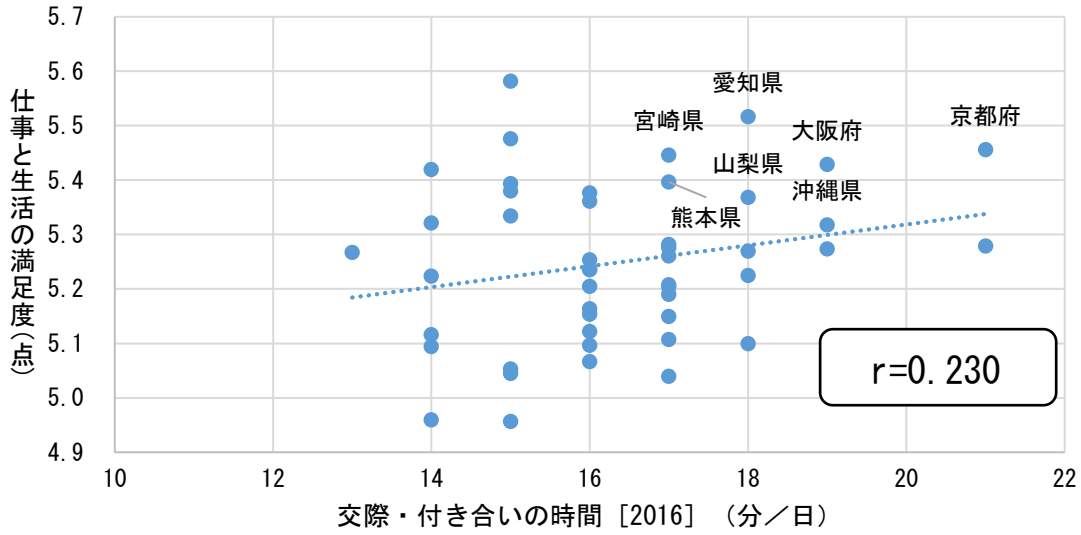
**図表１－４－11　通勤・通学時間別の仕事と生活の満足度（有業者）**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

また、交際・付き合いの時間との関係をみると、交際・付き合いの時間が長い都道府県ほど「仕事と生活」の満足度が高いことがみてとれる。

**図表１－４－12　都道府県別　仕事と生活の満足度と交際・付き合いの時間の相関**




（出典）総務省　社会生活基本調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## 2.「仕事と生活」の満足度に関する総合的な指標の作成に向けて（試行）

前節では、都道府県レベルで、「仕事と生活」の満足度と相関のある客観指標を複数確認することができ、「仕事と生活」の満足度が、実労働時間や交際・付き合い時間などと多面的な相関関係を有していることがみてとれた。そこで、複数の指標を合成することで、「仕事と生活」の満足度を客観的に示す総合的な指標を作成することを試みることとした。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここでは z 値を算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。

「仕事と生活」の満足度を表す客観指標としては、仕事の時間とプライベートの時間の両面からとらえることとし、この両面に対応する指標を選定した。なお、仕事の時間に対応する指標としては「実労働時間」、プライベートの時間に対応する指標としては「3次活動の平均時間」及び「交際・付き合いの時間」を選定している。「3次活動の平均時間」と「交際・付き合いの時間」はいずれもプライベートな時間のうち自由時間を示すものであり、前者が時間の総量、後者は自由時間の過ごし方の内容を示す。試算結果は以下のとおりである。

試算結果をみると、単純合成法、多変量解析法の相関係数の値はほぼ同じ値となっている。（0.34、0.36）

### （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 実労働時間（事業所規模 5 人以上） | 時間 | 毎月勤労統計調査 | 2016 | −0.34 | 仕事の時間 | |
| 3次活動の平均時間(男女) | 分 | 社会生活基本調査 | 2016 | 0.13 | 自由時間（量） | 平均時間は性比（2018 年）で調整 |
| 交際・付き合いの時間 | 分 | 社会生活基本調査 | 2016 | 0.23 | 自由時間（質） | |

### （2）試算結果

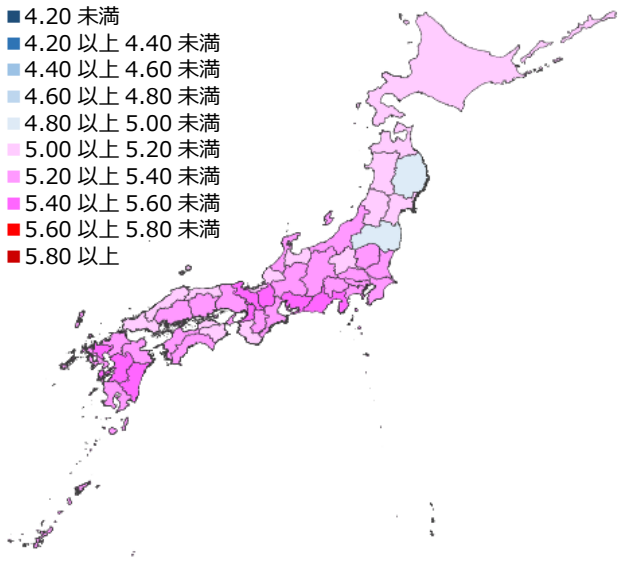
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| −①実労働時間（事業所規模5人以上）<br>＋②3次活動の平均時間(男)(女)※人口性比：2018 で計算<br>＋③交際・付き合いの時間 | 0.34 | 0.36 |

### （3）都道府県地図

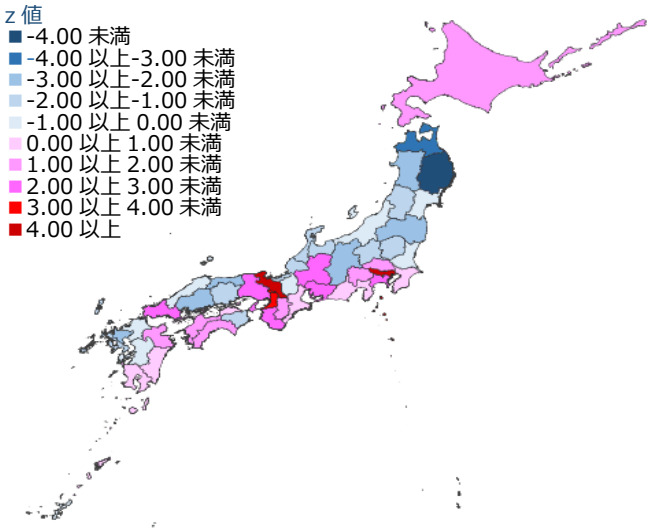
下の図は、満足度（満足度調査による計測値の平均値）、標準化した満足度（z 値）、単純合成法（各客観指標の z 値の合成）、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。満足度の地図をみると、全体は薄い桃色のグラデーションとなっているが、「仕事と生活」の満足度が5以下の県も一部みられる。また、単純合成法と満足度の z 値との比較では、同系統の配色を示す地域と異なる配色を示す地域がみられた。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも8県であった。

**図表１－４－13　都道府県地図**

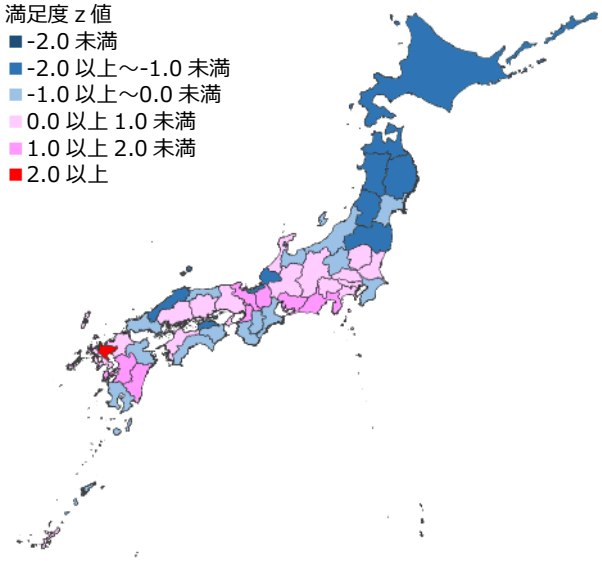
満足度



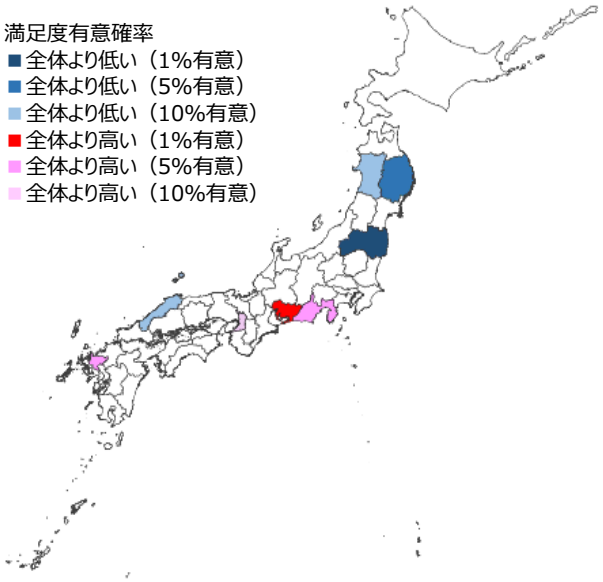

単純合算法（z 値の合計）




満足度 z 値




満足度有意確率



## Ⅴ　健康状態

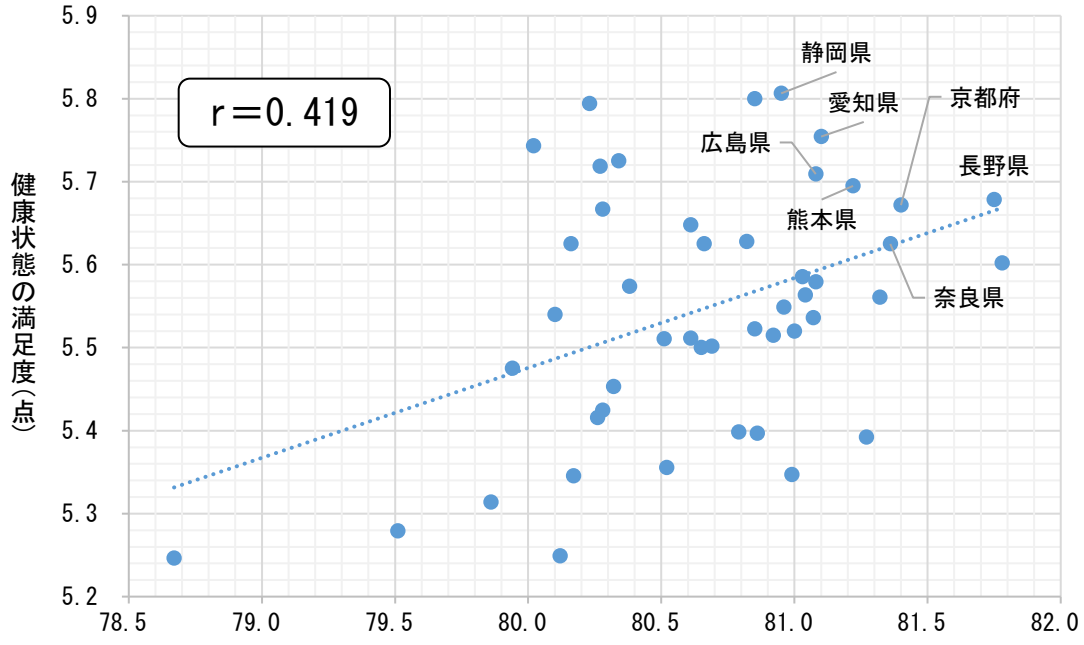
### 1．ダッシュボード指標の妥当性の検証

2019 年7月に公表したダッシュボードでは、健康状態に関する指標として「平均寿命」「健康寿命」「糖尿病が強く疑われる者の割合」「運動習慣がある者の割合」を採用した。ダッシュボード指標の妥当性を検証するため、これらの指標その他の関連指標について、「健康状態」の満足度（平均値）の間の関係を分析していく。

#### ①平均寿命・健康寿命

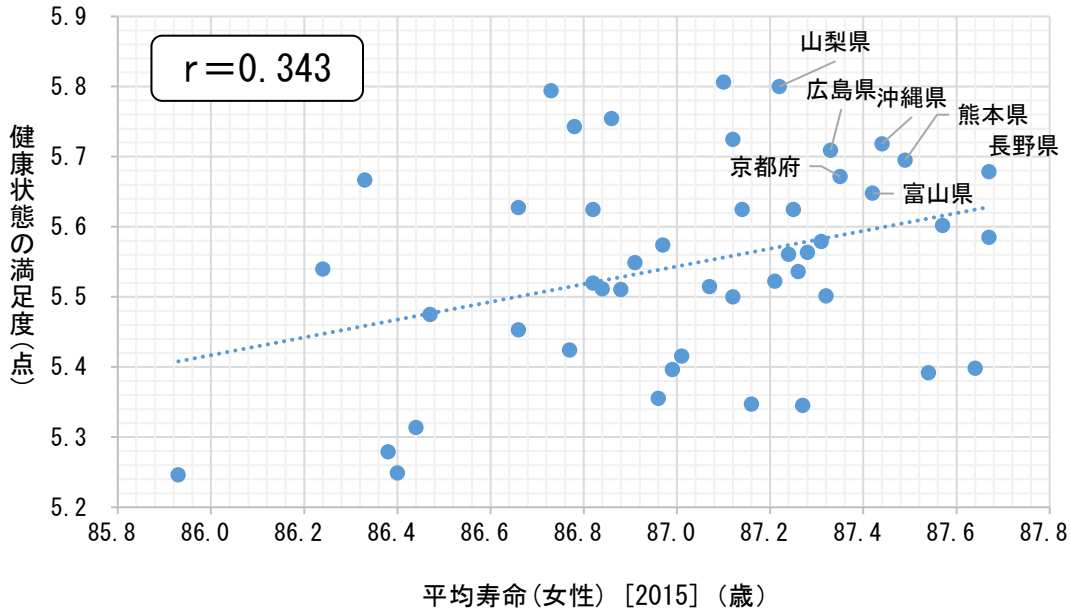
都道府県別の「健康状態」の満足度と平均寿命の相関係数が男性は 0.419、女性は 0.343 と、一定の相関が確認できる。また、健康寿命においても相関がみられることから、これは、自分の住む地域における平均寿命の長さが健康状態に関する主観的満足度に寄与している可能性も完全には否定できないが、むしろ健康に関する主観的満足度の高さ、すなわち「自分は健康である」と思う人の多い都道府県では、平均寿命が高くなるという関係にある可能性がある。平均寿命及び健康寿命は、満足度・生活の質に関するダッシュボード指標としての有効性が示唆される。

**図表１－５－１　都道府県別　健康状態の満足度と平均寿命（男性）の相関**



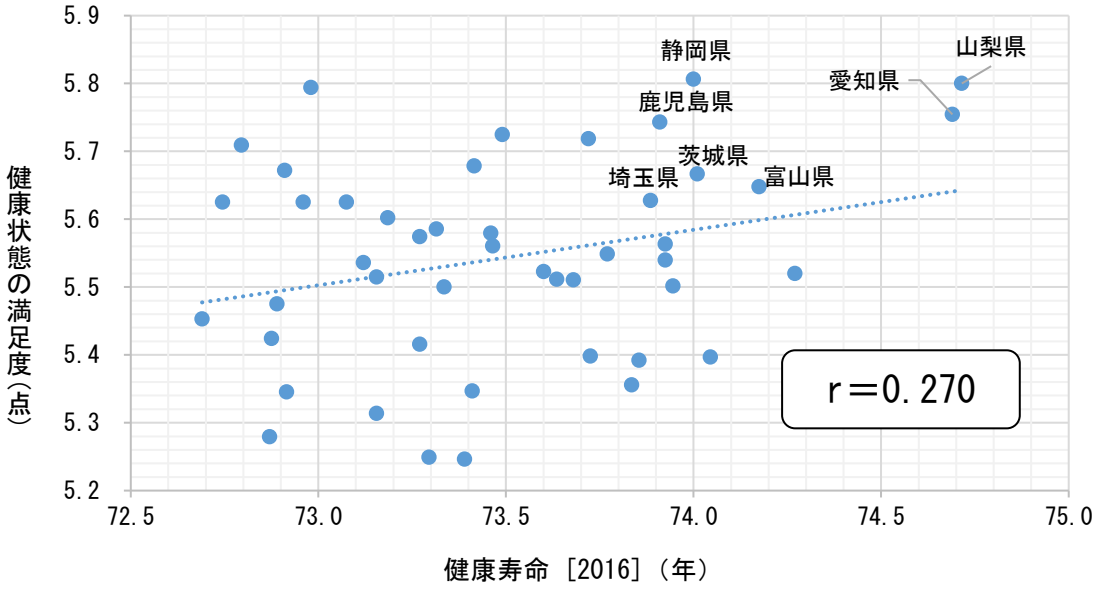

（出典）厚生労働省　簡易生命表
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

**図表１－５－２　都道府県別　健康状態の満足度と平均寿命（女性）の相関**




（出典）厚生労働省　簡易生命表
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

**図表１－５－３　都道府県別　健康状態の満足度と健康寿命の相関**



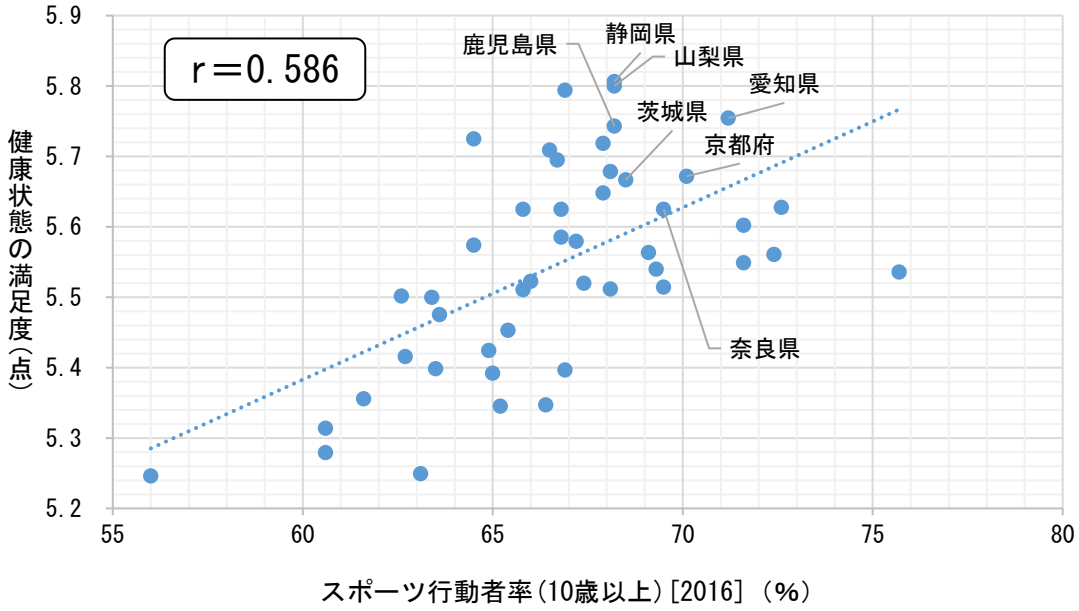

（出典）総務省統計局　社会・人口統計体系
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

### ②健康に関する習慣（運動習慣等）

ダッシュボードでは、厚生労働省「国民健康・栄養調査」における「運動習慣がある者の割合」を選定した。このデータは都道府県別の計数が得られないため、他の統計を用いて、運動習慣と健康状態の満足度との関係をみていく。

まず、総務省「社会生活基礎調査」における「スポーツ行動者率」（1年の間に1度でもスポーツをした者）でみると、スポーツ行動者率の高い都道府県は健康状態の満足度が高いというやや強い相関がみられる。

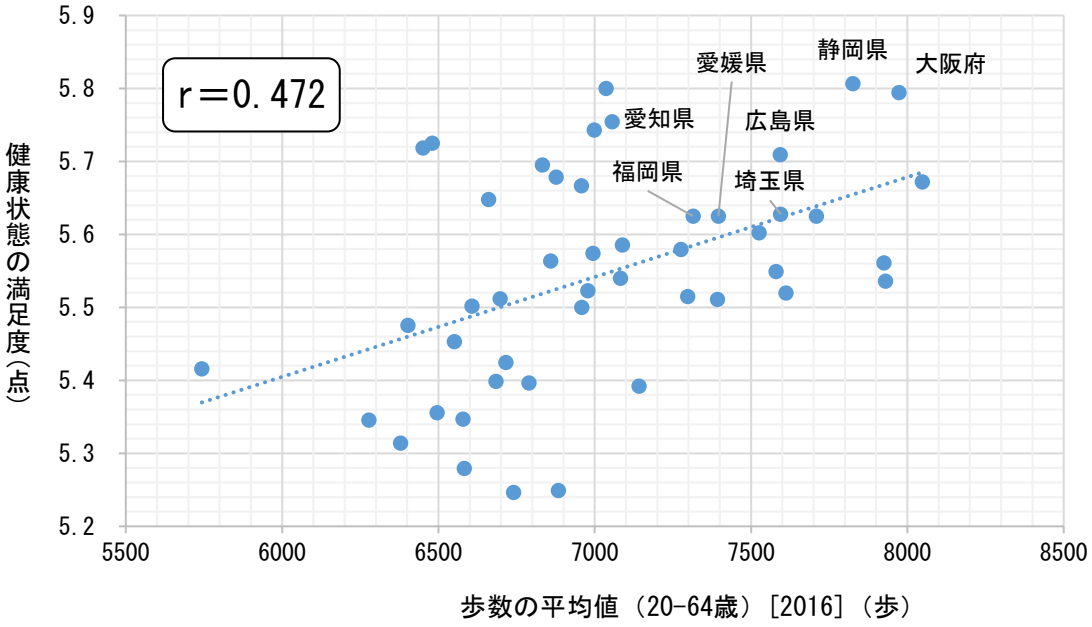
**図表１－５－４　都道府県別　健康状態の満足度とスポーツ行動者率の相関**




（出典）総務省　社会生活基本調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

また、1日当たりの歩数の平均値でみても、一定の相関がみられる。これらは、運動習慣に関する指標の、ダッシュボード指標としての有効性を示唆している。

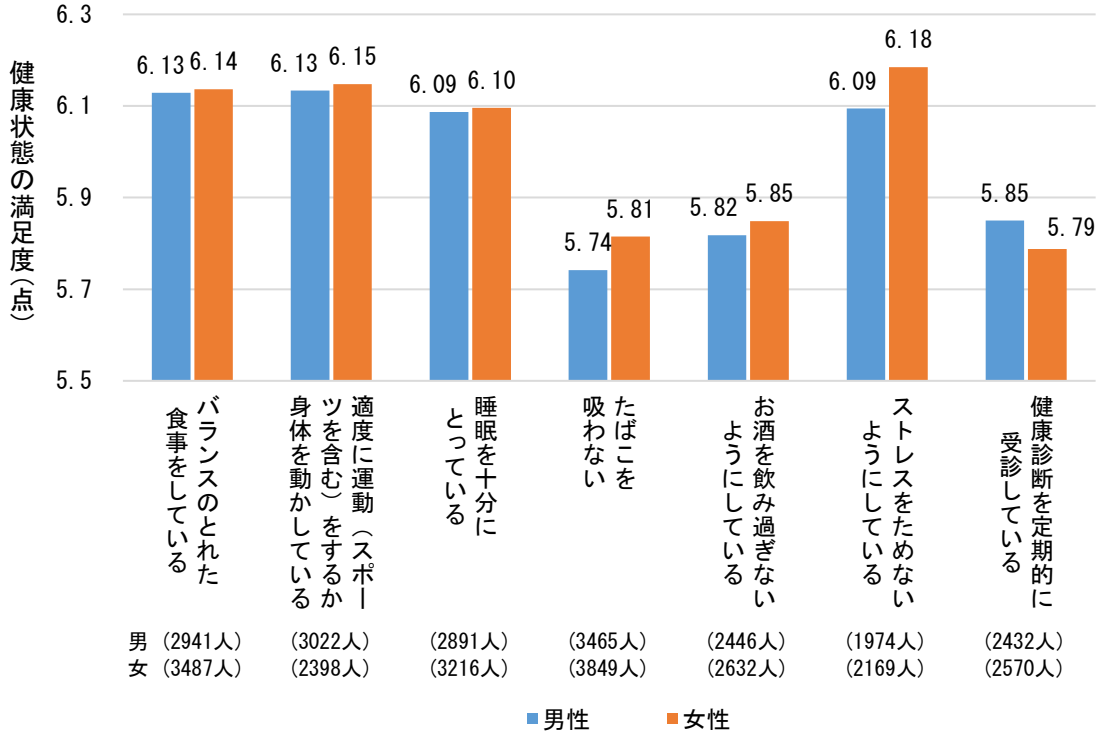
**図表１－５－５　都道府県別　健康状態の満足度と歩数の平均値の相関**




（出典）厚生労働省　国民健康・栄養調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

一方、健康に関する様々な習慣のうち、健康状態の満足度に関係するものは運動習慣だけではない。例えば、バランスのとれた食事、ストレスをためない、十分な睡眠も、健康状態の満足度に関係していると考えられる。

**図表１－５－６　健康のために行っていることと健康状態の満足度**

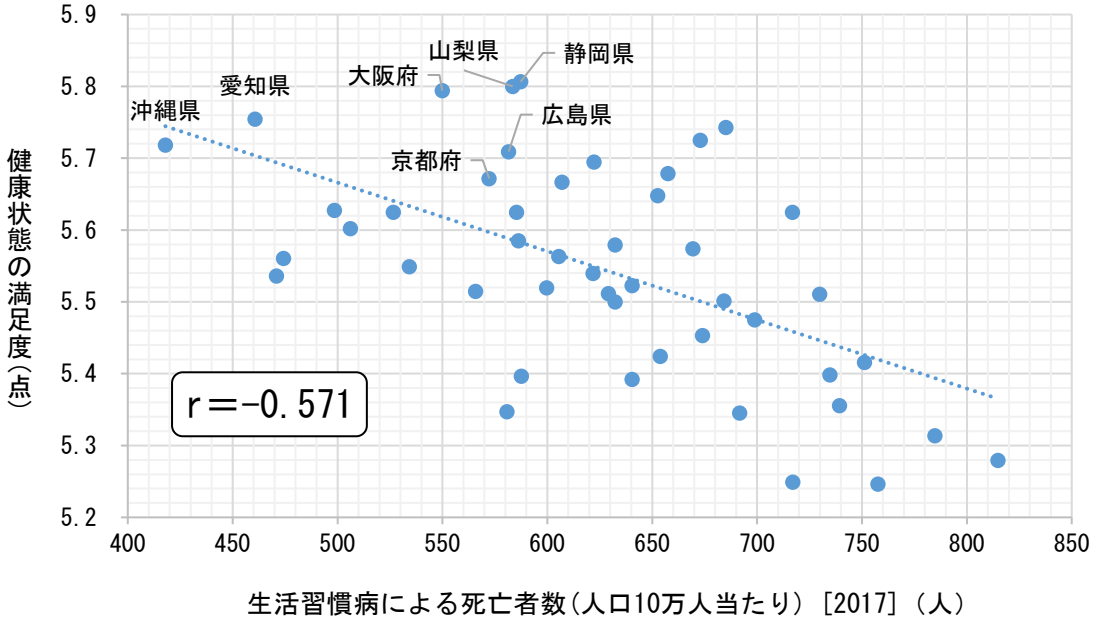



（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

### ③生活習慣病等の健康状態に関する指標

都道府県別の生活習慣病による死亡者数と「健康状態」の満足度との関係をみると、相関係数が-0.571 と高い負の相関を示しているため、ダッシュボード指標として新たに採用する。

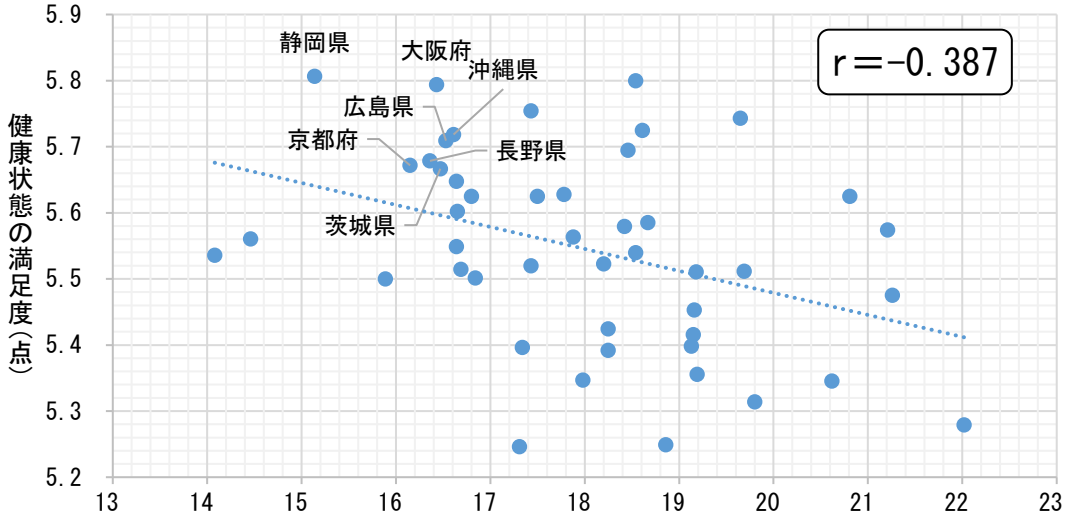
**図表１－５－７　都道府県別　健康状態の満足度と生活習慣病による死亡者数の相関**




（出典）総務省統計局　社会・人口統計体系
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

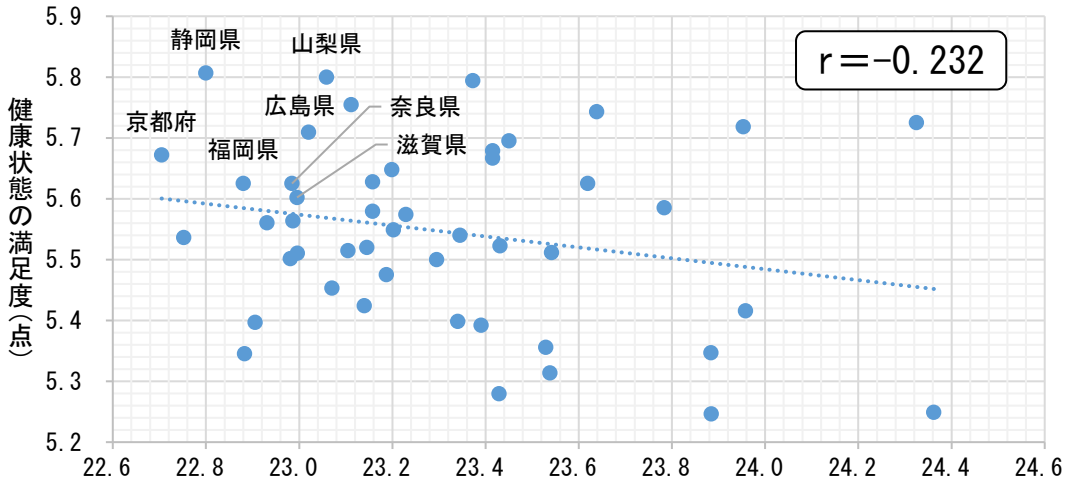
次に、高血圧や BMI 値といった、人々の健康状態を表す指標と「健康状態」の満足度との関係をみると、高血圧率が低い都道府県ほど、「健康状態」の満足度の平均値が高いこと（相関係数-0.387）、BMI 値が低い都道府県ほど、「健康状態」の満足度の平均値が高いこと（相関係数-0.232）がみてとれた。

**図表１－５－８　都道府県別　健康状態の満足度と**
**特定健診の高血圧率の相関**




（出典）厚生労働省　第４回 NDB オープンデータ、特定健康診査の状況（都道府県別一覧）
（高血圧率＝（収縮期血圧 140mmHg 以上の者の人数）／（特定健診受診者数）により算出）
内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

**図表１－５－９　都道府県別　健康状態の満足度と**
**BMIの平均値の相関**

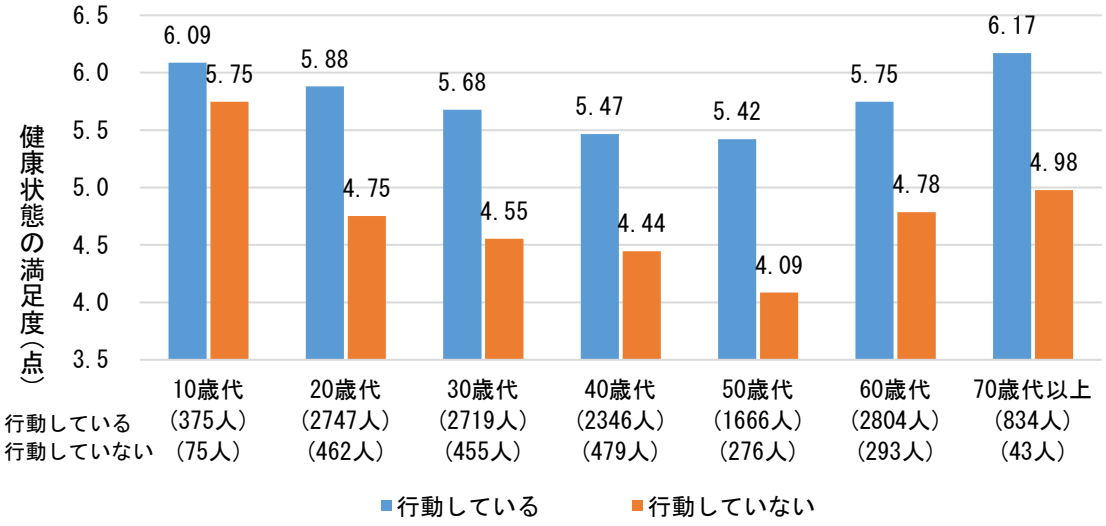



（出典）厚生労働省　国民健康・栄養調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## ＜コラム＞　健康のための行動

回答者が健康のために行動しているかどうかと、自身の「健康状態」の満足度との関係をみると、男女とも行動している者の満足度が行動していない者の満足度に比べ高くなっている。年代別にみると、10 歳代では両者の差は小さいが、その他の年代では1ポイント以上差があり、特に 50 歳代では、1.3 ポイント差があるとともに、健康のために行動していない者の満足度は 4.09 と低い水準となっている。

**図表１－５－10　年代別　健康のための行動と健康状態の満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## 2.「健康状態」の満足度を客観的に示す総合的な指標の作成（試行）

前節では、都道府県レベルで、「健康状態」の満足度と相関のある客観指標を複数確認することができ、「健康状態」の満足度が、平均寿命や生活習慣病による死亡者数などと多面的な相関関係を有していることがみてとれた。そこで、複数の指標を合成することで、「健康状態」の満足度を客観的に示す総合的な指標を作成することを試みることとした。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここでは z 値を算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。

「健康状態」の満足度を表す客観指標としては、寿命、疾病、健康増進の面からとらえることとし、これらの面に対応する指標を選定した。なお、寿命に対応する指標として「平均余命」（男女）、疾病に対応する指標として「生活習慣病による死亡者数」「通院者率」、健康増進に対応する指標として「スポーツの年間行動者率」を選定している。試算結果は以下のとおりである。

試算結果をみると、単純合成法、多変量解析法とも相関係数は 0.61 と他の分野に比べ非常に高くなっている。

### （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平均余命(0歳・男) | 年 | 生命表 | 2015 | 0.42 | 寿命 | |
| 平均余命(0歳・女) | 年 | 生命表 | 2015 | 0.34 | 寿命 | |
| 生活習慣病による死亡者数（人口 10 万人当たり） | 人 | 人口動態統計 | 2017 | −0.57 | 疾病 | 統計でみる都道府県のすがたの掲載データを使用 |
| 通院者率（人口千人当たり） | 人 | 国民生活基礎調査 | 2016 | −0.50 | 疾病 | |
| スポーツの年間行動者率(10歳以上) | % | 社会生活基本調査 | 2016 | 0.59 | 健康増進 | |

### （2）試算結果

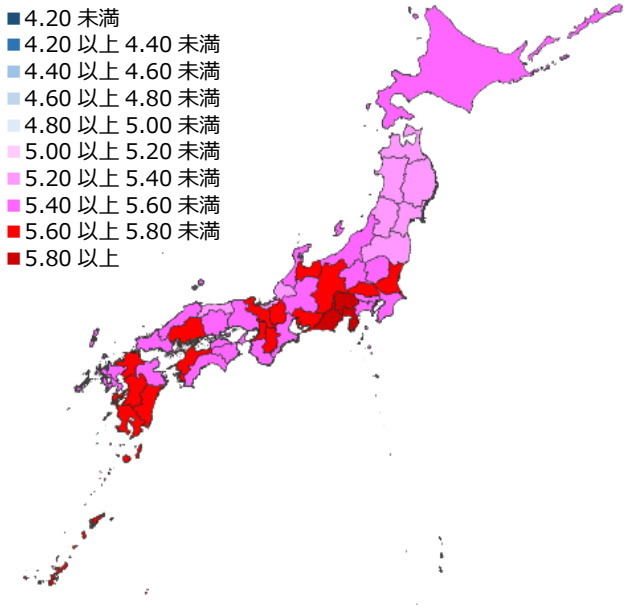
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| ①平均余命(0歳・男)<br>＋②平均余命(0歳・女)<br>－③生活習慣病による死亡者数（人口 10 万人当たり）<br>－④通院者率（人口千人当たり）<br>＋⑤スポーツの年間行動者率(10 歳以上) | 0.61 | 0.61 |

### （3）都道府県地図

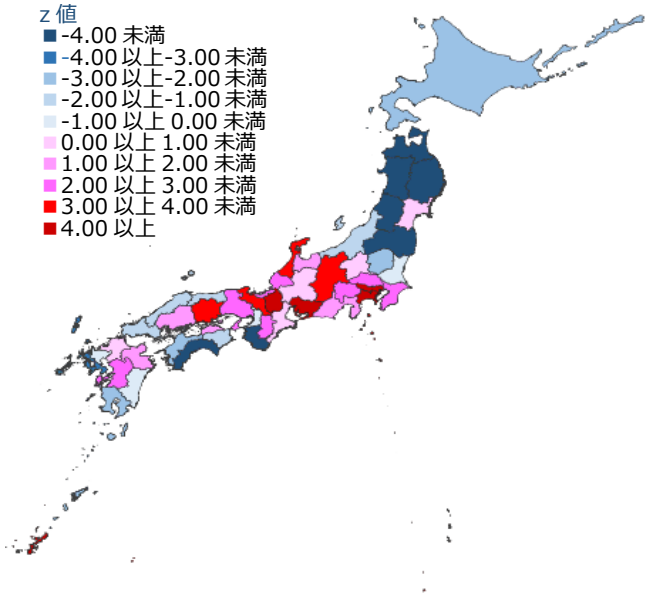
下の図は、満足度（満足度調査による計測値の平均値）、標準化した満足度（z 値）、単純合成法（各客観指標の z 値の合成）、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。満足度の地図をみると、「健康状態」の満足度は比較的高いことから、全体が濃い桃色であるとともに、赤みが強い地域もいくつかみられる。また、単純合成法と満足度の z 値との比較でも、概ね同系統の配色となっている。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも9県であった。

**図表１－５－11　都道府県地図**

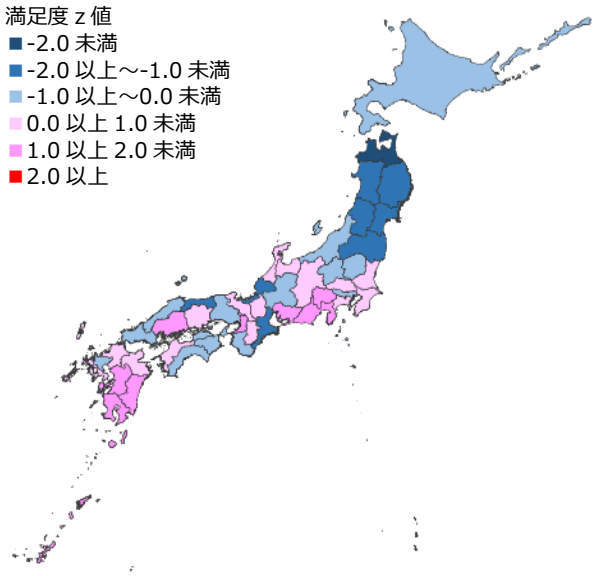
満足度



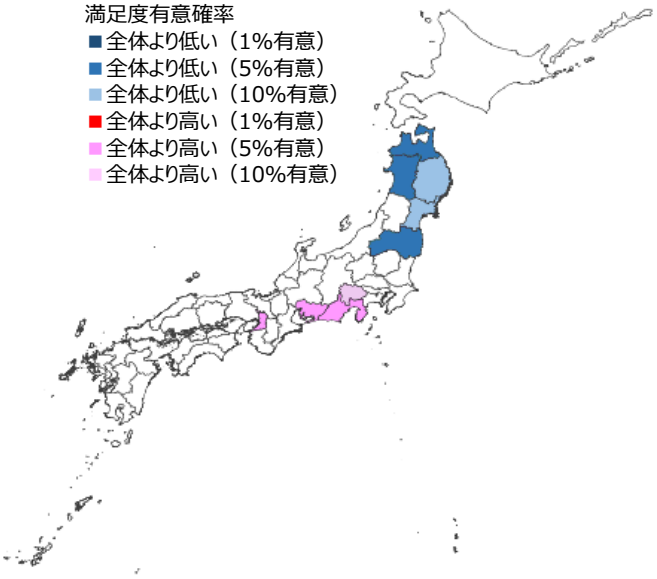

単純合成法（z 値の合計）




満足度 z 値




満足度有意確率



## Ⅵ　教育水準・教育環境

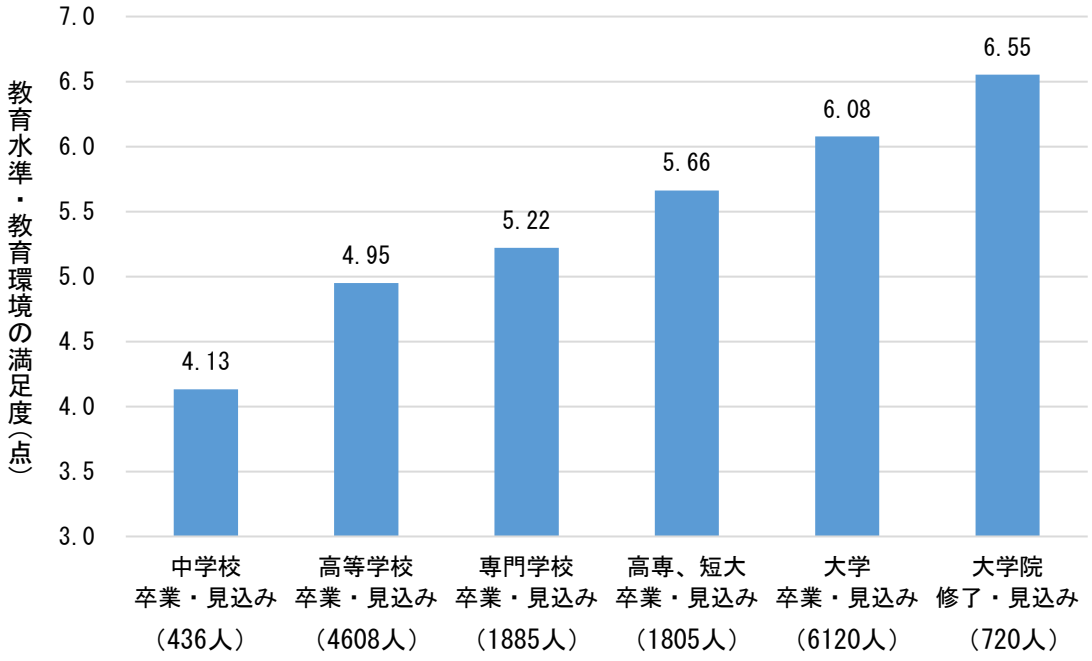
### 1．ダッシュボード指標の妥当性の検証

2019 年7月に公表したダッシュボードでは、教育水準・教育環境に関する指標として「大学進学率」「学習到達度」「社会人入学者数」を採用した。ダッシュボード指標の妥当性を検証するため、これらの指標その他の関連指標について、「教育水準・教育環境」の満足度（平均値）の間の関係を分析していく。

#### ①大学進学率

回答者の最終学歴と「教育水準・教育環境」の満足度との関係をみると、最終学歴が高いほど満足度は高い傾向がみられる。中学校卒業・見込みの者の満足度は 4.13 であるのに対し、大学院修了・見込みの者の満足度は 6.55 と2ポイント以上の大きな差が生じている。

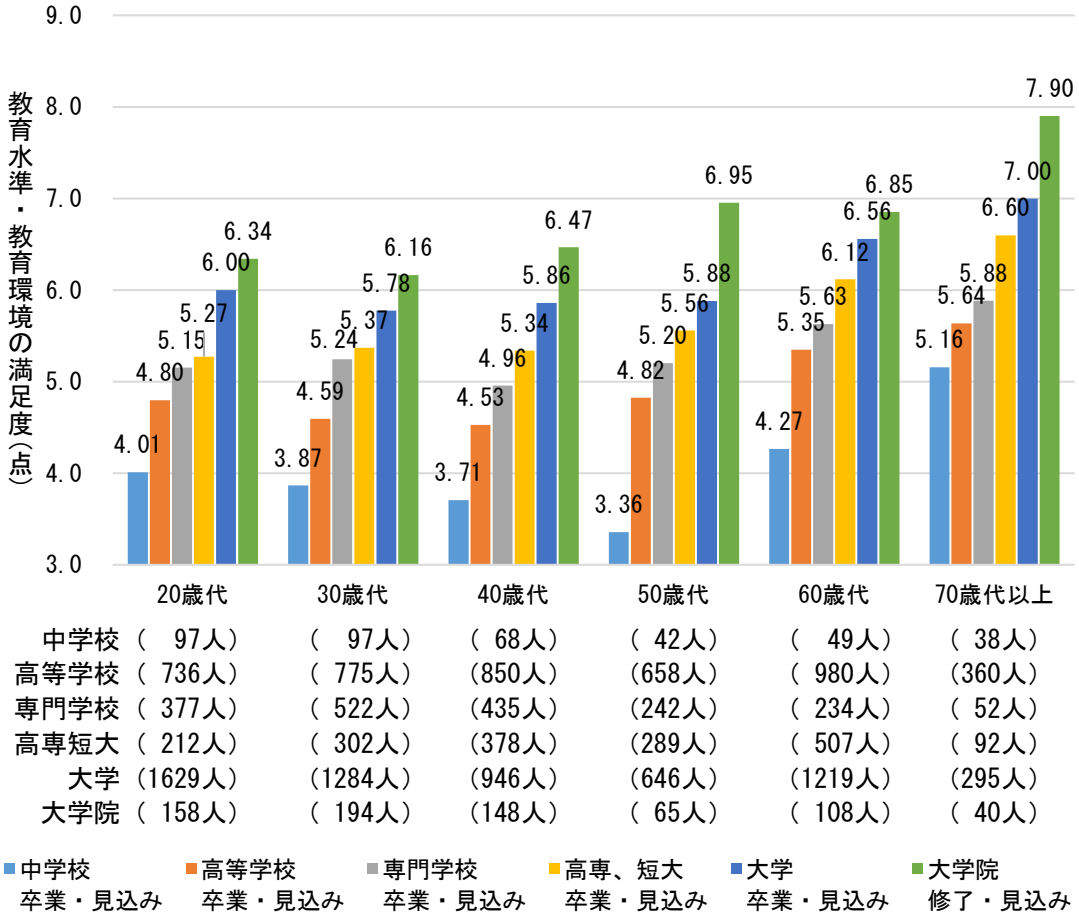
**図表１－６－１　最終学歴と教育水準・教育環境の満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019年調査・2020年調査）

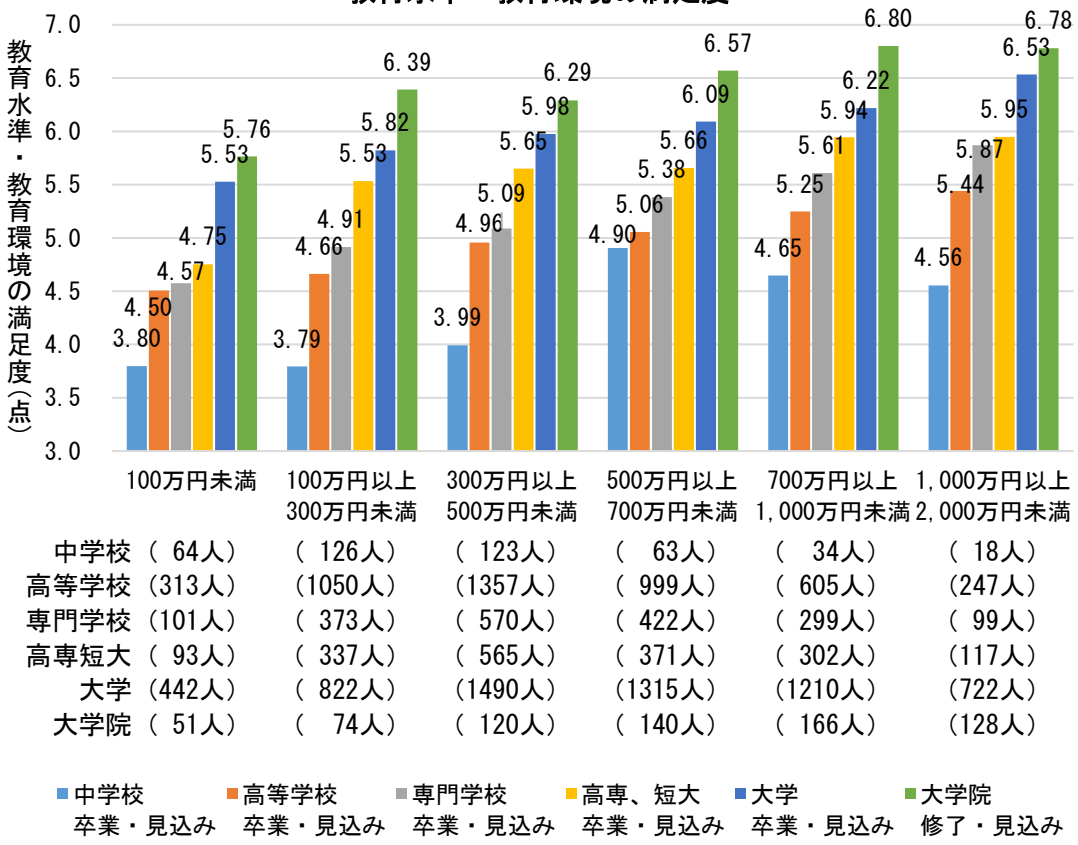
次に、年齢別に最終学歴と満足度との関係をみると、すべての年代で右肩上がりの関係がみられる。また、世帯年収別との関係でも、すべての年収範囲において右肩上がりとなっており、同じ年収でも「教育水準・教育環境」の満足度は最終学歴が高いほど高くなっている。

**図表１－６－２　年齢別　最終学歴と教育水準・教育環境の満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019年調査・2020年調査）

**図表１－６－３　世帯年収別　最終学歴と**
**教育水準・教育環境の満足度**



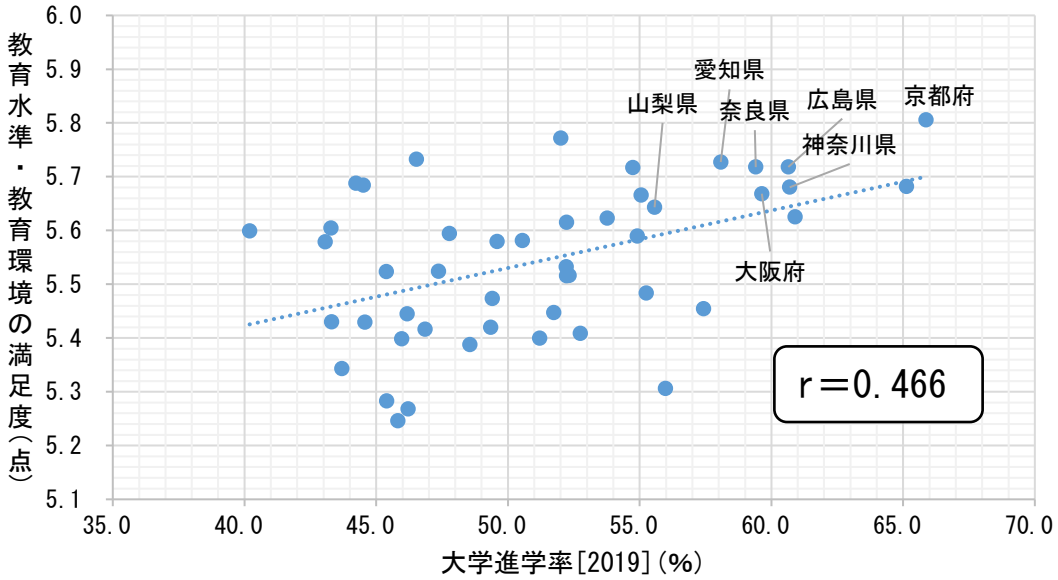

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019年調査・2020年調査）

回答者の最終学歴と、「教育水準・教育環境」の満足度が相関していることは、上記の分析でみてとれた。では、今回の Web 調査で収集した満足度と一般統計で示される指標、例えば、都道府県ごとの大学進学率との間に同様な相関関係はあるのだろうか。ここでは、都道府県ごとに回答者の「教育水準・教育環境」の満足度の平均値を算出し、それと一般統計から得られた都道府県別の大学進学率等との関係についてみていくことにする。

図表１－６－４は、都道府県別の「教育水準・教育環境」の満足度と大学進学率との関係をあらわしており、進学率が高い都道府県ほど、満足度の平均値が高いことがみてとれる。相関係数も 0.466 と非常に高い相関を示している。

以上の分析は、「大学進学率」が「教育水準・教育環境」の満足度をあらわす指標群（ダッシュボード）の一つとして有効であることを示唆する。

**図表１－６－４　都道府県別　教育水準・教育環境の満足度と大学進学率の相関**




（出典）文部科学省　学校基本調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

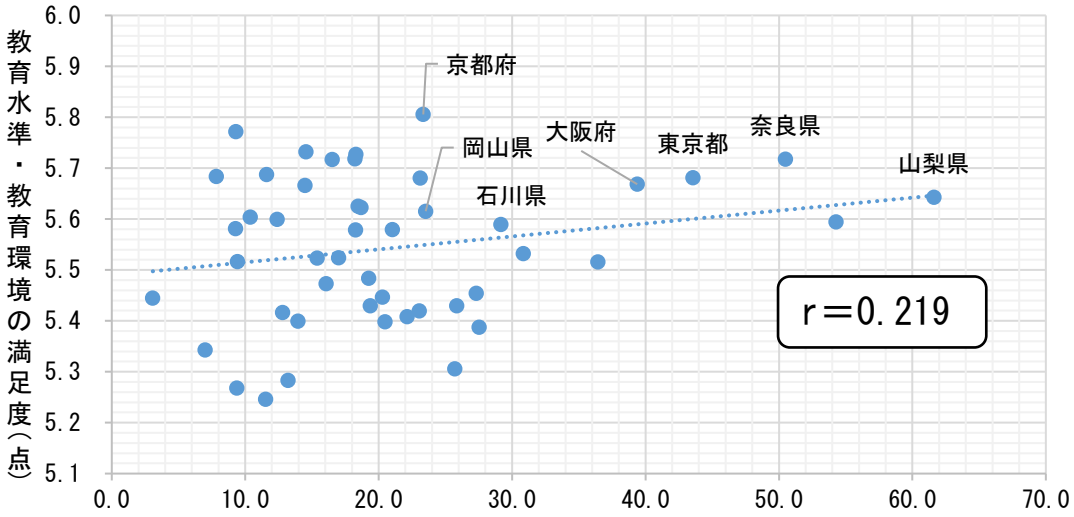
### ②その他の指標

ダッシュボードで採用している「学習到達度(PISA)」は、読み書き計算といった認知能力のテストに偏りがちであり、対象年齢が限られており主観的満足度との関係を確認するのが困難であるという短所はある。しかし、教育に関する数少ないアウトカム指標の1つであり、OECD「幸福度白書 2020」のヘッドライン指標や「より良い暮らし指標」においても採用されており、今回変更しないこととする。

もう1つのダッシュボード採用指標は「社会人入学者数」である。これは 2019 年調査において、「教育水準・教育環境」の満足度に大きく影響しているものとして、「社会人向けの教養講座・専門講座の使いやすさ（市民講座・大学・大学院等）」との回答が上位（3位）であったことから採用されたものであり、適切な代替指標も無いことから、今回変更しないこととする。

なお、社会人向けの教養講座と直接関係するものではないが、文教施設数の多さも「教育水準・教育環境」の満足度と関係しうる。この指標について都道府県別にみてみると、可住地面積当たりの文教施設数が多い都道府県の方が、「教育水準・教育環境」の満足度が高いという緩やかな相関が確認された。

**図表１－６－５　都道府県別　教育水準・教育環境の満足度と文教施設数の相関**




※文教施設……公民館、図書館、博物館、青少年教育施設

（出典）文部科学省　社会教育調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

## 2.「教育水準・教育環境」の満足度を客観的に示す総合的な指標の作成（試行）

前節では、都道府県レベルで、「教育水準・教育環境」の満足度と相関のある客観指標を複数確認することができ、「教育水準・教育環境」の満足度が、大学進学率や文教施設数と多面的な相関関係を有していることがみてとれた。このように、単一の客観指標では、「教育水準・教育環境」の満足度を十分に表すことにはできないことから、ここでは、複数の指標を合成することで、「教育水準・教育環境」の満足度を客観的に示す総合的な指標を作成することを試みることとした。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここでは z 値を算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。

客観指標としては、試行した結果、大学進学率、大学収容力指数及び文教施設数とした。試算結果は以下のとおりである。

試算結果をみると、単純合成法、多変量解析法とも相関係数は 0.5 程度と高い値となっている。

### （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大学進学率 | % | 学校基本調査 | 2019 | 0.47 | 学歴 | |
| 大学収容力指数 | | | 2018 | 0.47 | 高等教育・リカレント教育へのアクセス | 統計でみる都道府県のすがたの掲載データを使用 |
| 文教施設数（公民館・図書館・博物館・青少年教育施設）（可住地 100k ㎡当たり） | 施設 | 社会教育調査 | 2015 | 0.22 | 生涯学習環境 | |

### （2）試算結果

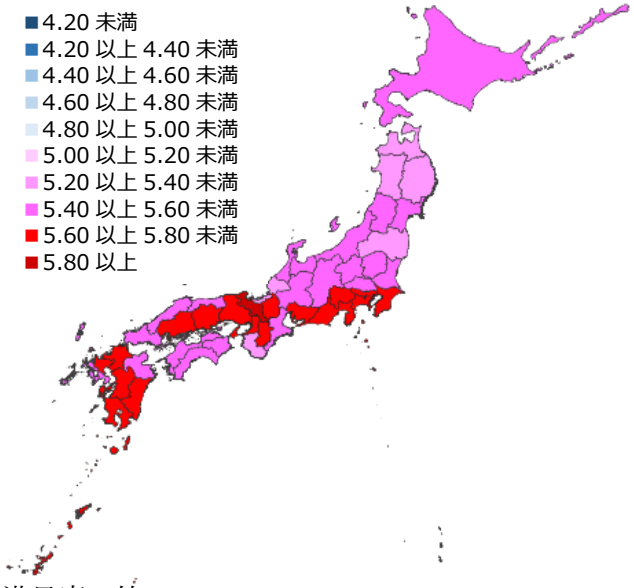
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| ①大学進学率<br>＋②大学収容力指数<br>＋③文教施設数（公民館・図書館・博物館・青少年教育施設）（可住地 100k ㎡当たり） | 0.49 | 0.50 |

### （3）都道府県地図

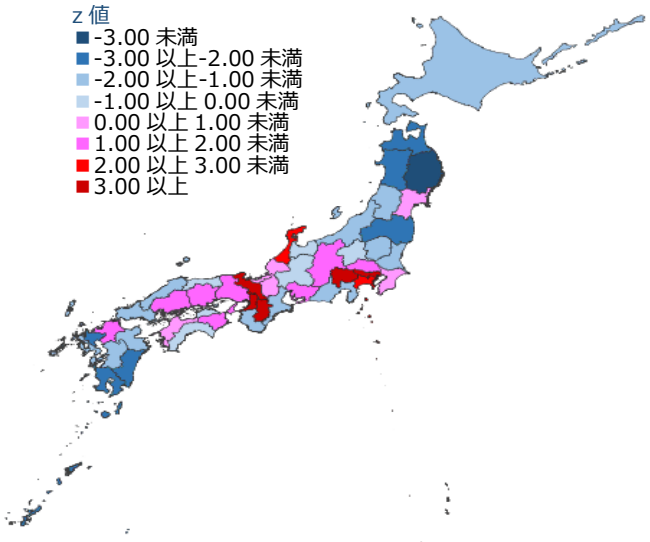
下の図は、満足度（満足度調査による計測値の平均値）、標準化した満足度（z 値）、単純合成法（各客観指標の z 値の合成）、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。満足度の地図をみると、「教育水準・教育環境」の満足度は比較的高いことから、全体が濃い桃色であるとともに、太平洋沿岸に赤色が強い帯がみてとれる。また、単純合成法と満足度の z 値との比較では、同系統の配色が多いものの、一部、異なる配色の県がみられた。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも8県であった。

**図表１－６－６　都道府県地図**

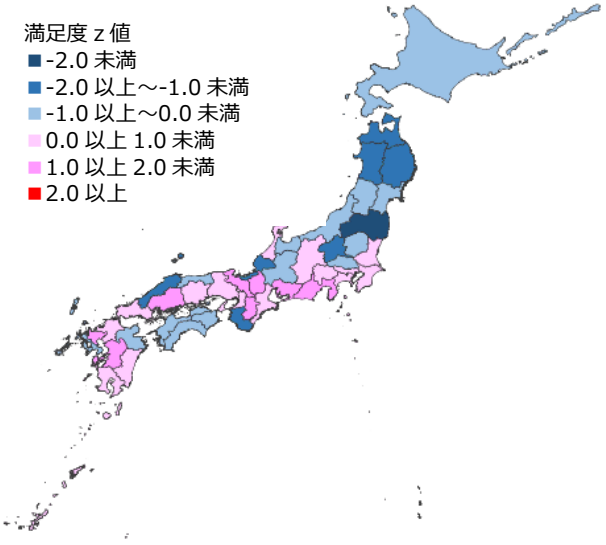
満足度



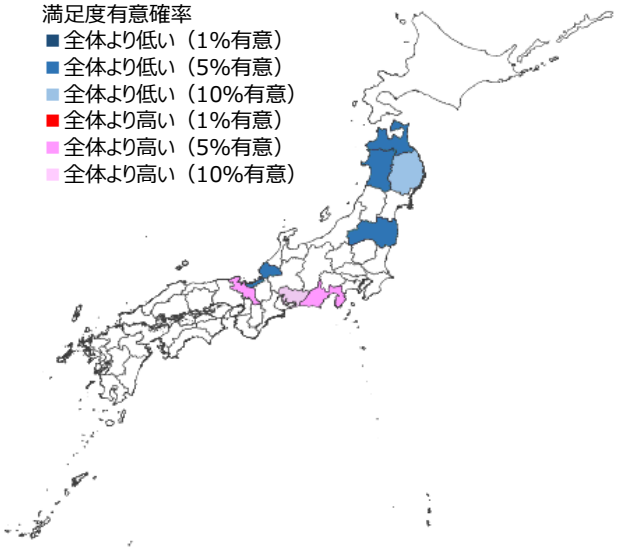

単純合成法（z 値の合計）




満足度 z 値




満足度有意確率



## Ⅶ　社会とのつながり

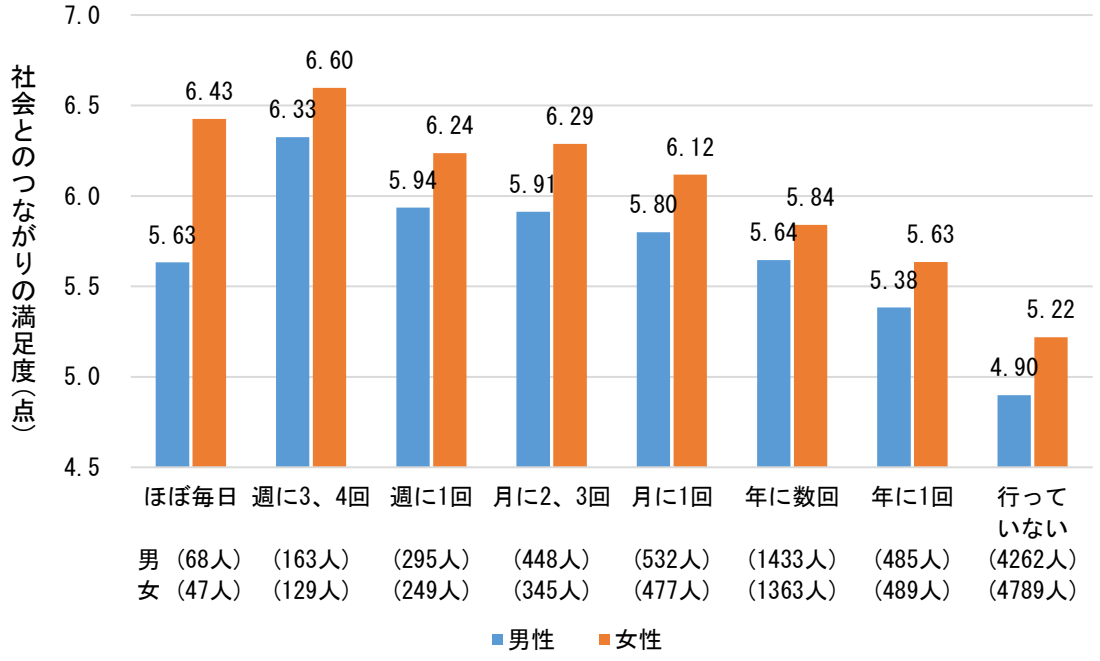
### 1．ダッシュボード指標の妥当性の検証

2019 年7月に公表したダッシュボードでは、社会とのつながりに関する指標として「ボランティア行動者率」「個人寄付総額」「ふるさと納税受入額」「交際・付き合いの時間」を採用した。ダッシュボード指標の妥当性を検証するため、これらの指標その他の関連指標について、「社会とのつながり」の満足度（平均値）の間の関係を分析していく。

#### ①ボランティア行動者率

ボランティア活動と「社会とのつながり」の満足度との関係をみると、ボランティア活動の参加頻度が高いほうが、満足度が高い傾向にあり、ダッシュボード指標としての有効性が示唆される。

**図表１－７－１　この１年間のボランティア活動参加頻度と社会とのつながりの満足度**

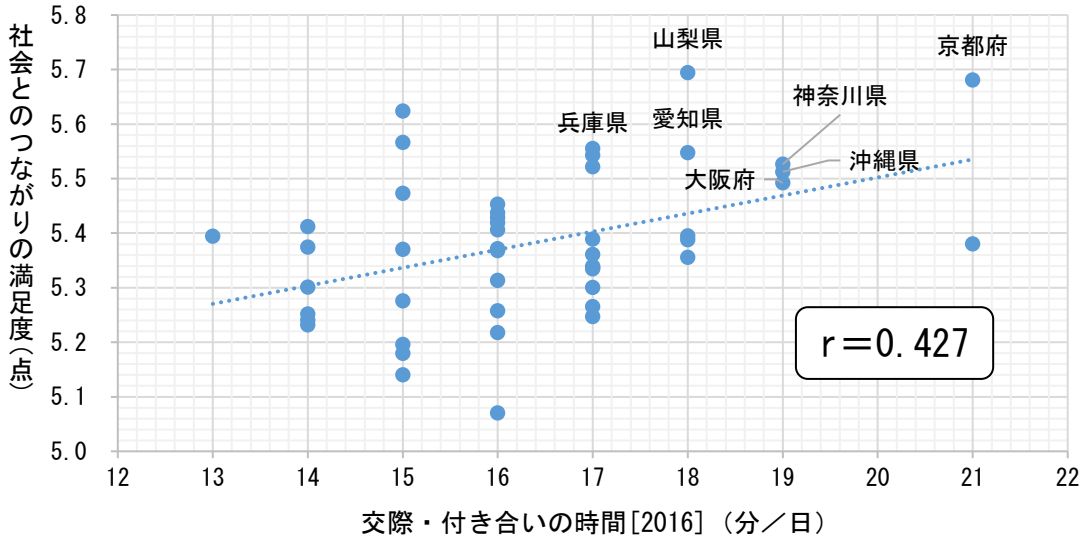



（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

### ②交際・付き合いの時間

都道府県別の「社会とのつながり」の満足度と交際・付き合いの時間との関係をみると、相関係数が 0.427 と高い相関を示しており、ダッシュボード指標としての有効性が示唆される。

**図表１－７－２　都道府県別　社会とのつながりの満足度と交際・付き合いの時間の相関**




（出典）総務省統計局　社会生活基本調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

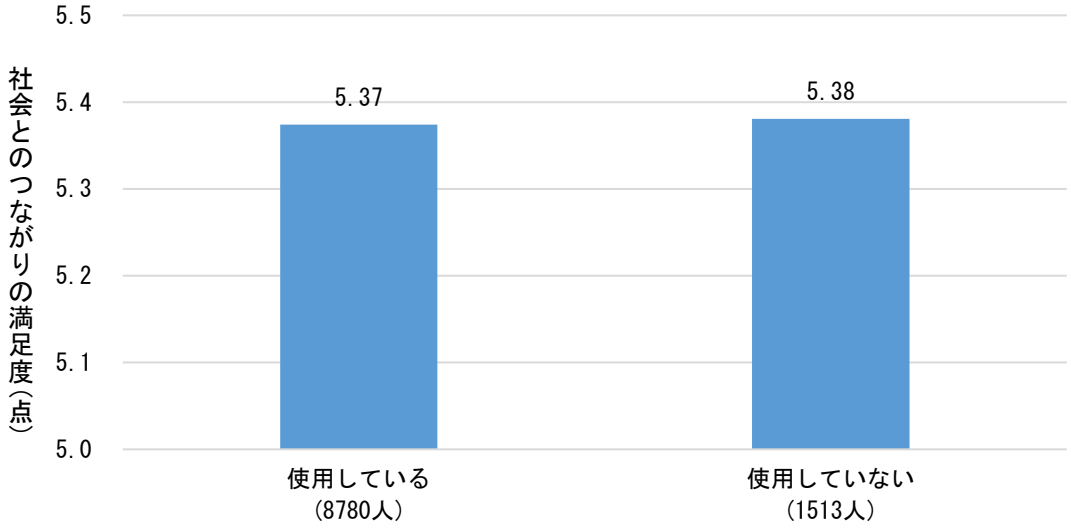
## ＜コラム＞　社会とのつながりとスマートフォン

社会とのつながりを育む手段は、対面による人と人とのコミュニケーションだけではない。手紙や電話、そして現代ではスマートフォンが人と人とのコミュニケーション手段として、大いに活用されている。そこで、スマートフォンの使用頻度と「社会とのつながり」の満足度との関係について、ここではみていくことにする。

スマートフォンを使用している者と使用していない者の満足度を比較すると、両者はほぼ同じである。しかし、年代別にみると、20 歳代では、スマートフォンを使用している者の満足度が1ポイント以上高くなっているのに対し、60 歳代以上では差が小さくなっている。すなわち、「社会とのつながり」の満足度が高い高齢者層では、スマートフォンを活用していなくても社会とのつながりを深めることができているのに対し、20 歳代の若者にとってはスマートフォンを活用することが、社会とのつながりを深めるための重要な手段であることがうかがえる。

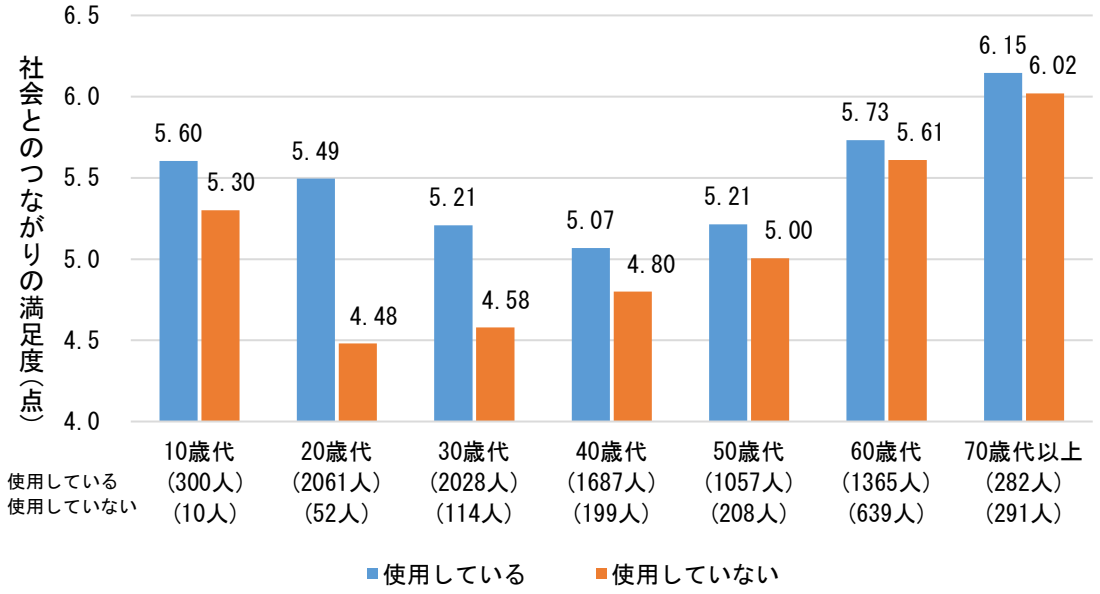
また、スマートフォンを使用している者に対し、スマートフォンは生活の中でどの程度重要であるかを0～10 点までの 11 段階できいたところ、重要性が高いと回答した者の「社会とのつながり」の満足度は高い傾向がみられる。スマートフォンが生活の中で重要であると考えている者は、社会とのつながりをスマートフォンの活用により深めているといえよう。

**図表１－７－３　スマートフォンの使用と社会とのつながりの満足度**



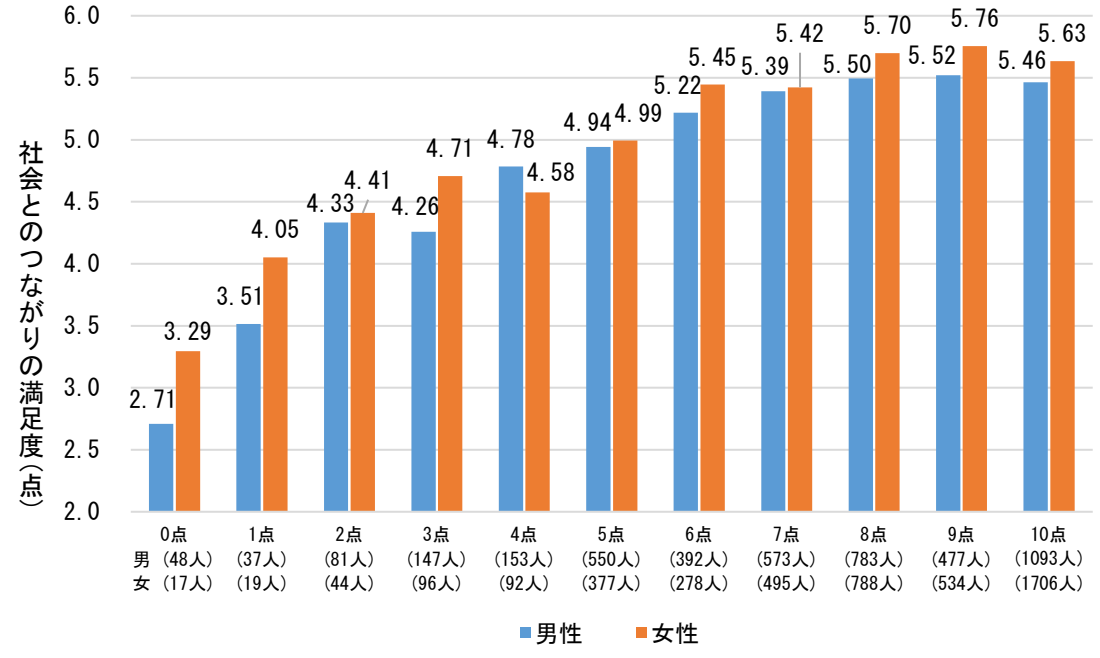

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査）

## 図表１－７－４　年代別　スマートフォンの使用と社会とのつながりの満足度




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査）

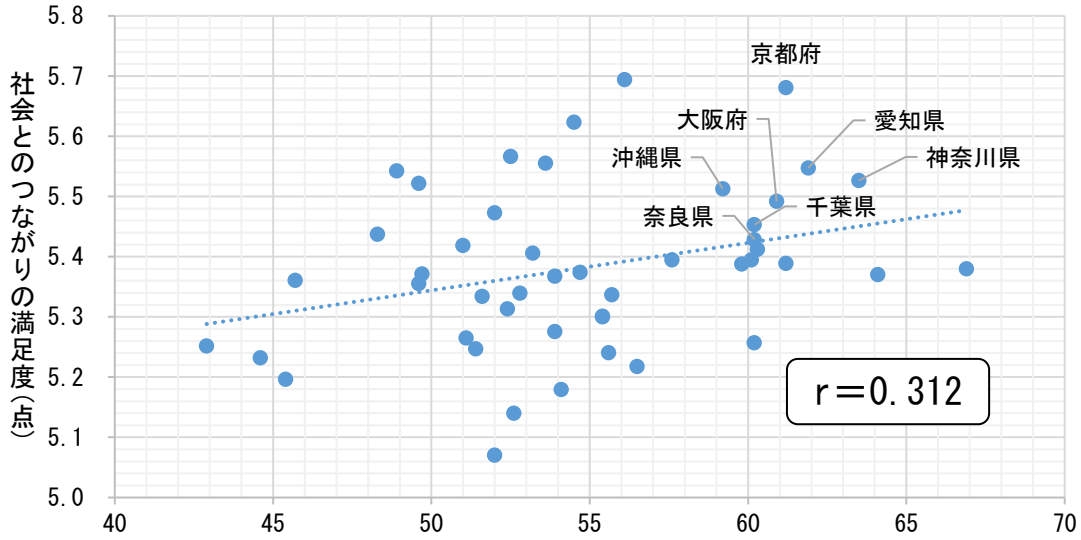
## 図表１－７－５　スマートフォンは生活の中でどのくらい重要かと社会とのつながりの満足度




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査）

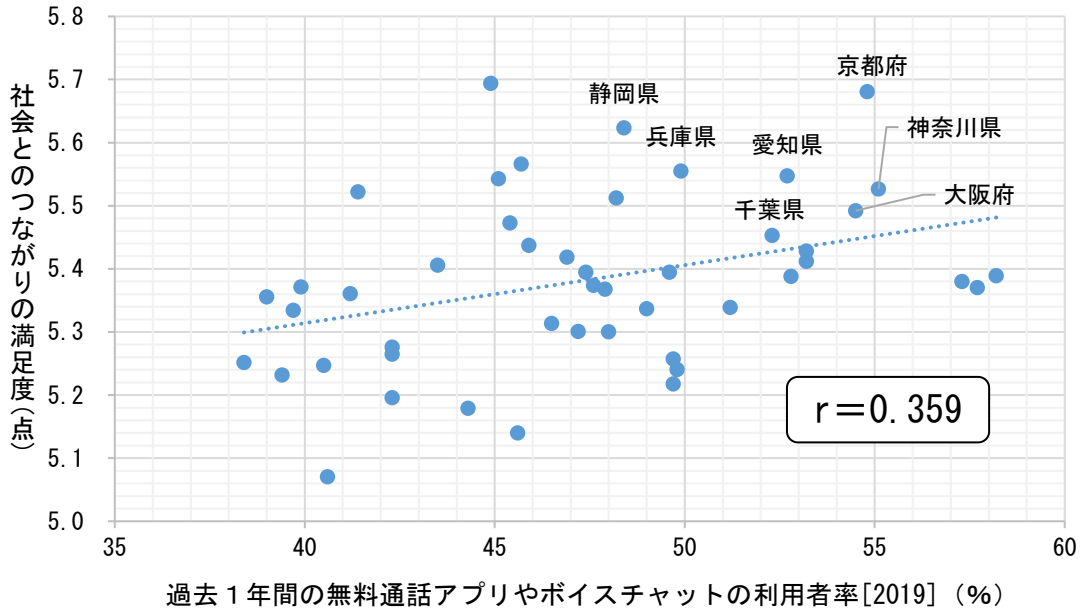
では、スマートフォンなど最近のデジタル化の進展と「社会とのつながり」の満足度との関係は、都道府県レベルでも確認できるのだろうか。回答者の「社会とのつながり」の満足度の都道府県別平均値と都道府県ごとの SNS 利用者率等の関係をみていくと、SNS 利用者率が高い都道府県ほど満足度が高い傾向にあることがみてとれる（相関係数 0.312）。また、無料通話アプリ等利用者率との関係についても、同様に利用者率が高いほど満足度が高い傾向にある（相関係数 0.359）。

**図表１－７－６　都道府県別　社会とのつながりの満足度と SNS利用者率の相関**




（出典）総務省　通信利用動向調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

**図表１－７－７　都道府県別　社会とのつながりの満足度と無料通話アプリ等利用者率の相関**




（出典）総務省　通信利用動向調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

## 2.「社会とのつながり」の満足度を客観的に示す総合的な指標の作成（試行）

前節では、都道府県レベルで、「社会とのつながり」の満足度と相関のある客観指標を確認することができ、「社会とのつながり」の満足度が、交際・付き合いの時間などと多面的な相関関係を有していることがみてとれた。そこで、複数の指標を合成することで、「社会とのつながり」の満足度を客観的に示す総合的な指標を作成することを試みることとした。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここでは z 値を算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。

「社会とのつながり」の満足度を表す客観指標としては、交際・交流、活動参加機会、社会的支援の面からとらえることとし、これらの面に対応する指標を選定した。なお、交際・交流に対応する指標としては「交際・付き合いの時間」及び「婚姻率」、活動参加機会に対応する指標として「NPO法人認証数」、社会的支援に対応する指標としては地域に対する支援・応援を意味するものとして「ふるさと納税受入額」を選定している。試算結果は以下のとおりである。

試算結果をみると、単純合成法、多変量解析法とも相関係数が約 0.5 と高い値となっている。

### （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 交際・付き合いの時間 | 分 | 社会生活基本調査 | 2016 | 0.43 | 交際・交流 | |
| NPO法人認証数（人口 10 万人当たり） | 件 | NPO 統計情報 | 2018 | 0.15 | 活動参加機会 | |
| 婚姻率(人口千人当たり) | ‰ | 人口動態統計 | 2017 | 0.37 | 交際（男女） | |

### （2）試算結果

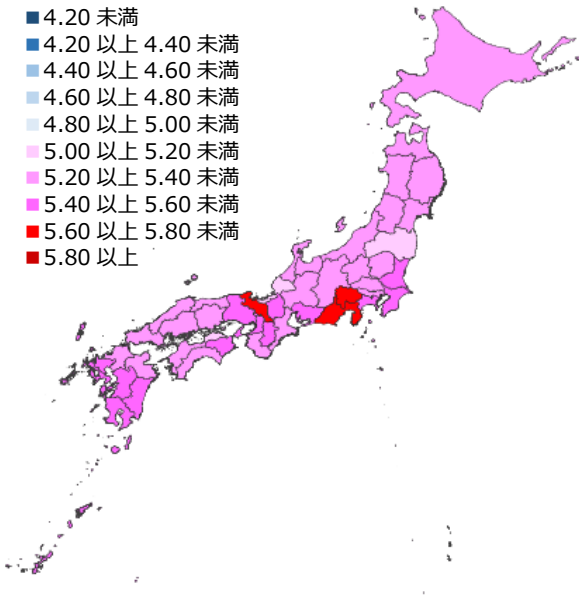
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| ①交際・付き合いの時間<br>＋②NPO法人認証数（人口 10 万人当たり）<br>＋③婚姻率(人口千人当たり) | 0.43 | 0.45 |

### （3）都道府県地図

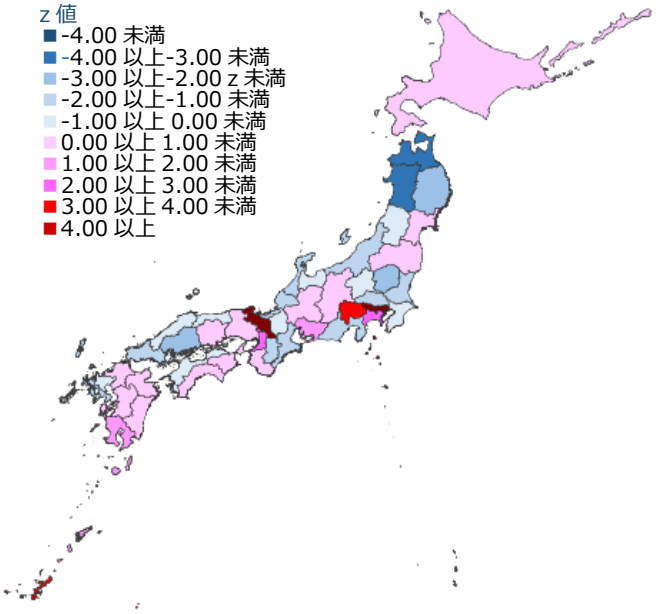
下の図は、満足度（満足度調査による計測値の平均値）、標準化した満足度（z 値）、単純合成法（各客観指標の z 値の合成）、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。満足度の地図は、ほぼ同一の桃色となっており、すべての都道府県の満足度が5以上であることがみてとれる。また、単純合成法と満足度の z 値との比較では、同系統の配色が多いものの、一部、異なる配色の県がみられた。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも6県であった。

**図表１－７－８　都道府県地図**

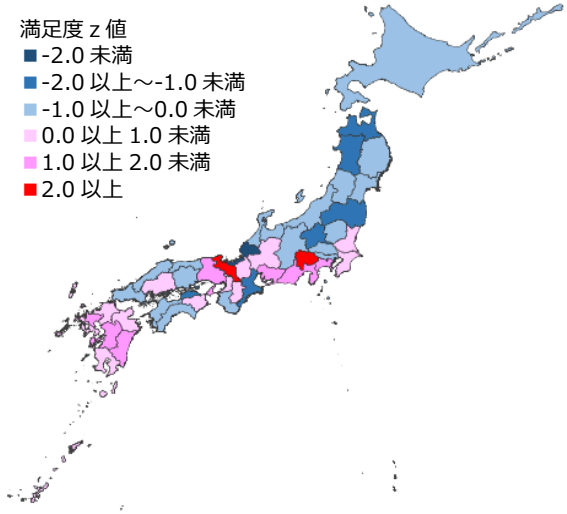
満足度



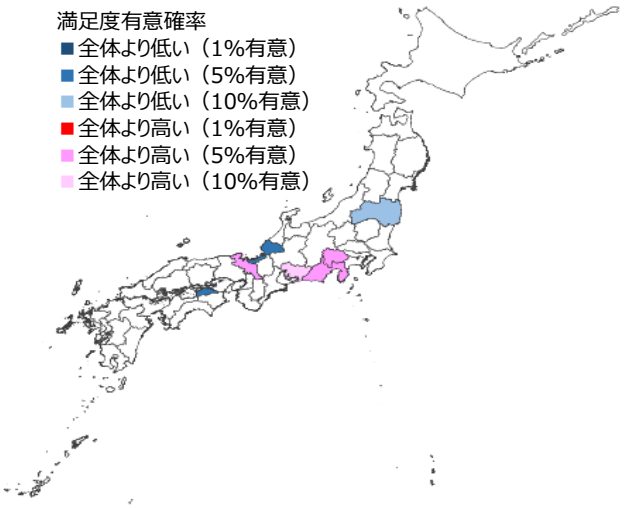

単純合成法（z 値の合計）




満足度 z 値




満足度有意確率



## Ⅷ　自然環境

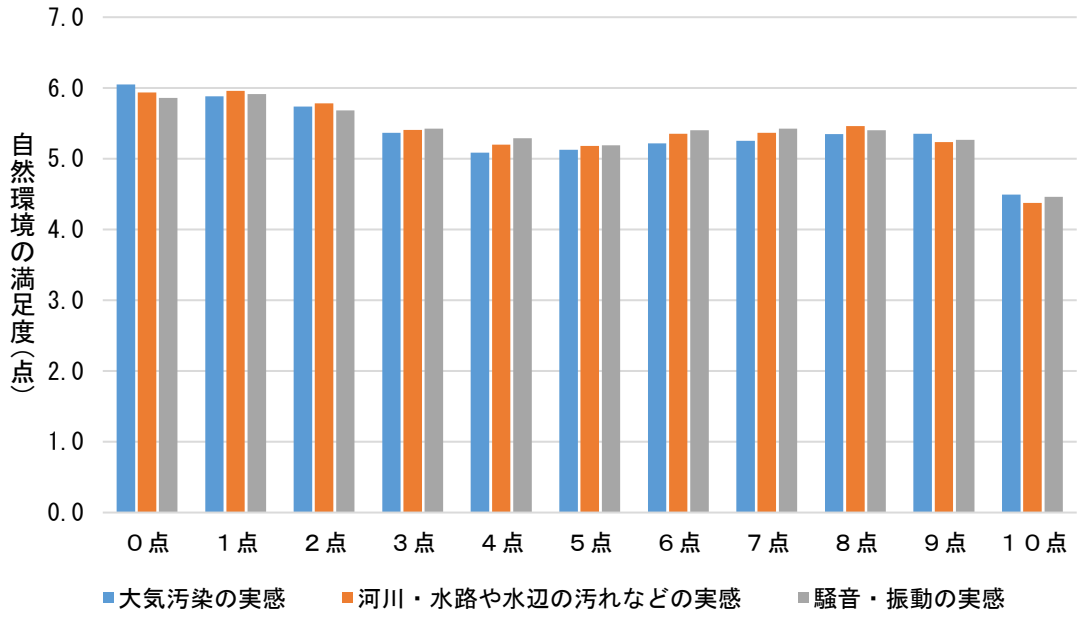
### 1．ダッシュボード指標の妥当性の検証

2019 年7月に公表したダッシュボードでは、自然環境に関する指標として「騒音」、「微小粒子状物質(PM2.5)」「水質(汚濁)」の関連指標を設定したが、これらはいずれも環境汚染に関する指標であった。今回はこれらの指標の妥当性を検討するとともに、公園や森林といった「自然環境」の満足度にプラスの影響を与えうる要素も合わせてみていく。

#### ①環境汚染関係指標

回答者が環境汚染[10]をどの程度感じているかを 10 点満点[11]で回答した点数と、自然環境の満足度との関係をみると、環境汚染を感じていない回答者ほど、「自然環境」の満足度は高い傾向にあることがみてとれる。

**図表１－８－１　環境汚染の実感度と自然環境の満足度の関係**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

[10]「大気汚染(粉じん、ダイオキシン、PM2.5 など)」、「河川・水路や水辺の汚れなど」、「土壌汚染(ダイオキシン、放射能など)」、「騒音・振動(近隣の生活音や、飛行機、車、電車、工事の音・振動など)」、「悪臭(近隣の生活臭や、廃棄物、農林水産業・工業生産に伴う臭いなど)」

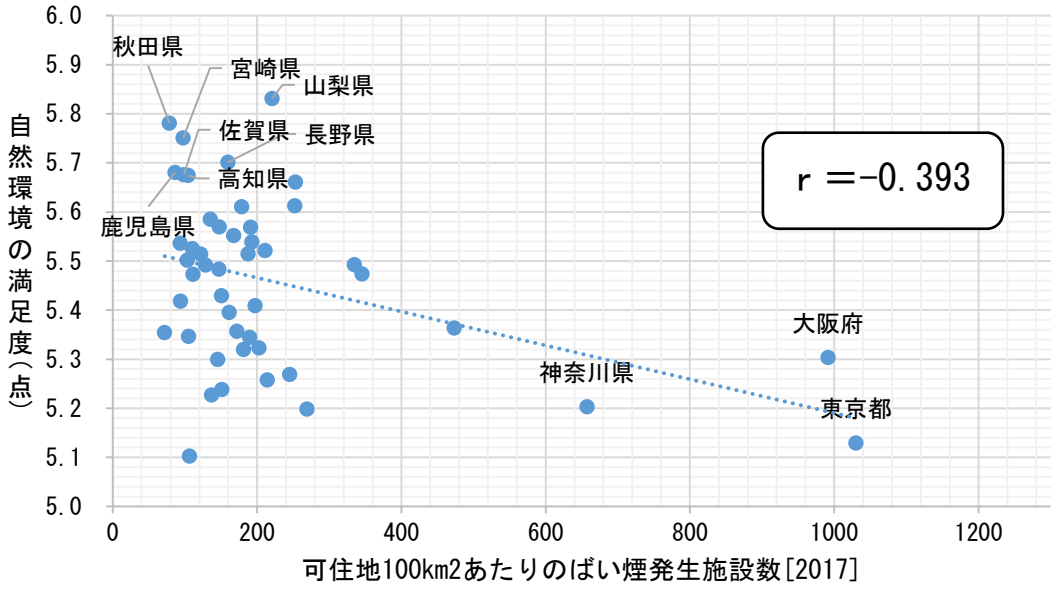
[11] 非常に感じるが 10 点、全く感じないが 0 点の 11 段階

大気汚染の原因として、車の排気ガスや国際的な影響等の他、工場等からのばい煙の影響が考えられる。そこで、ばい煙発生施設数と満足度の関係をみると、東京都、大阪府、神奈川県といった、ばい煙発生施設数が多い都道府県では、「自然環境」の満足度の平均値が低いことがみてとれる。

また、個票別（個人レベル）で集計すると、大気汚染、騒音・振動、河川・水路や水辺の汚れを強く感じるか否かによって満足度に有意な差がある。

以上から、ダッシュボードとして採用している「微小粒子状物質（PM2.5）の環境基準達成率」、「水質の環境基準達成率」、「騒音の環境基準適合率」については継続して採用することとする。

**図表１－８－２　都道府県別　自然環境の満足度と**
**可住地100km2あたりのばい煙発生施設数の相関**



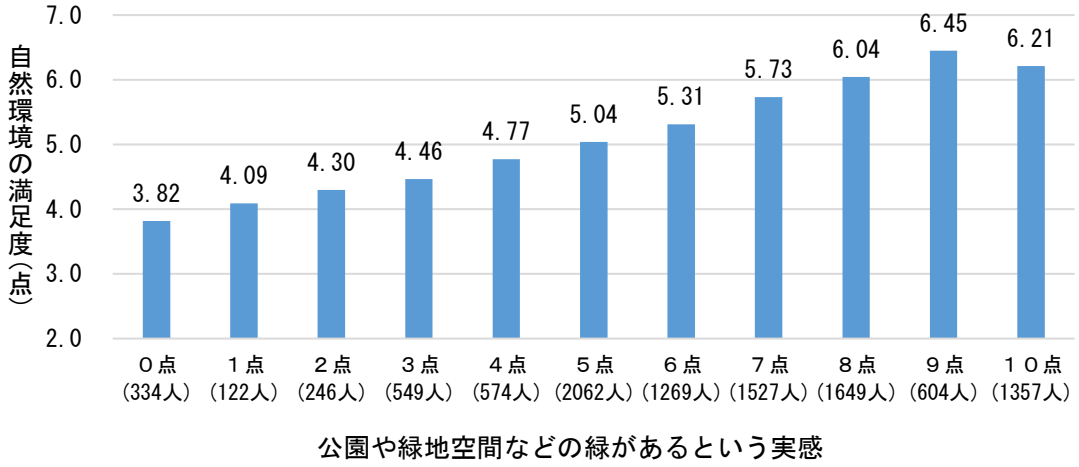

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）
環境省　大気汚染防止法施行状況調査

### ②公園や森林等

我々は公園や森林等において、緑を感じ、豊かな自然を楽しむことができる。こうした要素が「自然環境」の満足度に関係するかどうかをみていく。

回答者に「お住まいの地域に公園や緑地空間など緑があると感じるか」を、10 点満点で付けた点数と、「自然環境」の満足度の関係をみてみよう。緑があると強く感じている回答者の方が、「自然環境」の満足度が高いという傾向がみてとれる。

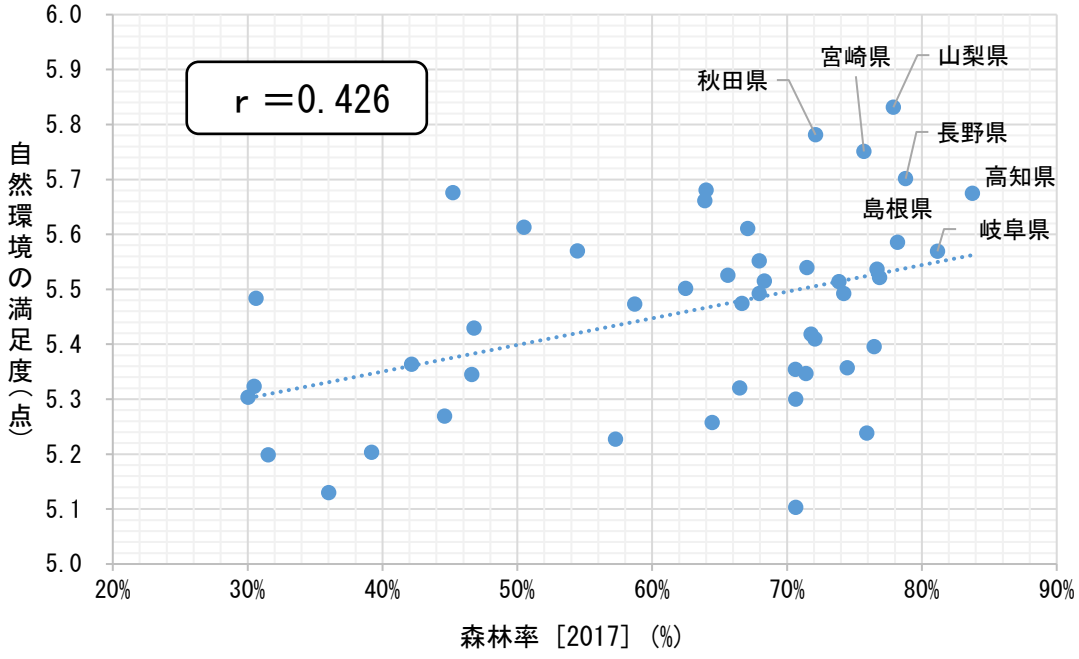
**図表１－８－３　公園や緑地空間などの緑の有無の実感と自然環境の満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査）

また、客観指標である森林率と「自然環境」の満足度の関係を都道府県別にみると、森林率が高い都道府県ほど、満足度の平均値が高いという正の相関関係がみてとれる。

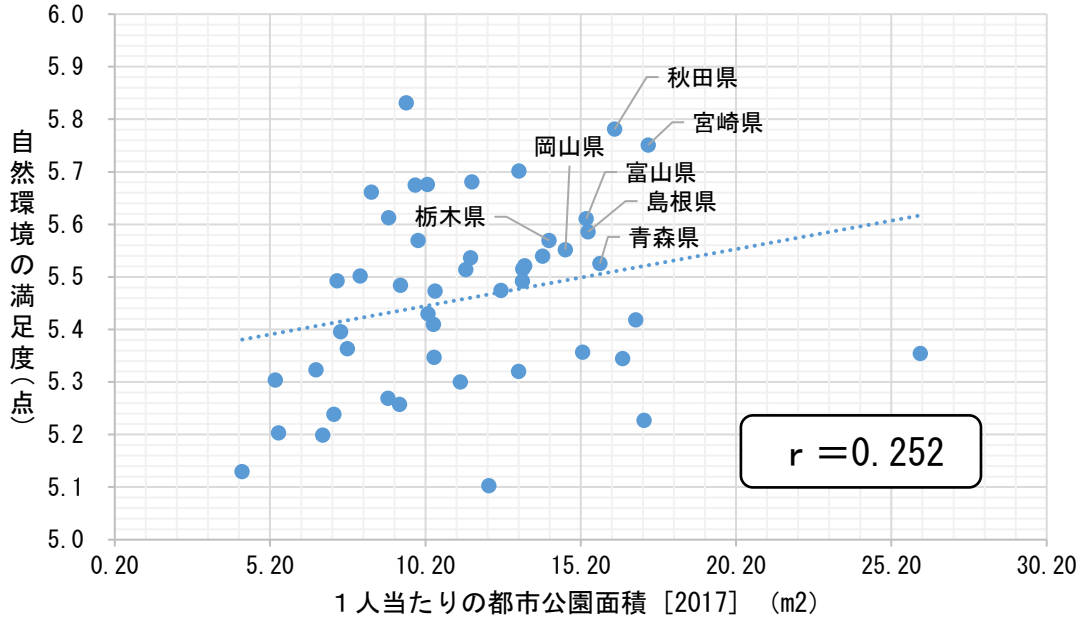
**図表１－８－４　都道府県別　自然環境の満足度と森林率の相関**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）
林野庁　都道府県別森林率・人工林率

また、都道府県別の一人当たりの都市公園面積と満足度との関係をみると、同様に、都市公園面積が大きいほど、満足度が高いという緩やかな相関関係がみてとれる。

**図表１－８－５　都道府県別　自然環境の満足度と都市公園面積の相関**



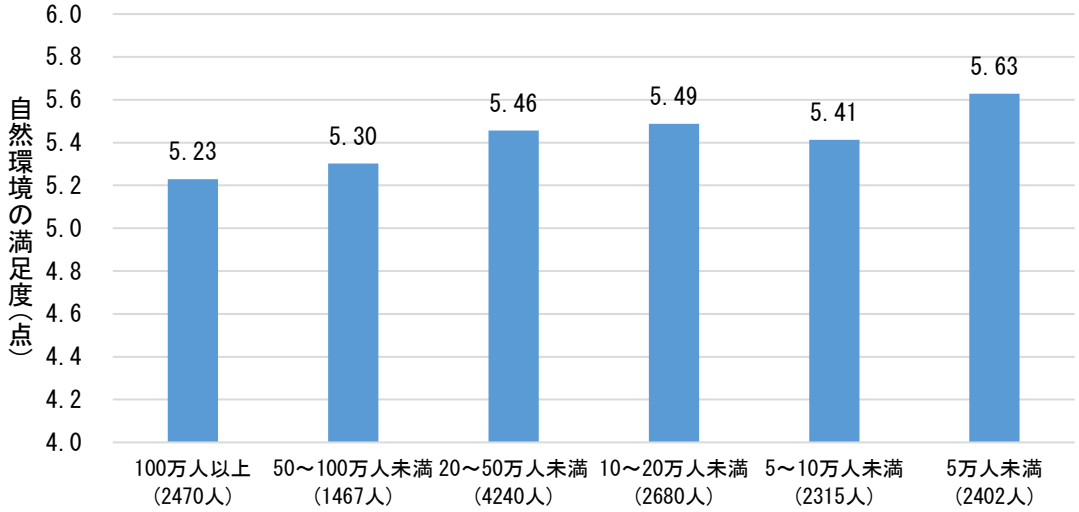

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）
総務省　社会生活統計指標

以上から、環境汚染の程度だけでなく、緑の存在を感じられるかが、満足度に関係することが示唆されるため、「森林率」及び「１人当たりの都市公園面積」をダッシュボード指標として新たに採用することとする。

＜コラム＞　人口規模別の満足度

回答者の住む市町村の人口規模別に「自然環境」の満足度の平均値を表すと、大都市に住む回答者ほど、「自然環境」の満足度は低い傾向にあることがみてとれる。

**図表１－８－６　人口規模別の自然環境の満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## 2.「自然環境」の満足度を客観的に示す総合的な指標の作成（試行）

前節では、都道府県レベルで、「自然環境」の満足度と相関のある客観指標を確認することができ、「自然環境」の満足度が、森林率などと多面的な相関関係を有していることがみてとれた。そこで、複数の指標を合成することで、「自然環境」の満足度を客観的に示す総合的な指標を作成することを試みることとした。

「自然環境」の満足度を表す客観指標としては、緑・公園、公害の面からとらえることとし、これらの面に対応する指標を選定した。なお、緑に対応する指標としては「森林面積割合」、公園に対応する指標としては「都市公園面積」、公害に対応する指標として、大気汚染に関する目安として「ばい煙発生施設数」を選定している。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここでは z 値を算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。試算結果は以下のとおりである。

試算結果をみると、単純合成法、多変量解析法とも相関係数は同じ値となっている。（0.44、0.44）

### （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 森林面積割合 | % | | 2014 | 0.42 | 緑 | 社会生活指標統計の掲載データを使用 |
| 都市公園面積（人口1人当たり） | ㎡ | 都市公園データベース | 2017 | 0.25 | 公園 | |
| ばい煙発生施設数（可住地100k ㎡当たり） | 件 | 大気汚染防止法施行状況調査 | 2015 | −0.39 | 公害（大気） | |

### （2）試算結果

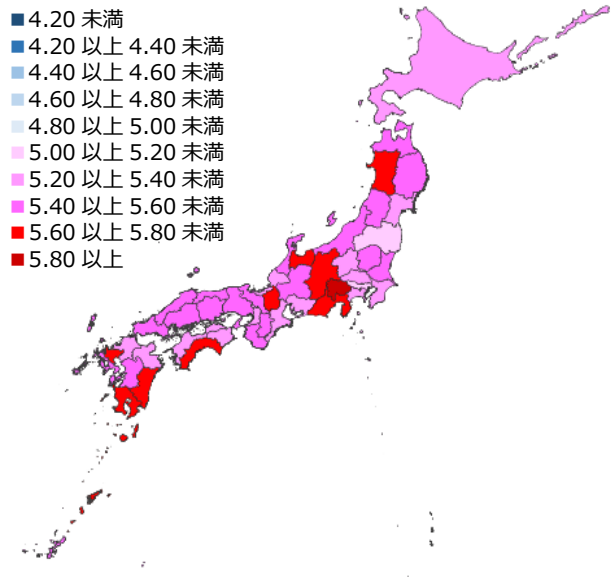
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| ①森林面積割合<br>＋②都市公園面積（人口1人当たり）<br>＋③ばい煙発生施設数（可住地 100k ㎡当たり） | 0.44 | 0.44 |

### （3）都道府県地図

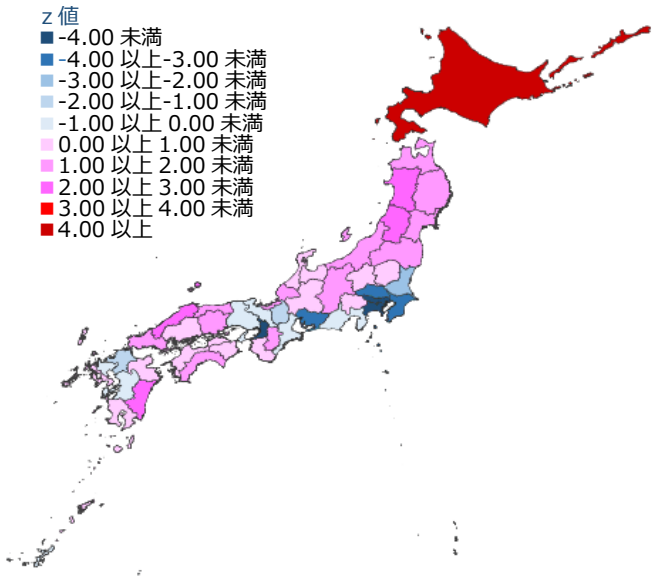
下の図は、満足度（満足度調査による計測値の平均値）、標準化した満足度（z 値）、単純合成法（各客観指標の z 値の合成）、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。自然環境は、濃い桃色のグラデーションとなっており、すべての都道府県の満足度が5以上であることがみてとれる。また、単純合成法と満足度の z 値との比較では、同系統の配色が多いものの、明らかに異なる配色の県が複数みられた。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも 12 県であった。

**図表１－８－７　都道府県地図**

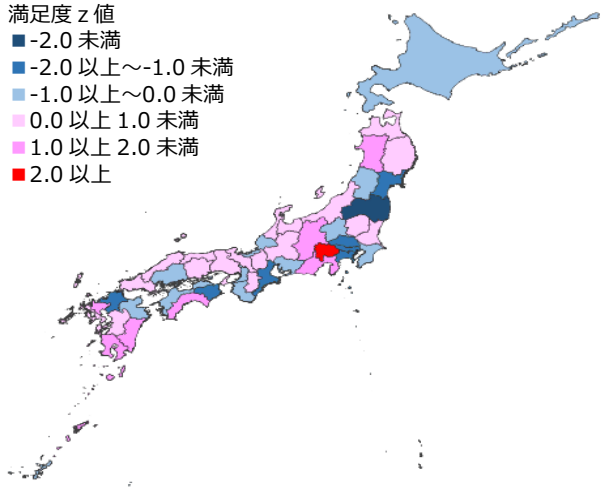
満足度



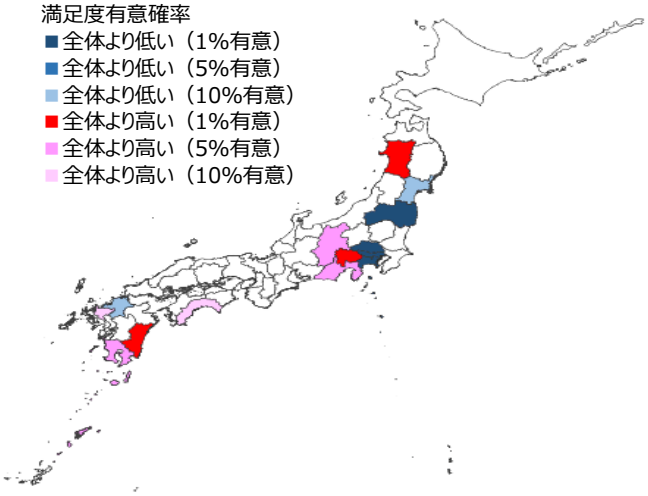

単純合成法（z 値の合計）




満足度 z 値




満足度有意確率



## Ⅸ　身の回りの安全

### 1．ダッシュボード指標の妥当性の検証

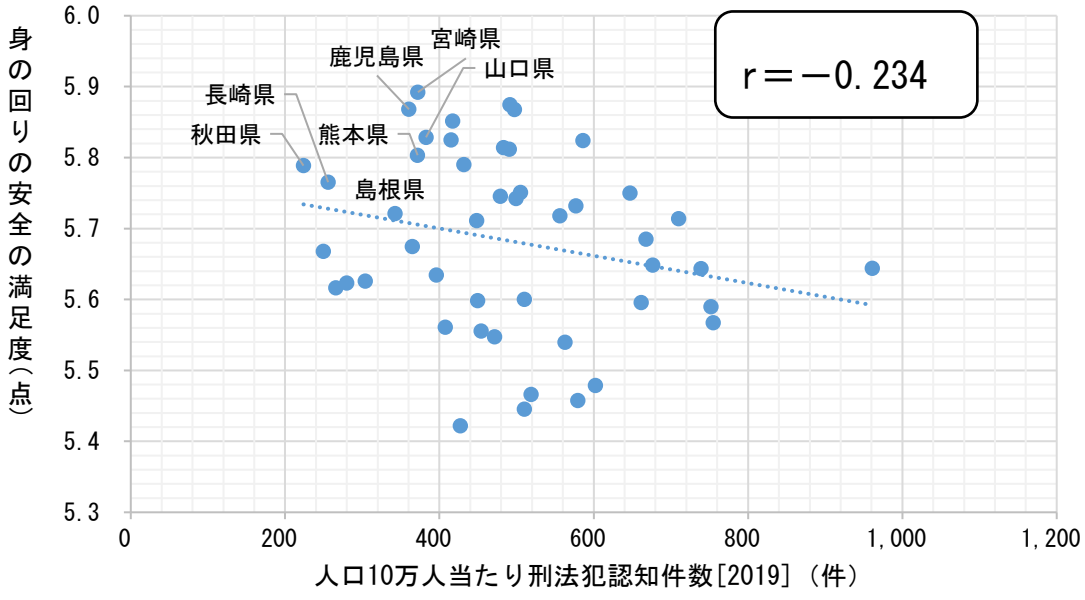
2019 年7月に公表したダッシュボードでは、身の回りの安全に関する指標として「刑法犯発生件数」、災害予防の取組に関する3指標、「交通事故死亡者数」を採用した。ダッシュボード指標の妥当性を検討するため、これらの指標その他の関連指標について、「身の回り安全」の満足度（平均値）との関係を分析していく。

#### ①犯罪に関する指標（刑法犯認知件数）

犯罪が多発する地域では、安心して生活を送ることは難しい。「身の回りの安全」の満足度の要素として、犯罪に関する指標と満足度の関係をみていく。

都道府県別にみると、人口 10 万人当たりの刑法犯認知件数が少ない都道府県ほど「身の回りの安全」の満足度が高いという緩やかな相関関係があり、ダッシュボード指標として「刑法犯認知件数」が有効であることが示唆される。

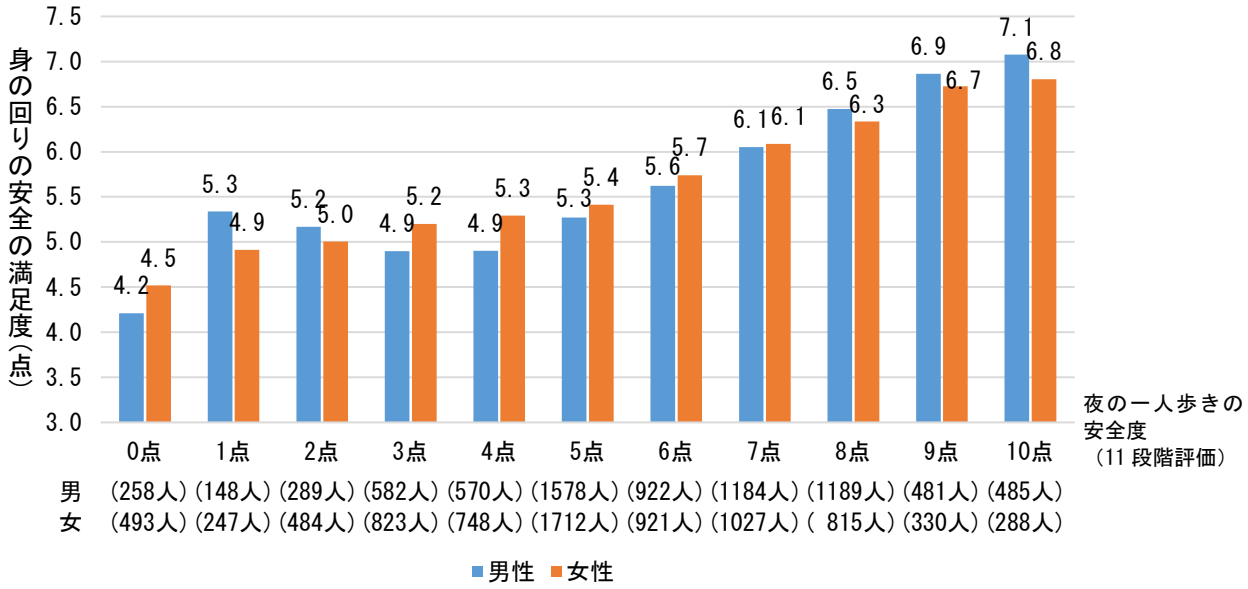
**図表１－９－１　都道府県別　刑法犯認知件数と**
**身の回りの安全の満足度の相関**




（出典）警察庁　犯罪統計
内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

犯罪に関する指標として、OECD「幸福度白書 2020」や「より良い暮らし指標」で採用されている指標が、ギャラップ社調査による「夜の一人歩きを安全と感じるか」という主観指標である。この指標の有効性について、内閣府調査を活用して分析する。「夜の一人歩きが安全と感じるか」を 0～10 点で回答した結果と、「身の回りの安全」の満足度の関係をみると、比例的な関係にある。特に女性は両者の相関係数が 0.987 と、男性の 0.922 より高くなっており、女性の方が、「身の回りの安全」の満足度に夜の一人歩きの安全性が強く関係していることが分かる。

**図表１－９－２　夜の一人歩きの安全度と身の回りの安全満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019年調査・2020年調査）

### ②災害に関する指標（自然災害による死者･行方不明者数等）

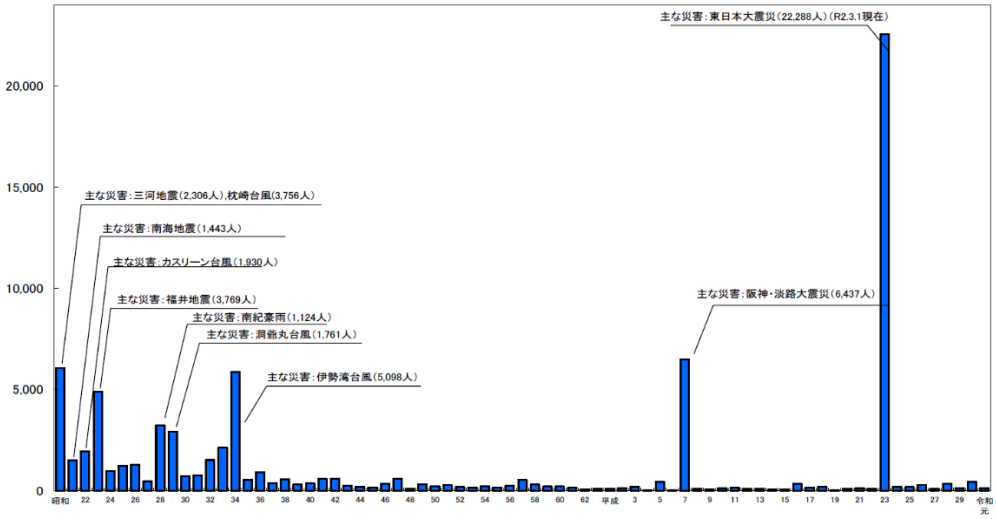
我が国は地震や水害をはじめとする災害が多く、これまで多数の人命や建物・財産が災害によって失われてきた。我が国において身の回りの安全を考える上で、災害は欠くことのできない要素である。

2019 年調査でも、身の回りの安全に影響する要素はどれかという質問に対して、災害対策を挙げる回答が多く寄せられた[12]。そこで、2019 年に公表したダッシュボードでは、災害対策に関する統計指標として、「自主防災組織カバー率」「防災行政無線整備率」「防災訓練実施回数」の3つの指標を採用した。

しかし、今回検討したところ、いずれの指標も都道府県別のデータと、都道府県別の「身の回りの安全」の満足度の間に正の相関は無かった。また、いずれも一定の意義のある指標ではあるもの、指標自体が社会に広く周知されておらず、個々人の満足度に影響していると確認できない。また、災害対策を代表するユニークな指標とはいえず、分かりやすさに欠ける。

このため、これら3つの指標ではなく、より直接的に災害の状況を捉える指標として、内閣府の防災白書の「自然災害による死者・行方不明者数」を採用する。本指標は、大地震による被害が大きいことに加えて、1960 年以前までは地震に加えて被害規模の大きな水害が多発していたこと、その後の洪水対策等が進む中で被害数は長年減少傾向にあったが、近年は水害の激甚化等を受けて多数の被害が発生していること等が読み取れる。そうした点で有意義な指標だと考えらえるが、個票等で満足度との直接的な関係性を確認することは、今後の課題である。

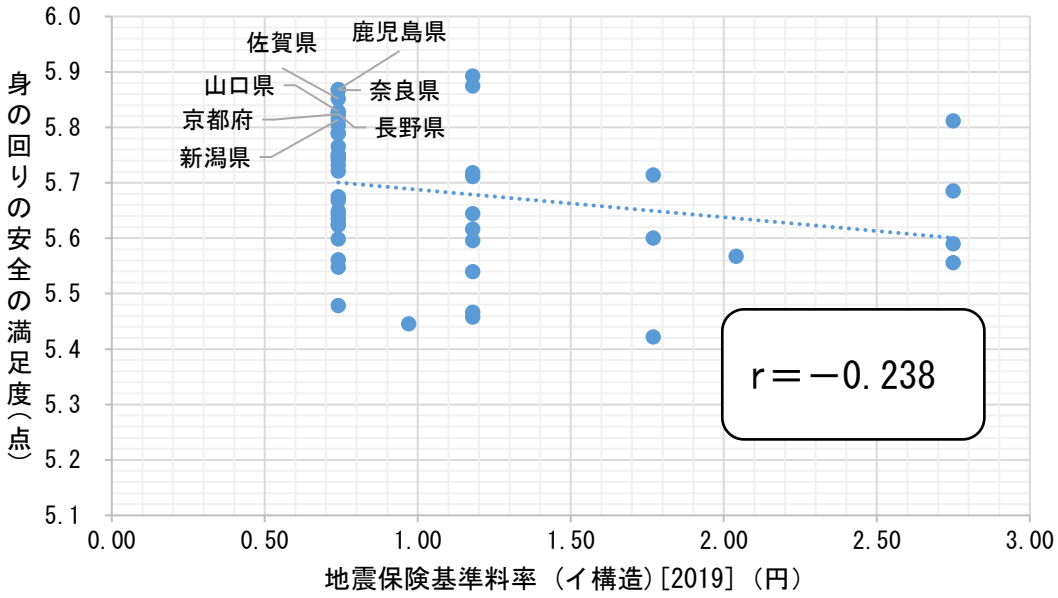
**図表１－９－３　防災白書「自然災害による死者・行方不明者数」**




[12] 災害発生時の行政の情報発信（1位）、被災後の対応（2位）、自然災害に対する予防（3位）となっている。

次に、都道府県ごとの地震保険基準料率と「身の回りの安全」の満足度の関係をみると、地震保険基準料率が高い都道府県ほど満足度の平均値が低い傾向にあることがみてとれる。

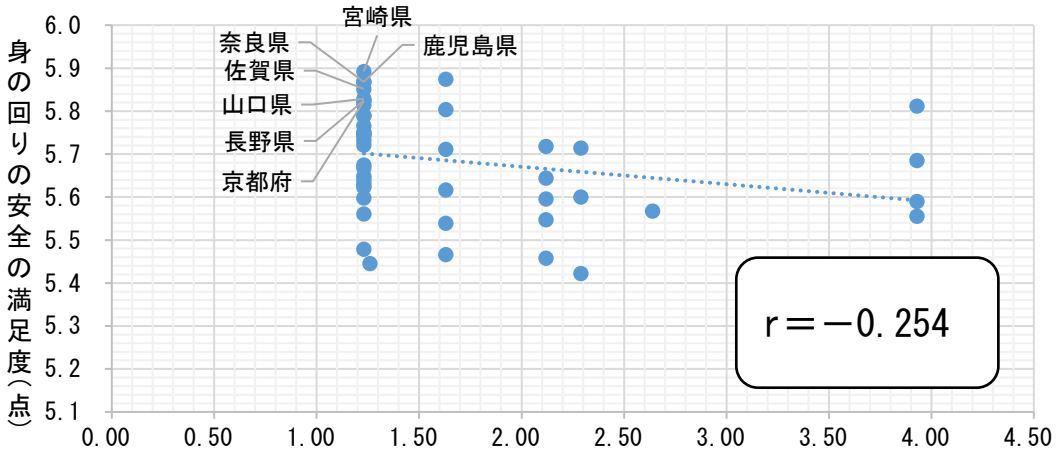
**図表１－９－４　都道府県別　身の回りの安全の満足度と地震保険基準料率の相関**




（出典）損害保険料算出機構　地震保険基準料率表

内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

**図表１－９－５　都道府県別　身の回りの安全の満足度と地震保険基準料率の相関**




（出典）損害保険料算出機構　地震保険基準料率表

内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

### ③その他の指標

交通事故死亡者数については、近年減少傾向にあるものの、依然として年間数千人の方が亡くなっており、身の回りの安全を考える上で重要な指標であることから、引き続きダッシュボード指標として採用する。

## 2.「身の回りの安全」の満足度を客観的に示す総合的な指標の作成（試行）

前節では、都道府県レベルで、「身の回りの安全」の満足度と相関のある客観指標を複数確認することができ、「身の回りの安全」の満足度が、犯罪件数、地震保険基準料率などと多面的な相関関係を有していることがみてとれた。そこで、複数の指標を合成することで、「身の回りの安全」の満足度を客観的に示す総合的な指標を作成することを試みることとした。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここではｚを算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。

「身の回りの安全」の満足度を表す客観指標としては、犯罪リスク、事故リスク、災害リスクの面からとらえることとし、これらの面に対応する指標を選定した。犯罪リスクに対応する指標としては「刑法犯認知件数」、事故リスクに対応する指標としては「交通事故死亡件数」、災害リスクに対応する指標としては「地震保険基本料率」を選定している。

試算結果をみると、単純合成法、多変量解析法とも相関係数はほぼ同じ値となっている。（−0.31、−0.30）

### （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 刑法犯認知件数（人口千人当たり） | 件 | 刑法犯に関する統計資料 | 2017 | −0.22 | 犯罪リスク | |
| 交通事故死亡件数 | 人 | 年報交通事故死者数について | 2018 | −0.20 | 事故リスク | |
| 地震保険基本料率（ロ構造：イ構造以外） | 円 | 地震保険基準料率のあらまし（損害保険料率算出機構） | 2019 | −0.35 | 災害リスク | ロ構造は、主として木造の建物（耐火建築物等を除く） |

### （2）試算結果

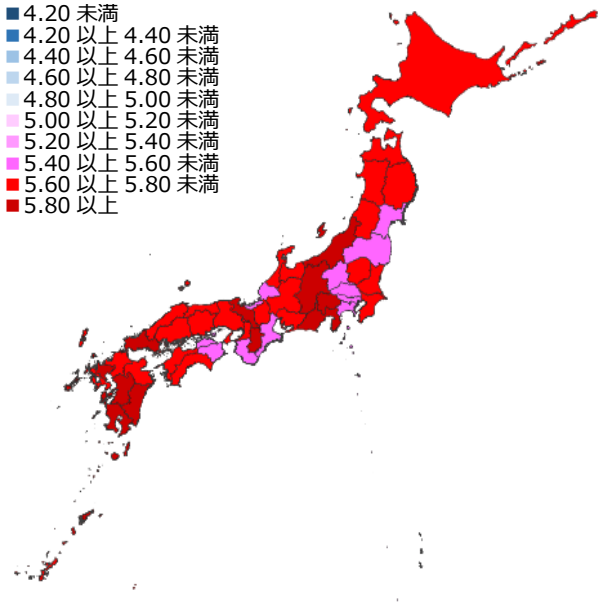
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| ①刑法犯認知件数（人口千人当たり）<br>＋②交通事故死亡件数<br>＋③地震保険基準料率（ロ構造：イ構造以外） | −0.31 | −0.30 |

### （3）都道府県地図

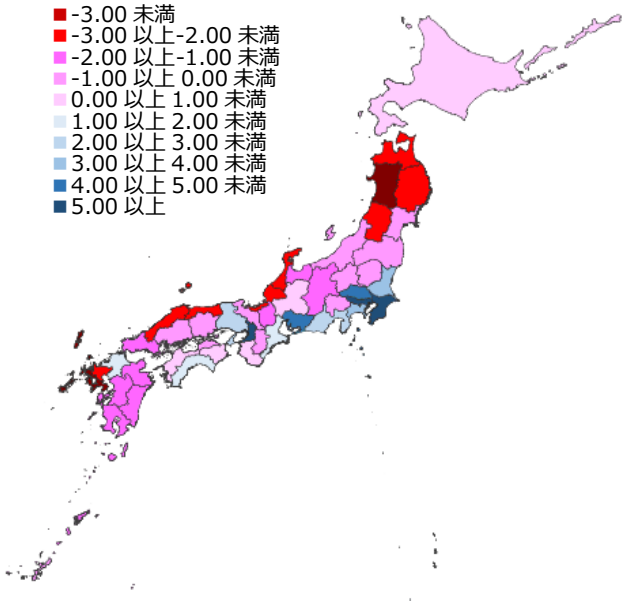
下の図は、満足度（満足度調査による計測値の平均値）、標準化した満足度（z 値）、単純合成法（各客観指標の z 値の合成）、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。身の回りの安全は、他の分野に比べ満足度が高いことから、満足度のグラフは赤みが濃くなっている。また、単純合成法と満足度の z 値との比較では、同系統の配色が多いものの、一部、異なる配色の県がみられた。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも8県であった。

**図表１－９－６　都道府県地図**

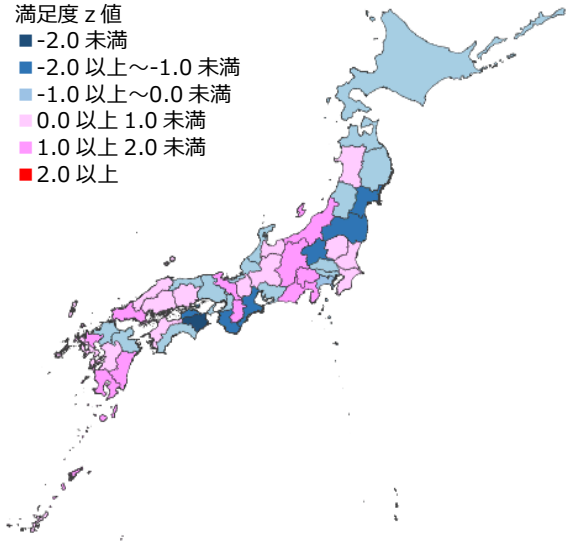
満足度



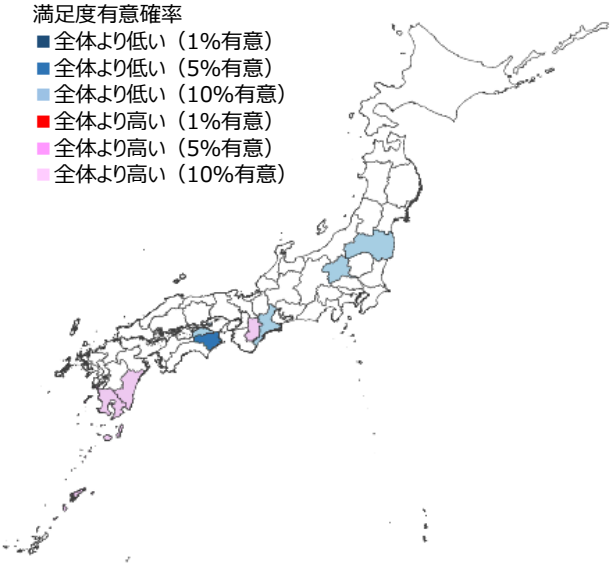

単純合成法(z 値の合計)




満足度 z 値




満足度有意確率



## X　子育てのしやすさ

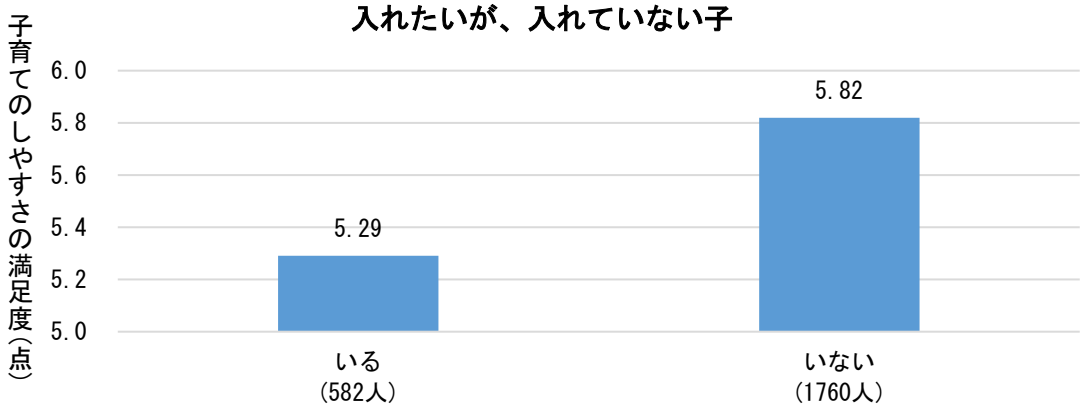
### 1. ダッシュボード指標の妥当性の検証

2019 年7月に公表したダッシュボードでは、子育てのしやすさに関する指標として「保育所待機児童数」、「育児休業取得者の割合」「子供の学習費総額」を採用した。ダッシュボード指標の妥当性を検証するため、これらの指標その他の関連指標について、「子育てのしやすさ」の満足度（平均値）の間の関係を分析していく。

#### ①保育所等利用待機児童数

認可保育所・幼稚園・認定こども園に入れたいが、入れていない子がいる者の満足度をみると、いない者に比べて「子育てのしやすさ」の満足度は低くなっており、「保育所待機児童数」のダッシュボード指標としての有効性を示唆している。

**図表１－10－１　認可保育所・幼稚園・認定こども園に入れたいが、入れていない子**



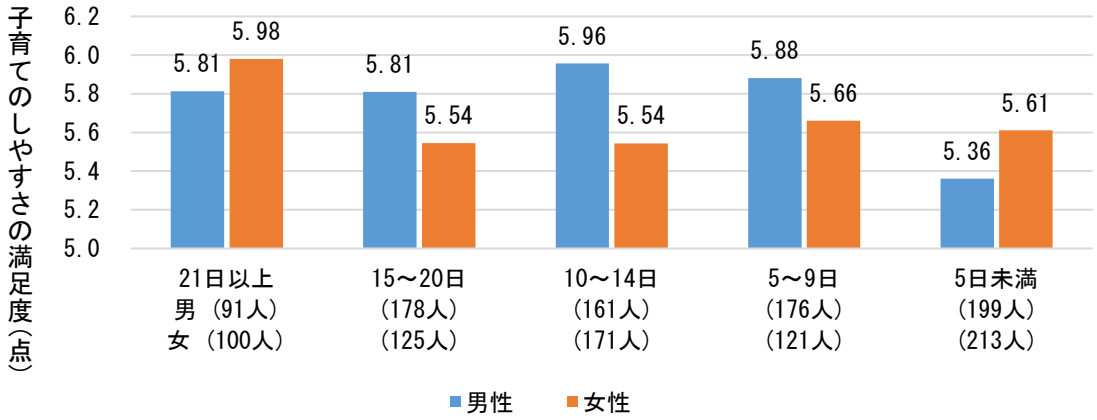

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

#### ②育児休業等の取得

子のいる就業者の年休取得状況と「子育てのしやすさ」の満足度との関係をみると、男性では、年休取得が 10～14 日の者の満足度が最も高く、それ以上の日数になると満足度が低下している。一方、女性は年休取得が 21 日以上の者の満足度が最も高くなっている。

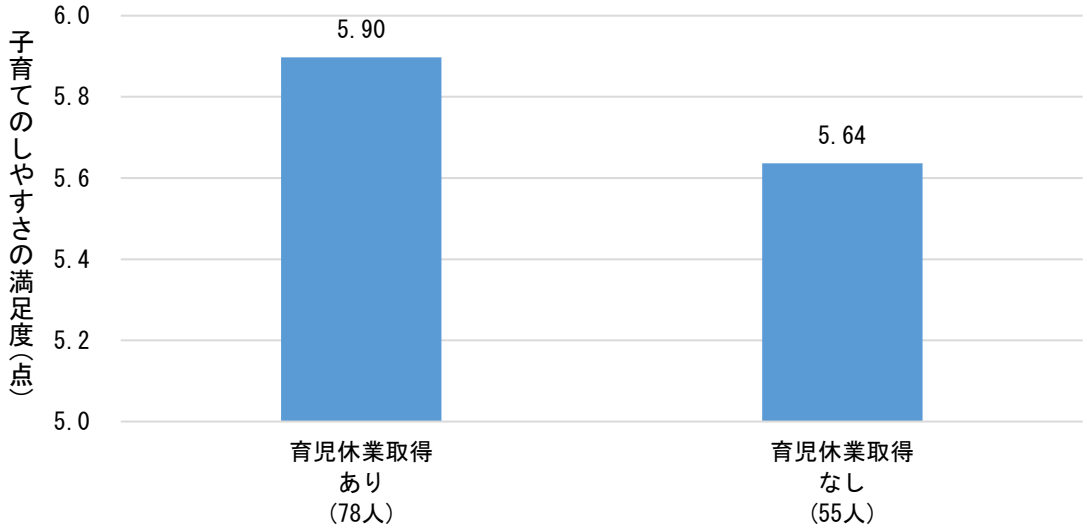
また、育児休業の取得と「子育てのしやすさ」の満足度との関係をみると、夫婦いずれかのうち一人でも育児休業取得のある世帯では、夫婦いずれも育児休業取得のない世帯よりも満足度が高くなっており、育児休業取得者の割合の、ダッシュボード指標としての有効性を示唆している。

**図表１－10－２　子のいる就業者の年休取得状況と**
**子育てのしやすさの満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

**図表１－10－３　世帯の育児休業取得状況と**
**子育てのしやすさの満足度（0歳の子を持つ女性）**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

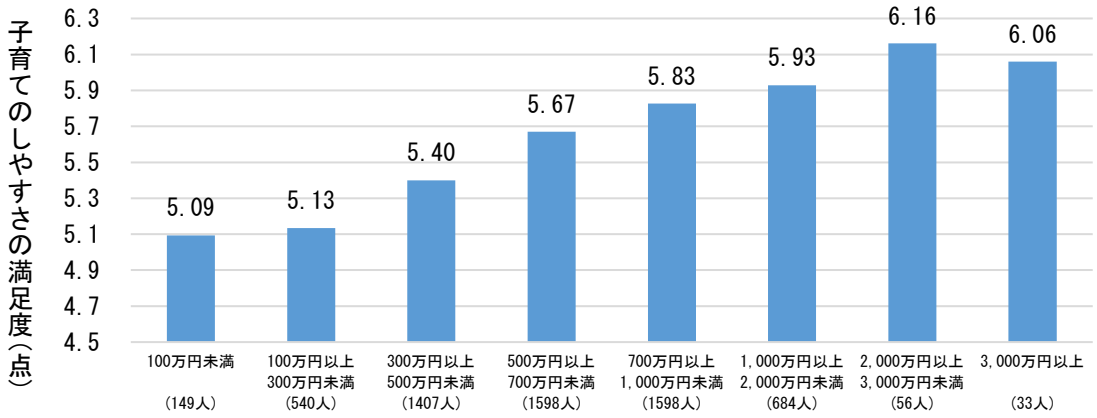
### ③その他の指標

子育てに要する教育費用等の経済負担の大きさは、子供を持たない理由の1つとされている。2019 年調査でも、「子育てのしやすさ」の満足度に影響しているものはどれか、との質問に対する回答の上位（1位）が「保育や教育など子育てにかかる費用」であったことから、ダッシュボード指標として「子供の学習費総額」を採用している。

一方、別の角度から捉えると、収入が多い世帯の方が教育費をねん出しやすく、世

帯収入が子育てのしやすさに影響すると考えられる。個票分析によると、世帯年収は多いほど、「子育てのしやすさ」の満足度は高くなる傾向が確認できる。

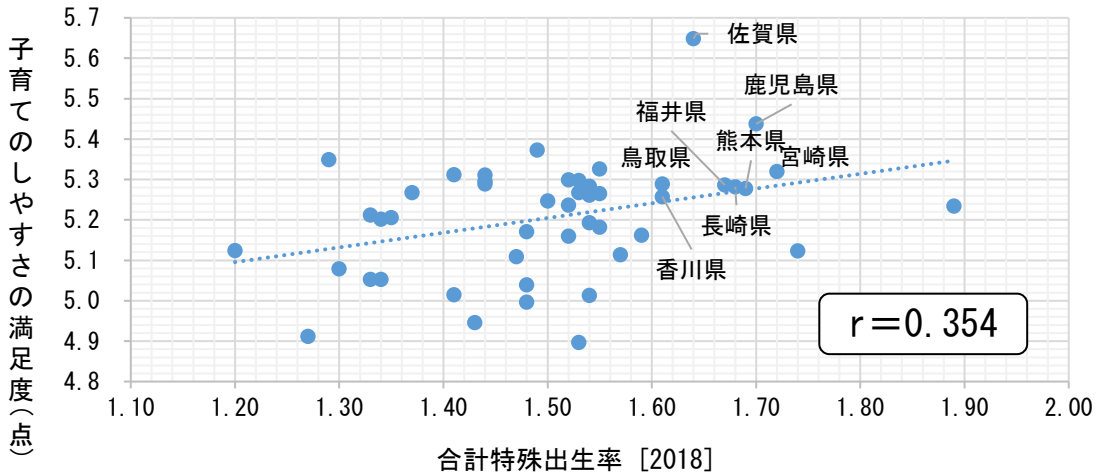
**図表１－10－４　世帯年収と子育てのしやすさの満足度（子育て世帯）**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

これまで見た要素は、いずれも「子育てのしやすさ」を構成する要素であった。では、子育てがしやすい地域は、すなわち出産しやすい地域であるといえるのだろうか。そこで、「子育てのしやすさ」の満足度と合計特殊出生率との関係についてみると、相関係数が 0.354 と高い相関が示されており、「子育てのしやすさ」の満足度が高い都道府県ほど、合計特殊出生率は高い傾向にあることが確認できる。このため、「合計特殊出生率」をダッシュボード指標として採用することとする。

**図表１－10－５　都道府県別　子育てのしやすさの満足度と合計特殊出生率の相関**




（出典）厚生労働省　人口動態調査

内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## 2.「子育てのしやすさ」の満足度を客観的に示す総合的な指標の作成（試行）

前節では、都道府県レベルで、「子育てのしやすさ」の満足度と相関のある客観指標を確認することができ、「子育てのしやすさ」の満足度が、出生率と相関関係を有していることがみてとれた。そこで、子育てには多面的な側面があることを鑑み、複数の指標を合成することで、「子育てのしやすさ」の満足度を客観的に示す総合的な指標を作成することを試みることとした。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここでは z 値を算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。

「子育てのしやすさ」の満足度を表す客観指標としては、出産、子育て支援環境（乳幼児期、就学前）の面からとらえることとし、これらの面に対応する指標を選定した。出産に対応する指標として「合計特殊出生率」、子育て支援環境に対応する指標として「育児休業者割合」及び「保育所等利用待機児童数」、なお、一般的に出産は、子育て可能な見通しを基盤とする判断の結果との解釈が可能であり、子育て可能な状況・環境を示す目安的な指標と位置付けられる。試算結果は以下のとおりである。

試算結果をみると、単純合成法では相関係数は約 0.5 と高い値となっている。他方、多変量解析法（主成分分析）によって得られた主成分との相関は 0 に近くなっており、相関の強い主成分は得られなかった。複数の成分があると見込まれる。

### （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 合計特殊出生率 | | 人口動態統計 | 2017 | 0.33 | 出産（子育て可能な見通し） | |
| 育児休業者割合 | % | 就業構造基本調査 | 2017 | 0.19 | 子育て支援環境（乳幼児期） | |
| 保育所等利用待機児童数（在所者数に対する割合） | % | 保育所待機児童数の状況 | 2018 | −0.11 | 子育て支援環境（就学前） | |

### （2）試算結果

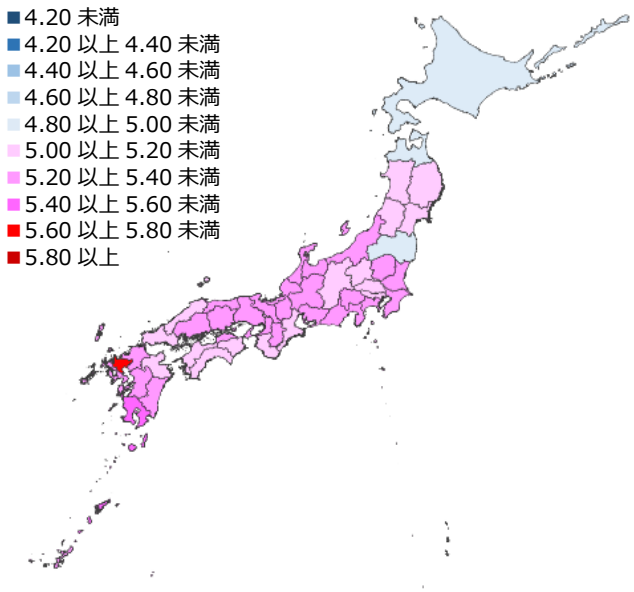
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| ①　合計特殊出生率<br>＋②育児休業者割合<br>－③保育所等利用待機児童数（在所者数に対する割合） | 0.50 | *−0.08* |

### （3）都道府県地図

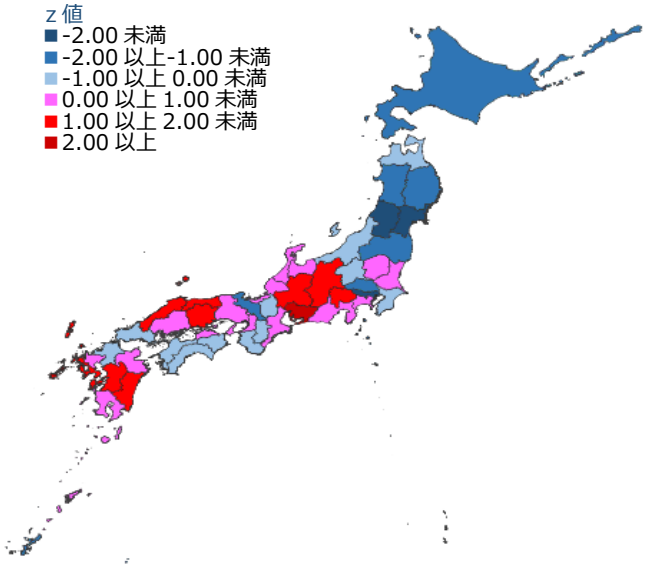
下の図は、満足度（満足度調査による計測値の平均値）、標準化した満足度（z 値）、単純合成法（各客観指標の z 値の合成）、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。満足度の地図をみると、全体は薄い桃色のグラデーションとなっているが、「子育てのしやすさ」の満足度が5以下の県も一部みられる。また、単純合成法と満足度のｚ値との比較では、同系統の配色が多いものの、一部、異なる配色の県がみられた。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも8県であった。

**図表１－10－６　都道府県地図**

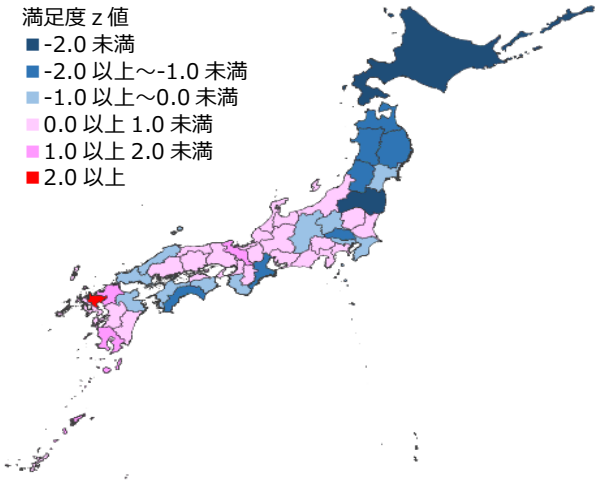
満足度



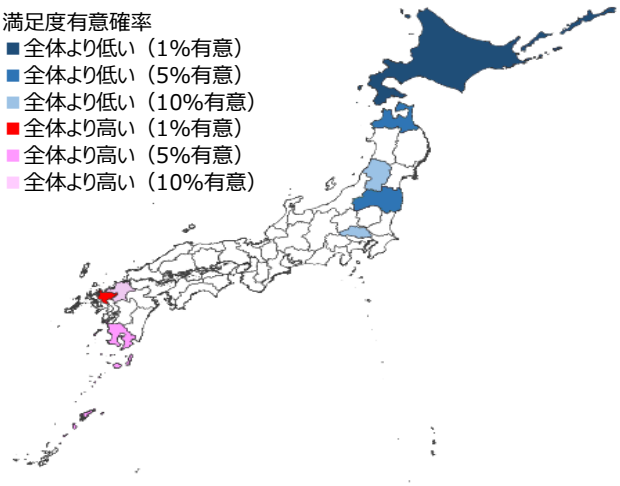

単純合成法（ｚ値の合計）




満足度ｚ値




満足度有意確率

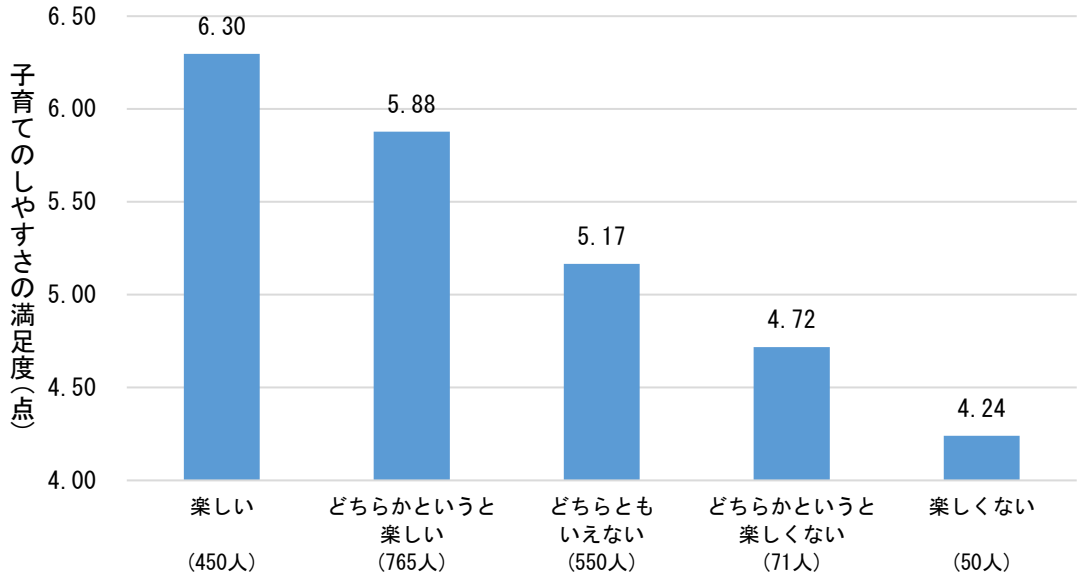


## ＜コラム＞　子育てについてどのように考えているか

回答者が子育てについてどのように感じているか、楽しいか楽しくないか等の回答結果と、「子育てのしやすさ」の満足度との関係をみると、「楽しい」と回答している者の満足度は 6.30 と非常に高く、一方、「楽しくない」と回答している者の満足度は 4.24 と低くなっている。

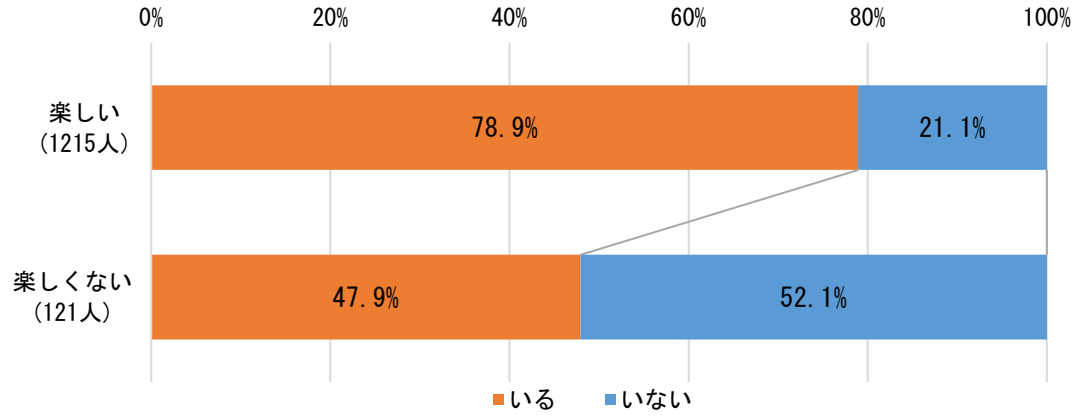
では、子育てを楽しいと感じている者はどのような環境にいるのであろうか。子育てを気軽にお願いできる人の有無との関係をみると、子育てを楽しいと感じている者の約8割がお願いできる人がいるのに対し、楽しくないと感じている人の約5割がお願いできる人がいない、との回答だった。

**図表１－10－７　子育てについてどのように感じているかと子育てのしやすさの満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

**図表１－10－８　子育てについての感じ方と子育てを気軽にお願いできる人**

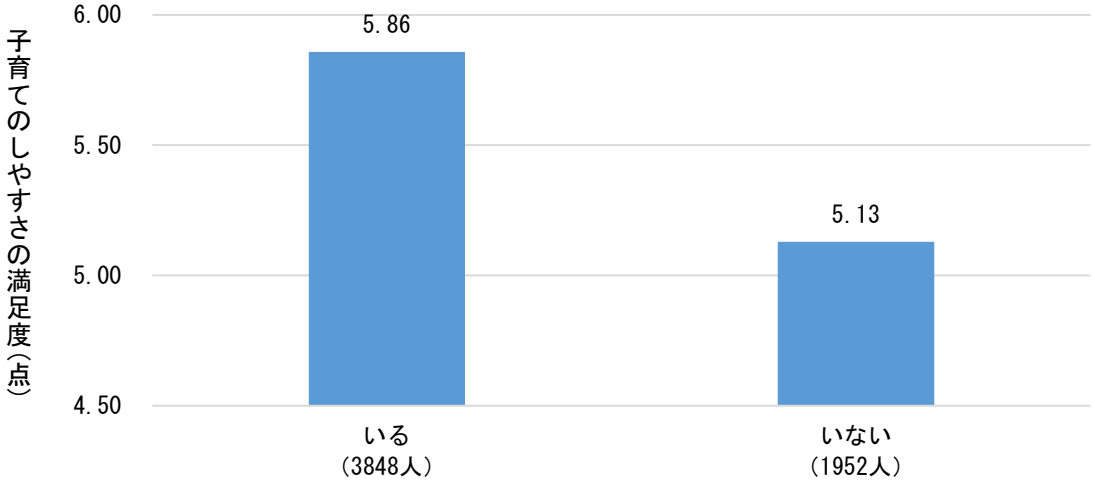



※楽しい：「楽しい」「どちらかというと楽しい」のいずれかを選択
※楽しくない：「楽しくない」「どちらかというと楽しくない」のいずれかを選択

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2020 年調査）

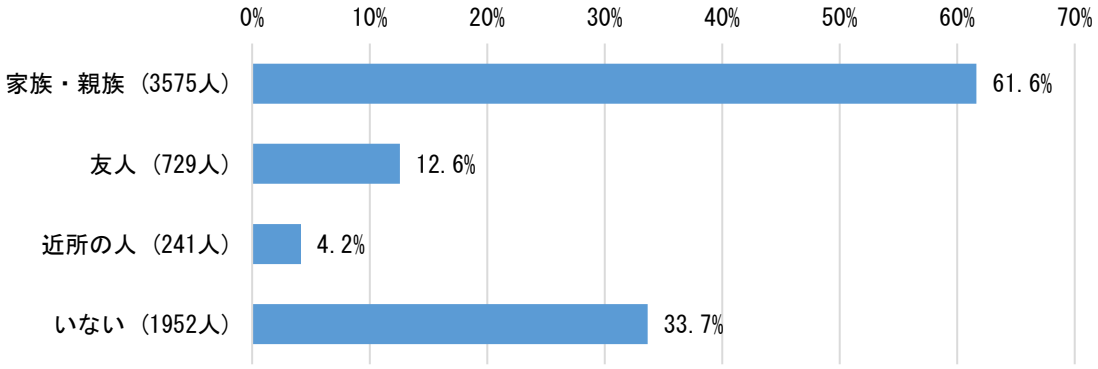
そこで、子育てを気軽にお願いできる人がいる者といない者の満足度についてみると、お願いできる人がいる者の満足度のほうが高いことがみてとれる。また、誰に子育てを気軽にお願いできるかをみると、家族・親族との回答が5割以上を占めているが、友人や近所の人にお願いできる場合、満足度が高くなっている。

**図表１－10－９　子育てを気軽にお願いできる人の有無と子育てのしやすさの満足度**



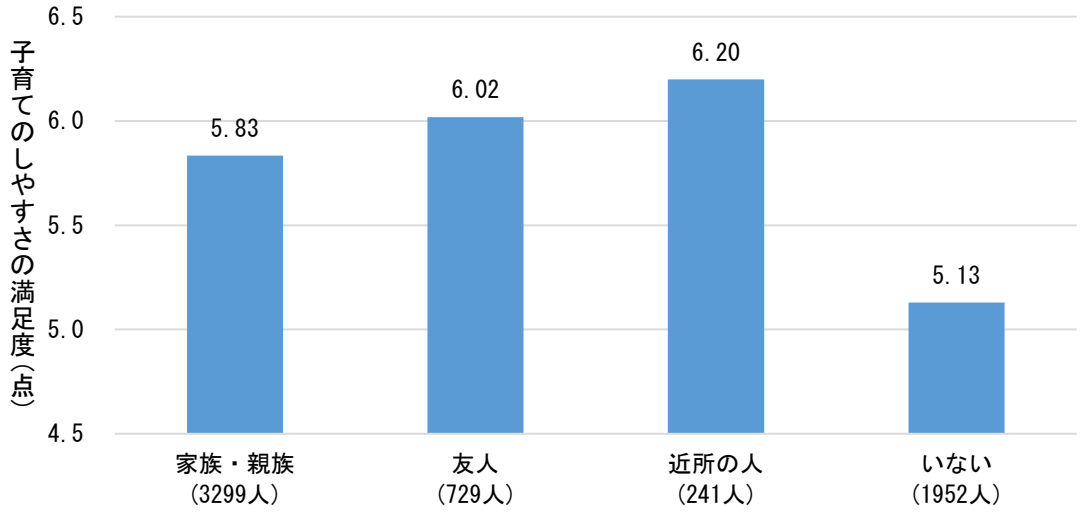

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

**図表１－10－10　子育てを気軽にお願いできる人はいるか**
**（複数回答）**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

**図表１－10－11　子育てを気軽にお願いできる人と**
**子育てのしやすさの満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査
（2019 年調査・2020 年調査）

## XI 介護のしやすさ・されやすさ

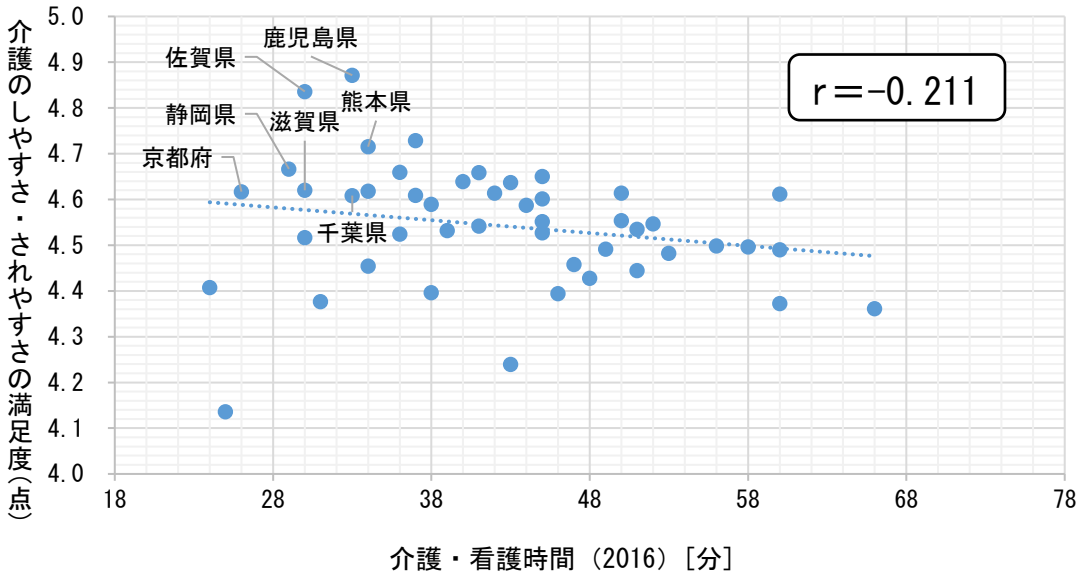
### 1. ダッシュボード指標の妥当性の検証

2019 年7月に公表したダッシュボードでは、介護のしやすさ・されやすさに関する指標として「介護保険サービス受給者率」「介護休業制度の規定がある事業所の割合」「介護離職率」「介護している人の介護・看護時間」「介護している人の睡眠時間・自由時間」を採用した。ダッシュボード指標の妥当性を検討するため、これらの指標その他の関連指標について、「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度（平均値）との関係を分析していく。

#### ①介護・看護時間（介護する人）

介護する人にとっては、たとえ大切な家族の介護・看護であっても、介護・看護時間が長くなると疲労の原因となり、満足度低下の要因となり得る。そこで、都道府県別の「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度と介護・看護時間との関係をみると、介護・看護時間の平均が長い都道府県ほど、満足度の平均値が低い傾向にあり、「介護・看護時間」のダッシュボード指標としての有効性を示唆している。なお、「介護・看護時間」が満足度に影響を与えることが直接的に明らかとなったことから、その裏側をあらわす「睡眠時間・自由時間」については、指標から削除することとする。

**図表１－11－１　都道府県別　介護のしやすさ・されやすさの満足度と介護・看護時間の相関**



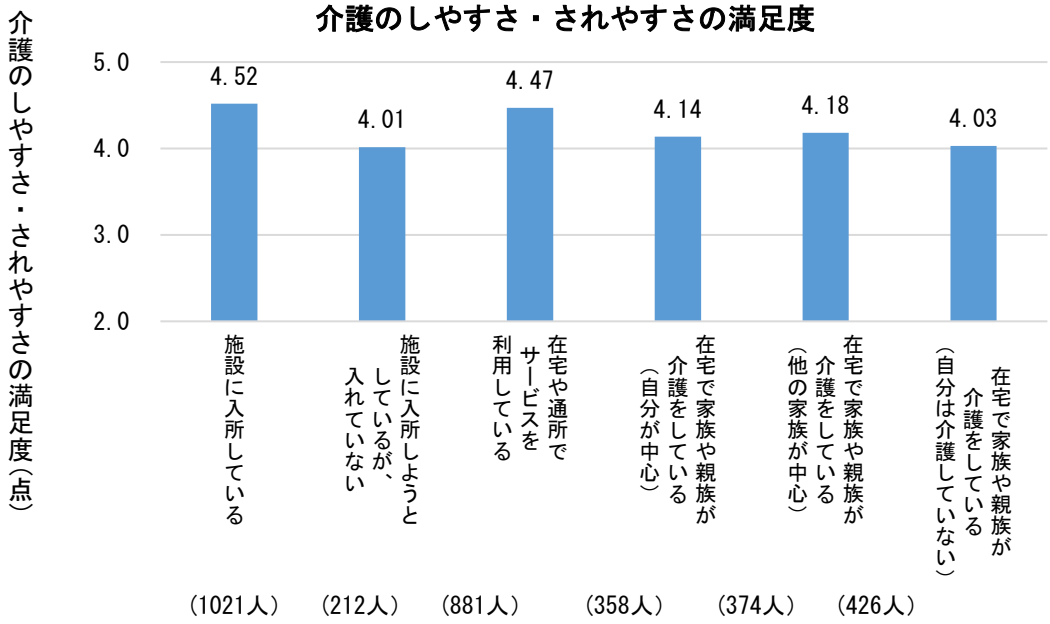

（出典）総務省　社会生活基本調査
内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

### ②介護施設に関する指標

介護する人にとっても、介護される人にとっても、介護施設が利用可能なことは重要である。介護施設が利用できない状態で介護を一人で抱え込むことは、介護と生活・仕事の両立を難しくする。

介護が必要な家族の状況と「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度との関係をみると、「施設に入所している」「在宅や通所でサービスを利用している」という回答者は、そうでない回答者よりも満足度が高い。

**図表１－11－２　介護が必要な家族の状況と介護のしやすさ・されやすさの満足度**

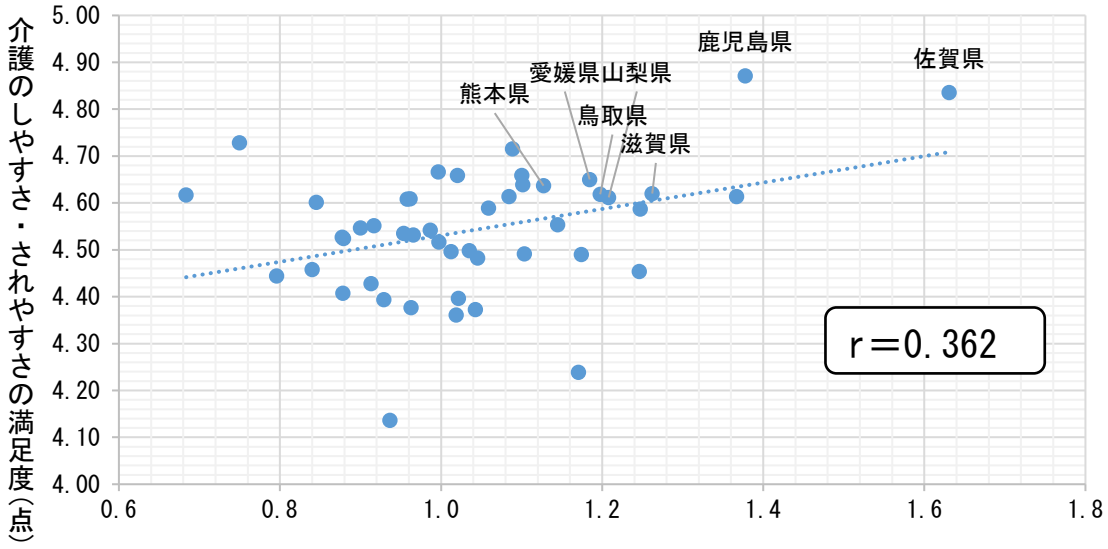



（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

次に、介護サービスとして、地域密着型サービスの事業所数と「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度との関係についてみると、要介護認定者に対する事業所数が多い都道府県ほど、満足度が高い傾向にあることがみてとれる。

以上から、介護サービスを利用できることが、介護に関する満足度を高めていると考えられ、ダッシュボードで採用している「介護保険サービス受給者率（認定者に占める実受給者の割合）」が、指標として有効であることが示唆される。

**図表１－11－３ 都道府県別　介護のしやすさ･されやすさの満足度と地域密着型サービス延べ事業所数の要介護認定者に対する割合の相関**



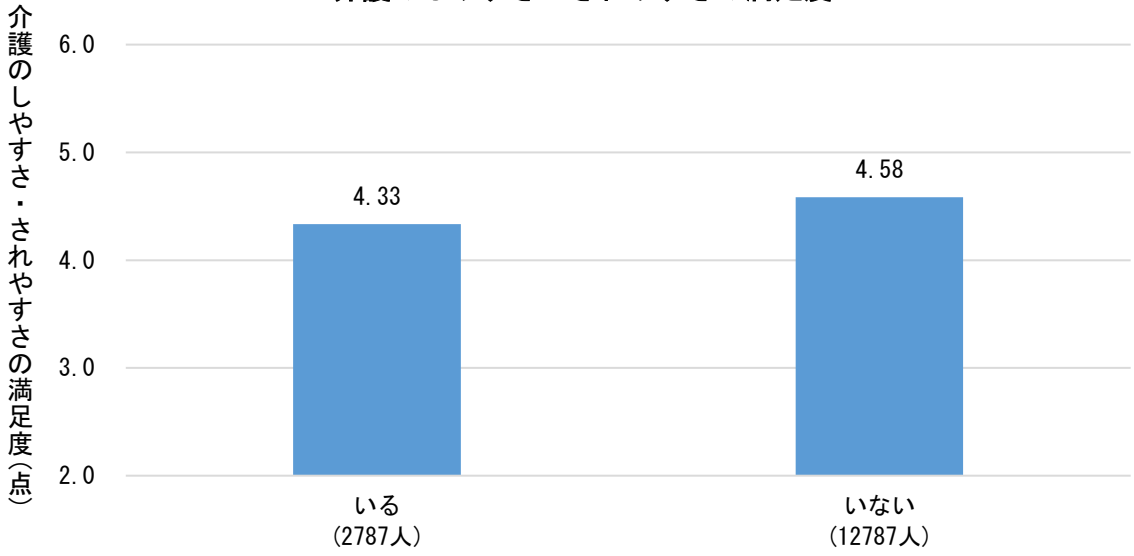

（出典）厚生労働省　介護サービス施設・事業所調査、介護保険事業報告
内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

その他、ダッシュボード指標として採用している「介護休業制度の規定がある事業所の割合」と「介護離職率（離職者のうち介護・看護を理由とする割合）」については、「満足度に影響しているもの」の回答1位が、「自分や自分の家族が要介護状態になった場合の不安」であり、家族が要介護となった際の離職不安に関する指標であることから、継続採用することとする。

## ＜コラム＞　介護を必要とする家族の有無

「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度は、11 分野の中で最も低い。それは、介護を必要とする家族がいる者の満足度が非常に低いからなのであろうか。そこで、介護を必要としている家族の有無と「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度の関係をみると、介護を必要としている家族がいる者の満足度が 4.33、いない者の満足度が 4.58 と、いない者の満足度も4点台と低い水準となっている。これは、介護を必要とする家族がいない者にとっても、現在の介護をめぐる環境を聞き及んだ結果、あまり満足できるものでないと感じているからといえよう。

**図表１－11－４　介護を必要とする家族の有無と**
**介護のしやすさ・されやすさの満足度**




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## 2.「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度を客観的に示す総合的な指標の作成（試行）

前節では、都道府県レベルで、「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度と相関のある客観指標を確認することができ、「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度が、介護・看護時間などと多面的な相関関係を有していることがみてとれた。そこで、複数の指標を合成することで、「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度を客観的に示す総合的な指標を作成することを試みることとした。

総合的指標の作成方法として、①単純合成法（各客観指標を標準化（ここでは z 値を算出）して合成）、②多変量解析法（主成分分析等による重みをつけて合成）の2つのパターンを採用した。

「介護のしやすさ・されやすさ」の満足度を表す客観指標としては、要介護者の重度化の状態、介護サービスの状況（施設サービス、居宅サービス、地域密着型サービス）、家族の介護負担の面からとらえることとし、これらの面に対応する指標を選定した。要介護者の重度化の状態に対応する指標としては「要介護3以上の割合」を選定した。また、介護サービスに対応する指標としては、介護サービスの種類別に「施設サービスの状況（介護保険3施設定員と地域密着型特養定員の合計が要介護3以上の認定者数に占める割合）」、「居宅サービスの状況（医療系サービス事業所数の要介護認定者数に対する割合）」、「地域密着型サービスの状況（地域密着型サービス延べ事業所数の要介護認定者に対する割合）」を選定している。また、家族の介護負担に対応する指標としては「介護・看護時間」を選定した。試算結果は以下のとおりである。

試算結果をみると、単純合成法では相関が強めになっている。(0.47)他方、多変量解析法（主成分分析）で得られた主成分との相関は 0.1 台にとどまった。複数の主成分が抽出され1つの主成分にまとまらなかったと想定される。

## （1）選定指標

| 指標 | 単位 | 調査・統計 | 年 | 分野別満足度との相関 | 指標の意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 要介護3以上の割合（第1号被保険者に占める割合） | % | 介護保険事業報告 | 2018 | −0.11 | 重度化の状況 | |
| 介護保険3施設定員と地域密着型特養定員の合計が要介護3以上の認定者数に占める割合 | % | 介護保険事業報告、介護サービス施設・事業所調査 | 2017 | 0.13 | 施設サービスの状況 | |
| 医療系サービス事業所数の要介護認定者数に対する割合 | % | 介護保険事業報告、介護サービス施設・事業所調査 | 2017 | 0.37 | 居宅サービス（介護）の状況 | |
| 地域密着型サービス延べ事業所数の要介護認定者に対する割合 | % | 介護保険事業報告、介護サービス施設・事業所調査 | 2017 | 0.36 | 地域密着型サービス | |
| 介護・看護時間 | 分 | 社会生活基本調査 | 2016 | −0.21 | 家族の介護負担 | |

## （2）試算結果

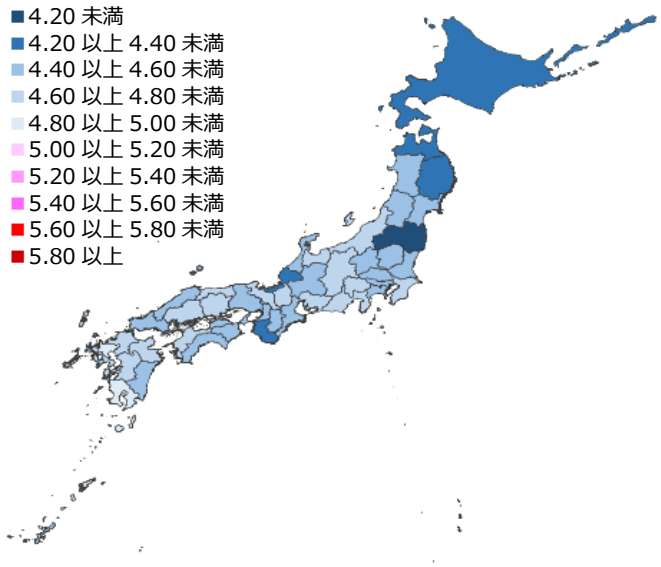
| 客観指標 | 分野別満足度との相関係数 | |
|---|---|---|
| | 単純合成法 | 主成分分析 第一主成分 |
| −①要介護3以上の割合（第１号被保険者に占める割合）<br>＋②介護保険3施設定員と地域密着型特養定員の合計が要介護3以上の認定者数に占める割合<br>＋③医療系サービス事業所数の要介護認定者数に対する割合<br>＋④地域密着型サービス延べ事業所数の要介護認定者に対する割合<br>−⑤介護・看護時間 | 0.47 | 0.13 |

### （3）都道府県地図

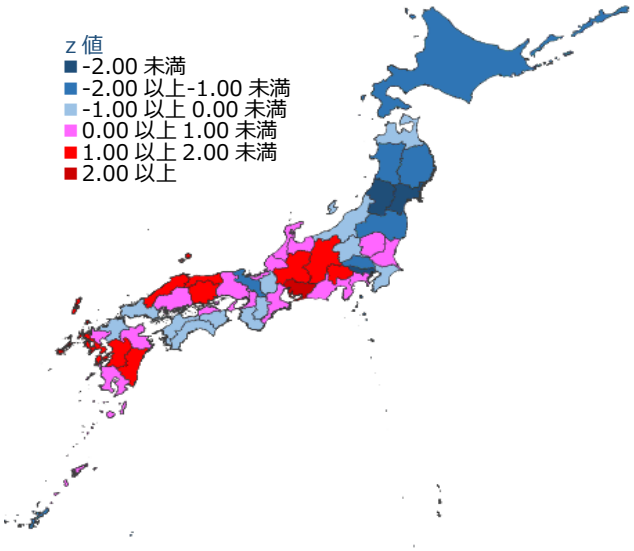
下の図は、満足度（満足度調査による計測値の平均値）、標準化した満足度（z 値）、単純合成法（各客観指標の z 値の合成）、満足度の有意確率を日本地図に色付けしたものである。介護のしやすさ、されやすさは、他の分野に比べ満足度が低いことから、満足度のグラフは青みが濃くなっている。また、単純合成法と満足度の z 値との比較では、同系統の配色が多いものの、一部、異なる配色の県がみられた。前項の相関係数はこのような状況を反映したものとなっている。加えて、各県の満足度を全体と比べた場合に、統計的有意水準を 10%とした場合でも9県であった。

**図表１－11－５　都道府県地図**

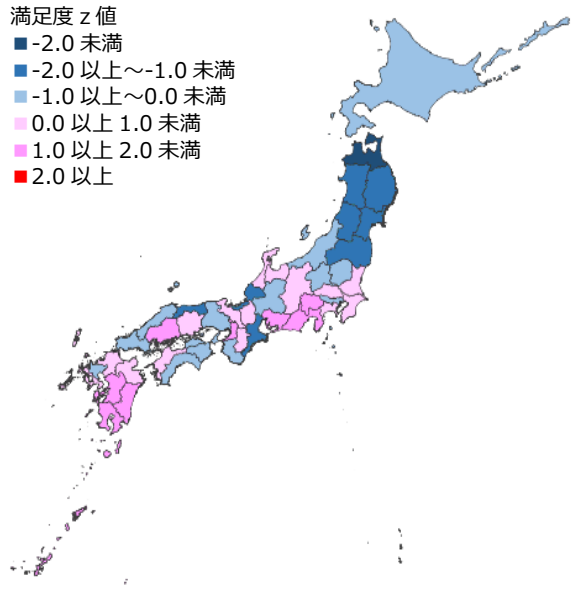
満足度



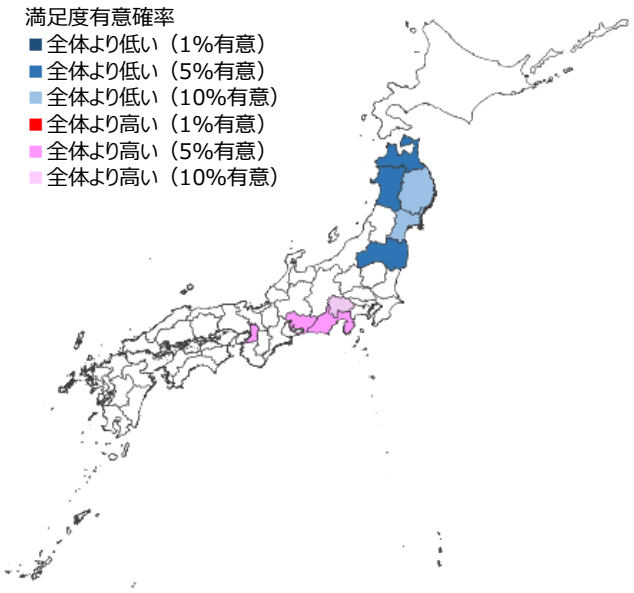

単純合成法（ｚ値の合計）




満足度ｚ値




満足度有意確率



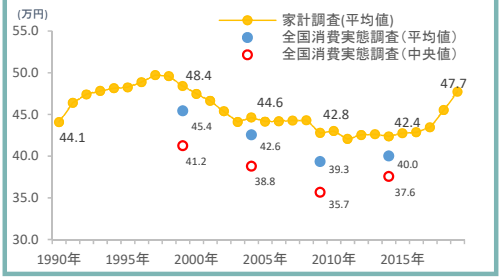
# 満足度・生活の質を表す指標群(ダッシュボード)

各分野の指標をすべて掲載しています。

## 家計と資産

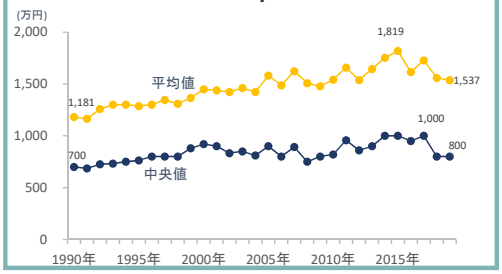
### 可処分所得金額

47.7万円/月（2019年）



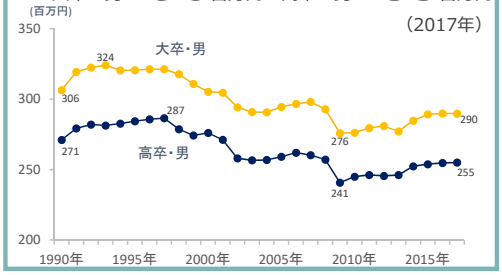

### 金融資産残高

1,537万円（2019年）




### 生涯賃金

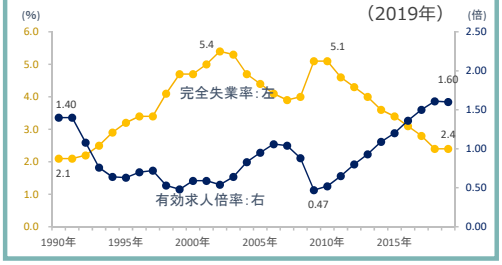
大卒・男290百万円　高卒・男255百万円（2017年）




## 雇用と賃金

### 完全失業率・有効求人倍率

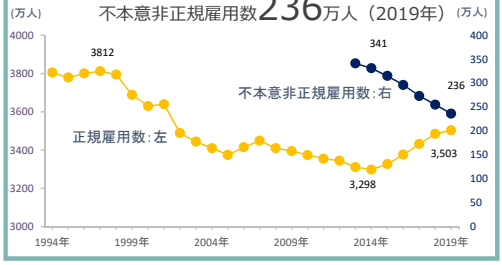
完全失業率2.4%　有効求人倍率1.60倍（2019年）




### 正規雇用数・不本意非正規雇用数

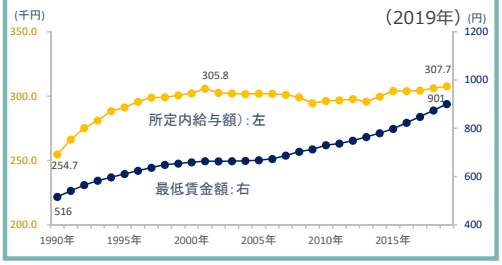
正規雇用数3,503万人

不本意非正規雇用数236万人（2019年）




### 所定内給与額・最低賃金額

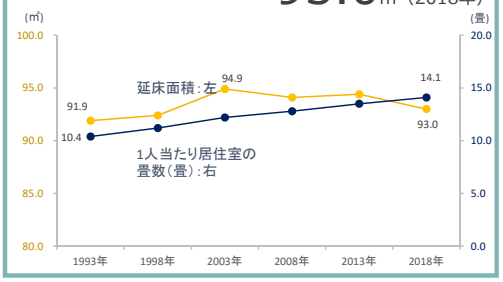
所定内給与額30.8万円／月　最低賃金901円（2019年）




## 住宅

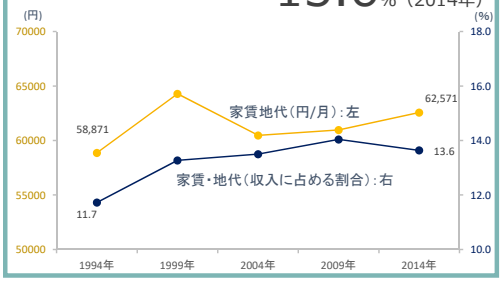
### 延床面積

93.0㎡（2018年）



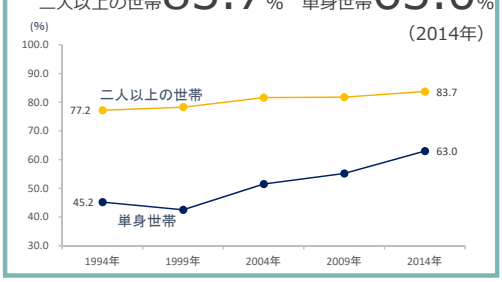

### 家賃・地代（収入に占める割合）

13.6%（2014年）




### 住宅保有率

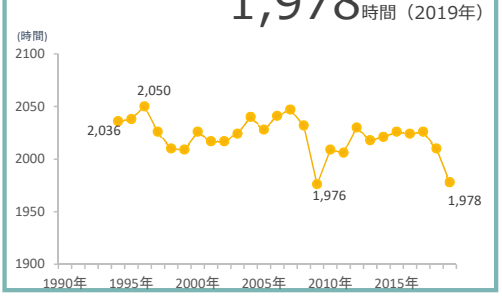
二人以上の世帯83.7%　単身世帯63.0%（2014年）




## 仕事と生活（ワークライフバランス）

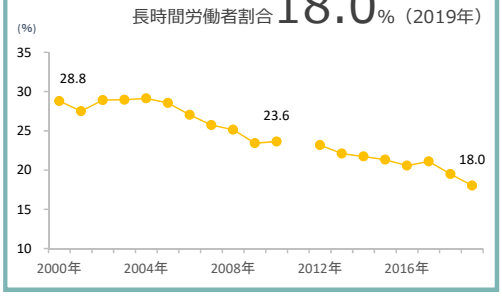
### 実労働時間（一般労働者）

1,978時間（2019年）



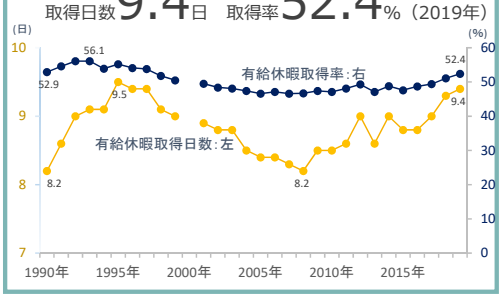

### 長時間労働者割合（週50時間以上）

長時間労働者割合18.0%（2019年）




### 年次有給休暇取得率

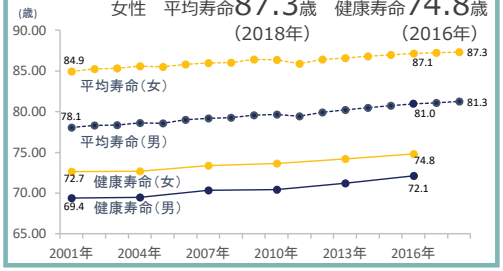
取得日数9.4日　取得率52.4%（2019年）



# 健康状態

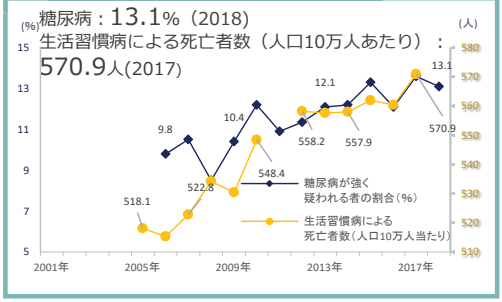
## 平均寿命・健康寿命

男性　平均寿命81.3歳　健康寿命72.1歳
女性　平均寿命87.3歳　健康寿命74.8歳
（2018年）　（2016年）



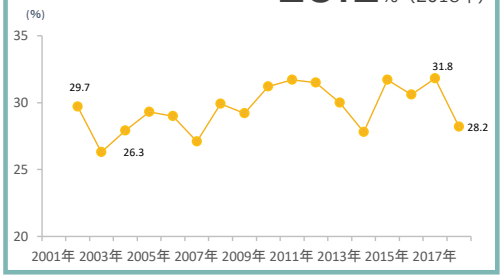

## 糖尿病が強く疑われる者の割合<br>生活習慣病による死亡者数の推移

糖尿病：13.1%（2018）
生活習慣病による死亡者数（人口10万人あたり）：570.9人(2017)




## 運動習慣がある者の割合

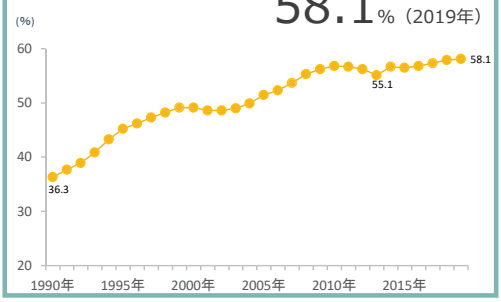
28.2%（2018年）




# 教育環境･教育水準

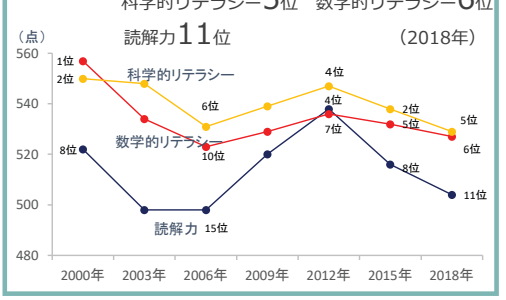
## 大学進学率

58.1%（2019年）



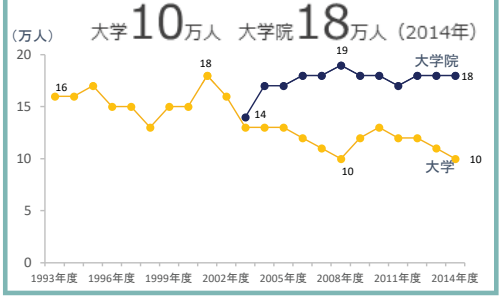

## 学習到達度の国際順位

科学的リテラシー5位　数学的リテラシー6位
読解力11位　（2018年）




## 社会人入学者数（大学・大学院）

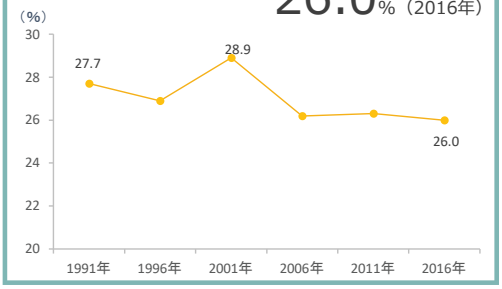
（万人）　大学10万人　大学院18万人（2014年）




# 社会とのつながり

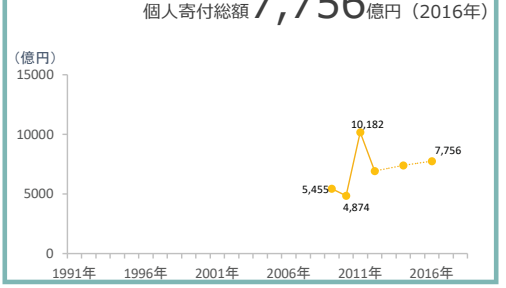
## ボランティア行動者率

26.0%（2016年）



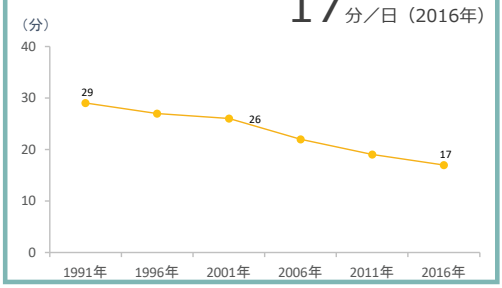

## 個人寄付総額

個人寄付総額7,756億円（2016年）




## 交際・付き合いの時間

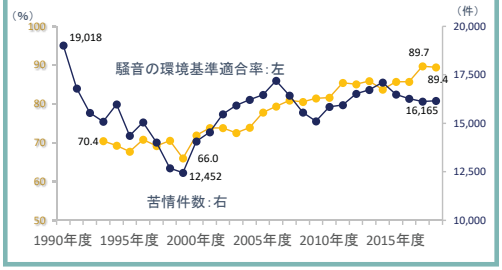
17分／日（2016年）




# 自然環境

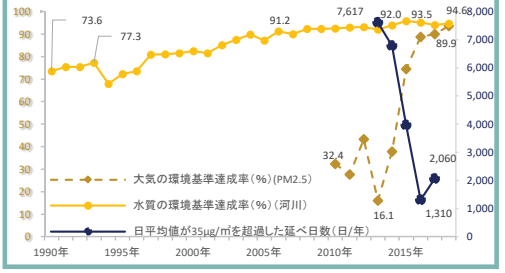
## 騒音の環境基準適合率

89.4%（2018年）



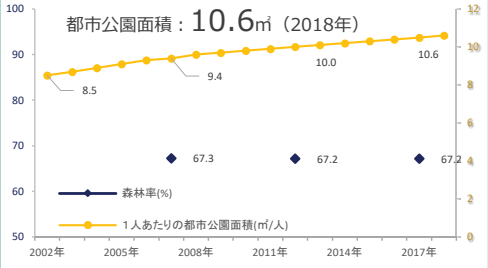

## 微小粒子状物質（PM2.5）、水質の環境基準達成率

大気93.5%（2018年）水質94.6%（2018年）




## 森林率、１人あたりの都市公園面積の推移

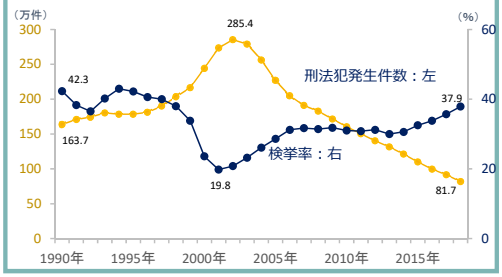
森林率：67.2%（2017年）
都市公園面積：10.6㎡（2018年）



# 身の周りの安全

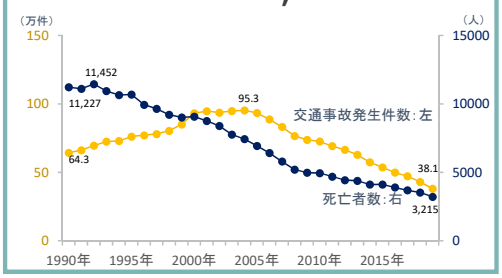
## 刑法犯発生件数(認知件数)

81.7万件（2018年）



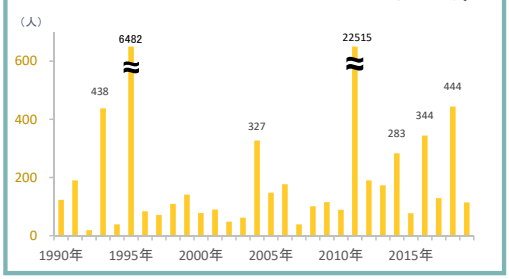

## 交通事故死亡者数

3,215人（2019年）




## 自然災害による死者・行方不明者数

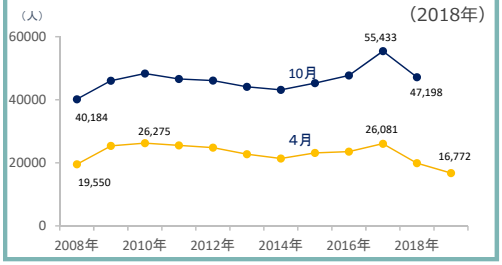
114人（2019年）




# 子育てのしやすさ

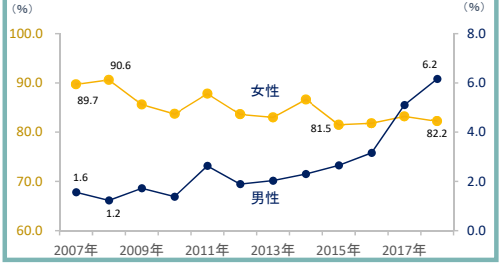
## 保育所待機児童数

4月：1.7万人（2019年）　10月：4.7万人（2018年）




## 育児休業取得者の割合

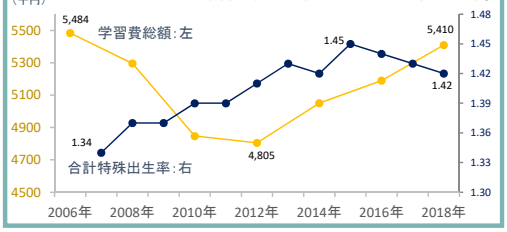
男性6.16%、女性82.2%（2018年）




## 子どもの学習費総額（すべて公立）<br>合計特殊出生率

子どもの学習費総額541万円（2018年）

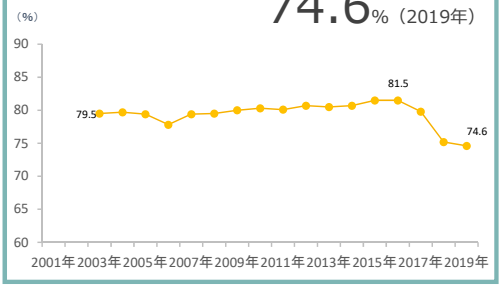
合計特殊出生率1.42（2018年）




# 介護のしやすさ･されやすさ

## 介護保険サービスの受給者の割合

74.6%（2019年）



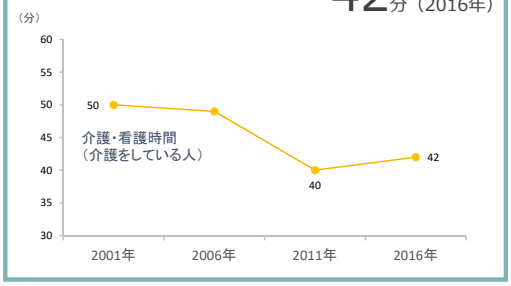

## 介護休業制度の規定のある事業所の割合<br>介護離職率

介護休業制度のある事業所の割合70.9%（2017年）

介護離職率1.4%（2018年）

## 介護・看護時間

42分（2016年）



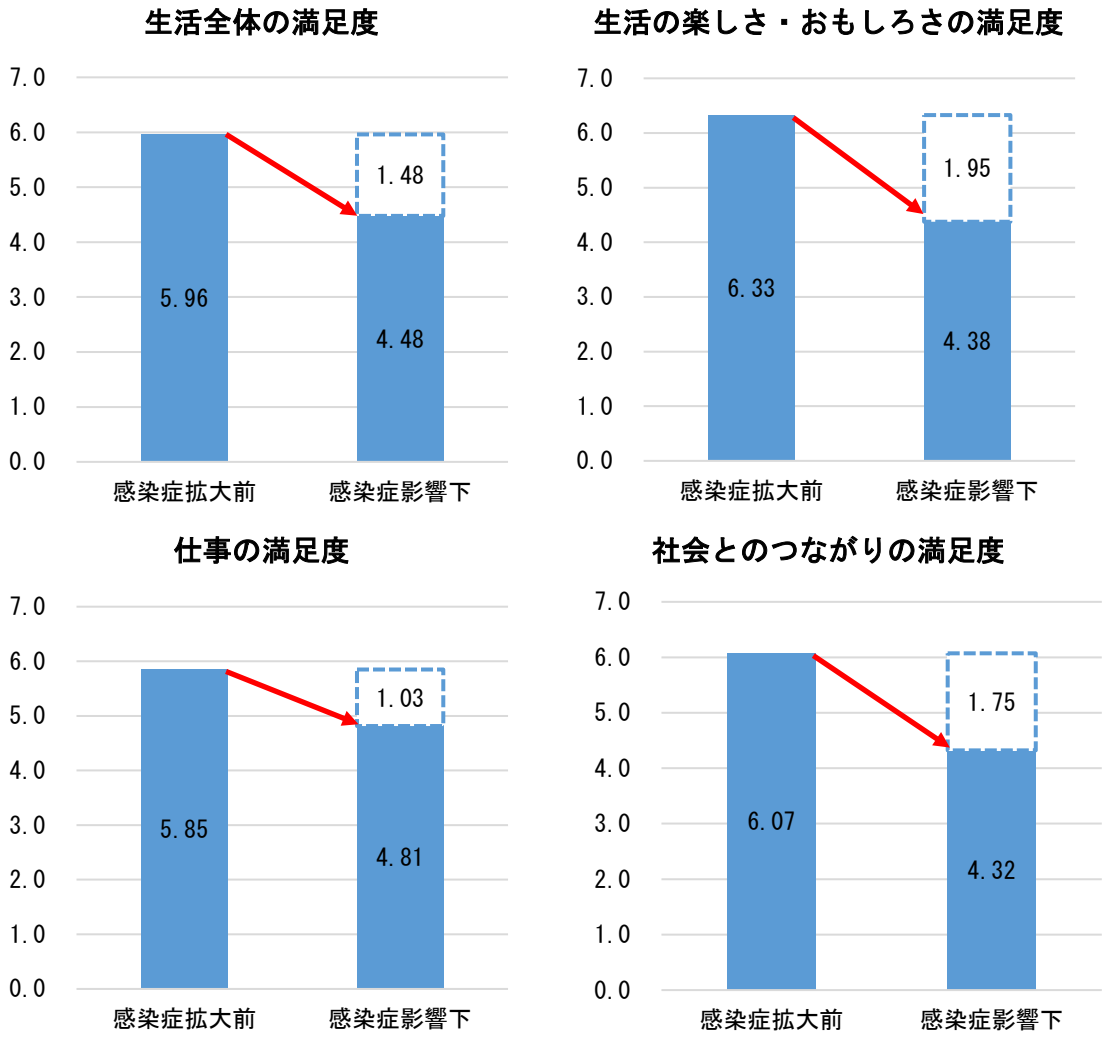
# 第2章　with コロナの暮らしと満足度

## Ⅰ　with コロナの満足度の概観

### （生活の楽しさ、社会とのつながりの満足度の低下幅が大きい）

新型コロナウイルス感染症（以下、感染症）の拡大に伴い、人々の生活は大きく変化した。外出の自粛、学校の休校、企業でのテレワーク、各種店舗の短縮営業や休業等、その影響は広範囲にわたった。第2章では、こうした感染症による暮らしの変化に伴う、人々の生活満足度の変化について、内閣府が実施した意識調査[13]に基づいて分析する。

**図表２－１－１　満足度の変化**




[13] 内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」による。同調査は 2020 年5月 25 日～6月5日にインターネット調査により実施、全国の 15 歳以上の登録回答者 10,128 人から回答を得たもの。

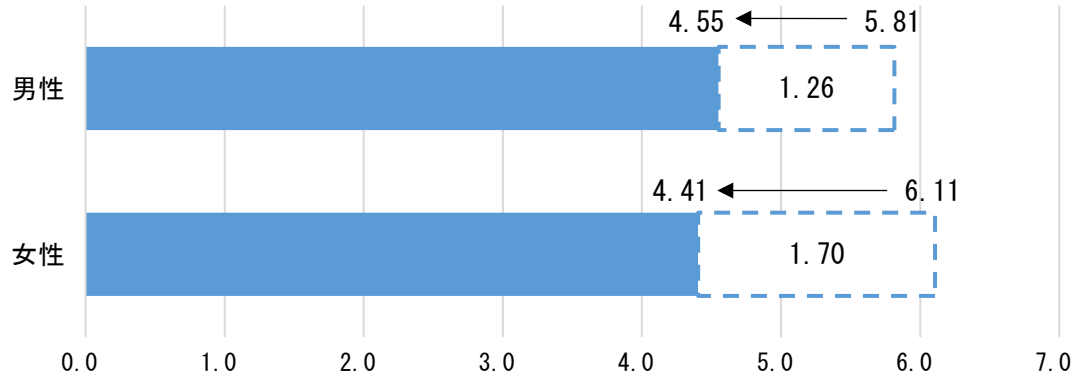
まず、我が国の満足度平均の概況を確認する。生活全体の満足度が 5.96 から 4.48 へと 1.48 減少したのに対して、仕事の満足度の低下幅はそれより小さく 1.03 であった。一方、生活の楽しさ・おもしろさの満足度の低下幅は 1.96、社会とのつながりの満足度の低下幅は 1.75 となり、生活全体の満足度と比べて低下幅が大きい。

生活の楽しさの満足度が低下した理由としては、例えば、自粛生活の中で、各種レジャーや外食といった外出機会が減少したこと等が考えられる。また、社会とのつながりの満足度が低下した理由[14]としては、友人・親戚や職場の同僚等との交流機会が減少したこと等が考えられる。

**（女性の満足度の低下幅は男性より大きい）**

満足度（生活全体）平均の変化を男女別に比較すると、女性は平均満足度が 1.70 低下しており、男性の 1.26 よりも低下幅が 0.44 大きくなっている。その理由は定かでは無いが、例えば、女性の方が友人との交流時間が長いこと、子供の学校休校など育児の環境変化の影響を受けやすいこと、非正規雇用の割合が男性より高いこと等が考えられる。

**図表２－１－２　感染拡大前後の総合主観満足度の変化**



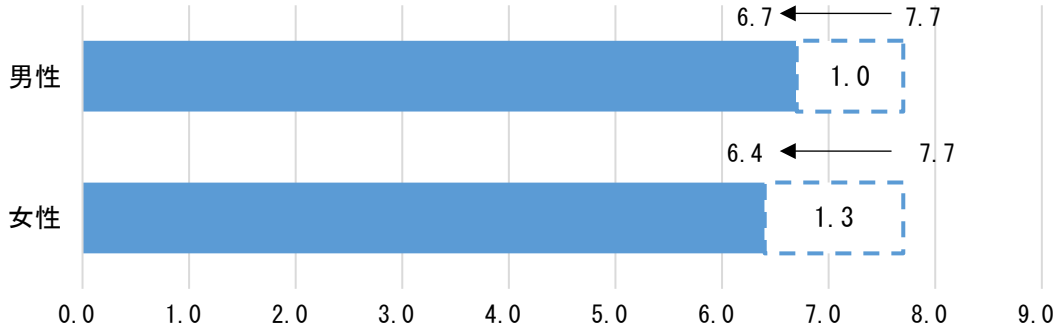

女性の満足度の低下幅が大きい傾向は、日本以外の国でも見られる。例えば英国では、女性の平均満足度の低下幅は 1.3 となっており、男性の満足度の低下幅 1.0 よりも大きい。なお、調査の時期・方法等が異なる[15]ため、日本の調査結果と海外の調査結果の直接比較はできないことに留意が必要である。

---

[14] 社会とのつながりの満足度の低下については、第2節で詳しく分析する。

[15] 英国では、感染症拡大前に実施した調査と、感染症影響下で実施した調査という2つ調査結果を比較している。日本では1度の調査で「感染症拡大前」と「感染症影響下」の満足度の両方を質問したため、影響下の満足度が低く出やすい可能性がある。

**図表２－１－３　英国の生活満足度の変化（男女別）**




（出典） Simetrica-Jacobs and the London School of Economics and Political Science (2020)[16]

**（高齢者の満足度が大きく低下する一方、若者の一定割合は満足度が上昇）**

満足度（生活全体）の変化について年代別に見ると、60 歳以上の満足度の低下幅が大きいことが分かる。感染症拡大前の通常期では、60 歳以上、特に 70 歳以上の平均満足度は他の年代よりも高いが、感染症影響下においては、若者の満足度を下回る水準まで低下している。

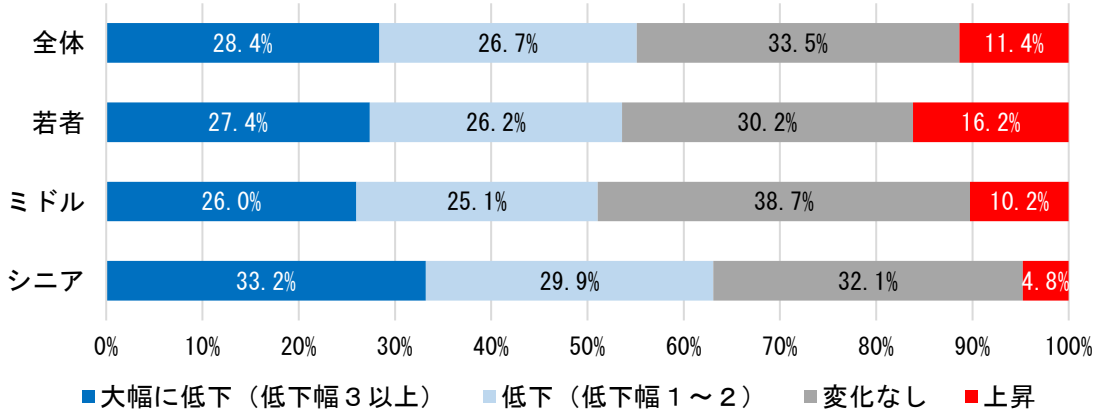
**図表２－１－４　年代別　満足度の変化**

| | 拡大前 | 影響下 | 差 |
|---|---|---|---|
| 10 歳代 | 6.03 | 4.60 | -1.43 |
| 20 歳代 | 5.94 | 4.69 | -1.25 |
| 30 歳代 | 5.92 | 4.53 | -1.39 |
| 40 歳代 | 5.61 | 4.35 | -1.26 |
| 50 歳代 | 5.67 | 4.22 | -1.44 |
| 60 歳代 | 6.30 | 4.45 | -1.85 |
| 70 歳代以上 | 6.60 | 4.63 | -1.97 |

以上のように、平均満足度で見ると、減少幅に違いはあるものの、どの年代でも満足度は低下傾向にある。では、感染症影響下において、すべての人の満足度が低下したかどうかを見てみよう。若者(30 歳代以下)、ミドル(40～50 歳代)、シニア(50 歳代)の別で見ると、すべての年代で過半数の人の満足度が低下しており、特にシニアでは6割を超える。一方で、満足度が上昇した割合は少ないものの、シニアの 4.8%に対して、若者の 16.2%は満足度が上昇している。

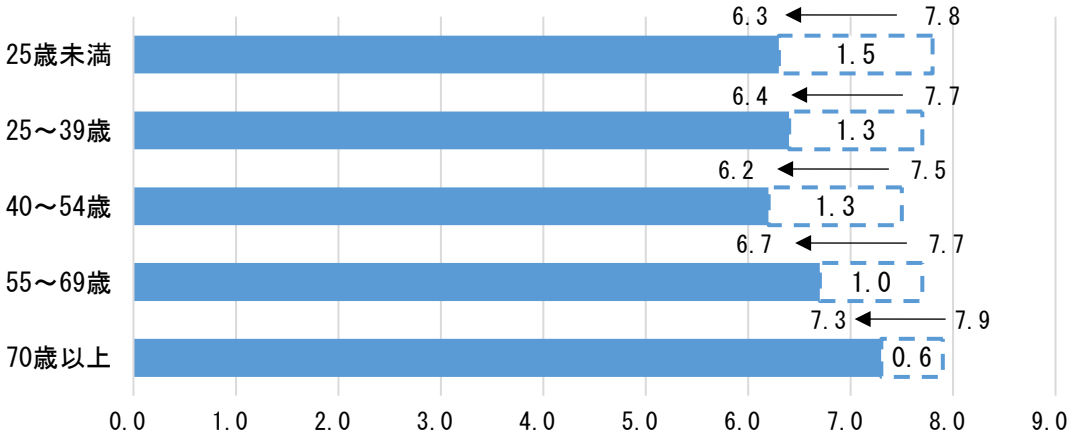
16　〝The Well-being Costs of COVID-19 in the UK:Average levels of Life satisfaction by gender〟

図表２－１－５　満足度（生活全体）の変化【回答者割合】




以上のように、日本では高齢者の満足度の低下幅が最も大きい。一方で英国では、若者の平均満足度の低下幅が大きく、高齢者の満足度の低下幅は小さくなっており、日本とは傾向が異なる。

図表２－１－６　英国の調査結果
(The Wellbeing Costs of COVID-19 in the UK)




（出典）Simetrica-Jacobs and the London School of Economics and Political Science (2020)[17]

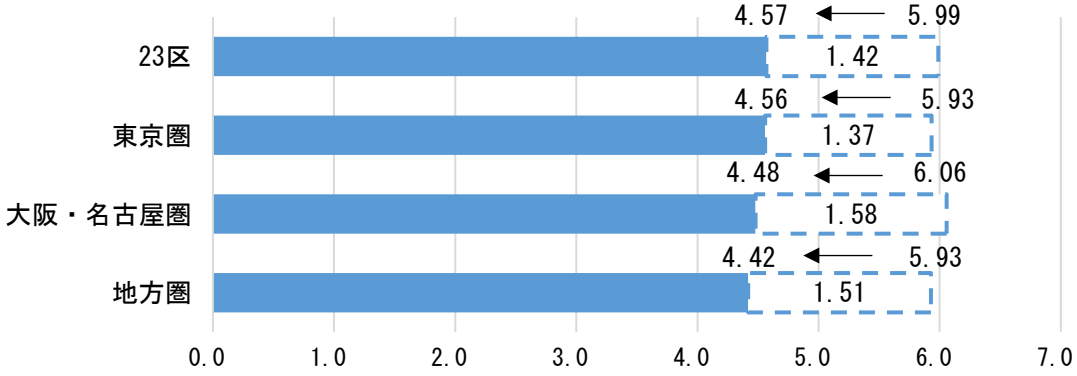
日本では感染症拡大前において、60 歳以上のシニア層の満足度が、他の年代と比べて相当程度高い水準にあったことが、下落幅の大きさに関係している可能性もある。

[17] 〝The Well-being Costs of COVID-19 in the UK:Average levels of Life satisfaction by age group〟

**（23 区では高齢者の満足度が低下し、地方圏では若者の満足度が低下）**

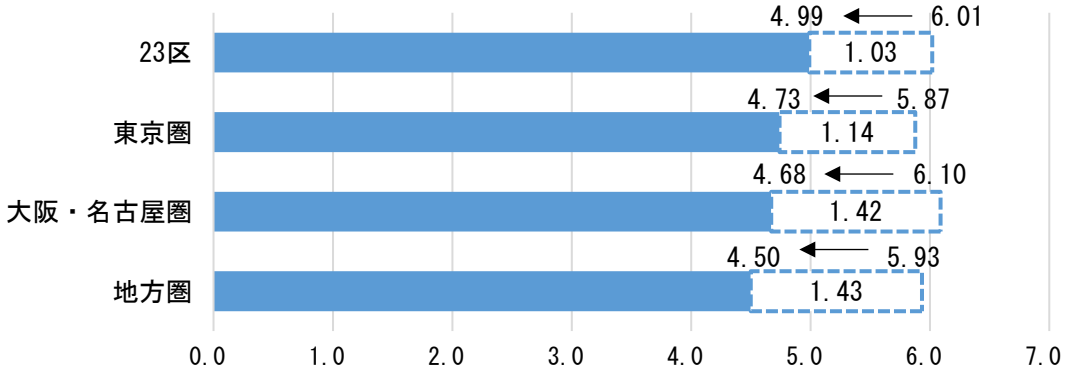
平均満足度（生活全体）の変化を地域別に見ると、全年齢計では、地域別に大きな違いはみられない。

**図表２－１－７　地域別（全年齢計）**

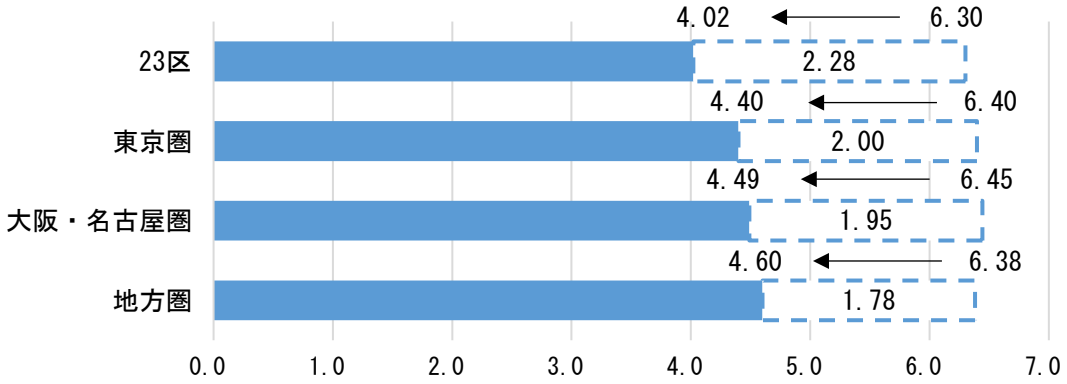



一方、年齢別と地域別のクロス分析をしてみると、地域別の傾向が見える。東京 23 区では、他の地域と比べて若者の満足度の低下幅が小さい一方で、シニアの満足度の低下幅は他の地域よりも大きい。

**図表２－１－８　地域別（若者）**




**図表２－１－９　地域別（シニア）**



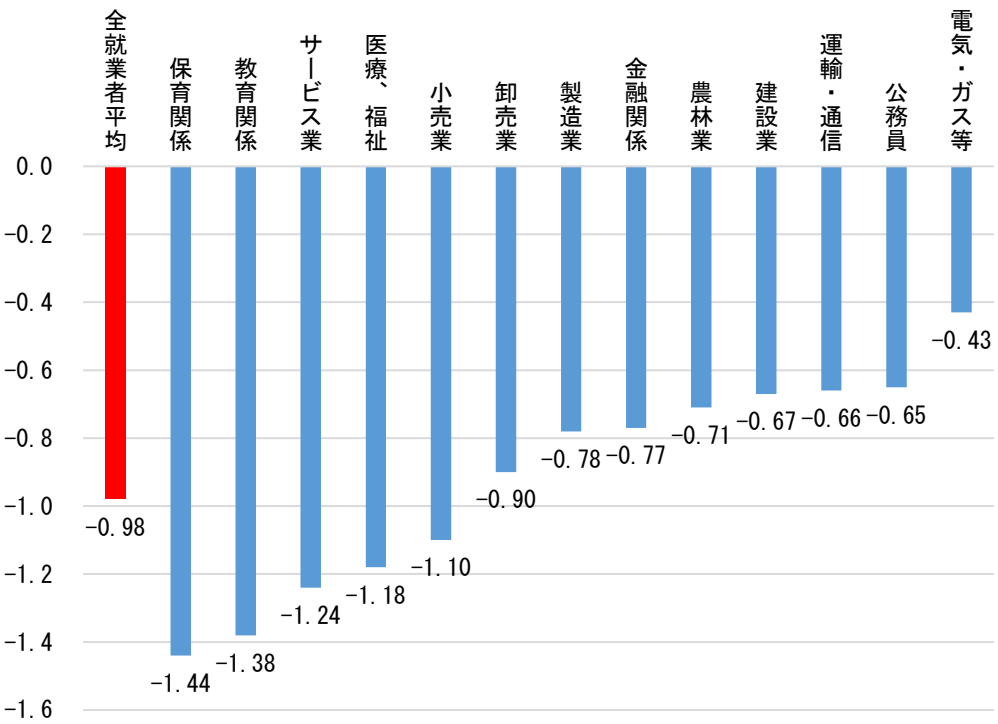
## Ⅱ　with コロナの働き方の変化と満足度

感染症の影響によって、我が国の企業・団体の業務において変化が必要となった。対面サービスを提供する事業所の多くは休業や時短営業を実施。また、営業する場合にも、マスクやフェイスシールドの着用など感染症対策を実施した上で営業するため、従業員は従来にない対応が必要になった。こうした中で、就業者の仕事に対する満足度がどのように変化したのかを見ていく。

### （保育、教育、サービス業、医療・福祉で仕事満足度が低下）

まず、仕事満足度（平均値）の低下幅について、産業分類別に見ていく。保育関係及び教育関係という子供と直接接することが多い産業において、最も仕事満足度の低下幅が大きくなっている。次に、サービス業、医療・福祉、小売業といった、テレワークがしにくい対面サービスを提供する産業が続いている。

**図表２－２－１　産業分類別の仕事満足度の低下幅**



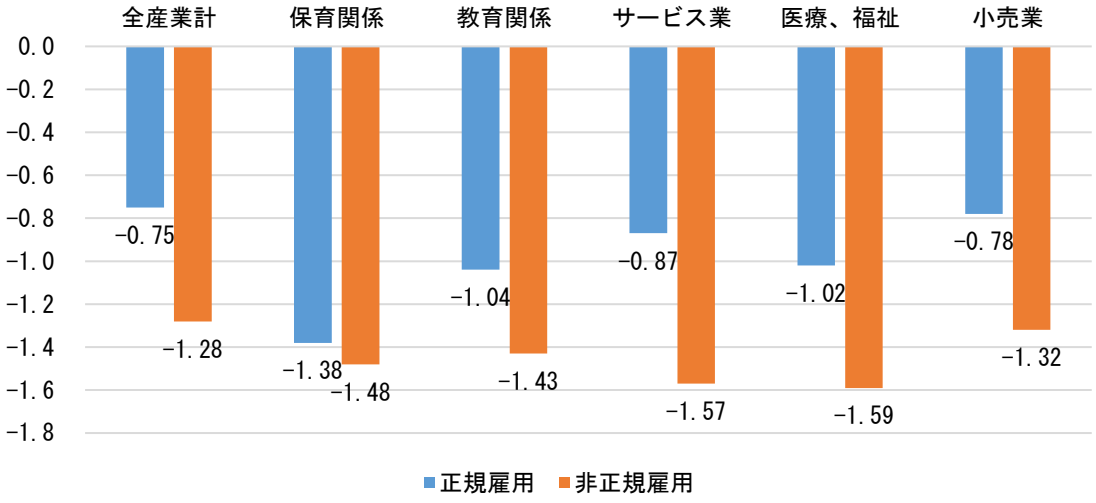

次に、雇用形態別（正規・非正規の別）に満足度の変化幅を見てみる。非正規雇用については仕事満足度の低下幅が 1.28 となっており、正規雇用の 0.75 よりも大きくなっている。

これを産業別に集計し、仕事満足度の低下幅の大きな5産業について見ると、最も満足度の低下幅の大きかった保育関係については、正規・非正規の低下幅が概ね同

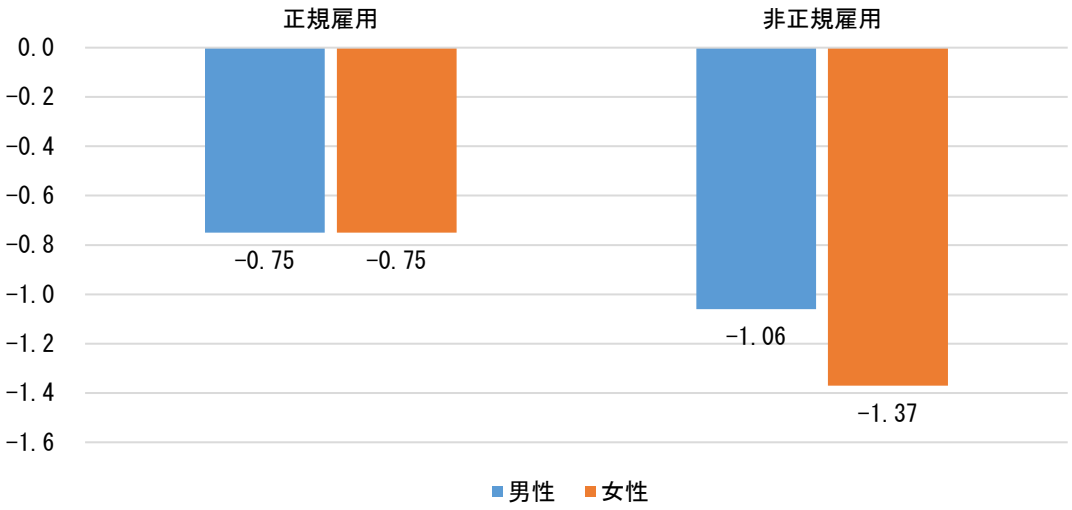
程度である。一方、正規・非正規の間の満足度の低下幅の差が大きいのが、サービス業（差が 0.70）、医療・福祉（差が 0.57）、小売業(差が 0.54)の3つである。これら3つの産業では、女性の非正規雇用の労働者が多く働いているため、女性の非正規雇用は、正規雇用や男性の非正規雇用と比べて満足度の低下幅が大きく、1.37 となっている。

今回の調査結果からは、非正規雇用の方が満足度の低下幅が大きい理由は明らかでない。例えば対面サービスに従事することが相対的に多く、これまでと違う環境でストレスを抱えがちなこと等の仮説が考えられるが、今後の検討課題である。

**図表２－２－２　雇用形態別の仕事満足度の低下幅**




**図表２－２－３　男女別の仕事満足度の低下幅**



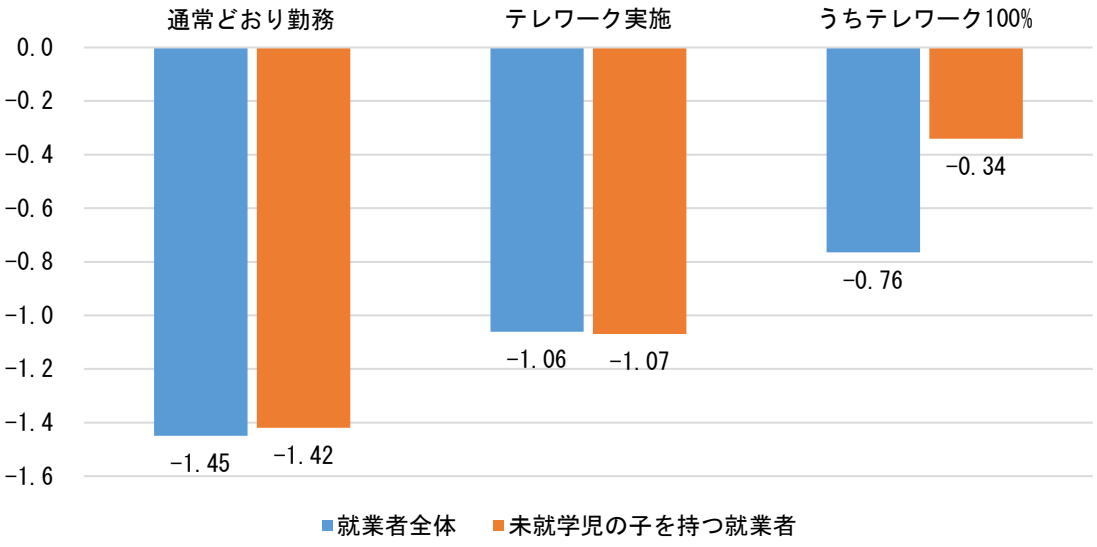
（テレワークは仕事満足度の低下幅を縮小）

感染症の影響によって、我が国でこれまで導入が十分に進んでこなかったテレワークが急速に普及した。例えば内閣府調査によれば、就業者の 33.4%がテレワークを経験し、うち東京 23 区の就業者は 55.5%がテレワークを経験した。こうしたテレワークの拡大によって、就業者の満足度にどのように影響したのかを分析する。

テレワークを実施した就業者の満足度の低下幅 1.06 となっており、通常どおり勤務した就業者の 1.45 よりも、低下幅が小さい。特にテレワーク実施率が 100%の就業者の満足度低下幅は 0.76 となり、通常どおり勤務の場合の約半分である。

また、未就学児の子供を持つ就業者が、テレワークを 100%で実施する場合、満足度低下幅は 0.34 となり、通常どおり勤務と比べかなり小さくなる。小さい子供を持つ親にとって、しっかりと家で子育てに向き合える 100%テレワークが実施できることは、生活満足度の改善にとって有意義であると考えられる。

**図表２－２－４　満足度（生活全体）平均値の低下幅**

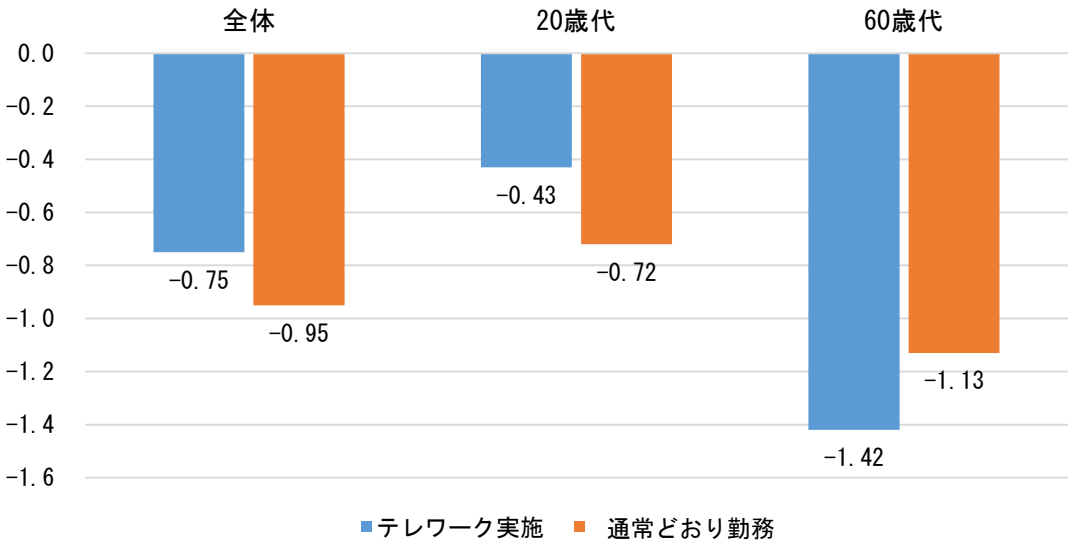



（60 歳代ではテレワークによって仕事満足度の低下幅が拡大）

次に、テレワークの普及に伴い、就業者の仕事の満足度にどのように変化したのかを見ていく。

就業者全体では、テレワーク実施者は仕事の満足度の低下幅が小さい傾向があり、プラスの効果を持つ。テレワークによるメリットとして、無駄な会議の見直しにつながること、自分の仕事に集中できること等が指摘されている。こうした理由で、テレワーク実施者の仕事満足度の低下幅が縮小しているのではないかと考えられる。

**図表２－２－５　テレワークの実施の有無と仕事満足度の低下幅**




テレワークと仕事満足度の関係を年代別に見ていく。20 歳代においては、テレワーク実施者は通常どおり勤務した就業者よりも仕事満足度の低下幅が小さい。一方、60 歳代では、テレワークを実施しなかった就業者の方が、満足度の低下幅が小さい。若者は新しい働き方であるテレワークに馴染みやすい一方、60 歳代ではテレワークに馴染みづらい可能性が示唆される。

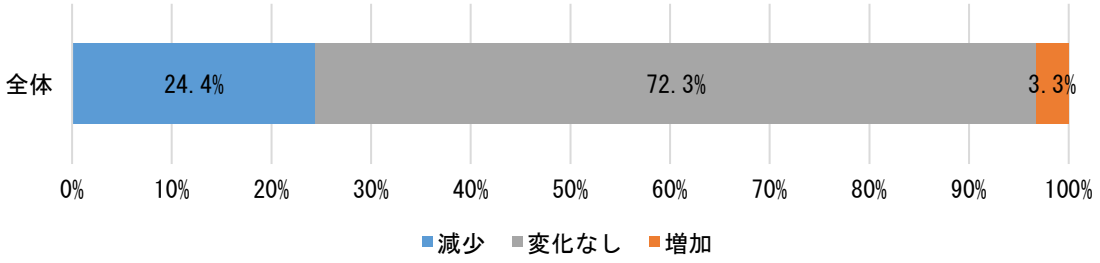
## Ⅲ　with コロナの暮らしの変化と満足度

### （対話人数が減少したシニアは満足度が低下）

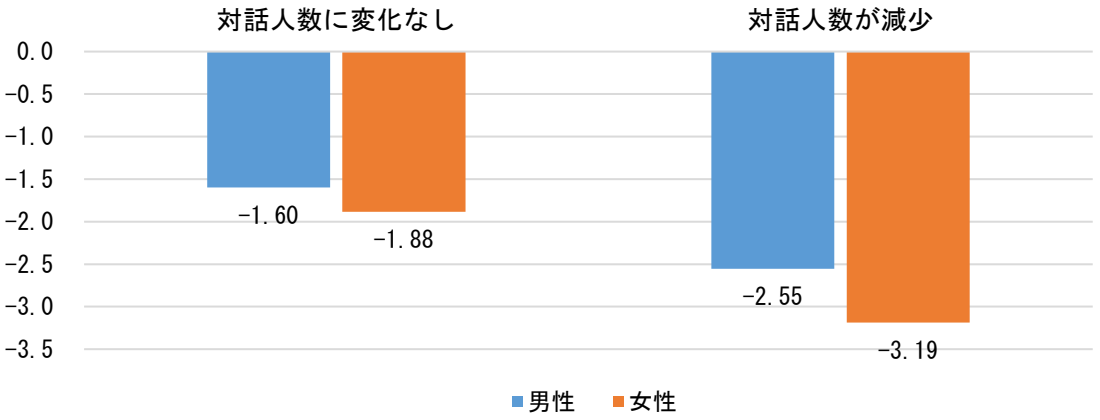
感染症が暮らしに与えた大きな影響の一つとして、自粛生活の中での社会とのつながりの縮小が挙げられる。特に、社会とのつながりの満足度の低下幅が大きかった 60 歳以上のシニアにおいて、どのような変化が生じているかをみてみる。

シニアの対話人数の変化を見ると、24.4%が感染症影響前と比較すると減少しており、対話人数に変化がない人よりも社会とのつながり満足度の低下幅が大きい。特に、対話人数が減少した女性の満足度の低下幅は 3.19 と大きくなっている。

**図表２－３－１　対話人数の変化（シニア）**




**図表２－３－２　社会とのつながりの満足度の低下幅（シニア）**

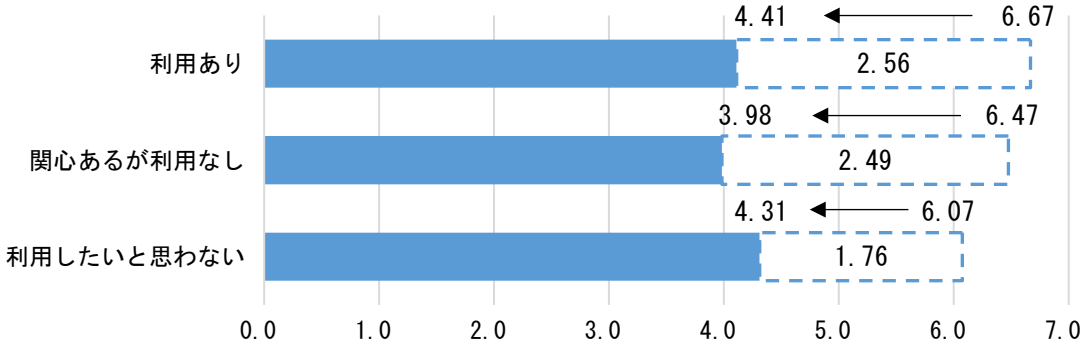



### （ビデオ通話の経験、関心の程度と社会とのつながりの満足度）

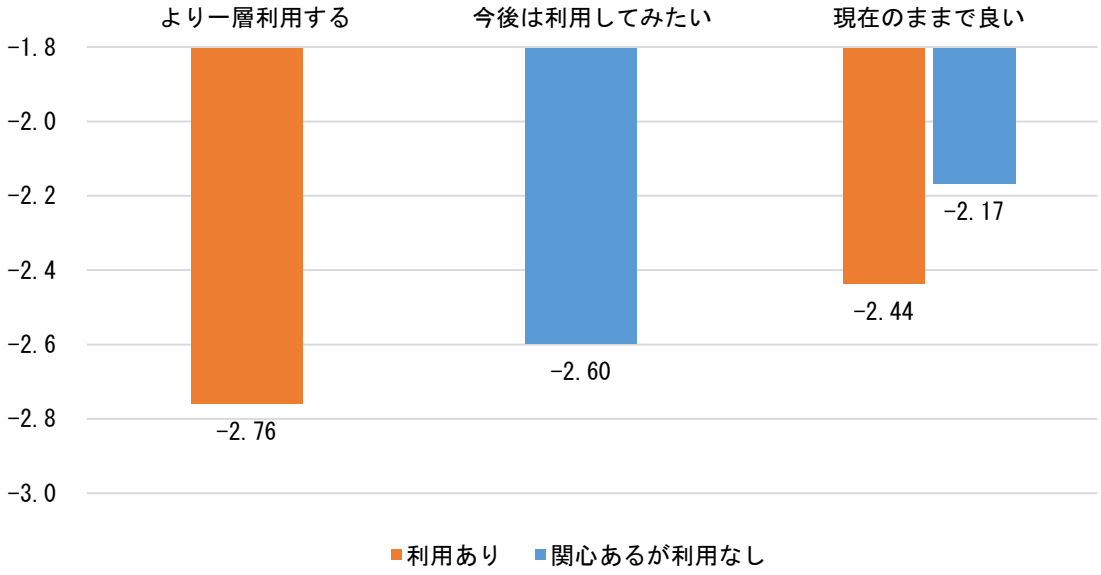
シニアのビデオ通話（zoom、skype、Line 等）の経験、関心の程度と社会とのつながりの満足度を見ると、ビデオ通話の利用がある人は利用しない人よりも、感染症拡大前の社会とのつながり満足度が高いが、感染症の影響下においては低下幅が最も大きくなっている。さらに、今後のビデオ通話の利用について、より一層利用すると回答した人が最も満足度の低下幅が大きく、ビデオ通話への関心が高い人や利用者の方が

社会とのつながりをより重要視しているのではないかと考えられる。

**図表２－３－３　ビデオ通話の経験、関心の程度と社会とのつながり満足度の変化（シニア）**



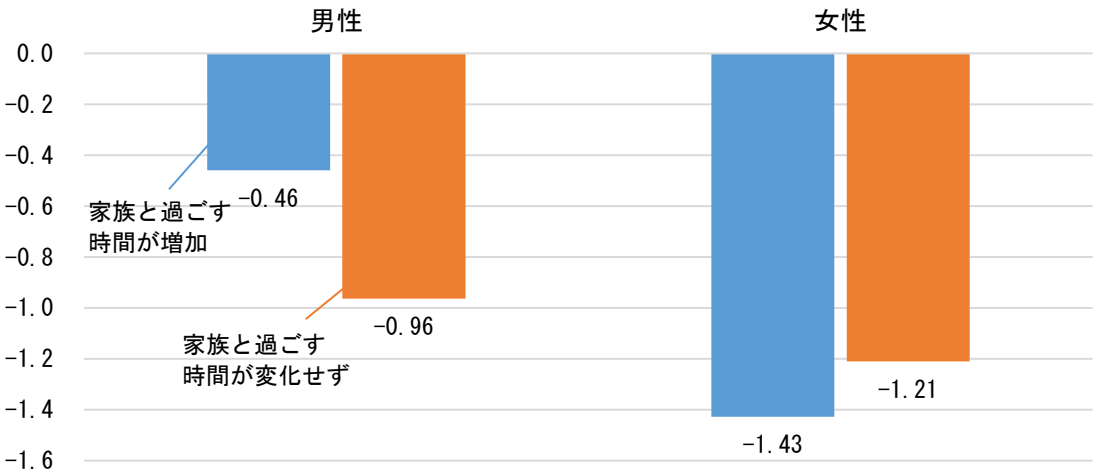

**図表２－３－４　今後のビデオ通話利用と社会とのつながり満足度の低下幅**



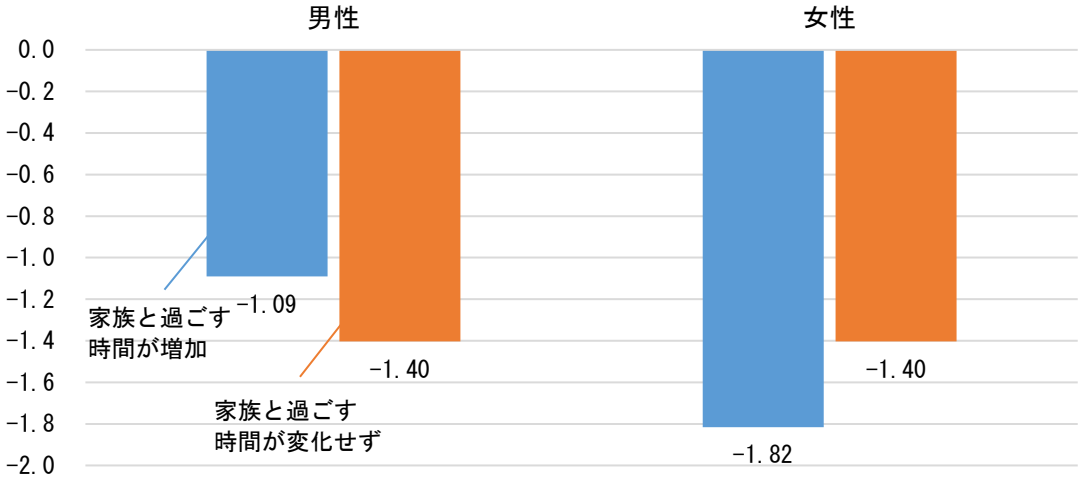

**（家族と過ごす時間の増加は男性の子育て満足度を改善）**

テレワーク等の働き方の変化や外出自粛等の感染症の影響により、子育て世帯の 70.3%が家族と過ごす時間が増加した。家族と過ごした時間の増加と子育てのしやすさ満足度の関係を見ると、男女で異なる結果が見られる。男性の場合は家族と過ごす時間が増加した方が子育て満足度の低下幅が小さい。一方、女性では、家族と過ごす時間が増えた方が満足度の低下幅が大きくなっている。生活全体の満足度との関係においても、同様の傾向がみられる。

**図表２－３－５　家族と過ごす時間の変化と**
**子育てのしやすさ満足度の低下幅**




**図表２－３－６　家族と過ごす時間の変化と**
**満足度（生活全体）の低下幅**

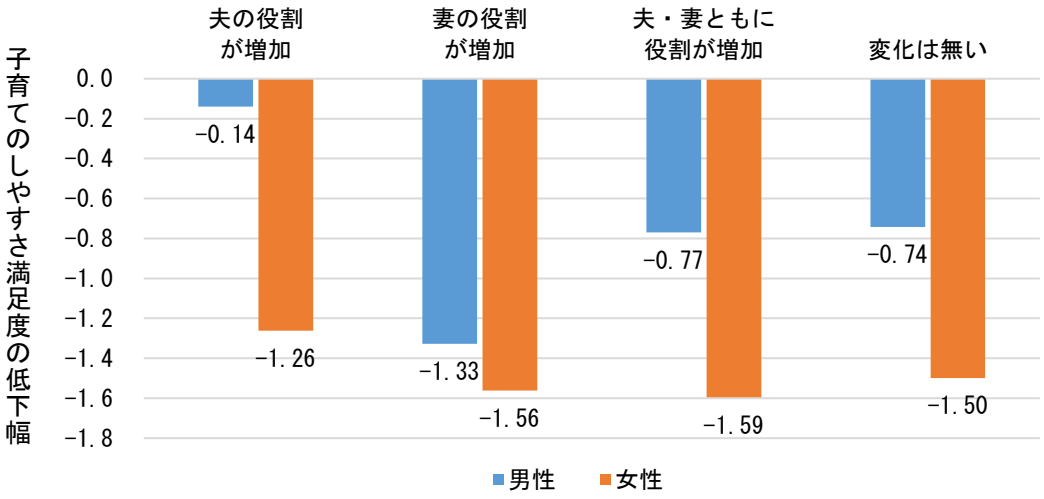


## ＜コラム＞　家事・育児の役割分担から見る子育て満足度

家族と過ごす時間の増加が子育て満足度に与える影響には大きな男女差が見られたが、その背景には夫婦間の家事・育児の役割分担の変化が及ぼす影響が大きいと考えられる。

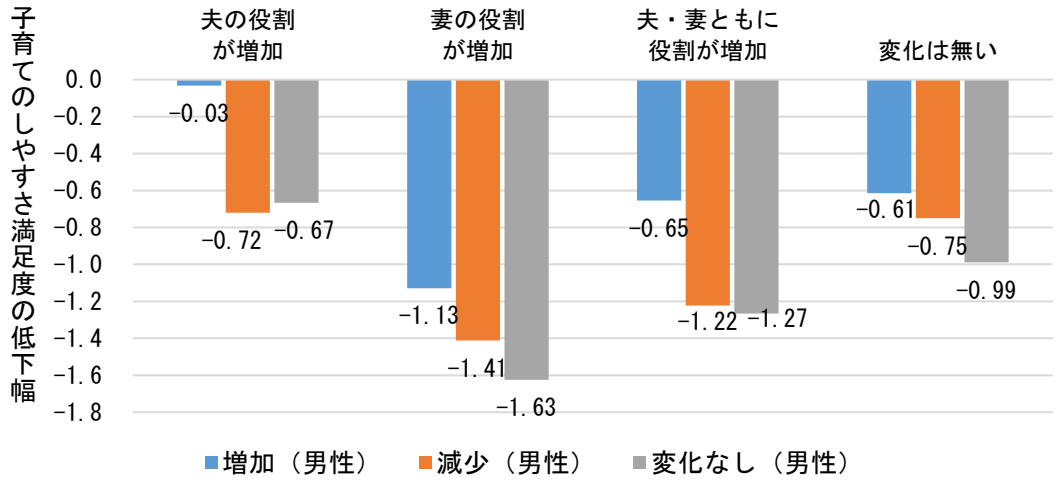
家事・育児に関する夫婦間の役割分担の変化と子育て満足度の関係を見ると、特に男性で自ら（夫）の役割が増加した場合、子育て満足度の低下幅は著しく小さい。一方、妻の役割が増加した男性の満足度の低下幅は大きく、感染症の影響下において、妻のみの負担が増加すると、男性の子育て満足度にもマイナスの効果が及ぶことが分かった。女性の場合については、男性と比較すると夫婦間の役割分担の変化が子育て満足度に与える影響は小さいが、夫の役割が増加した場合に最も低下幅が小さくなっている。

**図表２－３－７　家事・育児に関する夫婦間の役割分担の変化**



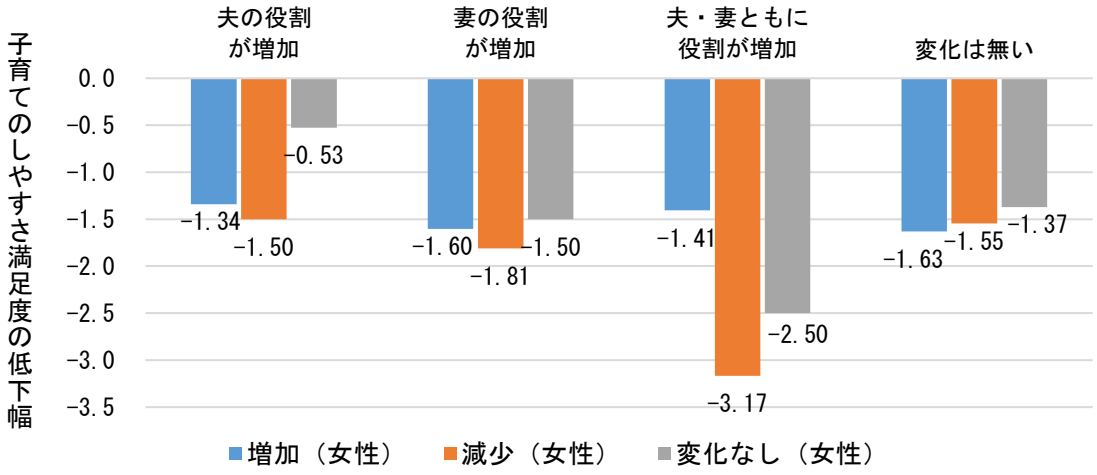

男性は、夫（自ら）の役割が増加すると、子育て満足度の低下幅は著しく小さくなるが、その中でも特に、家族と過ごす時間が増加した人の満足度の低下幅が著しく小さい。男性にとっては、家事・育児の役割分担の変化に関わらず、家族と過ごす時間の増加は子育て満足度にプラスの効果をもたらすが、特に夫の役割が増加した場合にその効果が大きくなる。

**図表２－３－８　夫婦間の役割分担の変化と家族と過ごす時間の変化（男性）**




女性においても、夫の役割が増加すると、子育て満足度の低下幅が小さくなる傾向にある。男性と比較すると、家族と過ごす時間や夫婦の役割分担の変化が与える影響は小さいが、夫の役割の増加は子育て満足度にプラスの効果をもたらす。

**図表２－３－９　夫婦間の役割分担の変化と家族と過ごす時間の変化（女性）**

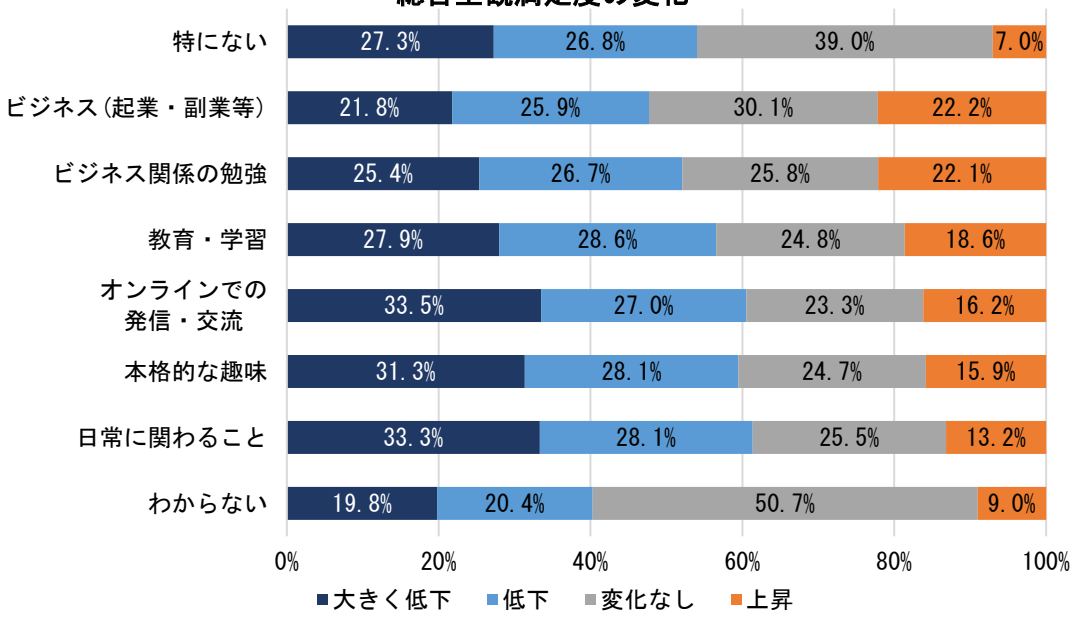



※夫の役割が増加：夫の役割が増加・夫の役割がやや増加
　妻の役割が増加：妻の役割が増加・妻の役割がやや増加

（新たな挑戦をした人は、満足度が上昇した割合が高い）

自宅で過ごす時間が増加する中で、新たな挑戦・取組を行う人も多くみられる。新たな挑戦・取組を特に実施しなかった回答者の中で、満足度が上昇した割合は低く7.0%であるが、感染症を機にビジネス関係の取組・勉強に新たに挑戦した人の22%は満足度が上昇している。

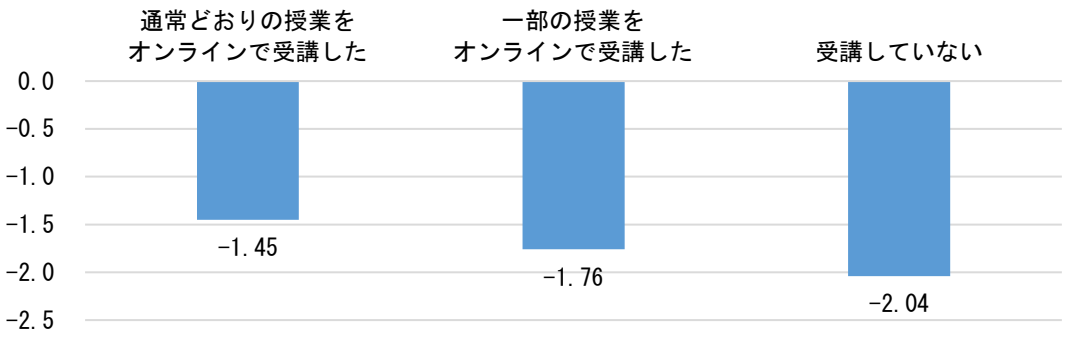
**図表２－３－10　新たな挑戦・取組を行った人の総合主観満足度の変化**




（オンライン授業を受けている大学生は満足度が高い）

感染症の影響を踏まえ、多くの大学で授業が休止となったり、オンライン授業として再開されたりしている。大学生・大学院生の満足度（生活全体）を見ると、オンライン授業を受講していない学生と比べて、通常どおりの授業をオンライン授業で受講できた学生は、満足度の低下幅が小さいことが分かる。

**図表２－３－11　大学生・大学院生のオンライン授業の受講と満足度の低下幅**



## 第3章 「満足度・生活の質に関する調査」のデータを活用した研究の紹介

「満足度・生活の質指標群に関する研究会」では、2019 年調査、2020 年調査、合わせて約 15000 人規模の Web 調査（満足度・生活の質に関する調査：以下、本調査）を活用して、人々の満足度・生活の質の向上に資するよう、生活全般の満足度および分野ごとの満足度を多方面から分析している。ここでは、データが入手可能な分野・地域に限定した分析や、現時点においては分析結果の解釈が一様ではない分析など、試行的なものも含めた6つの研究成果を、研究会での議論を踏まえ紹介する。

### 1．市町村レベルにおける満足度と客観指標の関係性（健康状態の満足度の例）

住民の満足度と地域の客観指標（＝地域の状況を客観的に表す指標）との関係性は、都道府県レベルにおいてよりも市町村レベルにおいて、より鮮明に現れやすいと見込まれる。そこで、本調査において一定の回答者数が得られた市町村（回答者数が 10 人以上の 366 市町村：人口 10 万人以上の市町村が多数を占める）を対象に、健康分野を事例に選定し、相関分析と重回帰分析を行った。なお、客観指標には、平均寿命、基本健診受診率、がん検診受診率、生活習慣病死亡率、人口当たり病床数・医師数、1人当たり医療費を用いた。相関分析では一部を除いて弱い相関から強い相関が確認できた。重回帰分析では、客観指標を入れ替えて複数のケースを分析したところ、6つの客観指標で健康分野の満足度の7割程度を説明できるモデルも得られた。健診受診率（健康管理の状況）、三大疾病での死亡率（生活習慣病の状況）、病床数（地域の医療資源）の3つのみで説明するモデルでも5割以上を説明するモデルが得られた。

### 2．地域レベルの経済社会的条件が住民の健康状態の自己評価や生活満足度に与える影響

本研究では、個人レベルの経済社会的条件（収入、学歴、職の有無）と共変量（性別、年齢、配偶者の有無、調査年）をコントロールしながら、市町村レベルの経済社会的条件（失業者率、1人当たりの課税所得など）を説明変数に用いて、個人の健康状態の自己評価や生活満足度の高さを説明するための重回帰分析を行った。また、健康維持・増進の取組、友人等との交流が、地域レベルの経済社会的条件が個人の健康状態の自己評価や生活満足度に与える影響をどのように媒介しているかを検討した。

分析の結果からは、（1）市町村レベルの経済社会的条件は、住民の健康状態の自己評価や、生活満足度を低下させる傾向があることが分かった。しかしながら、この影

響の大きさは、住民の健康状態の自己評価と個人レベルの経済社会的条件との関連性の5分の1から4分の1であり、地域レベルの経済社会的条件が住民の健康状態の自己評価や、生活満足度に与える影響は、一般的に個人レベルの経済社会的条件と比較して非常に限定的であることを示していた。(2)健康行動と友人等との交流の媒介効果については、健康効果についてのみ確認できた。経済社会的条件の低い市町村の住民は、健康的でない行動を身近な場で目にしたり、その影響を受けたりする機会が多いのではないかと考えられる。

### 3. 人々を取り巻く様々な環境や属性と生活全体の満足度との関係(満足度が特に低い層に焦点を当てて)

多様な視点から生活全体の満足度が0点～2点の層を回答者全体と比べてみた結果、健康状態、困った時に頼りになる人の有無、交流の有無、趣味・生きがいの有無において、0点～2点の層では全体よりも否定的な回答(よくない、ない等)の割合が特に高くなっていた。満足度が特に低い層の特徴として、健康状態がよくない、困った時に頼りになる人がいない、交流がない、趣味・生きがいがない等が浮かび上がった。また、これらの条件が複合的に重なった生活状況も満足度が特に低い層の特徴として浮かび上がった。

また、要因を分析したところ、生活全体の満足度に対して有意に効く全分野で特に満足度が低い傾向があったほか、個人や世帯の基本的な属性においても、満足度の低い属性がそろっている傾向があった。さらに残差もマイナス側に偏っており、要因分析で把握できていない残りの部分でも満足度を低める要因が働いている状況が確認された。

### 4. 暮らしの将来的な持続可能性の見通しと満足度の関係性(将来不安の視点から)

将来の暮らしへの不安が現在の満足度に影響を及ぼしているのではないか、との想定に立ち、現在の分野別満足度と将来の見通し(不安の度合い)の関係性について分析した。その結果、現在の満足度と将来の見通しには、中程度の相関から強い相関がみられた。また、満足度と将来見通しとの差を分野別に確認すると、「健康」「自然環境」「身の周りの安全」で他の分野よりも大きな差が見られた。年齢別にみると、25-34 歳、35-44 歳で、他の年齢層に比べてやや差が大きく開いていた。これらの年齢層では、他の年齢層に比べて、現在の満足度水準の暮らしの持続を難しいととらえる傾向が強いと考えられる。

## 5. 生活課題・欲求に対処するための資源からみたクラスター

クラスター分析により、資源保有状況別の類似性に基づいて回答者をグルーピングし、生活全体及び分野別の満足度との関係をみたところ、豊富にそろう何らかの資源が1つでもある層は、たとえ、分野別満足度で満足度が低い分野があっても、生活全体の満足度は 5.5 以上となっていた。一方、すべての資源に乏しい層は、分野別満足度が全般的に低く、生活全般の満足度も低い（5以下）ことが判明した。頼れる資源が一つもない状況の解消、すなわち、一つの資源の十分な向上を目指す方向性が重要である可能性が見受けられた。

## 6. SNS の利用と生活満足度

本研究では、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の利用と生活満足度との関係を、「知覚されたソーシャル・サポート（社会的支援）（perceived social support、以下 PSS）」の媒介効果に着目して分析した。

基本的な回帰分析の結果、第一に、若年層（15～29 歳）、中年層（30～59 歳）、高齢層（60～86 歳）のすべての年齢層において、SNS 利用が生活満足度と正の関連を持つことが確認された。第二に、構造方程式モデリング分析により、全年齢層において SNS 利用と生活満足度の関連性に、PSS が介在することが明らかになった。また、SNS の友達の数に関わらず、SNS 利用と生活満足度との間の正の相関には、PSS の媒介効果が一貫して寄与していた。これらの結果から、SNS 利用は PSS への正の影響を介して生活満足度を高める可能性があることが示唆されている。

## Ⅰ　市町村レベルにおける主観的満足度と客観指標の関連性（健康状態の満足度の例）

### 1．実施概要

住民の満足度と地域の客観指標（＝地域の状況を客観的に表す指標）との関係性は、都道府県レベルの状況を示す客観指標においてよりも市町村レベルの状況を示す客観指標において、より鮮明に現れやすいと見込まれる。しかし、市町村レベルの分析を行う場合、アンケート回答者数が十分にそろう市町村が少なく、また、市町村レベルの客観指標は少数に限られる点で、満足度と客観指標との関係性を把握するには限界がある。このような限界を踏まえながらも、本研究では、市町村レベルの指標が比較的そろう健康分野を事例として関係性の分析を試行した。

ここでは、回答者数が 10 人以上の市町村（366 市町村：人口 10 万人以上の市町村が多数を占める）に絞り込んで、相関分析を行うとともに、重回帰分析を実施し、説明力の高いモデルが得られるか試行した[18]。

客観指標として分析に使用したのは、平均寿命、健診・がん検診受診率、死亡率、医療（病床数、医師数、医療費）である。

### 2．結果

最も説明力の高い試算ケース4では、決定係数が 0.720 であった。ケース4より、シンプルなモデル（ケース1・3・5・7共通の結果）でも、健康診査受診率（健康管理の状況）、三大疾病での死亡率（生活習慣病の状況）、人口当たりの病床数（医療資源の状況）で、満足度の5割以上を説明していた。

以上により、市町村レベルでは、客観指標により健康分野の満足度のかなりの部分を説明できることが把握できた。

---

[18] 10 人より回答者が多い市町村にしぼると計算対象となる市町村数が少なくなり、かつ大きな市町村に偏る点で難点が生じる。他方、より回答者数が少ない市町村まで対象に含めると、地域性を反映せず特定の個人の影響が反映されたデータを含む点で難点が生じる。以上により回答者数が 10 人以上の市町村を対象に重回帰分析を行った。

## 図表３－１－１　試算結果

※表中の水色のセルは各試算に使用した客観指標を示す。そのうち、符号条件を満たし、かつ、5%水準で有意だったものについては表中で非標準化係数を記載している。

| n≧10の自治体<br>概ね10万人以上の規模の自治体 | | | | 試算ケース | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| ※表中の数値は標準化係数β<br>（符号条件を満たす、かつp<0.05） | | | $R^2$（調整済） | 0.533 | 0.577 | 0.533 | 0.720 | 0.533 | 0.577 | 0.533 | 0.515 | 0.419 |
| | | | 回帰　p値 | 0.001 | 0.000 | 0.001 | 0.000 | 0.001 | 0.000 | 0.001 | 0.006 | 0.004 |
| 属性項 | （統制） | 高齢化率 | | | | | 0.966 | | | | 0.948 | |
| | | 性比 | | | 0.415 | | 0.519 | | 0.415 | | 0.528 | 0.572 |
| 平均寿命 | 生のパブリックイメージ | 男 | | | | | | | | | | |
| | | 女 | | | | | 0.432 | | | | | |
| | | 男女（0歳性比調整） | | | | | | | | | | |
| 健診・検診 | 健康管理・健康リスクの意識が現れる行動 | 健康診査受診率 | | 0.433 | 0.471 | 0.433 | 0.287 | 0.433 | 0.471 | 0.433 | 0.389 | 0.511 |
| | | がん検診受診率（延べ） | | | | | | | | | | |
| | | 胃がん検診受診率 | | | | | | | | | | |
| | | 肺がん検診受診率 | | | | | 0.535 | | | | 0.559 | |
| | | 大腸がん検診受診率 | | | | | | | | | | |
| 死亡率（10万人当たり） | 生活習慣病の状況 | 三大疾病 | 男女（性比調整） | −0.694 | | −0.694 | | −0.694 | | −0.694 | | |
| | | 悪性新生物 | 男女（性比調整） | | | | | | | | | |
| | | 心疾患 | 男女（性比調整） | | | | | | | | | |
| | | 脳血管疾患 | 男女（性比調整） | | −0.439 | | −1.116 | | −0.439 | | −1.203 | |
| | 生活習慣病死亡率構成比 | 死亡率・三大疾病 | 男女（性比調整） | | | | | | | | | |
| | | 死亡率・悪性新生物 | 男女（性比調整） | | | | | | | | | |
| 医療 | 健康状態の回復の社会基盤 | 人口10万対病床数 | | 0.566 | 0.502 | 0.566 | | 0.566 | 0.502 | 0.566 | | 0.428 |
| | | 人口10万対医師数 | | | | | | | | | | |
| | | 1人当たり医療費 | | | | | | | | | | |

## Ⅱ　地域レベルの経済社会的条件は、住民の健康状態の自己評価や生活満足度をどのように低下させるのか？

本研究は、本調査を活用して、地域レベルの経済社会的条件が、健康状態の自己評価や、生活全般の満足度にどのように影響しているのかを試行的に分析したものである。[19]

### 1. 実施概要

ここでは、本調査全体の約 15000 名のモニターの回答のうち、1市町村でモニター10 名以上の回答が得られた 366 市町村に居住する 12461 名のモニターの回答を抽出するとともに、当該 366 市町村の客観データを一般統計から入手し、活用した。分析手法としては、個人レベルの経済社会的条件（収入、学歴、職の有無）と共変量（性別、年齢、配偶者の有無、調査年）をコントロールしながら、市町村レベルの経済社会的条件 [20]（失業者率、1人当たりの課税所得など）を説明変数に用いて、個人の健康状態の自己評価や生活満足度の高さを説明するための多変量解析を行った。また、健康維持・増進の取組 [21]や友人等との交流 [22]がどのように媒介効果を持つのかを検討した。

### 2. 結果

分析の結果からは、（1）市町村レベルの経済社会的条件は、住民の健康状態の自己評価や、生活満足度を低下させる傾向があることが分かった。具体的には、経済社会的条件が中レベルまたは低レベルの市町村に住んでいる人は、経済社会的条件が高い市町村に住んでいる人と比較して、住民の健康状態の自己評価や、生活満足度を悪化させた。しかしながら、この影響の大きさは、住民の健康状態の自己評価と個人レベルの経済社会的条件との関連性の5分の1から4分の1であり、地域レベルの経済社会的条件が住民の健康状態の自己評価や、生活満足度に与える影響は、一般的に個人レベルの経済社会的条件と比較して限定的であることを示していた。

（2）健康行動と友人等との交流の媒介効果については、健康効果については確認できたものの、友人等との交流では確認できなかった。すなわち、友人等との交流は

---

[19] この論文作成の背景のひとつに、地域レベルの経済社会的条件が死亡率、罹患率、またはその他の特定の健康アウトカムに悪影響を及ぼすことは、多くの研究から知られてきたが、地域レベルの経済社会的条件が健康状態の自己評価や生活満足度にどのような影響を与えるのかという研究は、これまでほとんど行われていないことがあげられる。

[20]失業者率、大卒以上の教育を受けた人の割合、一人当たりの課税所得、持家率、一人当たりの床面積が最低水準以下の世帯の割合、一人親世帯の割合、高齢単身世帯の割合

[21] 本調査の回答を活用：健康のために以下のことを普段から行っているか。1)バランスのとれた食事、2)運動、3)十分な睡眠、4)喫煙を控える、5)過度の飲酒を控える、6)ストレスの蓄積を避ける、7)定期検診を受ける、8)特に何もしていない、9)その他。健康行動の連続変数は、1～7 の中から選択した項目の数と、9 の中から選択した項目の数を足し合わせて構成

[22] 本調査の回答を活用：友人や他人との交流の頻度。ほぼ毎日、週に 3～4 回、週に 1 回、月に 2～3 回、年に 1 回、年に 1 回、交流する人がいない、それぞれ 7、7/2、1、2.5/4、1/4、1/4、1/16、1/48、0 を割り当てて、交流の連続変数を構築

地域レベルの経済社会的条件の影響をあまり受けていないのに対し、健康維持・増進の取組は地域レベルの経済社会的条件の影響を受けている。すなわち、地域レベルの経済社会的条件が低いことは、健康的な行動をとることを阻害していることが明らかとなった。経済社会的条件の低い市町村の住民は、健康的でない行動を身近な場で目にしたり、その影響を受けたりする機会が多いのではないかと考えられる。

## 3. 考察

健康行動の媒介効果については、2つの要因に注意する必要がある。第一に、地域レベルの経済社会的条件が低い場合にのみ媒介効果が働くことである。この結果は、近隣住民の健康的ではない行動が個人の行動に影響を与えるほどになるには、地域レベルの経済社会的条件が十分に低くなければならないことを示唆している。第二に、健康行動によって媒介される健康状態の自己評価および生活満足度への比例影響は 17.6%から 33.1%の範囲であり、健康行動は無視できないとはいえ、地域レベルの経済社会的条件の影響の支配的な媒介要因ではないことを意味している。健康行動と友人等との交流以外にも重要な媒介要因が存在しうると考えるのが妥当である。[23] それでも、本研究の結果は、健康的なライフスタイルを促進するための政策措置が、地域レベルの経済社会的条件の悪影響を緩和するのに役立つ可能性を示唆している。

## 4. 結論

本研究では、地域レベルの経済社会的条件は個人レベルの経済社会的条件とは独立した形で、個人の一般的な健康状態と主観的な満足度をある程度低下させることが示された。また、健康行動が地域レベルの経済社会的条件を媒介していることも観察された。これらの結果より、地域レベルの経済社会的状況を改善し、健康的なライフスタイルを促進するための政策が必要であるといえよう。

---

[23] 実際、近隣への意識や建築環境が、地域レベルの経済社会的条件が健康アウトカムに与える影響を媒介していることが研究で示されている 。

**Table 5.** Estimated association of municipality-level deprivation with self-rated satisfaction and life satisfaction: multilevel

| Dependent variable | | Self-rated heath[b] | | Life satisfaction[c] | |
|---|---|---|---|---|---|
| Municipality-level deprivation | | Coef. | *SE* | Coef. | *SE* |
| *z*-scoring method | | | | | |
| | Moderate | 0.05 * | -0.02 | 0.06 ** | -0.02 |
| | High | 0.05 * | -0.02 | 0.05 * | -0.02 |
| PCA[d] method | | | | | |
| | First and second compone | | | | |
| | Moderate | 0.04 | -0.02 | 0.09 *** | -0.02 |
| | High | 0.05 * | -0.02 | 0.06 ** | -0.02 |
| | First component | | | | |
| | Moderate | 0.01 | -0.02 | 0 | -0.02 |
| | High | 0.06 ** | -0.02 | 0.05 * | -0.02 |
| | Second component | | | | |
| | Moderate | –0.01 | -0.03 | 0.03 | -0.03 |
| | High | –0.01 | -0.02 | 0.02 | -0.03 |

*N* =12,461 (in 366 municipalities)

[a] Controlled for individual-level deprivation and covariates (not reported).

[b] The higher, the poorer. Standardized.

[c] The higher, the less satisfied. Standardized. [d] Principal component analysis.

*** $p$ <0.001, ** $p$ <0.01, * $p$ <0.05

**Table 6.** Mediating effects of health behavior and interactions with others on the impact of municipality-level deprivation (derived by the *z*-scoring method) on self-rated health[a]

| | Coef. | SE |
|---|---|---|
| Health behavior[b] | | |
| Moderate de\| $\beta_{11}$ | −0.04 | -0.02 |
| High depriva $\beta_{12}$ | −0.05 * | -0.02 |
| Interactions with others[b] | | |
| Moderate de\| $\beta_{21}$ | −0.03 | -0.02 |
| High depriva $\beta_{22}$ | −0.03 | -0.02 |
| Self-rated health[b, c] | | |
| Moderate de\| $\beta_{31}$ | 0.04 * | -0.02 |
| High depriva $\beta_{32}$ | 0.04 | -0.02 |
| Health behav $\gamma_1$ | −0.21 *** | -0.01 |
| Interactions $\gamma_2$ | −0.09 *** | -0.01 |
| Mediating effect on the impact of high deprivation on self-rated health | | |
| Health behav $\beta_{12}\gamma_1$ | 0.01 * | 0 |
| % proportion: $\beta_{12}\gamma_1/(\beta_{32}$ + | 21.1 * | -9.5 |
| *N* =12,461 (in 366 municipalities) | | |

[a] Controlled for individual-level covariates (not reported).

[b] Standardized.

[c] The higher, the poorer.

*** $p$ <0.001, ** $p$ <0.01, * $p$ <0.05

**Table 7.** Mediating effect of health behavior on the impact of high deprivation at the municipality level[a]

| | Self-rated health[b, c] | | Life satisfaction[b, d] | |
|---|---|---|---|---|
| | | (SE) | | (SE) |
| *z*-scoring me Effect | 0.01 * | 0 | 0.01 * | -0.01 |
| % proportion | 21.1 * | -9.5 | 24.8 * | -12.5 |
| PCA[e] method | | | | |
| First and sec Effect | 0.01 * | 0 | 0.01 * | -0.01 |
| % proportion | 20.3 * | -10.1 | 17.6 * | -8.7 |
| First compon Effect | 0.02 * | -0.01 | 0.02 *** | -0.01 |
| % proportion | 25.2 * | -10 | 33.1 * | -13.8 |
| *N* =12,461 (in 366 municipa | | | | |

[a] Controlled for individual-level covariates (not reported).

[b] Standardized.

[c] The higher, the poorer.

[d] The higher, the less satisfied

[e] Principal component analysis

*** $p$ <0.001, ** $p$ <0.01, * $p$ <0.05

## Ⅲ　人々を取り巻く様々な環境や属性と生活満足度との関係（満足度が特に低い者に焦点を当てて）

### 1．生活全体の満足度が低い人がおかれている状況

生活全体の満足度が低い人は、どのような状況（属性、環境等）下に多くいるのであろうか。ここでは、本調査の多様なデータを組み合わせて、回答者の属性を細分化し、生活満足度を0点～2点と回答している人の多い層をあぶり出していく[24]。これにより、特に生活全体の満足度が低い人々の満足度を上昇させるために何が必要なのか考える一助とする。

#### （1）本調査による満足度の低い者の状況（属性・環境等）

図表3－3－1は、満足度0点～2点と回答した回答者が各性・年齢別、地域別のグループに何％いるのかを整理したものである。性別、年層別、地域別にみると、全体（9.5％）に比べて0点～2点が多い層として、男性 45-59 歳（14.5％）等がみられるものの、全体との差は数％の範囲内に収まっている。基本属性だけで極端に大きな差が生じることはなく、仮に満足度が低い人が多い層が確認できた場合、その層では、属性要因だけではなく、満足度を押し下げる様々な生活条件が重なっているものと想定される。そこで、以下では、各分野において、社会問題として広く認識されている状況を想定し、それらも可能な限り分析軸の要素に加え、各層において満足度が0点～2点の割合を見ていくこととする。

---

[24] 詳細な属性にグルーピングするに当たって重視したのは、社会問題との対応である。失われた世代、引きこもり、ワーキングプア、シングルマザー、あるいは長時間労働、睡眠負債、さらには地方の疲弊等と呼ばれる層や状況は社会的に広く認識されており、特定の状況におかれた層が社会の中で不利益を被っている。そこで、例えば「シングルマザー」の条件と対応するように、アンケートの回答データから属性要素を抽出し、それらを組合せることで分析用のカテゴリーを作成し、それらのカテゴリー層の満足度の状況を把握した。

## 図表３－３－１

| 分野 | 社会問題 | 分析軸/条件 | カテゴリー区分 | n | 総合主観満足度0-2点の割合 |
|---|---|---|---|---|---|
| 基本属性 | ジェンダー | 性別 | 男性 | 7713 | 10.5% |
| | | | 女性 | 7861 | 8.6% |
| | 世代間 | 性別・年層別 | 男15-24 歳 | 1342 | 9.8% |
| | | | 男25-34 歳 | 1378 | 12.1% |
| | | | 男35-44 歳 | 1480 | 11.8% |
| | | | 男45-59 歳 | 1612 | 14.5% |
| | | | 男60歳以上 | 1901 | 5.5% |
| | | | 女15-24 歳 | 1329 | 6.0% |
| | | | 女25-34 歳 | 1371 | 8.7% |
| | | | 女35-44 歳 | 1471 | 12.0% |
| | | | 女45-59 歳 | 1617 | 10.3% |
| | | | 女60歳以上 | 2073 | 6.4% |
| 地域 | 地域間 | ブロック別（8区分） | 北海道・東北 | 2146 | 11.1% |
| | | | 関東 | 3275 | 9.5% |
| | | | 北陸・甲信越 | 1670 | 9.6% |
| | | | 東海 | 1488 | 9.6% |
| | | | 近畿 | 2167 | 9.4% |
| | | | 中国 | 1416 | 10.0% |
| | | | 四国 | 1055 | 10.0% |
| | | | 九州・沖縄 | 2357 | 7.6% |
| | | 人口規模別 | 人口100万人以上・特別区 | 2470 | 9.3% |
| | | | 50-100万人未満 | 1467 | 9.3% |
| | | | 20-50万人未満 | 4240 | 9.6% |
| | | | 10-20万人未満 | 2680 | 9.7% |
| | | | 5-10万人未満 | 2315 | 9.9% |
| | | | 5 万人未満 | 2402 | 9.2% |

※回答者全体では生活全体の満足度を0点から2点と回答した人の割合は 9.5%となっている。

次に、家族構成、家計、雇用状況、健康状態、教育水準、社会とのつながりなど、詳細にみていくことにする。

## （2）家族構成・家計

家族構成別に満足度を0点～2点と回答した者の割合をみると、単身者でこの割合がやや高くなっている。また、配偶者の有無、性別等で分類すると、男性 45～59 歳、35～44 歳でかつ配偶者がいない者で、満足度が0点～2点の割合が非常に高く、2割を超えている。世帯年収、世帯金融資産残高別にみると、年収、資産とも 100 万円未満の者で満足度が0点～2点の割合が高くなっている。

**図表３－３－２**

| 分野 | 社会問題 | 分析軸/条件 | カテゴリー区分 | n | 総合主観満足度0-2点の割合 |
|---|---|---|---|---|---|
| 世帯 | 家族形成（配偶関係・単身世帯） | 家族構成別 | 単身 | 2521 | 13.3% |
| | | | 夫婦のみ | 3421 | 5.7% |
| | | | 二世代 | 7879 | 9.7% |
| | | | 三世代 | 1218 | 10.6% |
| | | | その他 | 535 | 11.6% |
| | 生涯未婚・中高年・高齢単身世帯 | 配偶者有無別・性別・年層別 | 配偶者がいる | 8969 | 6.4% |
| | | | 配偶者がいない | 6605 | 13.8% |
| | | | 配偶者がいない（男15-24歳） | 1241 | 9.9% |
| | | | 配偶者がいない（男25-34歳） | 680 | 18.1% |
| | | | 配偶者がいない（男35-44歳） | 540 | 20.7% |
| | | | 配偶者がいない（男45-59歳） | 522 | 25.9% |
| | | | 配偶者がいない（男60歳代以上） | 323 | 12.4% |
| | | | 配偶者がいない（女15-24歳） | 1086 | 6.5% |
| | | | 配偶者がいない（女25-34歳） | 510 | 16.1% |
| | | | 配偶者がいない（女35-44歳） | 523 | 18.7% |
| | | | 配偶者がいない（女45-59歳） | 565 | 13.8% |
| | | | 配偶者がいない（女60歳代以上） | 615 | 7.6% |
| 家計と資産 | 経済（収入） | 世帯年収別 | 100万円未満 | 1064 | 18.9% |
| | | | 100万円以上300万円未満 | 2782 | 14.5% |
| | | | 300万円以上500万円未満 | 4225 | 9.7% |
| | | | 500万円以上700万円未満 | 3310 | 7.4% |
| | | | 700万円以上1,000万円未満 | 2616 | 5.7% |
| | | | 1,000万円以上2,000万円未満 | 1331 | 4.8% |
| | | | 2,000万円以上3,000万円未満 | 135 | 3.0% |
| | | | 3,000万円以上5,000万円未満 | 49 | 6.1% |
| | | | 5,000万円以上1億円未満 | 18 | 5.6% |
| | | | 1億円以上 | 44 | 11.4% |
| | | | （再掲）2000万円以上 | 111 | 8.1% |
| | 経済（資産） | 世帯金融資産残高別 | 100万円未満 | 3860 | 16.4% |
| | | | 100万円以上300万円未満 | 2723 | 9.9% |
| | | | 300万円以上500万円未満 | 2195 | 8.3% |
| | | | 500万円以上700万円未満 | 1488 | 7.1% |
| | | | 700万円以上1,000万円未満 | 1413 | 6.7% |
| | | | 1,000万円以上2,000万円未満 | 1649 | 5.8% |
| | | | 2,000万円以上5,000万円未満 | 1459 | 4.7% |
| | | | 5,000万円以上1億円未満 | 536 | 3.7% |
| | | | 1億円以上3億円未満 | 193 | 5.7% |
| | | | 3億円以上 | 58 | 6.9% |
| | | | （再掲）1億円以上 | 251 | 6.0% |

### （3）雇用、ワークライフバランス

雇用形態別に満足度を0点～2点と回答した者の割合をみると、求職者で 25.1%と非常に高くなっている。また、非正規雇用のうちでも男性 15～59 歳の不本意非正規雇用では 24.5%と非常に高くなっている。

ワークライフバランスの視点でみると、仕事時間が 14 時間以上の層（回答数が少ない）、睡眠時間が1日5時間未満の層で満足度が0点～2点の回答者が多かった。

**図表３－３－３**

| 分野 | 社会問題 | 分析軸/条件 | カテゴリー区分 | n | 総合主観満足度0-2点の割合 |
|---|---|---|---|---|---|
| 雇用環境と賃金 | 失業・非正規雇用 | 就業状況別 | 正規雇用 | 6092 | 8.4% |
| | | | 非正規雇用（パート、アルバイト、契約・派遣社員、有期労働者など） | 3137 | 11.8% |
| | | | 会社などの役員 | 303 | 9.2% |
| | | | 自営業（手伝いを含む） | 1124 | 11.2% |
| | | | 内職・在宅ワーク | 301 | 11.0% |
| | | | 学生であり、アルバイトをしている | 836 | 4.5% |
| | | | 学生であり、アルバイトはしていない | 424 | 7.5% |
| | | | 学生ではなく、就業していない（求職中） | 486 | 25.1% |
| | | | 学生ではなく、就業していない（求職していない） | 2871 | 7.8% |
| | 非正規雇用（望まない非正規/就職氷河期世代） | 非正規雇用（属性別） | 非正規雇用（男性15-59歳：望まない非正規みなし）【2019調査】 | 306 | 24.5% |
| | | | 非正規雇用（望まない非正規）【2020調査】 | 266 | 18.4% |
| | | | 非正規雇用（15-34歳：若年非正規） | 810 | 12.6% |
| | | | 非正規雇用（35-44歳：就職氷河期） | 664 | 16.0% |
| | | | 非正規雇用（45-59歳：中高年） | 782 | 13.0% |
| | | | 非正規雇用（60歳以上：高齢者） | 881 | 6.9% |
| 仕事と生活（ワークライフバランス） | 長時間労働 | 仕事時間別【2020】 | 仕事時間：1日8時間未満【2020調査】 | 267 | 8.6% |
| | | | 仕事時間：1日8-10時間未満【2020調査】 | 1249 | 6.5% |
| | | | 仕事時間：1日10-12時間未満【2020調査】 | 406 | 11.6% |
| | | | 仕事時間：1日12-14時間未満【2020調査】 | 161 | 9.9% |
| | | | 仕事時間：1日14時間以上【2020調査】 | 57 | 19.3% |
| | | | （再掲）仕事時間：1日12時間以上【2020調査】 | 218 | 12.4% |
| | 睡眠負債 | 睡眠時間別【2020】 | 睡眠時間：1日8時間以上【2020調査】 | 769 | 8.3% |
| | | | 睡眠時間：1日7-8時間未満【2020調査】 | 1526 | 6.9% |
| | | | 睡眠時間：1日6-7時間未満【2020調査】 | 1804 | 8.9% |
| | | | 睡眠時間：1日5-6時間未満【2020調査】 | 820 | 11.2% |
| | | | 睡眠時間：1日5時間未満【2020調査】 | 362 | 17.4% |

### （4）健康、教育、社会とのつながり

健康状態は満足度に大きな影響を与える。健康状態が「よくない」と回答している者の 47%、すなわち約半数が満足度を0点～2点と回答している。

教育水準の視点でみると、最終学歴が中学校卒業の者で満足度を0点～2点を回答する割合が高くなっている。

社会とのつながりも、満足度に大きな影響を与えている。困った時に頼りになる人の有無別にみると、頼りになる人がいないと回答している者の3割が満足度を0点～2点と回答している。また、友人等との交流の有無別にみると、満足度が0点～2点の者の割合は、交流なしで 24.4%、その中でも同居家族なしで 32.2%、困った時に頼りになる人がいないで 37.0%、同居家族も頼りになる人もいないで 41.3%となっている。世帯状況も組み合わせた場合、頼りになる人もいなくて交流もないと回答している者のうち、単身世帯の者で 41.3%、低所得世帯の者で 48.5%等が満足度を0点～2点と回答している。

**図表３－３－４**

| 分野 | 社会問題 | 分析軸/条件 | カテゴリー区分 | n | 総合主観満足度0-2点の割合 |
|---|---|---|---|---|---|
| 健康状態 | 健康状態 | 健康状態別 | よい | 2126 | 4.0% |
| | | | まあよい | 4824 | 4.4% |
| | | | ふつう | 5302 | 8.3% |
| | | | あまりよくない | 2764 | 17.5% |
| | | | よくない | 558 | 47.0% |
| 教育水準・教育環境 | 学歴 | 最終学歴別（既卒者） | 中学校卒業 | 401 | 19.7% |
| | | | 高等学校卒業 | 4372 | 12.2% |
| | | | 専門学校卒業 | 1819 | 9.7% |
| | | | 高専、短大卒業 | 1751 | 8.3% |
| | | | 大学卒業 | 5341 | 8.2% |
| | | | 大学院修了 | 630 | 6.8% |
| 社会とのつながり | 社会とのつながり | 困ったときに頼りになる人（社会的支援）の有無別 | 困ったときに頼りになる人がいる | 14096 | 7.4% |
| | | | 困ったときに頼りになる人がいない | 1478 | 29.6% |
| | | | 頼りになる人がいない（同居家族あり） | 1070 | 28.9% |
| | | | 頼りになる人がいない（同居家族なし） | 408 | 31.6% |
| | | 交流の有無別 | 交流あり | 13791 | 7.6% |
| | | | 交流なし | 1783 | 24.4% |
| | | | 交流なし（同居家族なし） | 338 | 32.2% |
| | | | 交流なし（困ったときに頼りになる人なし） | 659 | 37.0% |
| | | | 交流なし（同居家族なし、かつ困ったときに頼りになる人なし） | 189 | 41.3% |
| | | 社会的孤立（世帯状況別） | 単身世帯で、頼りになる人がなく、交流もなし | 189 | 41.3% |
| | | | 一人親世帯（18歳未満がいる一人親世帯）で、頼りになる人がなく、交流もなし | 10 | 30.0% |
| | | | 低所得世帯で、頼りになる人がなく、交流もなし | 198 | 48.5% |
| | | | 高齢単身世帯（60歳以上の単身）で、頼りになる人がなく、交流もなし | 36 | 41.7% |
| | | | 退職者（男性60歳以上の無職）で、頼りになる人がなく、交流もなし | 24 | 45.8% |

### (5)子育て、介護、生活の楽しさ・面白さ

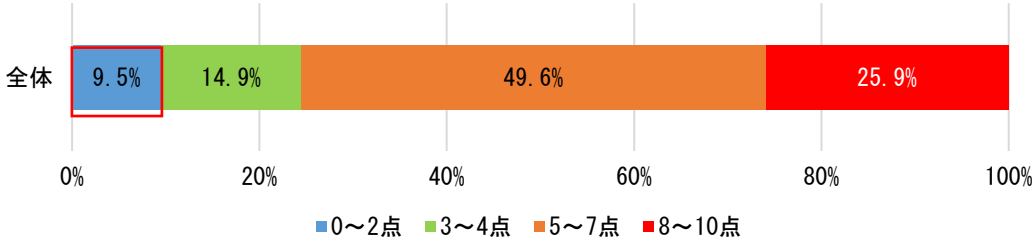
子育て世帯のなかで、満足度が0点～2点の割合が高いのは、18 歳未満の子供がいるシングルマザーである。そのなかでも非正規雇用者でこの回答の割合(回答者少)が高くなっている。また、介護についてみると、自分が中心となって介護している者の 15.9%が満足度を0点～2点と回答している。

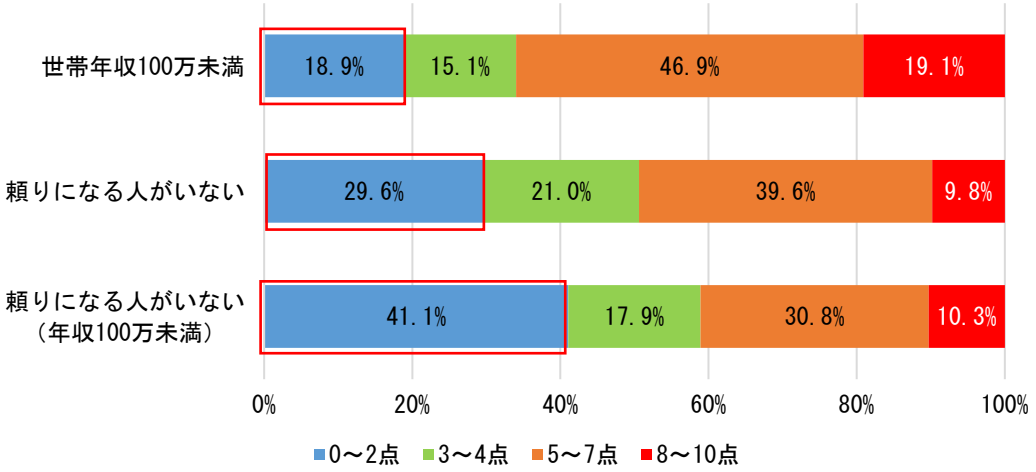
生活の楽しさ・面白さについてみると、趣味・生きがいがない者の 21.6%が満足度を0点～2点と回答している。特に趣味・生きがいがないうえ、友人等との交流がない者では 33.3%が、その中でも単身の高齢者では 46.2%(回答者少)が、満足度を0点～2点と回答している。満足度を押し下げる要因が複合的に重なっている層で、満足度が低い者の割合が高いことが分かる。

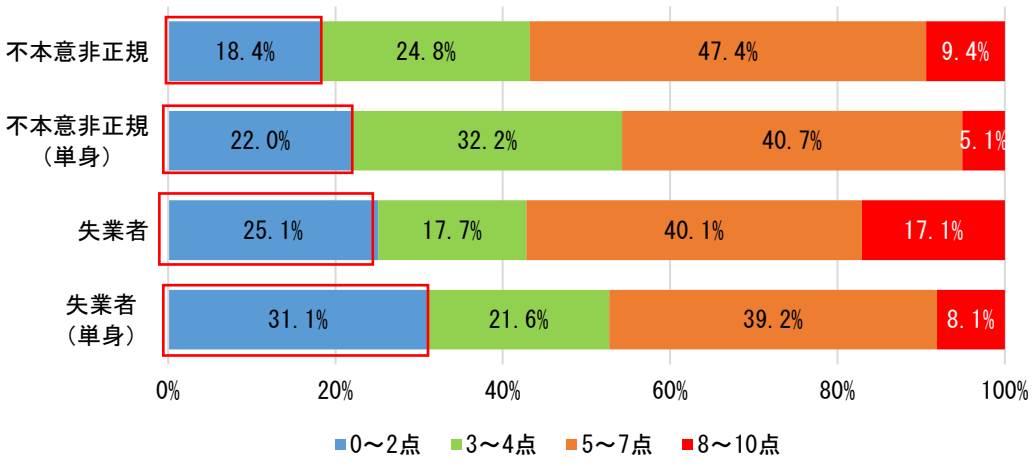
**図表３－３－５**

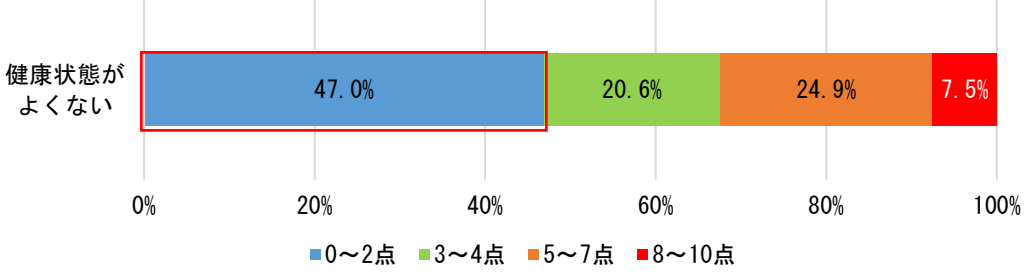
| 分野 | 社会問題 | 分析軸/条件 | カテゴリー区分 | n | 総合主観満足度0-2点の割合 |
|---|---|---|---|---|---|
| 子育てのしやすさ・ | 女性の育児負担 | 18歳未満がいる(性別) | 男(18歳未満がいる) | 2019 | 6.7% |
| | | | 女(18歳未満がいる) | 2262 | 7.1% |
| | | 未就学児がいる(性別) | 男(未就学児がいる) | 1057 | 5.8% |
| | | | 女(未就学児がいる) | 1285 | 4.8% |
| | | 未就学児がいる孤育て(性別) | 子育てをお願いできる人がいない | 527 | 9.3% |
| | | | 男(未就学児がいて、子育てをお願いできる人がいない) | 231 | 10.0% |
| | | | 女(未就学児がいて、子育てをお願いできる人がいない) | 296 | 8.8% |
| | | 待機児童がいる(性別) | 男(待機児童がいる) | 274 | 6.9% |
| | | | 女(待機児童がいる) | 435 | 4.4% |
| | 母子世帯・シングルマザー | 18未満がいる | 18歳未満がいるシングルマザー | 199 | 14.6% |
| | | | 18歳未満がいるシングルマザーで非正規雇用 | 75 | 16.0% |
| | | 未就学児がいる | 未就学児がいるシングルマザー | 44 | 4.5% |
| | | | 未就学児がいるシングルマザーで非正規雇用 | 12 | 8.3% |
| 介護のしやすさ・されやすさ | 介護負担 | 要介護者有無別 | 要介護者がいる | 2787 | 10.1% |
| | | | 要介護者がいる(男) | 1258 | 10.7% |
| | | | 要介護者がいる(女) | 1529 | 9.7% |
| | | | 施設入所待機者がいる | 212 | 11.8% |
| | | | 施設入所待機者がいる(男) | 105 | 11.4% |
| | | | 施設入所待機者がいる(女) | 107 | 12.1% |
| | 介護の複合課題 | 全体 | 自分が中心となって介護している | 358 | 15.9% |
| | | 女性の介護負担 | 自分が中心となって介護している(女) | 232 | 15.9% |
| | | ヤングケアラー | 自分が中心となって介護している(18歳未満) | 3 | 0.0% |
| | | 老々介護 | 自分が中心となって介護している(65歳以上) | 164 | 12.8% |
| | | ダブルケア | 自分が中心となって介護し、かつ子育ても実施(子育時間>0) | 53 | 3.8% |
| | | 介護離職リスク | 自分が中心となって介護し、かつ被雇用者(正規雇用・非正規雇用) | 186 | 15.6% |
| | | 介護離職 | 自分か家族が介護離職した【2020調査】 | 97 | 14.4% |
| 生活の楽しさ・面白さ | 趣味・生きがい | 趣味・生きがいの有無別 | 趣味・生きがいがある | 12088 | 6.0% |
| | | | 趣味・生きがいがない | 3486 | 21.6% |
| | | | (内)趣味・生きがいがなく、交流もない人 | 850 | 33.3% |
| | | 高齢者の状況別 | (内)趣味・生きがいがなく、交流もない高齢者(60歳以上) | 188 | 27.1% |
| | | | (内)趣味・生きがいがなく、交流もない単身の高齢者(60歳以上) | 39 | 46.2% |
| | | | (内)趣味・生きがいがない定年退職者(男性60歳以上で無職みなし) | 118 | 18.6% |

## 図表３－３－６


全体
9.5%
14.9%
49.6%
25.9%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
0～2点
3～4点
5～7点
8～10点


世帯年収100万未満
18.9%
15.1%
46.9%
19.1%
頼りになる人がいない
29.6%
21.0%
39.6%
9.8%
頼りになる人がいない
（年収100万未満）
41.1%
17.9%
30.8%
10.3%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
0～2点
3～4点
5～7点
8～10点


不本意非正規
18.4%
24.8%
47.4%
9.4%
不本意非正規
（単身）
22.0%
32.2%
40.7%
5.1%
失業者
25.1%
17.7%
40.1%
17.1%
失業者
（単身）
31.1%
21.6%
39.2%
8.1%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
0～2点
3～4点
5～7点
8～10点


健康状態が
よくない
47.0%
20.6%
24.9%
7.5%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
0～2点
3～4点
5～7点
8～10点

## (6)生活全体の満足度が低い人の属性の分布

(1)～(5)の結果のうち主要な項目を、逆の視点から見て回答者全体と0点～2点の人の属性の分布の違いを確認する。結果は下表のとおりとなっている。

### 図表３－３－７

性別

| | n | 男 | 女 |
|---|---|---|---|
| 全体 | 15574 | 49.5% | 50.5% |
| 0-2点 | 1484 | 54.6% | 45.4% |

年齢

| | n | 15-24歳 | 25-34歳 | 35-44歳 | 45-59歳 | 60-89歳 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 15574 | 17.2% | 17.7% | 18.9% | 20.7% | 25.5% |
| 0-2点 | 1484 | 14.3% | 19.3% | 23.6% | 26.9% | 16.0% |

世帯

| | n | 単身 | 二人以上 |
|---|---|---|---|
| 全体 | 15574 | 16.2% | 83.8% |
| 0-2点 | 1484 | 22.6% | 77.4% |

世帯年収

| | n | 100万円未満 | 100万円以上300万円未満 | 300万円以上500万円未満 | 500万円以上700万円未満 | 700万円以上1,000万円未満 | 1,000万円以上2,000万円未満 | 2,000万円以上3,000万円未満 | 3,000万円以上5,000万円未満 | 5,000万円以上1億円未満 | 1億円以上 | 300万円未満(計) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 15574 | 6.8% | 17.9% | 27.1% | 21.3% | 16.8% | 8.5% | 0.9% | 0.3% | 0.1% | 0.3% | 24.7% |
| 0-2点 | 1484 | 13.5% | 27.2% | 27.5% | 16.6% | 10.0% | 4.3% | 0.3% | 0.2% | 0.1% | 0.3% | 40.8% |

世帯金融資産

| | n | 100万円未満 | 100万円以上300万円未満 | 300万円以上500万円未満 | 500万円以上700万円未満 | 700万円以上1,000万円未満 | 1,000万円以上2,000万円未満 | 2,000万円以上5,000万円未満 | 5,000万円以上1億円未満 | 1億円以上3億円未満 | 3億円以上 | 300万円未満(計) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 15574 | 24.8% | 17.5% | 14.1% | 9.6% | 9.1% | 10.6% | 9.4% | 3.4% | 1.2% | 0.4% | 42.3% |
| 0-2点 | 1484 | 42.6% | 18.1% | 12.3% | 7.1% | 6.4% | 6.5% | 4.6% | 1.3% | 0.7% | 0.3% | 60.7% |

職業

| | n | 正規雇用 | 非正規雇用 | 会社などの役員 | 自営業 | 内職・在宅ワーク | 学生であり、アルバイトをしている | 学生であり、アルバイトはしていない | 学生ではなく、就業していない(求職中) | 学生ではなく、就業していない(求職していない) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 15574 | 39.1% | 20.1% | 1.9% | 7.2% | 1.9% | 5.4% | 2.7% | 3.1% | 18.4% |
| 0-2点 | 1484 | 34.4% | 25.0% | 1.9% | 8.5% | 2.2% | 2.6% | 2.2% | 8.2% | 15.1% |

健康状態

| | n | よい | まあよい | ふつう | あまりよくない | よくない | あまりよくない+よくない(計) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 15574 | 13.7% | 31.0% | 34.0% | 17.7% | 3.6% | 21.3% |
| 0-2点 | 1484 | 5.8% | 14.4% | 29.6% | 32.5% | 17.7% | 50.2% |

学歴

| | | n | 中学校卒業 | 高等学校卒業 | 専門学校卒業 | 高専、短大卒業 | 大学卒業 | 大学院修了 | 中等教育卒(計) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 既卒者 | 全体 | 14314 | 2.8% | 30.5% | 12.7% | 12.2% | 37.3% | 4.4% | 46.1% |
| | 0-2点 | 1414 | 5.6% | 37.8% | 12.5% | 10.3% | 30.8% | 3.0% | 55.9% |

困ったときに頼りになる人

| | | n | いる | いない |
|---|---|---|---|---|
| 全体 | 全体 | 15574 | 90.5% | 9.5% |
| | 0-2点 | 1484 | 70.5% | 29.5% |
| 単身 | 全体 | 2521 | 83.8% | 16.2% |
| | 0-2点 | 336 | 61.6% | 38.4% |

**（結果の概要）**

生活満足度が0点～2点の回答者を様々な属性で分類した結果、特に回答割合が高かった（40％以上の）グループは、①健康状態がよくない、②困った時に頼りになる人がなく、友人等との交流もない（同居家族なし、単身世帯、貧困世帯）、③趣味・生きがいがなく、友人等との交流もない単身高齢者（回答者少）、であることが浮き彫りとなった。また、満足度を押し下げる要因が複合的に重なっている層で、満足度が低い者の割合が高いことが分かった。

## 2．満足度が特に低い要因

前項では、生活全体の満足度が0点～1点の人に焦点をあてて、満足度が特に低い人の実態を追ってきた。ここでは、13 分野の分野満足度と基本属性を用いて重回帰分析を行い、生活全体の満足度に対して有意に効いている分野等を把握する。

分析の結果、13 分野のうち、次の8分野が有意となった。

①家計と資産、②雇用環境と賃金、③住宅、④仕事と生活、⑤健康状態、
⑥教育水準・教育環境、⑦社会とのつながり、⑧楽しさ・面白さ

この8分野について、生活全体の満足度が0点～1点の人の満足度と回答者全体の満足度とを比べると、その差は2点～3点台となっていた。他方、有意とならなかった5分野では、その差が2点台を下回っていた。生活全体の満足度が0点～2点の層では、生活全体の満足度に有意に効く分野の満足度が全体と比べて低い傾向が確認できた。また、属性についても同様に、0点～2点の層と回答者全体との差をみると、0点～2点の層では、女性、年齢、配偶者、18 歳未満の子どものいずれについても回答者全体を下回っていた。これらの属性は、いずれも生活全体の満足度と正の方向の関係性にある。よって、0点～2点の層では属性の側面からみても満足度が低くなりやすい一面を持っていることが確認できた。さらに、この重回帰分析のモデルを使って計算した生活全体の満足度の理論値と、アンケート結果から得られた生活全体の満足度を比べてみると、0点から2点の層では理論値に対して、アンケート結果が低く出ていた。残差も低くなったことから、モデルで説明できていない個人的要因等においても、満足度を低める方向に働いていることが把握できた。

## 図表３－３－８　重回帰分析の結果

| R | R2 乗 | 調整済み R2 乗 | 推定値の標準誤差 |
|---|---|---|---|
| .796[a] | 0.633 | 0.633 | 1.409 |

| | 平方和 | 自由度 | 平均平方 | F 値 | 有意確率 |
|---|---|---|---|---|---|
| 回帰 | 53392.33 | 13 | 4107.102 | 2068.342 | .000[b] |
| 残差 | 30897.47 | 15560 | 1.986 | | |
| 合計 | 84289.80 | 15573 | | | |

| | 非標準化係数 | 標準誤差 | 標準化係数 | t 値 | 有意確率 |
|---|---|---|---|---|---|
| (定数) | 0.949 | 0.104 | | 9.151 | 0.000 |
| 1.家計と資産 | 0.208 | 0.008 | 0.209 | 25.903 | 0.000 |
| 2.雇用環境と賃金 | 0.039 | 0.008 | 0.038 | 4.697 | 0.000 |
| 3.住宅 | 0.056 | 0.007 | 0.054 | 7.653 | 0.000 |
| 4.仕事と生活 | 0.124 | 0.009 | 0.116 | 14.062 | 0.000 |
| 5.健康状態 | 0.097 | 0.007 | 0.092 | 13.363 | 0.000 |
| 6.教育水準・教育環境 | 0.043 | 0.008 | 0.038 | 5.240 | 0.000 |
| 7.社会とのつながり | 0.029 | 0.008 | 0.026 | 3.582 | 0.000 |
| 13.生活の楽しさ・面白さ | 0.368 | 0.009 | 0.341 | 42.714 | 0.000 |
| 女性 | 0.142 | 0.023 | 0.031 | 6.252 | 0.000 |
| 年齢 | -0.031 | 0.005 | -0.217 | -6.712 | 0.000 |
| 年齢2乗 | 0.000 | 0.000 | 0.213 | 6.574 | 0.000 |
| 配偶者 | 0.403 | 0.029 | 0.086 | 13.995 | 0.000 |
| 18歳未満の子ども | 0.111 | 0.031 | 0.021 | 3.594 | 0.000 |

## 図表３－３－９　満足度等の差

| | | 0-2 点の人 | 回答者全体 | 回答者全体との差 |
|---|---|---|---|---|
| 分野 | 1.家計と資産 | 1.55 | 4.70 | -3.15 |
| | 2.雇用環境と賃金 | 1.83 | 4.66 | -2.83 |
| | 3.住宅 | 2.92 | 5.58 | -2.65 |
| | 4.仕事と生活 | 2.36 | 5.26 | -2.90 |
| | 5.健康状態 | 2.95 | 5.56 | -2.61 |
| | 6.教育 | 3.12 | 5.56 | -2.44 |
| | 7.社会とのつながり | 2.91 | 5.39 | -2.48 |
| | 8.政治・行政・裁判所 | 2.43 | 4.26 | -1.83 |
| | 9.自然環境 | 3.50 | 5.43 | -1.93 |
| | 10.身の周りの安全 | 3.69 | 5.67 | -1.98 |
| | 11.子育て | 3.32 | 5.20 | -1.89 |
| | 12.介護 | 2.70 | 4.54 | -1.84 |
| | 13.楽しさ・面白さ | 2.44 | 5.66 | -3.21 |
| 属性 | 女性 D | 0.45 | 0.50 | -0.05 |
| | 年齢 | 42.42 | 44.05 | -1.63 |
| | 年齢 2 乗 | 2,001 | 2,210 | -208.46 |
| | 配偶者 D | 0.39 | 0.58 | -0.19 |
| | 18 歳未満の子ども D | 0.20 | 0.27 | -0.08 |

■:有意となった分野

**図表３－３－10　残差の集計結果**

| 生活全体の満足度 | アンケート集計 | 理論値 | 残差 |
|---|---|---|---|
| 0 点 | 0.00 | 2.00 | −2.00 |
| 1 点 | 1.00 | 2.92 | −1.92 |
| 2 点 | 2.00 | 3.46 | −1.46 |
| 3 点 | 3.00 | 4.12 | −1.12 |
| 4 点 | 4.00 | 4.72 | −0.72 |
| 5 点 | 5.00 | 5.24 | −0.24 |
| 6 点 | 6.00 | 5.84 | 0.16 |
| 7 点 | 7.00 | 6.54 | 0.46 |
| 8 点 | 8.00 | 7.25 | 0.75 |
| 9 点 | 9.00 | 7.95 | 1.05 |
| 10 点 | 10.00 | 8.35 | 1.65 |
| 0～2 点 | 1.05 | 2.80 | 1.75 |
| 全体 | 5.80 | 5.80 | 0.00 |

**（結果の概要）**

生活満足度が0点～2点の回答者を様々な属性で分類した結果、特に回答割合が高かった（40％以上の）グループは、①健康状態がよくない、②困った時に頼りになる人がなく、友人等との交流もない（同居家族なし、単身世帯、貧困世帯）、③趣味・生きがいがなく、友人等との交流もない単身高齢者（回答者少）、であることが浮き彫りとなった。また、満足度を押し下げる要因が複合的に重なっている層で、満足度が低い者の割合が高いことが分かった。

また、要因を分析したところ、生活全体の満足度に対して有意に効く全分野で特に満足度が低い傾向があったほか、個人や世帯の基本的な属性においても、満足度の低い属性がそろっている傾向があった。さらに残差もマイナス側に偏っており、要因分析で把握できていない残りの部分でも満足度を低める要因が働いている状況が確認された。

## Ⅳ　暮らしの将来的な持続可能性の見通しと満足度の関係性（将来不安の視点から）

2020 年2月に実施した調査では、将来にわたる暮らしの持続可能性の見通しと満足度との関係性について把握するための質問を加えた。具体的には、将来の暮らしへの不安が現在の満足度に影響を及ぼしているのではないか、との想定にたち、現在の分野別満足度に対応させて、将来の見通し（不安の度合い）について、分野ごとに質問した[25]。

### 1．実施概要

将来の見通しと現在の満足度との相関関係を分析した。その際には、分野横断的に相関を把握した。それは、例えば、将来の「住宅」の見通しの評価が、現在の「住宅」の満足度だけではなく、現在の「家計と資産」の満足度とも相関のある可能性が見込まれるからである。また、将来の見通しの評価は、年齢と大きな関係があると見込まれるため、年齢別に、満足度と将来見通しの点数の差の大きさを分析した。

### 2．結果

現在の「家計と資産」の満足度は、将来の「家計と資産」の満足度と強い相関があった。その他の分野においても現在の満足度とその分野の将来見通しとの間に強い相関が確認された。これは図表3-4-1の対角線上で示されるところである。また、現在の「家計と資産」の満足度は、「雇用環境と賃金」「住宅」等全分野の将来見通しと中程度以上の相関がみられた。他の分野の満足度も同様に、多くの分野の将来見通しと概ね中程度以上の相関が確認された。現在の満足度と将来の見通しには分野横断的な関係が確認できた。

相関係数と合わせて、満足度と将来見通しとの差（満足度の点数から将来見通しの点数を引いた差[26]）を分野別に確認すると、「健康状態」「自然環境」「身の回りの安全」で他の分野よりも大きな差が見られた。なお、これらの分野だけではなく、全分野で統計的に有意な差（1％水準）があることが確認された。

年齢別にみると、60-89 歳では、大半の分野で、現在の満足度と将来見通しとの差が、回答者全体の水準を下回っており、現在の満足度と将来見通しが近い水準にある。他方、25-34 歳、35-44 歳では大半の分野で、回答者全体の水準を上回っており、現在の満足度と将来見通しが他の年齢層に比べてやや乖離している傾向がみられる。

---

[25] 本調査は 2019 年1月～2月（約 10000 人）、2020 年2月（約 5000 人）の2回にわたって実施した調査であり、2020 年2月の調査では一部の質問の組み換えを行っている。

[26] 満足度が同じ点数の場合、将来見通し（将来不安の小ささ）が低い（＝将来不安が大きい）と、満足度と将来見通しの差は大きくなる。また、将来見通し（将来不安の小ささ）の点数に対して満足度の点数が低いとマイナスになる。

これらの年齢層では、他の年齢層に比べて将来的な見通しに不安を抱える傾向が強いと見込まれる。なお、25-34 歳では「子育て」、35-44 歳では「健康状態」でこの傾向が顕著である。

また、現在の満足度と将来見通しの差の標準偏差をみると、若い層ほど標準偏差が大きくなっており、ばらつきのある傾向がみられる。若い層ほど、個人差が大きいと見込まれる。

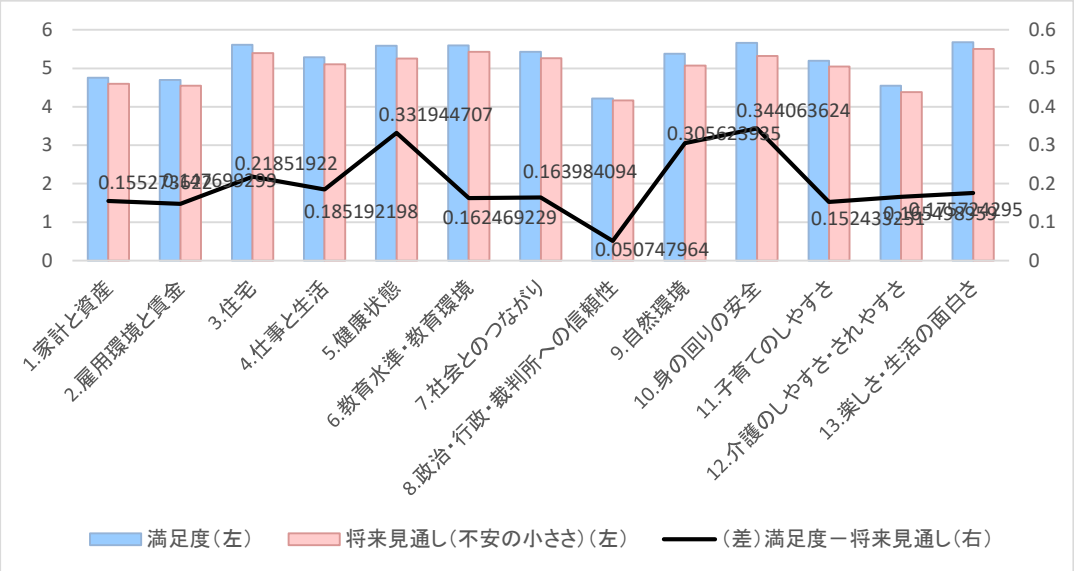
### 図表３－４－１　分野別の満足度と将来見通しとの相関

1．相関分析（相関係数）

| | | 将来見通し（将来不安の小さき） | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 1.家計と資産 | 2.雇用環境と賃金 | 3.住宅 | 4.仕事と生活 | 5.健康状態 | 6.教育水準・教育環境 | 7.社会とのつながり | 8.政治・行政・裁判所への信頼性 | 9.自然環境 | 10.身の回りの安全 | 11.子育てのしやすさ | 12.介護のしやすさ | 13.生活の楽しさ・面白さ |
| 満足度 | 1.家計と資産 | 0.83 | 0.68 | 0.60 | 0.62 | 0.53 | 0.57 | 0.53 | 0.47 | 0.48 | 0.51 | 0.48 | 0.54 | 0.61 |
| | 2.雇用環境と賃金 | 0.67 | 0.80 | 0.53 | 0.67 | 0.51 | 0.54 | 0.51 | 0.48 | 0.47 | 0.49 | 0.50 | 0.52 | 0.59 |
| | 3.住宅 | 0.56 | 0.51 | 0.81 | 0.57 | 0.48 | 0.54 | 0.52 | 0.36 | 0.47 | 0.50 | 0.46 | 0.45 | 0.60 |
| | 4.仕事と生活 | 0.60 | 0.64 | 0.58 | 0.78 | 0.55 | 0.57 | 0.57 | 0.41 | 0.48 | 0.51 | 0.48 | 0.49 | 0.67 |
| | 5.健康状態 | 0.51 | 0.49 | 0.50 | 0.58 | 0.81 | 0.55 | 0.54 | 0.37 | 0.46 | 0.51 | 0.42 | 0.44 | 0.61 |
| | 6.教育水準・教育環境 | 0.56 | 0.55 | 0.55 | 0.59 | 0.54 | 0.80 | 0.60 | 0.41 | 0.48 | 0.52 | 0.48 | 0.47 | 0.60 |
| | 7.社会とのつながり | 0.51 | 0.50 | 0.54 | 0.58 | 0.53 | 0.59 | 0.81 | 0.40 | 0.47 | 0.49 | 0.45 | 0.47 | 0.66 |
| | 8.政治・行政・裁判所への信頼性 | 0.48 | 0.49 | 0.40 | 0.45 | 0.41 | 0.43 | 0.45 | 0.81 | 0.51 | 0.48 | 0.46 | 0.54 | 0.42 |
| | 9.自然環境 | 0.46 | 0.45 | 0.50 | 0.50 | 0.46 | 0.49 | 0.49 | 0.48 | 0.74 | 0.63 | 0.48 | 0.48 | 0.53 |
| | 10.身の回りの安全 | 0.48 | 0.47 | 0.52 | 0.52 | 0.52 | 0.52 | 0.51 | 0.45 | 0.63 | 0.76 | 0.51 | 0.48 | 0.56 |
| | 11.子育てのしやすさ | 0.46 | 0.48 | 0.46 | 0.50 | 0.41 | 0.48 | 0.48 | 0.46 | 0.50 | 0.53 | 0.75 | 0.57 | 0.50 |
| | 12.介護のしやすさ | 0.53 | 0.52 | 0.46 | 0.52 | 0.46 | 0.47 | 0.50 | 0.54 | 0.51 | 0.52 | 0.58 | 0.75 | 0.50 |
| | 13.生活の楽しさ・面白さ | 0.59 | 0.56 | 0.56 | 0.64 | 0.58 | 0.58 | 0.64 | 0.39 | 0.48 | 0.53 | 0.48 | 0.48 | 0.82 |

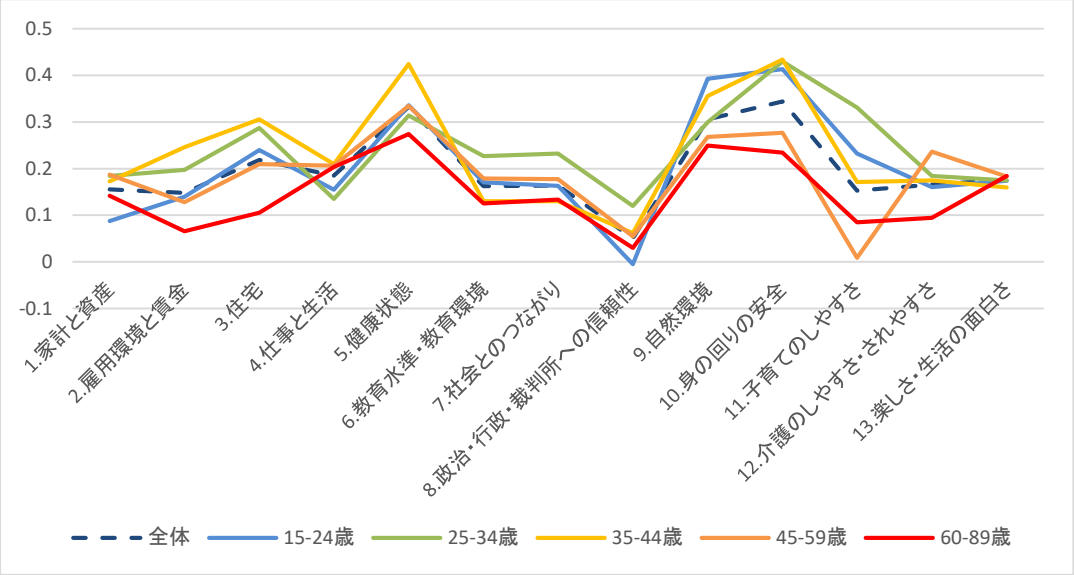
※すべて1％水準で有意。

### 図表３－４－２　分野別の満足度と将来の見通し

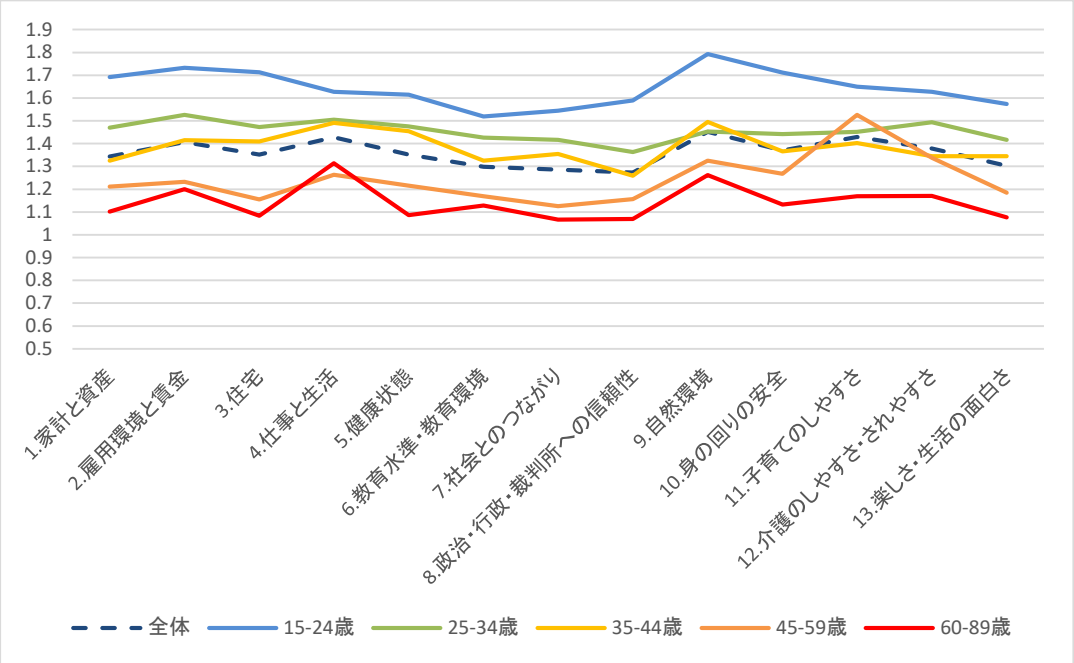



※各分野の満足度と将来不安の差は、すべて1％水準で有意。

## 図表３－４－３　年齢別の分野別満足度と将来見通しの差




## 図表３－４－４　年齢別の分野別満足度と将来見通しの差の標準偏差



## Ⅴ　生活課題・欲求に対処するための資源からみたクラスター

生活上の課題や欲求に対処できれば満足度が高く、対処できない場合は欲求不満となり、その分だけ満足度が低下するのではないか。そして満足度が低い層は、生活課題・欲求に対処するための資源が乏しいのではないか。ここでは、これを仮説として分析を進めることとした。

生活課題・欲求への対処のためには、自分で行動するか、他の人の協力や支援を得るか、あるいは、市場の商品・サービスを利用することが必要となる。これらに対応する資源としては、自分自身（自己資源）、他の人との関係（社会関係的資源）、資金（経済的資源）等が想定される。本調査でこれに対応する資源を抽出すると、自己資源として、健康状態、学歴等、社会関係的資源として家族、友人関係等、経済的資源としては世帯収入、金融資産等が得られた。そこで、これらの各資源の保有状況を生活全般の満足度と対応させてみることで、満足度の低い層の特性を把握することとした。

| 生活課題・欲求対処のための資源 | 資源に相当する変数 | 分析用変数の作成 |
|---|---|---|
| 自己資源 | 健康状態 | 「健康状態」は、「よい」から「よくない」まで降順の５段階のカテゴリーでできている順序尺度の変数である。そこで、「よい」を５点とし、等間隔で各カテゴリー配点し、「よくない」を１点とした。他の変数についても同様に、資源が少ないカテゴリーから資源が豊富なカテゴリーに向かって昇順に等間隔で配点を行った。この配点を分析に使用した。[27] |
| | 学歴 | |
| 社会関係的資源 | 家族人数 | |
| | 困った時に頼りになる人数 | |
| 経済的資源 | 世帯年収 | |
| | 金融資産残高 | |

クラスター分析[28]により、これらの6つの属性により機械的にグルーピング（クラスター化）を行った。その上で、この分析によって得られたクラスターと満足度との関係を整理した。

クラスター分析では6クラスター（C1～C6）にグルーピングした。各クラスターの特徴は以下のとおりである。

---

[27] 階級平均値を用いた変数の作成も行ったが、クラスター化の際に階級平均値の大きなカテゴリーの影響が大きく現れ、必ずしも各クラスターの特性が見えやすくならなかったため、本分析では順序で配点したデータを使用した。

[28] クラスター分析：クラスターとは「グループ」「層」等を意味する。クラスター分析は類似したサンプルを機械的に結合してグルーピング（層化）する方法である。またクラスター分析は、探索型の分析であり、特徴的なグループ（層）を作成するための多様な結合方法がある。本分析では結合方法として WARD 法を用いた。WARD 法は、各グループ内の各サンプルからそのグループの重心までの距離の平方和（群内平方和）の増分が最小になるようにグループ（またはサンプル）を併合していく方法であり、最も一般的に用いられている方法の一つである。

| ｸﾗｽﾀｰ | 特徴 | n |
|---|---|---|
| C1 | 全般的に資源に乏しい層 | 2607 |
| C2 | 全般的に資源が豊富な層 | 3685 |
| C3 | 自己資源（特に学歴）のみ豊富な層 | 2087 |
| C4 | 欠落した資源はなく、バランスよく資源がそろうが、経済的資源（特に金融資産）はあまり豊富でない層 | 3144 |
| C5 | 経済的資源（特に金融資産）は豊富だが、他の資源は乏しい層 | 1551 |
| C6 | 社会関係的資源（家族、頼りになる人数）及び健康度が高い一方、学歴度が低い層 | 2500 |

各クラスターの満足度をみると、以下の傾向がみられた。

① 資源が全般的に豊富な層（C2）の満足度は全般的に高い。

② 金融資産が多くなく、かつ学歴が低くても、社会関係的資源が豊富で、健康度が高い層（C6）は満足度が全般的に高めであり、家計と資産の満足度も高めである。

③ 豊富にそろう何らかの資源が1つでもある層（C1以外）は、分野別満足度で満足度が低い分野があっても、生活全般の満足度は 5.5 以上となっている。

④ すべての資源に乏しい層（C1）は分野別満足度が全般的に低く、生活全般の満足度も5を切っている。

属性別にみると以下の傾向がみられた。

⑤ C2、C4、C6は性別、年齢を問わず、生活全般の満足度が高い。C4は金融資産が豊富ではなく、年収も平均的であり、C6は学歴が低いが総合主観満足度は概ね 5.8 以上となっている。

⑥ 学歴のみが突出して高い C3が、現役世代では年齢が高くなるほど生活全般の満足度が低くなり、60 歳以上で回復している。

⑦ 金融資産が豊富な C2は、中高年以降から特に高くなっている。

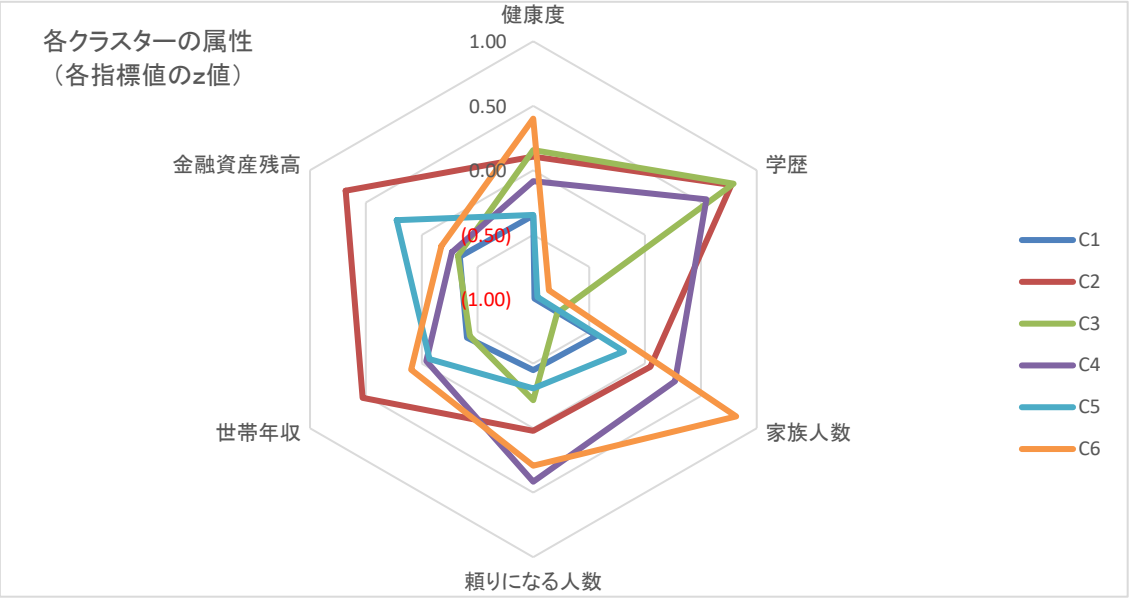
⑧ すべての資源に乏しい C1は現役世代全般で生活全般の満足度が5を下回っている。

生活課題・欲求への対処の資源が全般的に乏しい層は、満足度が低くなっていた。裏返せば、満足度が低い層は、資源が全般的に乏しい層と対応しており、仮説に沿う結果が得られている。

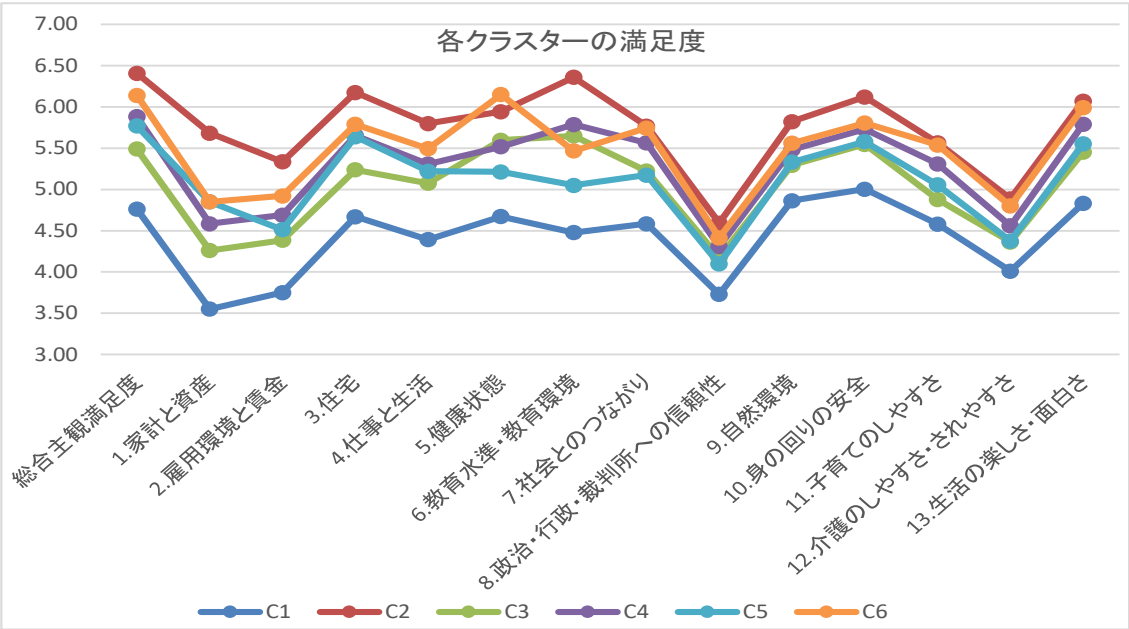
各クラスターの満足度の傾向から、豊富にそろう何らかの資源が1つでもある場合、分野別満足度で満足度が低い分野があっても、生活全般の満足度は低くはならないことが分かった。このことから、生活課題・欲求への対処の資源が全くない状況を生じさせない、解消させることの重要性がうかがえる。

各クラスターにおける属性別の満足度の傾向から、属性によって満足度に重要な資源は異なる様子がうかがえる。資源が全くないという状況を生じさせない、あるいは解消する際には、各属性で、満足度に対して重要となる資源に着目することの重要性がうかがえる。

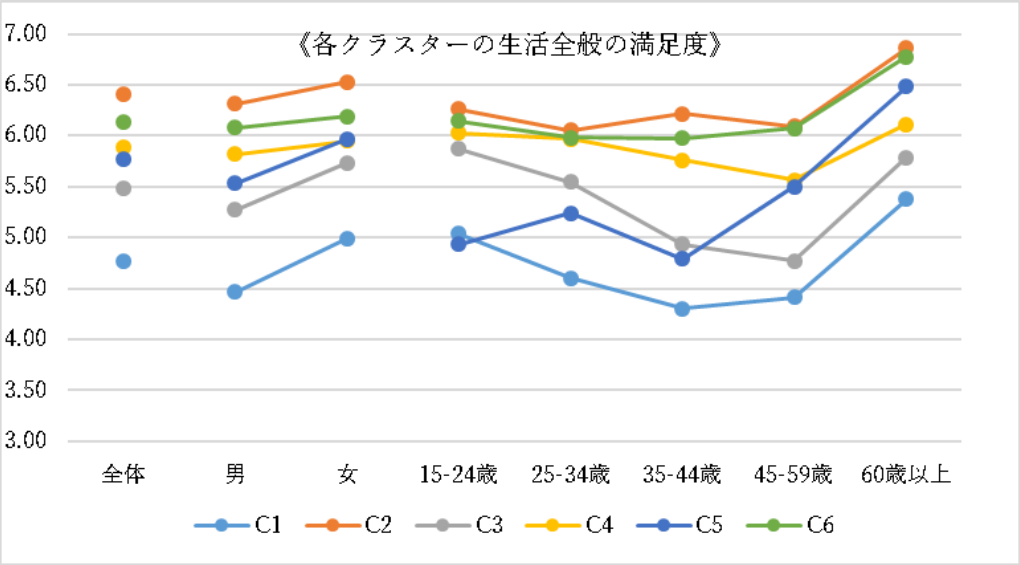
## 図表３－５－１　各クラスターの資源保有状況




## 図表３－５－２　各クラスターの満足度



**図表３－５－３　各クラスターの基本属性別満足度**



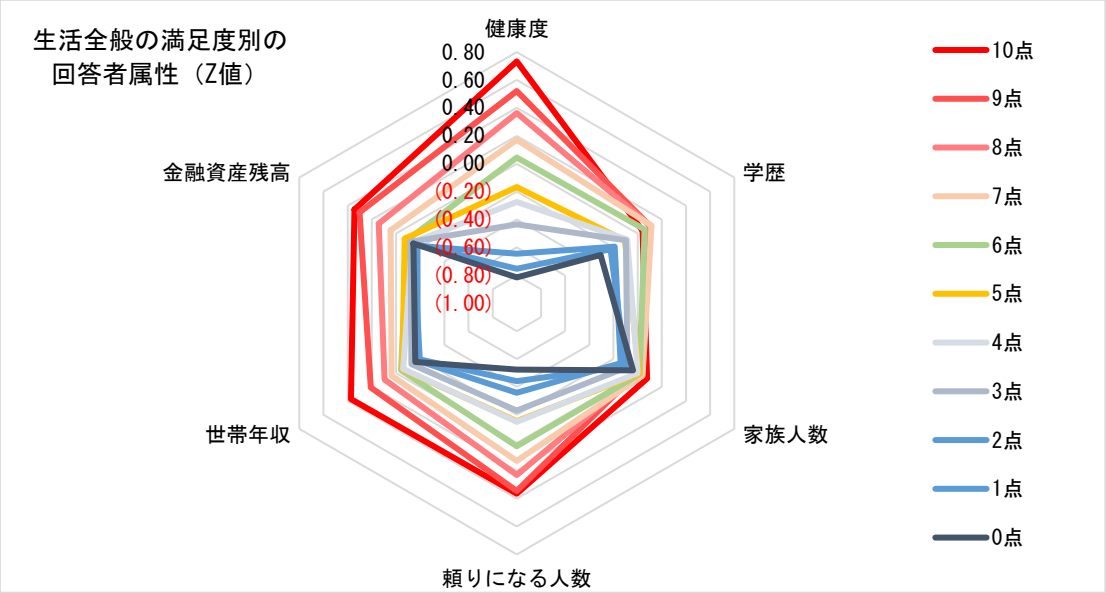

## 2. 生活全般の満足度と資源保有状況の関係

次に、生活全般の満足度別（0点から10点）に生活課題・欲求対処のための資源の状況を確認したところ、0点の人と 10 点の人の差は、6つの資源のうち「健康度」で特に大きく現れていた。また、「頼りになる人数」でも大きな開きがあった。これらの差は、「世帯年収」や「金融資産残高」における差よりも大きく現れていた。このことから、健康や社会関係等の資源の重要性が生活全体の満足度であることが浮かび上がった。

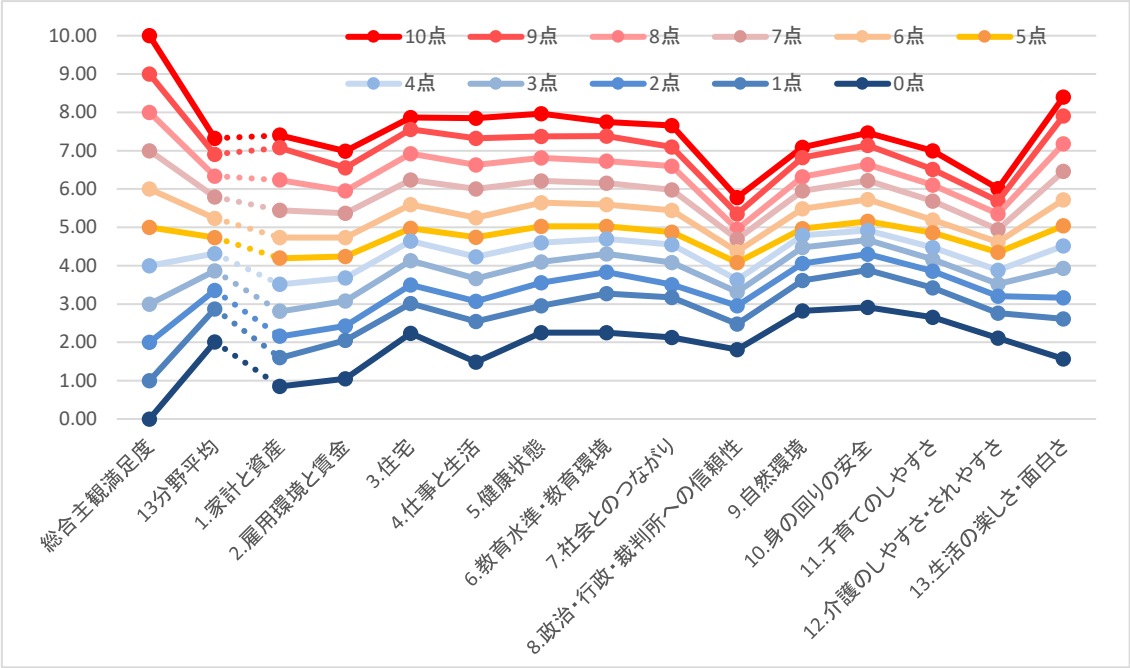
また、0点の人と5点の人とを比べると、「世帯年収」や「金融資産」では資源の豊富さに大きな差はない一方、「健康度」や「頼りになる人数」では大きな差が生じており、満足度が低い方では、「健康度」「頼りになる人数」と生活全般の満足度との関係性が、他の資源と満足度との関係性よりも強い様子がうかがえる。満足度の低い層の満足度の向上に向けては、これらの資源の増進を図る政策の重要性が特に高いことがうかがえる。

なお、上記に関連して、生活全般の満足度と分野別の満足度の状況をみると、生活全般の満足度が5点以上の層では、生活全体の満足度が 13 分野の満足度の平均を上回っていた。このことから 13 分野以外の生活分野の満足度や属性要因等が、生活全体の満足度を押し上げていることがうかがわれる。また、13 分野の満足度が満足傾向を増幅している可能性も指摘される。これに対して、生活全般の満足度が4点以下の層では生活全般の満足度が 13 分野の満足度の平均を下回っていた。13 分野以外の生活分野の満足度あるいは属性要因等が生活全体の満足度を押し下げていることがうかがわれる。13 分野の満足度が不満傾向を増幅している可能性も指摘される。特に生活全般の満足度が0点～2点の層では、生活全般の満足度が 13 分野のいずれの満足度も下回っており、13 分野の直接的な押し下げ要因以外の要因も大きいものと見込まれる。

## 図表３－５－４　生活全体の満足度別の資源保有状況




## 図表３－５－５　生活全体の満足度別と分野別満足度



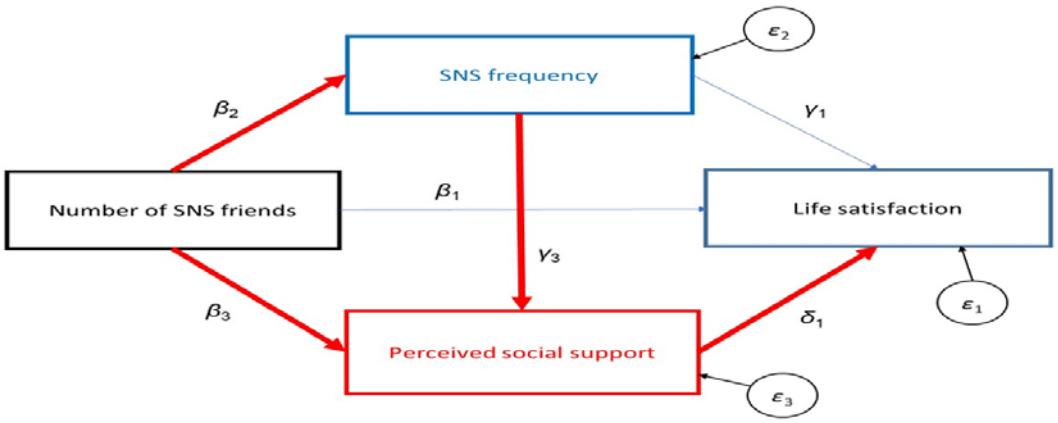
## Ⅵ　SNS の利用と生活満足度

本研究は、本調査を活用して、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の利用と生活満足度との関係を、「知覚されたソーシャル・サポート（社会的支援）（perceived social support、以下 PSS）」の媒介効果に着目して試行的に分析したものである。

PSS とは、必要な時に社会的支援が得られるという可能性を認識していることを意味する。十分なレベルの社会的支援の可能性を認識している人は、必要な時に十分な支援が得られると信じており、それにより満足感が高まる。実際、PSS は、実際に社会的支援を受けた場合と比較して、より一貫して満足感とメンタルヘルスを改善できることが先行研究で示されている。ここでは、PSS について、本調査の質問のひとつ、「困った時に頼りになる人（同居している家族や親族以外）がいるか、いる場合は何人いるか」に対する回答を活用している。

まず、基本的な回帰分析の結果、若年層（15～29 歳）、中年層（30～59 歳）、高齢層（60～86 歳）のすべての年齢層において、SNS 利用が生活満足度と正の関連を持つことが確認された。しかし、SNS の友達の数が 100 人以上の場合には、この関連性は一様ではなくなる。

第二に、構造方程式モデリング分析により、全年齢層において SNS 利用と生活満足度の関連性に、PSS が介在することが明らかになった。具体的には、SNS 利用を 10 人以上の SNS 友達がいると定義した場合、若年層で 35.3%、中年層で 37.0%、老年層で 40.4%が PSS の媒介効果によるものであることが分かった。また、SNS の友達の数に関わらず、SNS 利用と生活満足度との間の正の相関には、PSS の媒介効果が一貫して寄与していた。これらの結果から、SNS 利用は PSS への正の影響を介して生活満足度を高める可能性があることが示唆されている。



## 補論　総合生活満足度と分野別満足度との関係

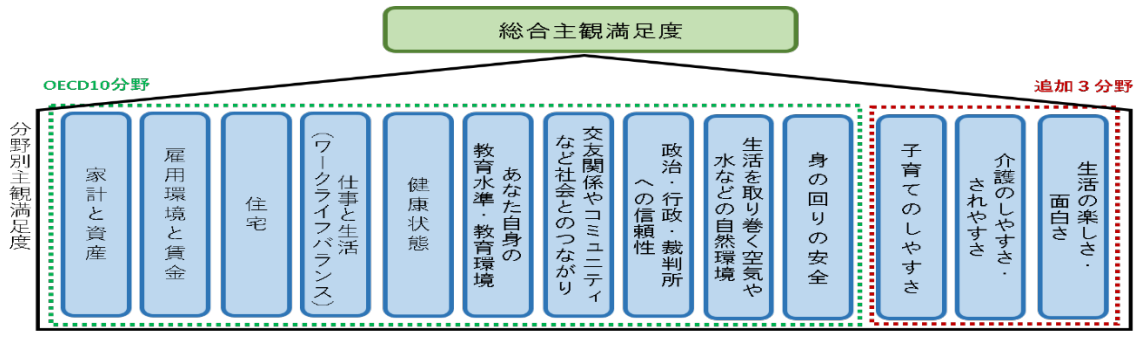
### 1．生活満足度はどのような要因に影響されるのであろうか

人々の生活満足度はどのような要因に影響されるのであろうか。あるいはどのような体系を想定して分析していくのがよいのであろうか。内閣府では、2018 年9月以降、専門家による研究会を開催し、検討を進めてきた。2019 年、2020 年の実施した Web による「満足度・生活の質に関する調査」では、人々の総合的な生活満足度を聞くと同時にそれが、どういった分野の満足度の影響を強く受けているかを調べるために、生活に関係する分野別の主観的満足度についても調査している[29]。

総合主観満足度[30]を構成する分野については、OECD による先行事例の分類[31]をベースとして、まず①家計と資産、②雇用環境と賃金、③住宅、④仕事と生活（ワークライフバランス）、⑤健康状態、⑥教育水準・教育環境、⑦交友関係やコミュニティなど社会とのつながり、⑧政治、行政、裁判所への信頼性、⑨生活を取り巻く空気や水などの自然環境、⑩身の回りの安全の 10 分野を設定した。例えば、「家計と資産」については、自らの所得や金融資産により、物やサービスを購入するなどの経済活動を行うことで生活満足度を高めることが可能であり、主要な分野の一つであると考えられる。

これらに加えて、ここでは、現在の日本の経済社会において、重要な課題である少子化・高齢化と密接に関係する、⑪子育てのしやすさ、⑫介護のしやすさ・されやすさ、そして、より前向きな要因として、⑬生活の楽しさ・面白さ、の3つの分野を追加した。

**図表１　体系図（総合主観満足度と分野別主観満足度）**




---

29　総合主観満足度（生活全般の満足度をここでは総合主観満足度と呼ぶ）と分野別主観満足度については、現在の生活にどの程度満足しているかについて、0 点から 10 点の 11 段階で満足の度合を質問しており、「全く満足していない」を 0 点、「非常に満足している」を 10 点として調査している。分野別主観満足度については、生活に関係するさまざまな分野における満足の度合いについて、同じ尺度（11 段階）で調査している。

30　生活全般の満足度をここでは総合主観満足度と呼ぶ。

31　OECD の「より良い暮らし指標(Better Life Index)」では、11 の分野（①所得と資産、②仕事と報酬、③住居、④健康状態、⑤ワーク・ライフ・バランス、⑥教育と技能、⑦社会とのつながり、⑧市民参加とガバナンス、⑨環境の質、⑩生活の安全、⑪主観的幸福 ）を設定し、分野ごとに１～４つの指標を用いて説明している。

## 図表２　分野別主観満足度を設定した理由

| 分野別主観満足度 | 設定した理由 |
|---|---|
| ①　家計と資産 | 所得は、人が自らのニーズを満たすこと、また、その他の自分の人生にとって重要と考える多くの目標の追求を可能にし、資産は、長期にわたってこうした選択を持続することを可能にする。 |
| ②　雇用環境と賃金 | 仕事に就き、そこから報酬を得ることは、個人の幸福にとって不可欠である。良い仕事は、自由になる金銭を増やすだけでなく、願望を実現させたり、自尊心を培ったりする機会をもたらす。 |
| ③　住宅 | 住居は、雨風をしのぐ場所など基本的なニーズを満たす上でも、個人的な安心感やプライバシーを得るためにも欠かすことができない。さらに住居費は家計資産の主たる要素でもある。 |
| ④　仕事と生活<br>（ワークライフバランス） | 仕事、家族との時間、そして個人としての時間を両立させること、「ワーク・ライフ・バランス」を実現することは、世帯の構成員の誰にとっても幸福の要件である。 |
| ⑤　健康状態 | 長寿、疾病・創傷なしに生きられることは、人の暮らしにおいて根源的に重要である。また、健康状態が良ければ、労働市場に参加したり、良好な社会関係を築いたりする機会が増える。 |
| ⑥　教育水準・教育環境 | 教育は、学習という基本的ニーズに応えるとともに、高い学歴は仕事の報酬や雇用の可能性を高める。また、経済成長や社会的結束の強化、犯罪の減少など社会にも様々な利益をもたらす。 |
| ⑦　交友関係やコミュニティなど社会とのつながり | 社会とのつながりは、人間本来の喜びに加えて、個人や社会の幸福に好ましい波及効果ももたらす。社会全体でみれば、他者への信頼や助け合いの社会規範といった共通の価値観を生み出す。 |
| ⑧　政治・行政・裁判所への信頼性 | 政治・行政・裁判所への信頼性は、帰属する社会の方向性の決定や運営への参加・関与の機会となり、民主主義を適切に機能させる。 |
| ⑨　生活環境を取り巻く空気や水などの自然環境 | 汚染物質や有害物質、騒音が人々の健康に及ぼす影響は小さくない。また、多くの人は居住地の美しさや健全さに価値を見出すとともに、地球の環境劣化や天然資源の枯渇を懸念している。 |
| ⑩　身の回りの安全 | 人の生活に対する脅威には、戦争、テロ行為、環境や自然を起因とするリスク、産業災害、労働災害など、様々なものがあげられるが、そのなかでも最も一般的な脅威の一つが犯罪である。 |
| ⑪　子育てのしやすさ | 母親の孤立など深刻な問題が発生しないよう、子育てがしやすい社会を構築することは、親の幸福感を高めるとともに、社会全体の繁栄をもたらすものである。 |
| ⑫　介護のしやすさ・されやすさ | 要介護者等からみた主な介護者の属性は同居者である。したがって、介護がしやすいこと、また、されやすいことは、世帯構成員すべての生活満足度に大きな影響を与えるものである。 |
| ⑬　生活の楽しさ・面白さ | 生活の楽しさ・面白さを追求することは、人間の根源的な欲求であり、生活の満足度に大きな影響を与えるとともに、相互に影響し合うものである。 |

なお、総合主観満足度は、家族などの個人的な諸要因の影響も受けていると考えられる。今回の取組では、政策運営との関係が深いと思われる分野を採り上げたが、それらの分野についての主観的満足度で、総合主観満足度の6割強を説明できる（図表3を参照）との結果となっている。

次項以降では、2019 年調査(回答者数 10293)と 2020 年調査(回答者数 5281)を合計した「満足度・生活の質に関する調査」の集計結果(回答者数 15574)について、まずは、回答者全体での総合主観満足度、各分野別主観満足度の平均をみた後、回答者の性別・年齢別等でそれぞれの満足度がどのように異なるのかを概観する。

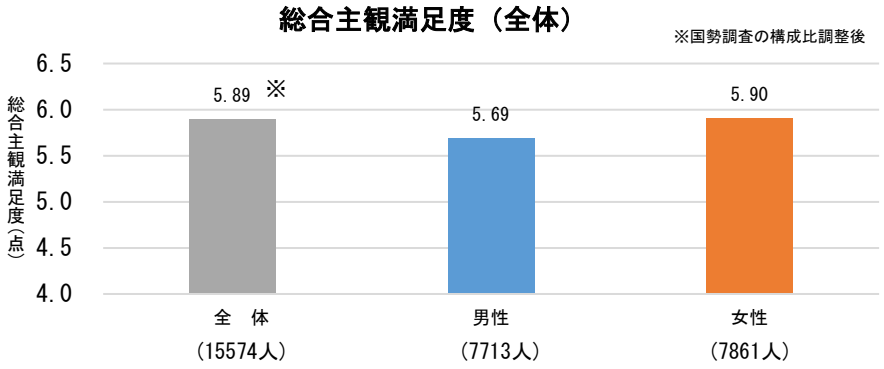
その後に、総合主観満足度に対し、どの分野の満足度が大きな影響を与えているのかを検証していきたい。

具体的には、①総合満足度を被説明変数とし、13 分野の満足度を説明変数とする重回帰分析、②総合満足度と生活の楽しさ・面白さが相互に影響し合うと仮定し、生活の楽しさ・面白さを除く 12 分野からは、(a)総合満足度に直接影響を与える経路、(b)生活の楽しさ・面白さを介して影響を与える経路、(c)両方に影響を与える経路、があるのではないか、との仮説を検証したパス解析により検証する。

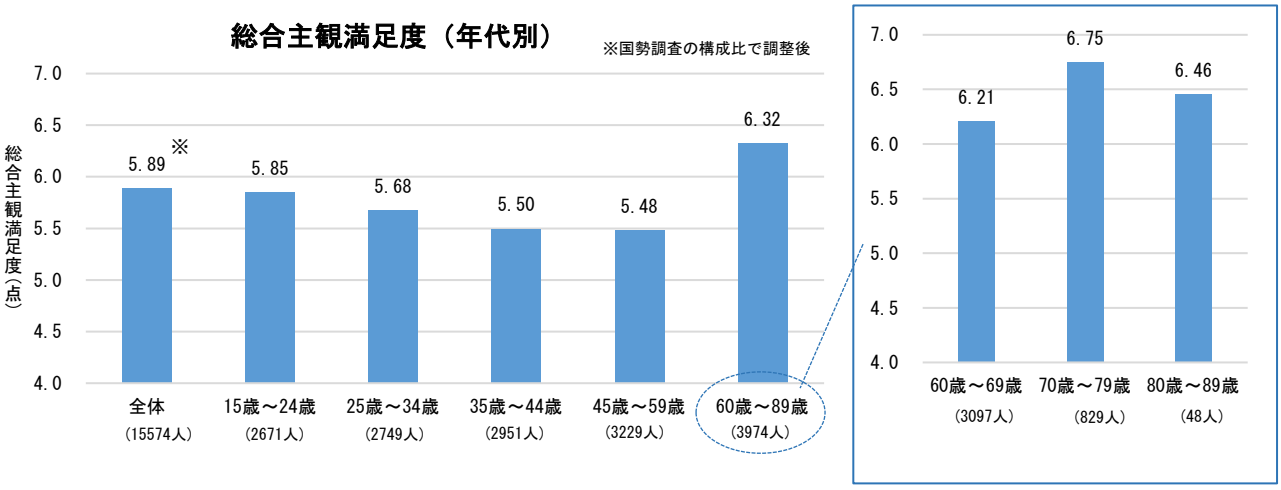
## 2.「満足度・生活の質に関する調査」の結果

### （１） 総合主観満足度の平均点

2019 年調査（回答者数 10293）と 2020 年調査（回答者数 5281）を合計した「満足度・生活の質に関する調査」の集計結果（回答者数 15574）では、総合主観満足度[32]の全国平均は 5.89 点[33]となった。直近に公表された国際連合の「World Happiness Report 2020」では、日本の幸福度は 5.871 点とあり、数値としては極めて近い結果となった[34]。




（出典）内閣府 満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）




（出典）内閣府 満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

---

[32] 「満足度・生活の質に関する調査」では、「現在の生活にどの程度満足しているか」について、0 点から 10 点の 11 段階で満足の度合を質問し、「全く満足していない」を 0 点、「非常に満足している」を 10 点として調査を実施。

[33] 総合主観満足度の全国平均は、「満足度・生活の質に関する調査」（SRC）の単純集計結果ではなく、平成 27 年国勢調査の構成比（性別・年齢・地域）で調整（ウエイトバック集計）を行っている。

[34] 「World Happiness Report 2020」では、1 位フィンランド（7.809 点）、2 位デンマーク（7.646 点）、5 位ノルウェー（7.488 点）、13 位英国（7.165 点）、17 位ドイツ（7.076 点）、18 位米国（6.940 点）、23 位フランス（6.664 点）、30 位イタリア（6.387 点）、61 位韓国（5.872 点）、62 位日本（5.871 点）、94 位中国（5.124 点）。

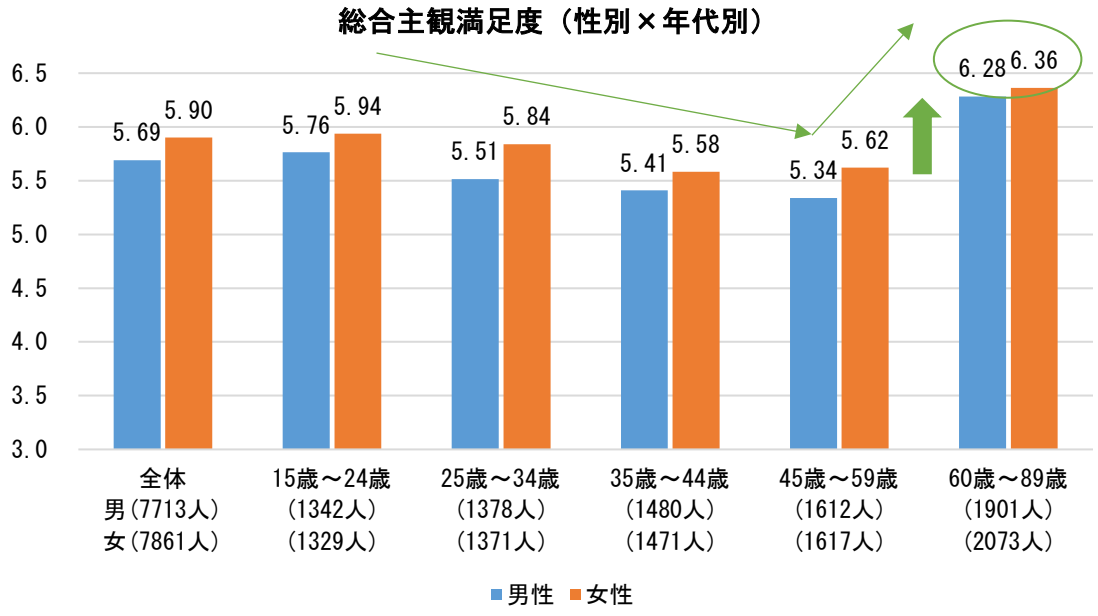
## （２） 性別・年齢別・地域別で見た総合主観満足度の特徴

今回の調査から、属性別にその特徴を見ると、①女性の方が満足度は高いこと、②年齢別では「谷型」となること、③地域別にみると、北海道・東北がやや低いが、大きな差はない、都市規模別にみても、規模による差は大きくないということが判明した。詳細は以下のとおり。

(a)性別×年齢

性別で見ると、女性の方が男性よりも総合主観満足度が高いことが分かる。

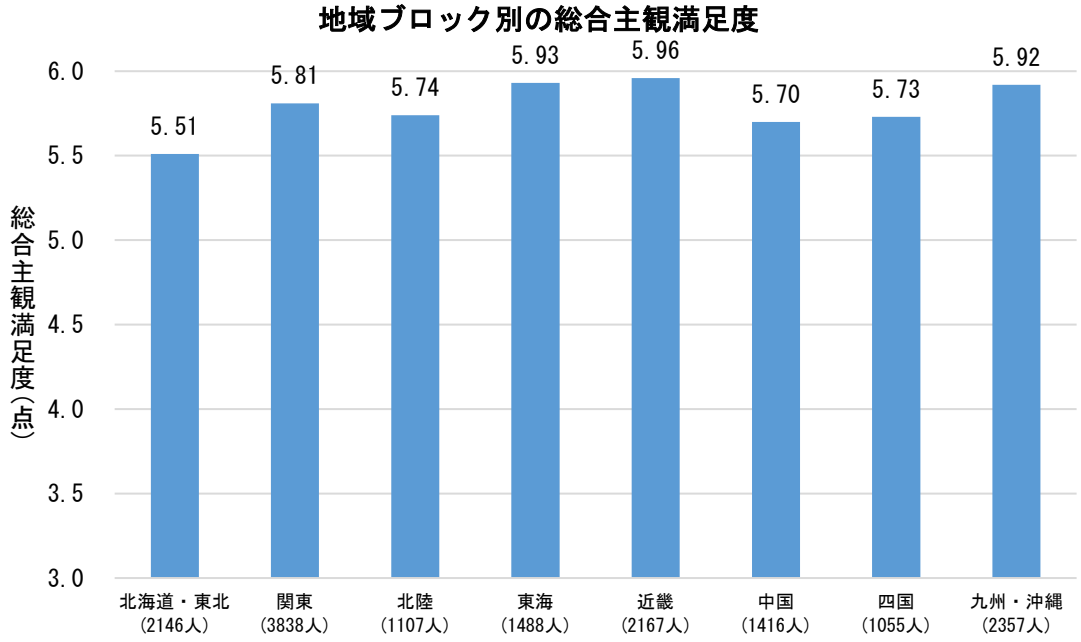
「45 歳～59 歳」までは男女ともに概ね年齢とともに、総合主観満足度が低下していくが、「60 歳以上」になると急激に上昇する。



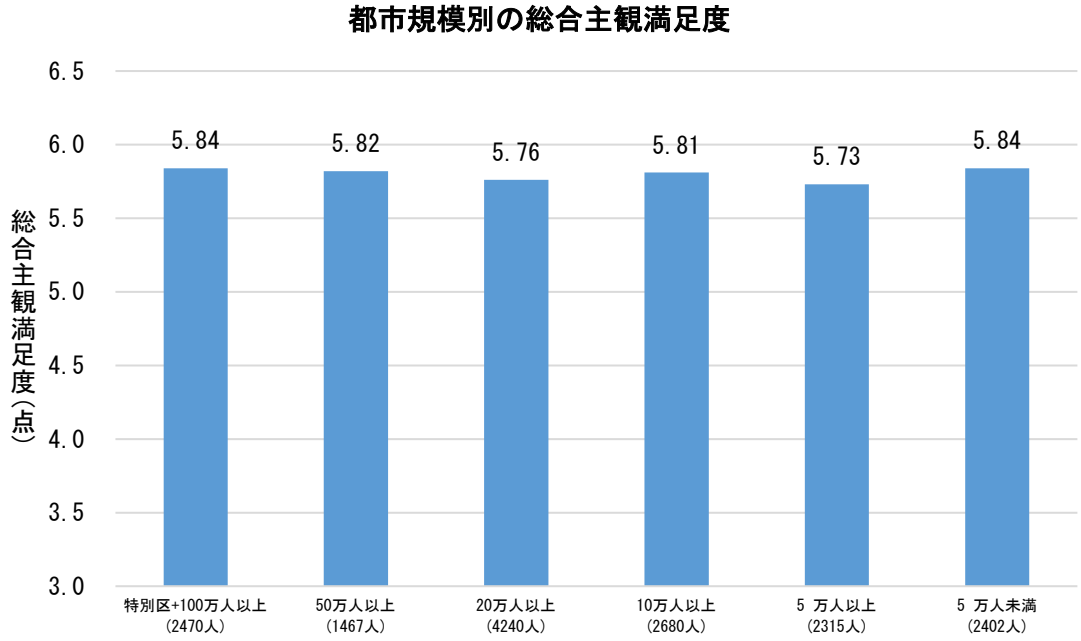

（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

(b) 地域・都市規模

地域別では、東海地方・近畿地方が比較的高かったものの、大きな特徴は見出せなかった。都市規模別では大きな差異はない。




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

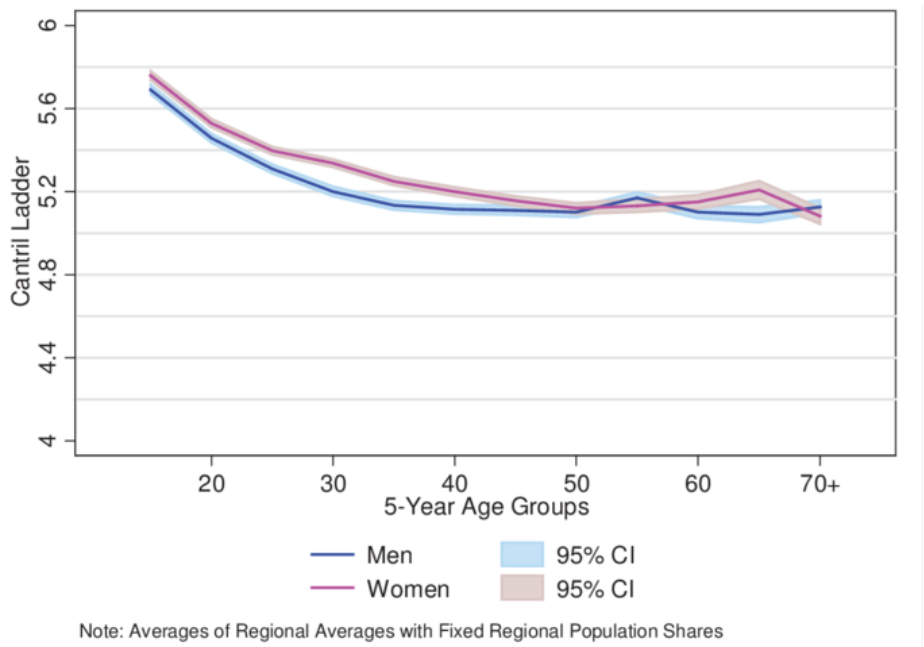



（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

## ＜コラム＞　国際的にみた性別・年齢による主観的幸福度の違い

World Happiness Report 2015 ではギャラップ世界世論調査（GWP）の 10 年間（2005～2014 年）のデータを用いて、全世界及び9つの地域別にみた男女間、年齢間の幸福度の差を比較している。下図をみると、世界平均では女性の方が男性よりも主観的な幸福度が高く、20 歳前後で最も高くなっており、すべての年齢層を合わせた場合、女性の方が 0～10 段階で平均 0.09 ポイント高くなっている。

**Figure3.1: World: Cantril Ladder by Gender and 5-Year Age Groups**



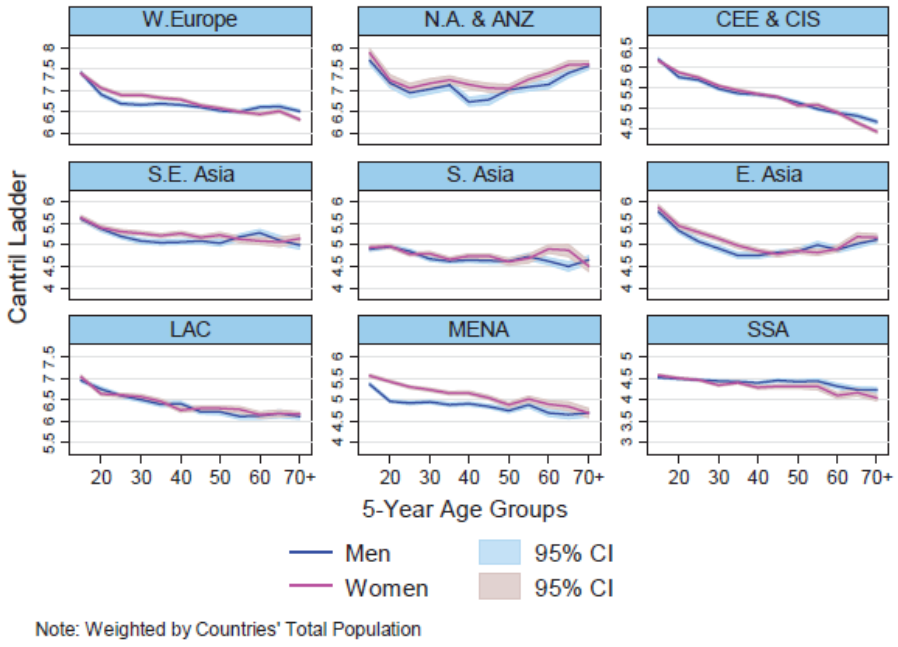

### （1）地域間で大きく異なる主観的幸福度の男女差

世界８地域のうち、北米・豪NZ（+0.17 ポイント）、東南アジア（+0.09）、南アジア（+0.05）、東アジア（+0.09）、中東・北アフリカ（+0.28）の5地域では、女性の方が男性よりも主観的幸福度が高く、わずかではあるが統計的に有意な差がある。一方、中東欧ロシア（-0.07）とサハラ以南のアフリカ（-0.03）の2地域では、女性の主観的幸福度は男性よりも有意に低い。西ヨーロッパとラテンアメリカでは、性別の差は非常に小さく、取るに足らないものである。

## （2）地域間でさらに大きく異なる主観的幸福度の年齢層間の差

主観的幸福度の年齢層間の差はより顕著である。以前は、多くの国でU字型のパターンを示しているが、現在は東アジアと南アジアの2つの地域のみである。また、西ヨーロッパでは男性、南アジアでは女性に有意なU字型が見られる。U 字型の左側は、ほぼすべての国と地域で、10 代後半から 40 歳代にかけて顕著に低下している。

**Figure 3.2: Regions: Cantril Ladder by Gender and 5-Year Age Groups**




Note: Weighted by Countries' Total Population

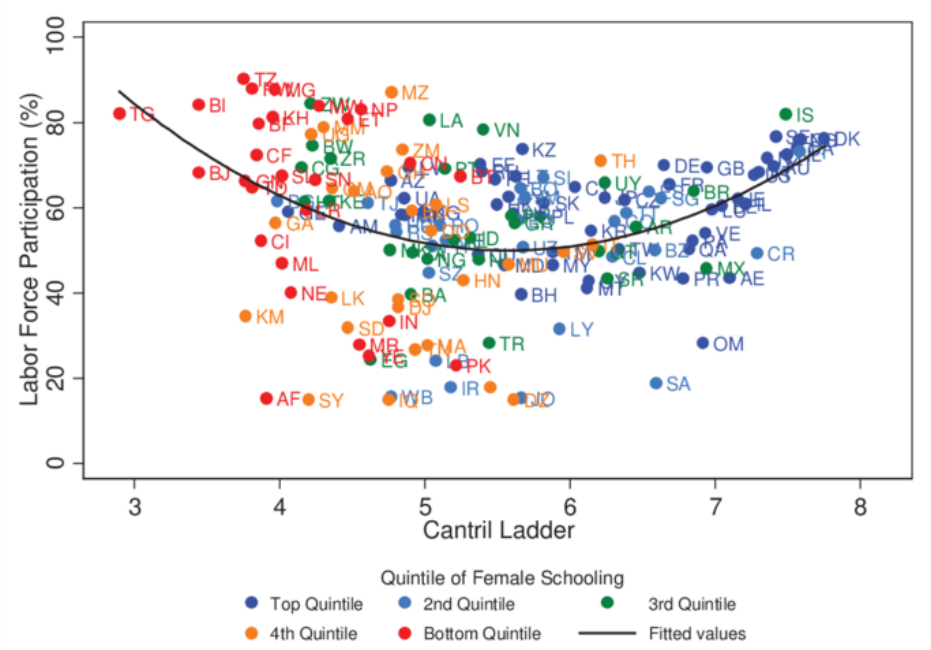
（注）W.Europe:西ヨーロッパ、N.A.&ANZ:北米・豪NZ、CEE&CIS:中東欧ロシア、S.E.Asia:東南アジア、
S.Asia:南アジア、E.Asia:東アジア、LAC:ラテンアメリカ、MENA: 中東・北アフリカ、SSA:サハラ以南アフリカ

## （3）女性の主観的幸福度と労働参加率

男女間の労働参加率の差は世界的に見ても大きい。世界平均では、労働市場に参加している割合は、女性は 55%、男性は 82%である。

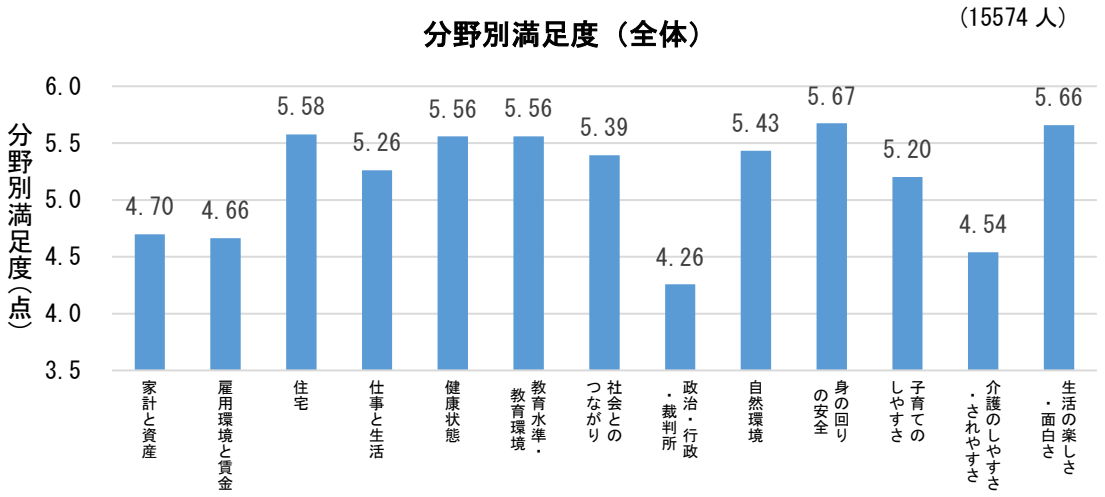
下図は、国レベルの女性の労働参加率と主観的幸福度の平均値を比較した散布図である。ギャラップ調査から計算された平均教育レベルは、明るい赤（教育水準が低い）から濃い青（教育水準が高い）の五分位で示している。U 字型のパターンが見られ、低い教育水準の女性は、労働参加率が高いほど主観的幸福度が低いのに対し、高い教育水準の女性は、労働参加率が高いほど主観的幸福度が高くなっている。

**Figure 3.11: Female Happiness and Labor Force Participation by Country**



## （３） 分野別満足度の特徴（全体、性別、年齢別、地域別）

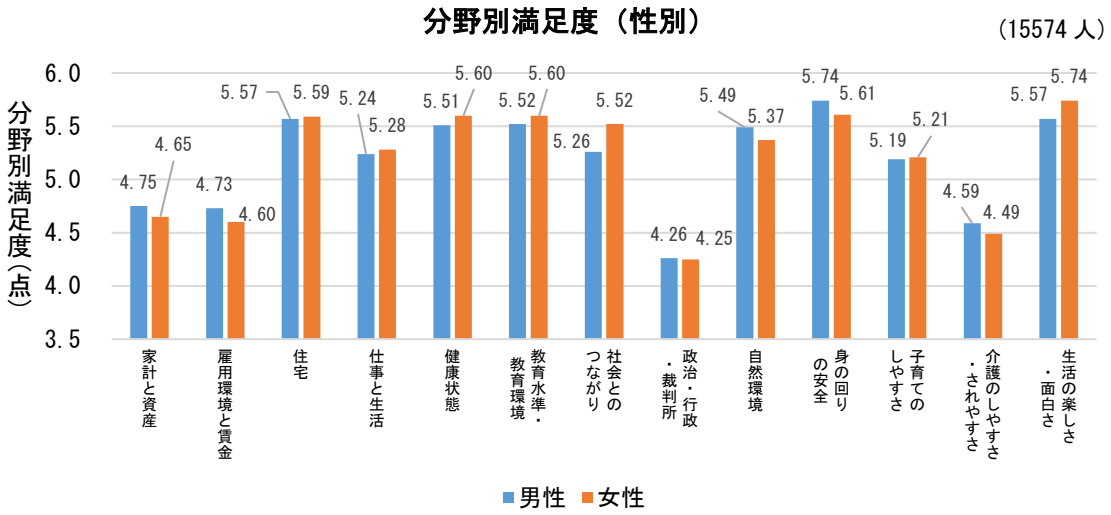
次に、分野別満足度をみていくと、分野により満足度の点数が大きく異なることがみてとれる。満足度が高い分野は、「身の回りの安全」、「生活の楽しさ・面白さ」、「住宅」、「健康状態」、「教育水準・教育環境」、一方、満足度が低い分野は、「政治・行政・裁判所」、「介護のしやすさ・されやすさ」、「雇用環境と賃金」、「家計や資産」となっている。




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

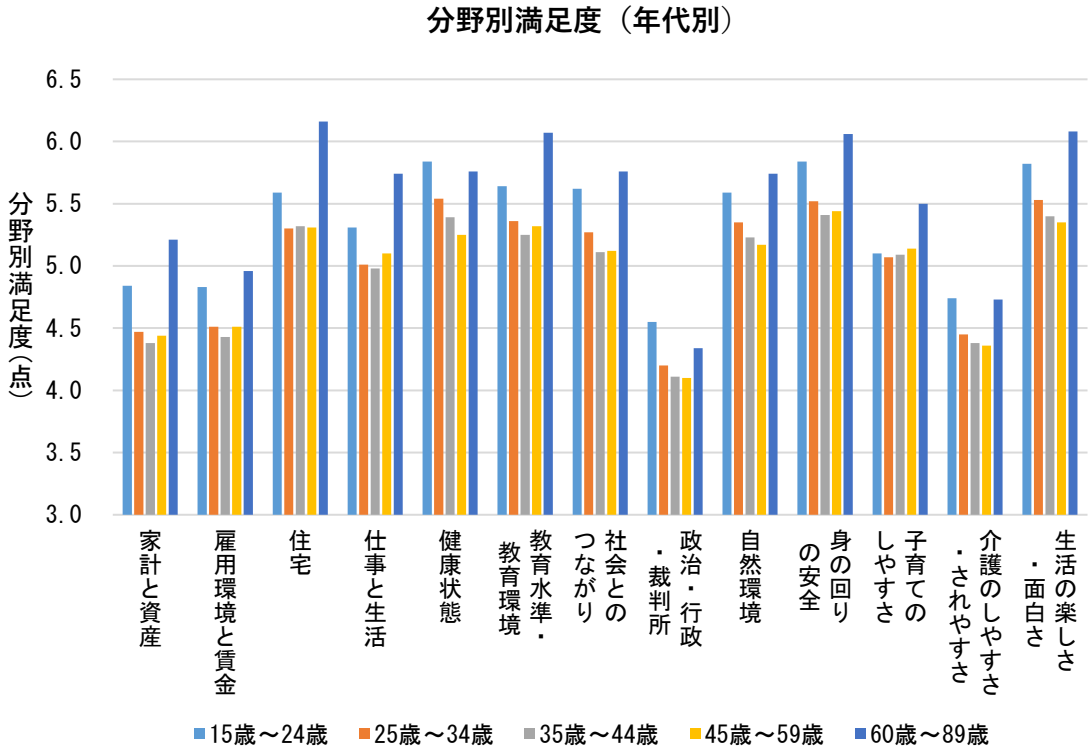
(a)性別×年齢

男女別にみると、13 分野のうち、男性の満足度が高い分野が6つ、女性の満足度が高い分野は7つとなっている。特に、男性は雇用環境と賃金、身の回りの安全、女性は社会とのつながり、生活の楽しさ・面白さが相対的に高いことがみてとれる。




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

年齢別に分野別満足度をみると、ほぼすべての分野がU字型となっているが、子育てのしやすさは、若年層の満足度が低くなっており、U字型が崩れている。また、35 歳～44 歳の年代が、7分野において最も満足度が低くなっている(「家計と資産」、「雇用環境と賃金」、「仕事と生活」、「教育水準・教育環境」、「社会とのつながり」、「身の回りの安全」)。




（出典）内閣府　満足度・生活の質に関する調査（2019 年調査・2020 年調査）

(b) 地域・都市規模

次に、地域別に分野別満足度をみていくと、分野別満足度の水準自体は地域間で大きな相違はないものの、地域ごとに分野別満足度の順位付けをみると、関東、東海地方は、「生活の楽しさ・面白さ」が1位であるのに対し、北海道・東北地方では3位となっている。一方、北海道・東北、北陸、中国、四国、九州・沖縄地方では、「身の回りの安全」が1位となっているが、東海、近畿では3位である。また、地域の特徴としては、北海道・東北地方では自然環境が2位、東海地方では教育水準・教育環境が2位、近畿地方では住宅が1位、といったことがあげられる。

| | 北海道・東北 | 関東 | 北陸 | 東海 | 近畿 | 中国 | 四国 | 九州・沖縄 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1位 | 身の回りの安全 | 生活の楽しさ・面白さ | 身の回りの安全 | 生活の楽しさ・面白さ | 住宅 | 身の回りの安全 | 身の回りの安全 | 身の回りの安全 |
| 2位 | 自然環境 | 身の回りの安全 | 生活の楽しさ・面白さ | 教育水準・教育環境 | 生活の楽しさ・面白さ | 生活の楽しさ・面白さ | 健康状態 | 生活の楽しさ・面白さ |
| 3位 | 生活の楽しさ・面白さ | 住宅 | 健康状態 | 身の回りの安全 | 身の回りの安全 | 教育水準・教育環境 | 生活の楽しさ・面白さ | 健康状態 |
| 4位 | 教育水準・教育環境 | 教育水準・教育環境 | 自然環境 | 住宅 | 教育水準・教育環境 | 健康状態 | 教育水準・教育環境 | 教育水準・教育環境 |
| 5位 | 住宅 | 健康状態 | 住宅 | 健康状態 | 健康状態 | 住宅 | 住宅 | 住宅 |

**※地域別の表**

最後に、人口規模別に市町村を分類してみると、ここでも、地域別同様、分野別満足度の水準自体に大きな差はないが、人口規模ごとに分野別満足度の順位付けをみると、50 万人以上の市町村では、「生活の楽しさ・面白さ」が1位であるのに対し、50 万人未満の市町村では、「身の回りの安全」が1位となっている。また、100 万人以上の都市では、「身の回りの安全」は4位と低くなっている。また、5万人未満の市町村では、「自然環境」が3位、100 万人以上の市町村では、「教育水準・教育環境」が2位となっている。

| | 100 万人以上 | 50～100 万人未満 | 20～50 万人未満 | 10～20 万人未満 | 5～10 万人未満 | 5 万人未満 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1位 | 生活の楽しさ・面白さ | 生活の楽しさ・面白さ | 身の回りの安全 | 身の回りの安全 | 身の回りの安全 | 身の回りの安全 |
| 2位 | 教育水準・教育環境 | 身の回りの安全 | 生活の楽しさ・面白さ | 生活の楽しさ・面白さ | 生活の楽しさ・面白さ | 生活の楽しさ・面白さ |
| 3位 | 住宅 | 住宅 | 教育水準・教育環境 | 住宅 | 健康状態 | 自然環境 |
| 4位 | 身の回りの安全 | 健康状態 | 住宅 | 教育水準・教育環境 | 住宅 | 住宅 |
| 5位 | 健康状態 | 教育水準・教育環境 | 健康状態 | 健康状態 | 教育水準・教育環境 | 健康状態 |

**※ただし、５万人未満都市の４位・５位は同数値、順不同**

## （４） 総合主観満足度と分野別主観満足度の関係

総合主観満足度と分野別主観満足度について、相関関係を調べることで、満足度を介した経済社会の構造を分析する。総合主観満足度と 13 の分野別満足度との関係を、（ｉ）総合主観満足度を被説明変数とし、13 分野の満足度を説明変数とする重回帰分析、（ii）総合主観満足度と生活の楽しさ・面白さが相互に影響し合うと仮定し、パス解析による検証を行う。

### （ｉ－①）総合主観満足度を 13 分野の満足度で重回帰[35]

総合主観満足度を被説明変数、13 分野の分野別主観満足度を説明変数として重回帰分析を行った結果が図表3である。「生活の楽しさ・面白さ」、「家計・資産」、「ワークライフバランス」、「健康状態」、「住宅」、「教育水準・教育環境」、「雇用・賃金」、「社会とのつながり」の8分野の説明力が有意であるとの結果となった。一方で、「身の回りの安全」、「自然環境」、「政治・行政・裁判所への信頼性」、「子育てのしやすさ」「介護のしやすさ・されやすさ」の5分野は有意な結果が得られなかった。このモデルの自由度修正済み決定係数は 0.626 であり、総合主観満足度を当該8分野で 62.6％説明できていることを意味する。

図表3の円グラフは本モデルで説明できている部分（62.6％）を当該8分野の偏回帰係数の大きさで按分することで、総合主観満足度の分野別の構成比を表したものである。説明できていない部分（37.4％）は8分野以外のその他の要因であり、家族などの個人的要因も含まれると考えられる。

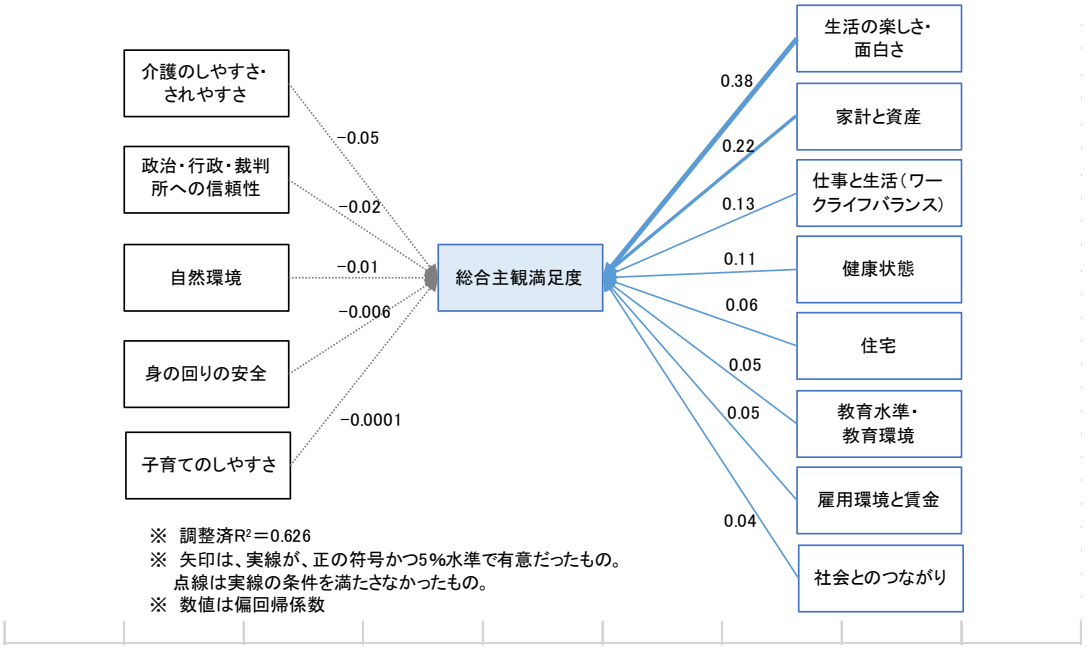
本モデルでは、「生活の楽しさ・面白さ」の満足度との偏回帰係数が一番大きく（0.38）、次に「家計・資産」（0.22）、「ワークライフバランス」（0.13）、「健康状態」（0.11）と続いている。

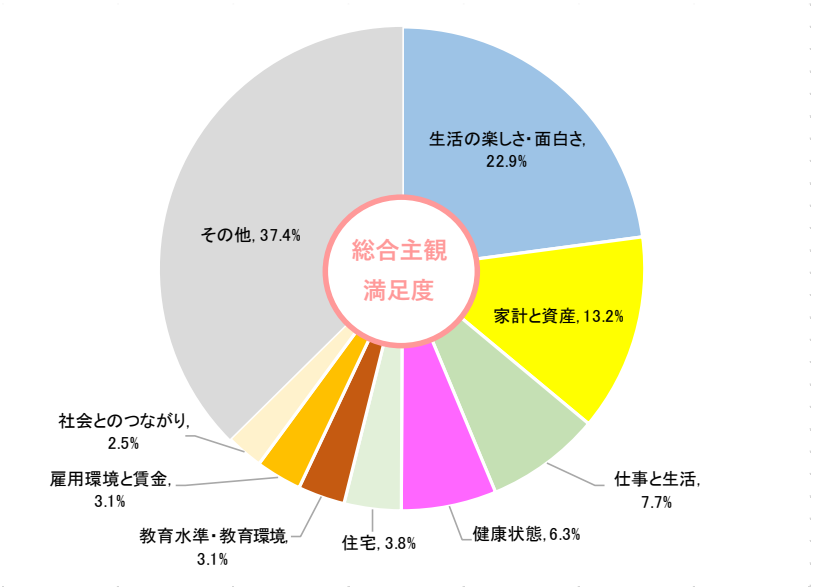
「生活の楽しさ・面白さ」は、国際機関などの先行研究ではとりあげられていない分野ではあるが、「家計・資産」などの経済面・金銭面から得られる満足度よりも影響度が大きいとみられることは注目に値する。

---

[35] 本報告書で実施している重回帰分析は、自由度が 500～10,000 程度であるため、|t値|は、信頼係数 99％の場合は 2.59 以上、95％の場合は 1.96 以上、90％の場合は 1.65 以上で有意となる。

## 図表３　総合主観満足度を 13 分野の満足度で重回帰 ： ８分野で有意となる



（ｉ－②)総合主観満足度を 12 分野の満足度と「楽しさ・面白さ（純）」で重回帰

他方で、「生活の楽しさ・面白さ」の満足度は、①総合主観満足度とそもそも似た概念となっている可能性があること、②他の 12 分野の効果を媒介して総合主観満足度に影響を与えている可能性について検証を試みた。

まず、総合主観満足度と分野別主観満足度の相関行列を見ると、図表4のとおりである。ここからは、①「生活の楽しさ・面白さ」の満足度と総合主観満足度との相関は 0.73 と強いこと、②「生活の楽しさ・面白さ」の満足度は、他の 12 分野中7分野と強めの相関が出ていること、残りの5分野とも中程度の相関があることが分かる。こうしたことら、「生活の楽しさ・面白さ」は総合主観満足度と似た概念である可能性があることが分かる。

**図表４　相関行列：総合主観満足度と「楽しさ・面白さ」の満足度の相関が高い**

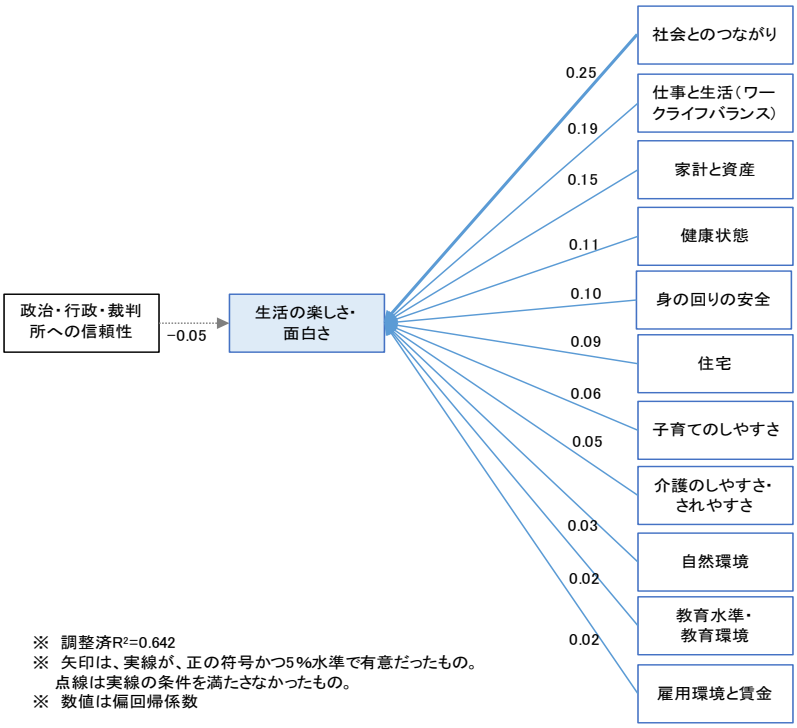
| | 総合主観満足度 | 家計と資産 | 雇用環境と賃金 | 住宅 | ワークライフバランス | 健康状態 | 教育水準・教育環境 | 社会とのつながり | 政治・行政・裁判所への信頼性 | 自然環境 | 身の回りの安全 | 子育てのしやすさ | 介護のしやすさ・されやすさ | 生活の楽しさ・面白さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 総合主観満足度 | 1.00 | 0.67 | 0.61 | 0.59 | 0.66 | 0.59 | 0.58 | 0.58 | 0.40 | 0.47 | 0.51 | 0.47 | 0.45 | 0.73 |
| 家計と資産 | 0.67 | 1.00 | 0.74 | 0.62 | 0.65 | 0.54 | 0.59 | 0.55 | 0.50 | 0.49 | 0.52 | 0.50 | 0.54 | 0.65 |
| 雇用環境と賃金 | 0.61 | 0.74 | 1.00 | 0.56 | 0.70 | 0.52 | 0.57 | 0.54 | 0.51 | 0.48 | 0.50 | 0.51 | 0.54 | 0.60 |
| 住宅 | 0.59 | 0.62 | 0.56 | 1.00 | 0.63 | 0.52 | 0.58 | 0.55 | 0.40 | 0.53 | 0.55 | 0.49 | 0.46 | 0.61 |
| 仕事と生活 | 0.66 | 0.65 | 0.70 | 0.63 | 1.00 | 0.62 | 0.61 | 0.60 | 0.46 | 0.52 | 0.55 | 0.52 | 0.51 | 0.68 |
| 健康状態 | 0.59 | 0.54 | 0.52 | 0.52 | 0.62 | 1.00 | 0.59 | 0.58 | 0.40 | 0.50 | 0.55 | 0.45 | 0.45 | 0.61 |
| 教育水準・教育環境 | 0.58 | 0.59 | 0.57 | 0.58 | 0.61 | 0.59 | 1.00 | 0.64 | 0.46 | 0.54 | 0.57 | 0.52 | 0.48 | 0.61 |
| 社会とのつながり | 0.58 | 0.55 | 0.54 | 0.55 | 0.60 | 0.58 | 0.64 | 1.00 | 0.46 | 0.51 | 0.53 | 0.50 | 0.48 | 0.67 |
| 政治・行政・裁判所への信頼性 | 0.40 | 0.50 | 0.51 | 0.40 | 0.46 | 0.40 | 0.46 | 0.46 | 1.00 | 0.54 | 0.51 | 0.49 | 0.55 | 0.44 |
| 自然環境 | 0.47 | 0.49 | 0.48 | 0.53 | 0.52 | 0.50 | 0.54 | 0.51 | 0.54 | 1.00 | 0.73 | 0.54 | 0.50 | 0.54 |
| 身の回りの安全 | 0.51 | 0.52 | 0.50 | 0.55 | 0.55 | 0.55 | 0.57 | 0.53 | 0.51 | 0.73 | 1.00 | 0.58 | 0.53 | 0.59 |
| 子育てのしやすさ | 0.47 | 0.50 | 0.51 | 0.49 | 0.52 | 0.45 | 0.52 | 0.50 | 0.49 | 0.54 | 0.58 | 1.00 | 0.64 | 0.54 |
| 介護のしやすさ・されやすさ | 0.45 | 0.54 | 0.54 | 0.46 | 0.51 | 0.45 | 0.48 | 0.48 | 0.55 | 0.50 | 0.53 | 0.64 | 1.00 | 0.53 |
| 生活の楽しさ・面白さ | 0.73 | 0.65 | 0.60 | 0.61 | 0.68 | 0.61 | 0.61 | 0.67 | 0.44 | 0.54 | 0.59 | 0.54 | 0.53 | 1.00 |

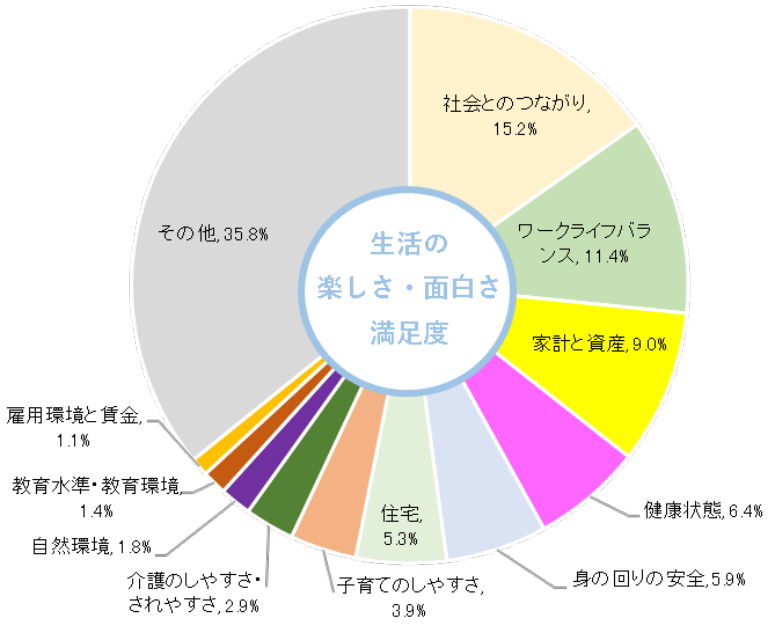
※すべて1%水準で有意

そこで、「生活の楽しさ・面白さ」の満足度を他の 12 分野の満足度で重回帰分析を実施したところ、「政治・行政・裁判所への信頼性」以外の 11 分野で有意となり、符号条件（符号がプラス）を満たしているとともに、この 11 分野で「生活の楽しさ・面白さ」の満足度の 64.2%を説明している。

特に、「社会とのつながり」(偏回帰係数:0.25)や「ワークライフバランス」(同：0.19)の係数が高かった。

**図表５「生活の楽しさ・面白さ」を他の 12 分野で重回帰 ： 11 分野で有意となる**




本結果からは、有意となった他の 11 分野の満足度が「楽しさ・面白さ」の満足度を媒介して、総合主観満足度に対して影響を与えている可能性が高いことがみてとれる。

分野別主観満足度が、「楽しさ・面白さ」を経由して総合主観満足度に影響を与えている効果を分析するため、「楽しさ・面白さ」の満足度のうち、他の 11 分野の要因では統計的に説明できない、残りの部分（いわゆる「残差」。以後、「楽しさ・面白さ（純）」と呼ぶ）を説明変数として活用することで、総合主観満足度と他の 12 分野の満足度の関係をより明確化できるのではないかと考えた。ここでの「楽しさ・面白さ（純）」は、他の 11 分野に関連しない、より前向きな「楽しさ・面白さ」のコアとなる要素であると考えられる。

総合主観満足度を被説明変数に、「楽しさ・面白さ（純）」と他の 12 の分野別満足度を説明変数として重回帰分析を行った。その結果は図表7のとおり。

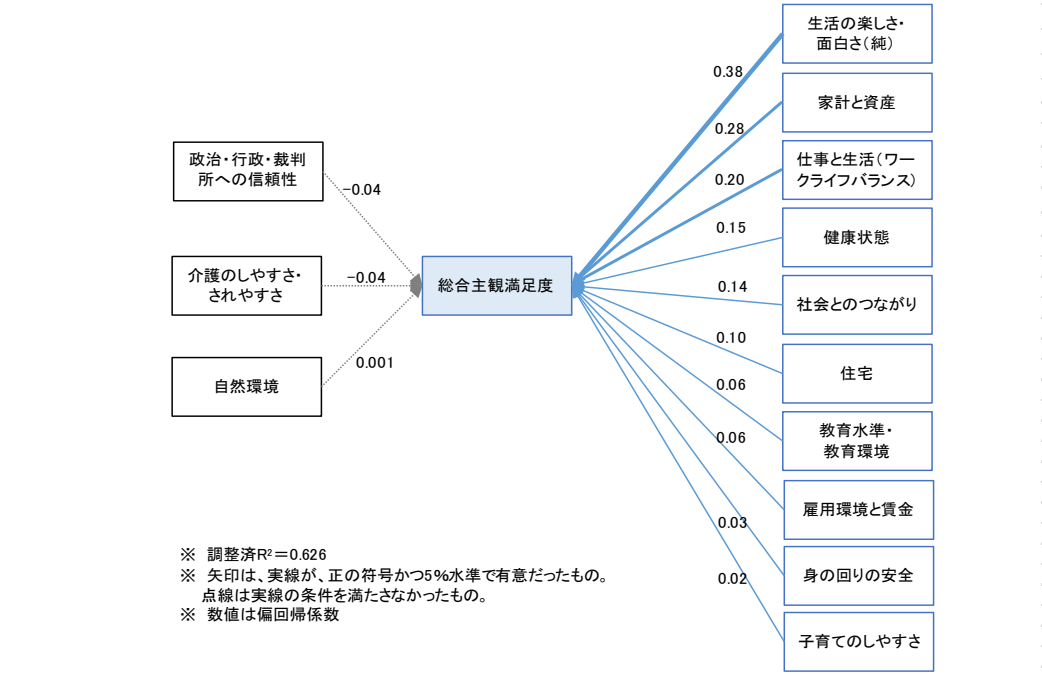
本モデルでは、「生活の楽しさ・面白さ（純）」は、ｉ －①で用いた重回帰モデルと比較すると、他の 12 分野の効果を媒介することで「生活の楽しさ・面白さ」の効果として計上されていた効果が除かれている形となる。

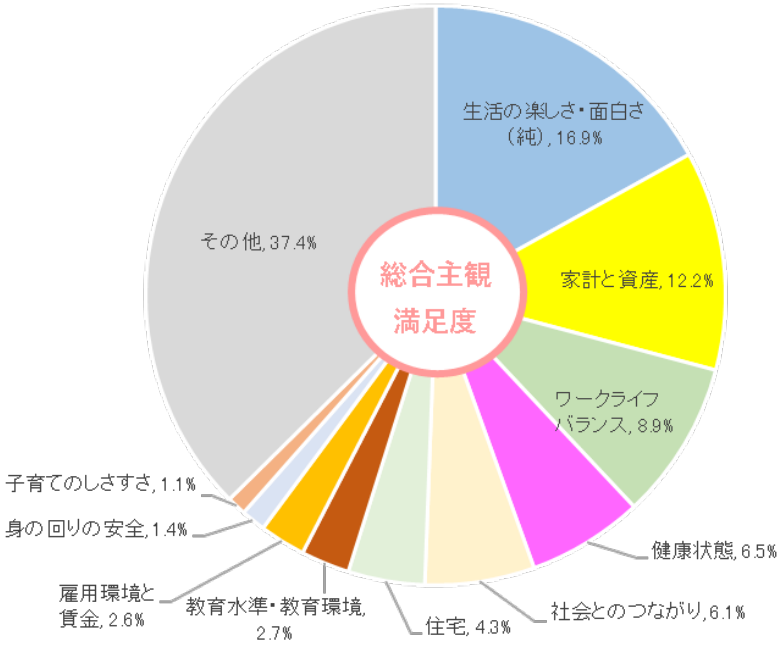
このため、①有意となる分野が増えること（例：「身の回りの安全」「子育てのしやすさ」が有意となる。）、②有意となったすべての分野の偏回帰係数が高まっていること（例：「社会とのつながり」の係数は大きく増加（0.04→0.14））など、ｉ －①で用いた重回帰モデルよりは、総合主観満足度と他の 12 分野からの影響がより解明できるモデルとなっている。なお、「介護のしやすさ・されやすさ」、「自然環境」は、本モデルでは、有意とはなっていないものの、図表6にあるとおり、「生活の楽しさ・面白さ」を媒介して総合主観満足度に影響していることには留意が必要である。

なお、「生活の楽しさ・面白さ（純）」は、「社会とのつながり」など 12 分野との相関を除いたものであるにもかかわらず、依然、総合主観満足度との相関が最も高く、重要なファクターであることが分かる。そこで、「生活の楽しさ・面白さ（純）」が具体的にどのような要因を反映しているのかについての検討が必要となる。予備的な検討結果はコラム2で説明している。

## 図表６　「生活の楽しさ・面白さ（純）」を用いた重回帰

：他分野の係数が高まる。新たに有意となる分野（身の回りの安全）が出現。



## ＜コラム１＞ライフステージ、地域ごとに見た総合主観満足度と分野別満足度の関係

ここでは、ライフステージや地域が異なることで、総合主観満足度と分野別満足度との関係に違いがあるかどうかについて検討した。その結果、全体では総合主観満足度との関係が有意ではない分野でも、特定のライフステージ、地域では有意となるなど、ライフステージ・地域ごとに関係の強い分野が異なることが分かった。

例えば、性別×年齢別を見ると、①「住宅」は、女性はほぼすべての世代で有意になるものの、男性は「35 歳以降」から有意になる、②「教育」は男性の 60 歳以上、女性の 35～59 歳で有意とならない、③「子育てのしやすさ」は男性の 25～44 歳、女性の 15～24 歳で有意となっている等である。

**図表７　属性別の重回帰分析の結果（性別×年齢別）**[36]

＜性別＞

| | 家計と資産 | 雇用環境と賃金 | 住宅 | 仕事と生活 | 健康状態 | 教育水準・教育環境 | 社会とのつながり | 政治・行政・裁判所への信頼性 | 自然環境 | 身の回りの安全 | 子育てのしやすさ | 介護のしやすさ・されやすさ | 楽しさ・面白さ（純） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 0.28 | 0.06 | 0.10 | 0.20 | 0.15 | 0.06 | 0.14 | −0.04 | 0.00 | 0.03 | 0.02 | −0.03 | 0.38 |
| 男性 | 0.25 | 0.10 | 0.09 | 0.21 | 0.14 | 0.07 | 0.14 | −0.03 | 0.00 | 0.04 | 0.03 | −0.05 | 0.37 |
| 女性 | 0.30 | 0.03 | 0.10 | 0.20 | 0.15 | 0.05 | 0.13 | −0.05 | 0.00 | 0.03 | 0.02 | −0.02 | 0.39 |

＜性別×年齢別＞

| | | 家計と資産 | 雇用環境と賃金 | 住宅 | 仕事と生活 | 健康状態 | 教育水準・教育環境 | 社会とのつながり | 政治・行政・裁判所への信頼性 | 自然環境 | 身の回りの安全 | 子育てのしやすさ | 介護のしやすさ・されやすさ | 楽しさ・面白さ（純） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男性 | 15～24歳 | 0.10 | 0.21 | −0.01 | 0.19 | 0.14 | 0.15 | 0.15 | 0.03 | 0.00 | −0.02 | 0.04 | −0.06 | 0.34 |
| | 25～34歳 | 0.26 | 0.10 | 0.01 | 0.16 | 0.19 | 0.09 | 0.15 | −0.07 | 0.07 | 0.01 | 0.08 | −0.06 | 0.31 |
| | 35～44歳 | 0.20 | 0.14 | 0.16 | 0.15 | 0.10 | 0.05 | 0.16 | −0.04 | −0.07 | 0.09 | 0.06 | −0.01 | 0.37 |
| | 45～59歳 | 0.30 | 0.09 | 0.11 | 0.27 | 0.10 | 0.07 | 0.13 | −0.04 | 0.03 | 0.04 | 0.03 | −0.11 | 0.36 |
| | 60～89歳 | 0.32 | 0.03 | 0.11 | 0.24 | 0.15 | 0.00 | 0.10 | −0.02 | 0.00 | 0.05 | −0.05 | 0.01 | 0.40 |
| 女性 | 15～24歳 | 0.21 | 0.04 | 0.03 | 0.15 | 0.15 | 0.11 | 0.10 | −0.02 | −0.03 | 0.04 | 0.06 | 0.00 | 0.34 |
| | 25～34歳 | 0.27 | 0.04 | 0.07 | 0.23 | 0.20 | 0.08 | 0.12 | −0.08 | 0.00 | 0.02 | 0.02 | −0.02 | 0.34 |
| | 35～44歳 | 0.29 | 0.04 | 0.11 | 0.16 | 0.17 | 0.04 | 0.18 | −0.01 | −0.02 | 0.01 | 0.00 | 0.02 | 0.38 |
| | 45～59歳 | 0.34 | 0.05 | 0.16 | 0.21 | 0.12 | 0.01 | 0.11 | −0.07 | 0.02 | 0.03 | 0.01 | −0.06 | 0.45 |
| | 60～89歳 | 0.31 | 0.00 | 0.12 | 0.21 | 0.15 | 0.05 | 0.14 | −0.06 | 0.03 | 0.05 | −0.01 | −0.04 | 0.43 |

（備考）① 強制投入法による重回帰分析結果、数値は偏回帰係数
② 表欄は、白色：|t 値|≧2.0、緑色：1.5≦|t 値|<2.0、灰色：|t 値|<1.5 又は符号条件が合致しないもの
③「楽しさ・面白さ（純）」は、「楽しさ・面白さ」の分野別主観満足度を他の 12 の分野別満足度で重回帰した際の残差

[36] 本報告書で実施している重回帰分析は、自由度が 500～10,000 程度であるため、|t 値|は、信頼係数 99%の場合は 2.59 以上、95%の場合は 1.96 以上、90%の場合は 1.65 以上で有意となる。

地域ブロック別で見ると、④「北海道・東北地方」では「自然環境」が有意となる、⑤「中国地方」では「子育て」が有意となる、等である。

**図表８　属性別の重回帰分析の結果（地域別）**

**＜地域ブロック別＞**

| | 家計と資産 | 雇用環境と賃金 | 住宅 | 仕事と生活 | 健康状態 | 教育水準・教育環境 | 社会とのつながり | 政治・行政・裁判所への信頼性 | 自然環境 | 身の回りの安全 | 子育てのしやすさ | 介護のしやすさ・されやすさ | 楽しさ・面白さ（純） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 北海道・東北 | 0.30 | 0.07 | 0.09 | 0.19 | 0.17 | 0.08 | 0.13 | −0.08 | 0.06 | −0.01 | 0.04 | −0.06 | 0.35 |
| 関東 | 0.28 | 0.06 | 0.07 | 0.21 | 0.14 | 0.09 | 0.15 | −0.04 | −0.02 | 0.04 | 0.02 | −0.01 | 0.36 |
| 北陸 | 0.22 | 0.08 | 0.08 | 0.24 | 0.17 | 0.01 | 0.17 | −0.07 | −0.01 | 0.07 | 0.01 | 0.00 | 0.33 |
| 東海 | 0.24 | 0.11 | 0.13 | 0.19 | 0.12 | 0.04 | 0.11 | −0.06 | −0.01 | 0.09 | 0.01 | −0.01 | 0.39 |
| 近畿 | 0.30 | 0.04 | 0.09 | 0.18 | 0.12 | 0.06 | 0.14 | −0.03 | 0.02 | 0.07 | 0.04 | −0.10 | 0.43 |
| 中国 | 0.32 | 0.03 | 0.09 | 0.14 | 0.15 | 0.06 | 0.16 | −0.01 | −0.02 | −0.02 | 0.06 | −0.01 | 0.47 |
| 四国 | 0.22 | 0.09 | 0.14 | 0.21 | 0.20 | 0.04 | 0.07 | −0.02 | 0.03 | −0.01 | 0.04 | −0.01 | 0.46 |
| 九州・沖縄 | 0.28 | 0.03 | 0.12 | 0.23 | 0.13 | 0.05 | 0.15 | 0.00 | −0.04 | 0.02 | −0.01 | −0.05 | 0.36 |

（備考）① 強制投入法による重回帰分析結果、数値は偏回帰係数
② 表欄は、白色：｜t 値｜≧2.0、緑色：1.5≦｜t 値｜<2.0、灰色：｜t 値｜<1.5 又は符号条件が合致しないもの
③「楽しさ・面白さ（純）」は、「楽しさ・面白さ」の分野別主観満足度を他の 12 の分野別満足度で重回帰した際の残差

また、⑥「楽しさ・面白さ（純）」が性別・年齢別・地域別問わず、一番説明力が大きい分野である。

このように、ライフステージや地域ごとに、総合主観満足度と分野別満足度との関係は異なることから、人々の生活の満足度を高めるための政策運営を行う上で、ライフステージや地域ごとに焦点を当てる分野を選択するなど、きめ細かな対応が必要であると考えられる。今後、より的確な政策運営を行うためにも、こうした属性ごとの分析をさらに深めていく予定である。

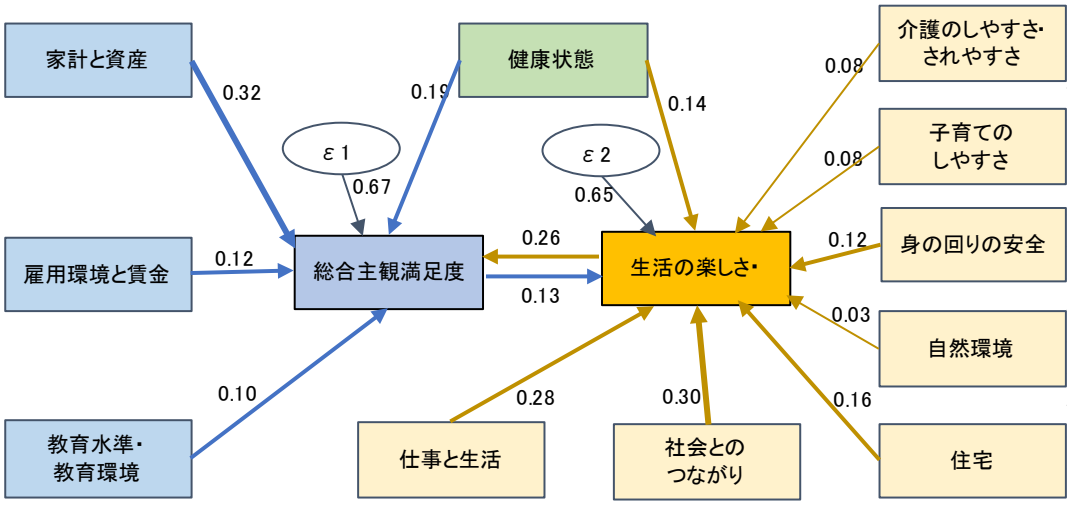
## （ⅱ）パス解析

上記の重回帰モデルにおいては、「総合主観満足度」を被説明変数とし、13 分野の「分野別満足度」で説明するという単純な構造を仮定したものであるが、実際には、総合主観満足度と 13 の分野別満足度は、それぞれが相互に影響しあう構造であるとも考えられる。

特に、「生活の楽しさ・面白さ」の満足度は、上述のとおり、他の 12 分野の効果を媒介して総合主観満足度に影響を与えている可能性が高く、そうしたことからも、「総合主観満足度」と「生活の楽しさ・面白さ」が相互に影響しあって互いの満足度が同時決定するとの仮定の上で、(a)総合主観満足度に直接影響を与える経路、(b)「生活の楽しさ・面白さ」を媒介して「総合主観満足度」に影響を与える経路、(c)両方に影響を与える経路がある可能性を想定し、パス解析を行うことで検証した。

その結果、最も説明力の高いモデルが以下の図表9にあるモデルである。

**図表９　パス解析の結果**




※　数字はパス係数。1%水準で有意かつ正符号を満たすもの。ε は誤差。
※　$R^2$は総合主観満足度が0.33、楽しさ・面白さが0.35。

| | |
|---|---|
| 総合主観満足度のみに直接的に影響 | 「家計と資産」「雇用環境と賃金」「教育水準・教育環境」 |
| 「生活の楽しさ・面白さ」を介して間接的に総合主観満足度に影響 | 「社会とのつながり」「仕事と生活」「住宅」「身の周りの安全」「子育てのしやすさ」「介護のしやすさ・されやすさ」「自然環境」 |
| 総合主観満足度と「生活の楽しさ・面白さ」の両方に影響 | 「健康状態」 |
| 有意にならなかった分野 | 「政治・行政・裁判所への信頼性」 |

この分析から、①総合主観満足度に直接影響するのは、「家計・資産」「雇用・賃金」などの3分野であり、これらは生きていく上で必要な分野（生活必需である分野）であるとともに、その多くは自助努力で金銭的に得ることができる満足度が多いこと、②生活の楽しさ・面白さの満足度を媒介して総合主観満足度に影響を与えるのは、「ワークライフバランス」や「社会とのつながり」などの7分野であり、これらは金銭だけでは得ることが難しい満足度が多いこと、③総合主観満足度と生活の楽しさ・面白さの満足度の双方に効いているのは「健康状態」の1分野のみであることが判明した。

本モデルでは、重回帰モデルにおいて有意とならなかった「子育てのしやすさ」、「介護のしやすさ・されやすさ」、「身の回りの安全」、「自然環境」の分野が有意となり、「政治・行政・裁判所への信頼性」以外のすべての相関関係が有意になった。

なお、上記の重回帰分析もパス解析も変数間の線形的関係を前提としたものである。しかし「家計と資産」等については、分野別満足度と総合主観満足度の間に非線形の関係（「家計と資産」に関する満足度が高まるにつれ、その総合主観満足度への影響が小さくなること）が有意に確認された。所得の絶対水準との幸福度や満足度との非線形関係は先行諸研究でも確認されているが、今回の分析で「家計と資産」の満足度との間にもそうした関係が確認されたことは興味深い。「家計と資産」の満足度が非線形の影響を持つことを無視したここまでの分析には歪みが生じている可能性があるので、コラムにおいて、非線形性を考慮した重回帰分析を紹介している。回帰係数には大きな差は認められなかったが、「家計と資産」以外の分野でも、分野別満足度の影響の逓減や逓増が計測されたものがある。

満足度から見た経済社会構造については、上記のモデルですべてを説明できるわけではないが、ここでは、生活満足度を構成する分野として、以下の 11 分野を選定した。

① 重回帰分析、パス解析とも有意な分野
「家計と資産」、「雇用環境と賃金」、「住宅」、「仕事と生活（WLB）」、「健康」、「教育」、「社会とのつながり」

② 重回帰分析では有意ではないものの、パス解析では「生活の楽しさ、面白さ」を通じて有意となった分野
「身の回りの安全」、「自然環境」、「子育てのしやすさ」、「介護のしやすさ・されやすさ」

※重回帰分析、パス解析とも有意ではない「政治・行政・裁判所への信頼性」は除いた[37]。

[37] 「政治・行政・裁判所への信頼性」は、ＯＥＣＤで採用されている 10 分野の中で唯一効かなかった分野である。属性別（年代・地域別）の重回帰分析でも全く有意とならず、本分野が効かないということが我が国の一つの特徴である可能性がある。

なお、「生活の楽しさ・面白さ」は、総合主観満足度と最も相関が高く、重要な分野であるが、「生活の楽しさ・面白さ」を構成する要素を探求する分析が、なお不十分であること(「生活の楽しさ・面白さ」の客観指標の選定が困難)から、第1章『生活満足度の観点から経済社会構造を「見える化」する』でとりあげることは見送った。今後、検討を深め、客観指標との関連が確認できれば、記載を追加することとしたい。

## ＜コラム2＞非線形性を考慮した総合主観満足度と分野別満足度の重回帰分析

ここでは、総合主観満足度を、13 の分野別満足度とともに 13 の分野別満足度の2乗項も加えた重回帰分析の結果をみていく。分野別満足度の2乗項を加えたのは、例えば、家計と資産の満足度は総合主観満足度に大きな影響を与えているが、それは、家計と資産の満足度が低い場合も高い場合も同じ程度の影響なのか、それとも、満足度が高くなると影響は小さくなる、もしくは大きくなる、といった非線形性をもっているのかということを検討するためである。

**図表１０　非線形性を考慮した重回帰分析**

| | 「楽しさ・面白さ」投入 | 「楽しさ・面白さ(純)」投入 |
|---|---|---|
| 調整済 $R^2$ | 0.629 | 0.630 |
| 非標準化係数 | | |
| (定数) | 0.370 | 0.415 |
| 《分野別満足度》 | | |
| 1.家計と資産 | 0.360 | 0.430 |
| 2.雇用環境と賃金 | 0.091 | 0.100 |
| 3.住宅 | 0.050 | 0.087 |
| 4.仕事と生活 | 0.120 | 0.198 |
| 5.健康状態 | 0.187 | 0.227 |
| 6.教育水準・教育環境 | 0.053 | 0.059 |
| 7.社会とのつながり | 0.073 | 0.175 |
| 8.政治・行政・裁判所 | −0.026 | −0.044 |
| 9.自然環境 | −0.058 | −0.044 |
| 10.身の周りの安全 | −0.030 | 0.008 |
| 11.子育て | −0.062 | −0.035 |
| 12.介護 | −0.049 | −0.027 |
| 13.楽しさ・面白さ | 0.408 | |

| | | |
|---|---|---|
| 13.楽しさ・面白さ(純) | | 0.379 |
| 《分野別満足度(2 乗)》 | | |
| 1.家計と資産(2 乗) | −0.015 | −0.017 |
| 2.雇用環境と賃金(2 乗) | −0.005 | −0.005 |
| 3.住宅(2 乗) | 0.001 | 0.001 |
| 4.仕事と生活(2 乗) | 0.001 | 0.000 |
| 5.健康状態(2 乗) | −0.008 | −0.008 |
| 6.教育水準・教育環境(2 乗) | 0.000 | 0.000 |
| 7.社会とのつながり(2 乗) | −0.003 | −0.003 |
| 8.政治・行政・裁判所(2 乗) | 0.000 | 0.000 |
| 9.自然環境(2 乗) | 0.005 | 0.004 |
| 10.身の周りの安全(2 乗) | 0.003 | 0.002 |
| 11.子育て(2 乗) | 0.007 | 0.006 |
| 12.介護(2 乗) | −0.001 | −0.001 |
| 13.楽しさ・面白さ(2 乗) | −0.003 | |
| 13.楽しさ・面白さ(純)(2 乗) | | 0.021 |

図表10は重回帰分析の結果をまとめたものである。これから読み取れることは以下の4点である。

① 「家計と資産」の満足度の総合主観満足度に与える影響は逓減する。これは、家計と資産についての満足度が低い段階では総合主観満足度に大きな影響を与えるが、満足度が高まるほどその影響は緩やかになるということを示している。所得や資産がある程度になると、それ以上豊かになってもそれほど満足度を押し上げない現象は、多くの先進国でみられるが、(総合主観満足度と「家計と資産」の満足度という)主観的満足度どうしでも、同様な関係がみてとれる。

② 「健康状態」や「雇用環境と賃金」に関する満足度の影響はわずかに逓減する。

③ 「楽しさ・面白さ」に関する満足度については、そのままを説明変数とした場合は、総合主観満足度への影響はわずかに逓減するが、他の分野の影響を除去した「楽しさ・面白さ(純)」を説明変数に入れ替えると、総合主観満足度への影響は逓増する。このことは、純粋な楽しさ・面白さが深まるにつれてその重要性がますます増してくる可能性を示唆しているという解釈もできよう。この点は大変興味深いので、この純変数が高い人の状況についての分析を深めていきたい。

④ 2乗項が有意でない分野(住宅、ワークライフバランス、教育、社会とのつながり)については、非線形性が認められない。

## （5）「満足度・生活の質に関する調査」の調査体制と概要

### （ⅰ）調査体制

内閣府では、2018 年9月に（株）サーベイリサーチセンター（以下「SRC」）への業務委託を行い、SRC の下で、「満足度・生活の質指標群に関する研究会」を立ち上げ、同研究会の意見を踏まえ、2018 年度に約 10000 人、 2019 年度には約 5000 人規模の WEB 調査（生活の質・満足度に関する調査）を行った。

満足度・生活の質指標群に関する研究会　構成員　（2020 年9月 11 日現在）

| | |
|---|---|
| 猪狩　廣美 | 聖学院大学政治経済学部特任教授、荒川区自治総合研究所理事 |
| 大守　隆(座長) | 科学技術振興機構　社会技術研究開発センター<br>領域総括(多世代領域) |
| 小塩　隆士 | 一橋大学経済研究所　教授 |
| 亀坂　安紀子 | 青山学院大学　経営学部　教授 |
| 土屋　隆裕 | 横浜市立大学　データサイエンス学部　教授 |

（50 音順、敬称略）

### （ⅱ）「満足度・生活の質に関する調査」の概要（①2019 年、②2020 年）

| 項目 | 内容 |
|---|---|
| 目的 | 総合的な主観的満足度及び分野別満足度を調査し、客観指標との関係性を明らかにする。 |
| 調査方法 | WEB 調査 |
| 対象者 | 日本国内に住む 15 歳～89 歳のインターネットパネル登録モニター |
| 回収数 | ①10,293 件（約 1 万件と設定し、下段の割当数の算定において端数処理を行った結果、10,293 件とした）<br>②5,281 件（約 5,000 件と設定し、下段の割当数の算定において端数処理を行った結果、5,281 件とした） |
| 回収数の割当※ | 地区別、性別、年齢階層別に割当を実施した。<br>※割当にあたっては、母集団をできるだけ反映するとともに、都道府県別結果の標準誤差を抑えるため、均等割当と人口比に応じた割当を組み合わせた。<br>※2020 年調査では、プールドデータとしての分析を行うため、モニター数を 15,000 件（2019 年:10,000 件＋2020 年:5,000 件）として基本的に 2019 年と同様の方法で割当を行った。<br><br>○地域区分：47 都道府県に 10,340 件を均等割当し、5,234 件を人口比に応じて割当<br>（1 県当たり 249～763 件：均等 220 件＋人口比 29～543 件）<br>○性別区分：47 都道府県に男女各 5,170 件を均等割当し、5,234 件を人口比に応じて割当<br>①男性（1 県当たり 124～378 件：均等 110 件＋人口比 14～268 件）<br>②女性（1 県当たり 125～385 件：均 110 件＋人口比 15～275 件）<br>○年代区分：①15～24 歳（1 県当たり 48～107 件：均等男女各 44 件＋人口比男女計 4～63 件）<br>②25～34 歳（1 県当たり 48～130 件：均等男女各 44 件＋人口比男女計 4～86 件）<br>③35～44 歳（1 県当たり 48～146 件：均等男女各 44 件＋人口比男女計 4～102 件）<br>④45～59 歳（1 県当たり 50～169 件：均等男女各 44 件＋人口比男女計 4～125 件）<br>⑤60～89 歳（1 県当たり 55～211 件：均等男女各 44 件＋人口比男女計 11～131 件） |
| 調査期間 | ①2019 年1月 25 日（金）～2月7日（木）<br>②2020 年2月7日（火）～2月 20 日（木） |
| 質問数・項目 | ○質問数：合計 35 問（質問が分岐するため、実質の質問数は増減する）<br><br>○項　目：①生活全体の主観的満足度、②生活分野別の重要項目、③生活分野別の主観的満足度、④各生活分野の重要度、⑤属性及び生活実態 |